

---

# 魔法少女リリカルなのはの憂鬱

朱神優希

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはの憂鬱

### 【Nコード】

N6156M

### 【作者名】

朱神優希

### 【あらすじ】

【題名変えました】全ては大切な物を取り戻すために。なのはとハルヒのクロスオーバー作品です。更新はかなり遅いです。

## 幻想世界

男が目を覚ますとそこは吹雪の中だった。

「どうなってんだ、こりゃ」

男は建物が無いかと辺りを見回すと、近くに一カ所だけ他の場所よりも出っ張っている場所があるのに気づいた。近寄ると何かが突き出ている。それが人の手だと男が気づくのになんかそう時間はかからなかった。慌てて男が積もった雪を掘ると、中から少女が出てきた。

「かわいいそうに、成仏してくれ」

男が手を合わせてなんとなく聞いたことがあるような曖昧なお経を唱え、その場から立ち去ろうと腰をあげると

『待つて』

と、頭に響くような声が聞こえて来た。男が辺りを見回して誰もいないのを確認すると、男はあげていた腰を再び下ろして中腰になって少女の遺体だと思われる物に聞いた。

「まさか今のお前か？」

『そつだよ、…驚かないんだね』

「まあな、非常識な物はさんざん見てきたから、少々の事じゃ驚かなくなってるんだろ」

『へえ』

「なあ、ここはどこなんだ？あんたは誰だ？なんで俺はここにいる？やっぱり“あいつ”の所為なのか？」

『そんなにいつぱい言われると困るな』

「あ、悪い」

『クスツ、ううん別にいいよ。ここはね、終わってしまった世界。何も生まれず何も死なない世界。あなたの住んでいる世界とは異なる世界』

「俺の住んでるのは違う世界？」

『そう、絶対に交わる事が無いはずだった世界』

「なら何で俺はここにいる？やっぱり“あいつ”の所為か？」

『私にもよく分からないの。それに、あなたの言っている人の事は誰なのか分からない』

「そうか。」

『だから、あなたの世界のお話を聞かせて』

「まあ、別に構わんが」

男の話は声は時々クスクスと笑いながら聞いて一区切りついたとき、おもむろに男に質問した。

『あなたは、あなたの世界が好きですか？』

「自分の世界が好きかって？まあ、嫌いじゃないな。振り回されてはいるがそんな日常もそれなりに気に入ってるし」

声は寂しげに『そう』と言うと、『ならと』切り出した

『あなたは自分の世界に帰らなくちゃね。あなたを待ってる人も居るし』

「ああ、そうしたいんだがどうやって帰るんだ？」

『もう少ししたら自然に帰れる筈だよ。あなたがそう望むから。それと』

男の前に手のひらサイズの光の玉がどこからとも無く現れた。

「何だこれ」

『私からの贈り物。面白いお話を聞かせてくれた御礼。それに望めば何でも一つ願いが叶うの』

「そうか、まあ大事に使わせて貰うよ」

男がそう言って腰を再びあげると同時に世界が強く光だした。

『気をつけてね。どんな事があってもあなたの大切な人を守ってあげて』

「おい、そりゃどーゆー意味だ。帰り際にいやな伏線を立てるなよ」

『ふふふ、頑張ってね』

男の意識はそこでぶつつりと途切れた。

## ブレイクワールド(前書き)

二話目更新。ちょっと長いです

## ブレイクワールド

ジリリリ…ガチャン

今日も朝がやってきた。しかし、布団の魔力とは恐ろしいもので、いっこうに体を動かす気を起こさせない。

ドタドタ

だが、それも後ほんの数秒のことだろう。何故なら親に頼まれた妹が俺の部屋にかけてくる足音が聞こえてくるからだ。そして俺の予想は残念ながら的中。妹は勢い良くドアを開けると俺に向かってダイブを仕掛けてきた。

「キョン君起きて〜、朝だよ〜」

そう言っただけで妹はドスドスと俺の上で跳ね始めた。俺はその痛みに耐えかねて

「ほら、起きたぞ。だから人の上で跳ねるんじゃないやありません」

と言いながら、体を起こす。上に乗っていた妹は「きゃー」と言いながら、ベットの足を転がった。

「きゃはは、起きた起きた。さ、シャミ下に行こう」

そう言っただけで妹はこれまた珍しいオスの三毛猫のシャミセンを連れて部屋を出て行った。



「やれやれ。そういえば、なんか壮大な夢を見たような気がするんだが、何だったかな」

頑張つて夢の内容を思いだそうとしている俺の目に時計が目に入った。長い針が6の所を指していた

七時半……七時半!?

「やべえ、早くしねーと遅刻しちまう」

てゆうかさつき確認したときは七時丁度だったはずだろ。布団の魔力は起きられなくするだけじゃなくて時間の感覚を狂わせる力もあるのを忘れてたぜ。と、んなバカなこと考えてないでサッサと着替えて行かないと

その後、なんとか遅刻間際に学校についたが我らが団長様に「遅刻間際に来るなんてたるんでる証拠よ」と怒鳴られてしまった。

やれやれ。

「暇」

のんびりとした放課後、珍しく俺とハルヒ以外が居ない部室でいきなりハルヒがそうつぶやいた。俺が何の反応も返さないでいると、

「暇、暇、暇、暇暇暇暇暇暇暇暇ひーまー」

とわめきだした。流石に五月蠅くなってきたので仕方なく対応する

「五月蠅いぞハルヒ。別に良いじゃないか暇でも。たまにはこうゆうゆったりとした無意味な時間を過ごすのも悪くないぞ」

と、俺が言つと何が気に食わなかったのかハルヒは音をならして立ち上がり俺に詰め寄ってきた。

「あんたそれ本気で言ってるの？」

「ああ、そつだ」

「情け無いわね。あんたそれでもSOS団の団員なの？団長が暇つて言つてたらすかさず不思議な事を持つてくるのがSOS団の団員でしょうが」

別になりたくてはSOS団の団員になった訳ではないし、そんな簡単に不思議なんて落ちてるわけがないだろうが。

「まあ、いいわ。あんたは一生雑用として生きていくのね」

ハルヒよ別にそこまで言わなくても良いだろう。

「それにしても、ユキもみくるちゃんも古泉君も遅いわね。なにしてんのかしら」

ガチャ

ハルヒがそう言つと同時にドアが開いてSOS団の残りのメンバーが入ってきた。

「遅れて申し訳ありません」

「お、おそくなりました」

「……………」

ハルヒ「遅いわよ三人共。ユキまで遅れるなんて、なんかあったの？」

「……………親と連絡していた」

親って情報統合思念体か？もしかしてまた何か起こるんじゃないだろうな？

ハルヒ「ふーん、で古泉君はどうしたの？」

「バイト先でトラブルがあったようでそのことを話を聞いてました」

おいおい、古泉のバイト先から連絡って、やっぱりなんかハルヒ絡みのとんでも事件が起こってんじゃないだろうな？

「へー、大変ね。みくるちゃんは？」

「え、えーと私もちよつと親戚から電話が」

朝比奈さんのあの慌てっぷりは絶対親戚からじゃないな。多分未来からの指令みたいなもんだろう。まさか三人同時にそれぞれの上に呼ばれるとは。これはもう確実にハルヒ絡みで何か起こってるな

（おい、古泉お前ら三人が特に長門が上に呼ばれるなんてハルヒ絡みの事で何かあったのか？）

(はい、……いや、やはりこの場合は違つと言つべきなのでしょう  
か)

(面倒臭い位遠回しに言わんでもいい結局ハルヒ絡みなのかそうじ  
やないのか)

「ちょっとそ何男だけでヒソヒソ話してんのよ、気持ち悪いわね」

(おや、怒られてしまいましたね。この話は後程とゆうことで)

「おいハルヒ、気持ち悪いと言われるような事をした覚えはないぞ」

「男二人が密着してヒソヒソ話してたら気持ち悪いでしょうが。ま  
あいいわ。とりあえず今日の活動を始めましょう」

そのハルヒの言葉とともに入り口の前に突っ立っていた朝比奈さん  
と古泉(長門は理由を言ったら直ぐに自分の定位置に座って本を読  
んでいた)も自分の定位置についた。

朝比奈さんが着替えるので男性陣は一旦外に出たその時に古泉に話  
を聞こうとしたが

古泉「長門さんの意見も聞かないと、今回の事はただの超能力を持  
つただけの人間には把握しかねる事柄でして」

といつもインチキスマイルで言ってきた。

そのインチキスマイルが今日に限って妙に無理してるように見える  
のは気のせいだろうか。

そしてその後は特に何事も無くいつも通りに時間が過ぎ

パタン

「じゃあ今日の活動は終了。みんな鍵閉めちゃうから早く出て頂戴」  
長門が本を閉じると同時にハルヒがそう言った。俺たちがハルヒに従って部室を出ていくと後ろから長門が

(……いつもの場所)

と言ってきた。

(ああ分かった)

そしてその後家に帰った俺は簡単な服に着替えるといつもの場所……つまり不思議探索の時の待ち合わせ場所に行った

到着するとそこには朝比奈さん、長門、古泉の三人がもう来ていた。ホントにこいつら何分前から来てるんだ？

「あ、キヨン君」

「来られましたね。では今回の事について僕が聞いた事をお話ししましょう」

ハルヒが狙われている

古泉の話を単純に言つとそうゆうことだった。

「犯人までは分かりませんがこれは確実な情報です」

「はあ？、ちょっと待て。狙われてるって、ハルヒの力がか？」

「そう」

「長門、お前以外にハルヒの力をどうこうできる奴がこの世にいるのかよ」

「この世界の人間じゃない」

「まさか異世界人とか言うんじゃないだろうな」

「そう、これは異世界の人間がやっている事」

「まじかよ」

「それと、もう一つ。あなたの事について」

「ん、なんだ？」

「今日の午前零時から午前一時までの間あなたの存在が完全に消失していた。しかし原因が分からない、何か覚えていることはない？」

「いや、何も覚えてないな。なんか壮大な夢を見たような気がするくらいだ」

「内容を覚えていない？」

「悪いなそれがいくら思い出そうとしても思い出せないんだ」

「そう、なるべく思い出すように努力して」

「分かった、努力してみるよ」

そこでさっきまで口をつぐんでいた朝比奈さんが喋り出す

「あの、その、涼宮さんの力が取られちゃったら世界はどうなっちゃうんですか？」

「最悪の場合この世界は消滅してしまう」

「まじかよ」

その時、急に古泉が俺にタックルをかましてきた。

「っ、なにしやがんだ、こいず」

俺の言葉は最後まで言わずに止まった。何故なら古泉の背中からかなりの量の血が流れ出ていたからだ。

「大丈夫か！？古泉」

「ええ、何とか致命傷にはいたらなかったようです。それよりあれを見て下さい」

古泉はそう言って前方を指差した。そこには口元を骨のような物で覆った男が立っていた。薄暗くてよく見えないが男の手から水のようなものが滴り落ちている。多分古泉の血だろう。つまり、こいつが古泉を攻撃した犯人って事になる。

「チツ、外したか。めんどくせーな、邪魔すんなよ。テメーから死にてーのか」

男は血のついてない方の手で頭をかきむしった。

「誰だ、テメーは」

「俺か？俺の名前は……ん……あれ、何だったっけ？ヴェーダじゃないしヴァンドでも無いよな、………まあ、名前なんて関係ねーよ。テメーは今から死ぬんだからな」

男はそう言うと同時に姿が消えた。いや、正確に言うとなりのスピードに目がついて行かずそう見えただけが、だからと言ってそれがわかった所で避けられないなら意味はない

何で俺はこう命を狙われ易いのかね？俺なんかを殺したところで一文の得にもならないだろうに

なんて考えてる内に男の顔が目の前まで来ていた。

「死ね」

男の声が耳に入るが、俺は焦りが一周回ったのか逆に冷静になっていた。もしくは、二回もの臨死体験（一回は未遂だが）によって俺の心が馴れてしまったのかもしれない。だとしたら嫌な馴れだ。

ドス

とゆう何かが刺さる嫌な音は最初俺の体から発せられたと思ったが、



それにしても体のどこにも痛みがない。恐る恐る恐怖で反射的に閉じた目を開けると、長門が男の手を昔朝倉の攻撃から俺を守ってくれた時のように、自分の腕を犠牲にして受け止めてくれていた。男は舌打ちすると大きく飛び退く

長門「\$%&amp;mp;¥\*/?@」

長門が聞き取れないほどの早口で　聞き取れたところで意味なんかこれっぽっちも分からないだろうが　呪文のような物を唱えると長門を中心に白く光る半径3mぐらいの丸いドームのようなものが現れた。  
男がまた突っ込んで来るが長門が作ったドームのようなものに弾かれた。

「私を中心とした半径3mに防御用のフィールドを形成した。しかし」

「どうした、長門？」

「原因は不明だが、私の力が何者かに阻害されている。このフィールドも不安定。いつ壊されるか分からない」

「なっ」

男はそれを知ってか知らずか長門が作った壁を思いつきり殴っている。ふと、長門の腕をみるとさっき男の攻撃を受け止めた手から血が流れていた。

「長門、その腕どうした!？」

「能力が、阻害されているため自己修復が出来ない。しかし問題ない」

長門の顔は問題ないからはほど遠いかった。顔色は悪いし、何より俺を恐怖に陥れたのは長門が痛みで顔を歪めていた事だ。今までほとんどのたいした感情を浮かべたことが無い長門がこんな表情をするとは夢にも思っていなかった

「長門、正直に答える。今、お前はどのくらい弱ってるんだ？」

「あまり、変わらない。少し力が使えないだけ」

長門は俺から目をそらして答える

おいおい、嘘ついてるのがバレバレだぞ

「長門、俺の目を見て答える」

「……………今の私は有機生命体とほぼ変わらない」

「ってことは、下手したら出血多量で死ぬかもしれないって事か？」

「……………そう」

おいおい、なんてこった。まじかよ

「心配ない。あなた達は私が守る」

「そんな怪我で何言ってるんだ長門」

パキ

何か割れるような音がした、前を見ると、長門が張ったバリアのような物にひびが入っていた。

「このフィールドはもう長くは持たない、古泉一樹と朝比奈みくるを連れて早く逃げて」

「なら、お前も一緒に」

「私はこのフィールドを維持しなければならぬから、この場を離れるわけにはいかない」

「なら、逃げれる訳ないだろ、お前をおいて逃げるなんて」

その時、俺の肩を誰かが掴んだ。振り向くと、古泉だった

「…心苦しいですが、ここは長門さんの言う通りにしましょう」

「ふざけんなよ、古泉。長門を見捨てられるわけ」

「ではあなたはこの状況をなんとか出来るのですか？」

古泉が珍しく大声をあげる

今日は珍しいことばかりだな

「それは…」

「ここにおいても被害が増えるだけです。ここは逃げましょう」

俺は何も出来ないのか？いつもそうだ。肝心な所ではいつもこいつらに頼つてばかりだ。恨むぜハルヒ。なんで俺を一般人にしたんだその時、異変が起こった。いきなり俺の前に光る手のひらサイズの玉が現れた。

「これは」

俺の呟きに古泉が怪訝な顔をする。

「どうかなされたのですか？」

古泉にはこれが見えていないようだ。俺は改めて玉を見る。どこかで見ることがある気がする。その時、ふと脳裏にある風景が浮かんだ。吹雪で雪が積もり、その中で埋もれている少女。そしてこの玉

『それに願えば何でも一つ願いが叶うの』

そうだ、思い出した

「さあ、長門さんの張ったフィールドが健在な内に逃げましょう」

「いや、俺は逃げない。俺がお前らを守る」

「？、あなたはいったい何を」

俺は古泉の言葉を無視して、玉に触れて願った

俺に仲間を守る力をくれ

すると、玉の光が強くなり、目を閉じる。そして、光が収まり、目を開けると、手に二本のUSBメモリを少し大きくしたぐらいのメモリとそれを差し込むのであろう機械があった。

「それは一体、それに、今の光も」

さっきの光は古泉達にも見えたようだ。

「悪いな、説明してる暇は無い」

こうゆう時のお約束は勝手に体が動くとうものだが、俺も例に漏れず、自然と体が動いた。まず腰に機械を持って行くと、ベルトが現れて腰に巻き付いた。次に、メモリの出っ張っている部分を押す。

『ファンタジー』

『ノーマル』

そしてそれを腰の機械に差し込み、両手でメモリを差し込んだ所を横に押す

『ファンタジー・ノーマル』

すると周りにさっきの光の玉が大量に現れて、俺の体を包み込むと次の瞬間には、俺は変身していた。

バリーン

それと同時に長門の張ったバリアが破られた。俺は男に人差し指を向けながら、なんとなく言わなければならぬ気がする言葉を言っ

た。

「さあ、テメーの罪を数えろ」

## ブレイクワールド（後書き）

デバイスがダブルドライバなのは特に意味はありません。気分です

## ステイールハート（前書き）

大変遅くなって申し訳ありません（土下座）。今回も意味がわかりません。文才が欲しい。



## ステイールハート

キヨン視点

「……………めんどくせーな。早く帰りてえ」

男が心底めんどくさそうに言う。

「なら、帰ってくれ」

「そうゆう訳にも行かねんだよ。はあ、大体さ」

そして、なんかブツブツ言い出した

…調子狂うな

その時いきなり声が聞こえた

『こんばんは』

頭に直接響くような声。この声には聞き覚えがある。

「もしかして、あん時のか？」

『そうだよ。ふふ、久し振り』

「まだ一日も立ってないがな。…どこに居るんだ？」

辺りをキョロキョロと見回す。

『あなたの中だよ。今、精神だけがあなたの中にあるの』

「何でだ？」

『とりあえずお喋りは後。来るよ』

その言葉で我に帰る。見ると、男はブツブツ文句を言うのを止め、構えている。

「とりあえず、テメーを殺さないで、俺がどやされるわけよ」

「そんなの知らん。勝手にどやされてくれ」

「やなこった。俺の為に死ね」

そう言いながら男が突っ込んできた。

なんて身勝手な野郎だ。

『避けて！』

言われんでもわかってる。男の攻撃を横っ飛びにかわす。すぐに体制を立て直し今度はこっちから殴りかかる

「これでも喰らいやがれ」

がそれを男は難なく受け止め鳩尾を殴ってくる

「かはっ」

殴られた俺は後ろに吹き飛んだ。

『大丈夫？』

「大丈夫に見えるか？」

『全然』

即答かよ。確かに全然大丈夫じゃ無いけどさ。

『相手は速いし、こちらよりも断然力がある。こっちは武器が何もない。どうする？』

「分が悪いにも程があるだろ。せめて武器があれば」

大剣的なもの

その時、俺の手元にさっきの光の玉が現れて俺の手の中で両刃の剣になった。

「これは……」

『それがファンタジーの能力、幻想を現実に変える力』

「なあ、そうゆう能力があるんだったら早く言ってくれないか？」

『しめん』

「まあ、良いけどな。さあ、仕切り直しだ」

剣を握りしめて男へと走りながら、切りかかる。が、男は難なくかわしカウンターの要領でまた俺は鳩尾を殴られ吹っ飛ぶ

「つか、なんか格好つけた後にこれって、恥ずかし。ホントハルヒが居なくて良かった

「よく考えたら、ただの高校生が少し力が強くなったからって、勝てるわけねーよ」

仰向けに倒れたまま呟く

『あきらめちゃ駄目だよ』

「なら、どうすればあんなのに勝てるんだ？」

俺は半ば投げやりに聞くと意外な言葉が返ってきた

『なら、あなたが増えれば良いんじゃないの？』

「は？」

いきなりの言葉に啞然とする

いまコイツなんて言った？増える？誰が？

『ファンタジーの力を使えばそれが出来る。さっきみたいに想像して』

俺はもう、なるようになれとヤケクソ気味に自分の分身を想像する。

すると、俺の周りに先程の光の玉が二個現れて、俺と同じ姿の分身が現れた

『ね、出来たでしょ』

「だからこうゆう事が出来るなら始めから言えー……」

流石に大声を出してしまった

『し、ごめんなさい』

「はあ、もういいからサッサとやるぞ」

俺が立ち上がって、構えると他の分身も構えだす

「なあ、こいつらって勝手に動いてくれるのか？」

『うん、動くよ』

「なら良かった。操作しろって言われても無理だしな」

「何体増えようがかんけーねーよ」

そう言って男が突っ込んでくる。俺は剣を構えようとするが

「ぐあっ!?!」

その前に俺の分身が吹っ飛ばしていた……っつて

「ちよっとまで、あの分身俺よりつえーぞ!?!どうなってんだ?」

『多分、あなたが無意識に分身の強さを自分より強くしたんじゃないかな?』

そんなことまで出来るのかよ。もう殆どチートの域だな

「あら、無様ねヴィラ」

男の横にいつの間にか女が立っていた

マジでいつから居たんだ? 全く気づかなかった

「ふざけんな! 俺がこんなのに負けるわけがねーだろ。体が動かなくなっただよ」

男が叫ぶ。おいおい、悔しいのはわかるがそれを世間一般では負けって言うんだ

女はクスクスと可笑しそうに笑いながら

「あなたはまだ調整中だから仕方ないわ。それに目的も果たせし調整中? なんの事だ? 体が動かないのはダメージで体が言うことを聞かないって意味じゃないのか? ……いや、それより

「おい、お前らの目的ってのはなんなんだ?」

「か八か聞いてみる。が、やはり反応は思った通りで

「教える訳ないでしょ?」

そりゃそうだ

「なら、力づくで聞いてやるよ」

俺の分身達が女に向かって行く。「ここで俺自身が行けないのが情けない話だ

「あら、良いのかしら？この子がどつなっても」

そう言った女の腕の中には

「なっ、ハルヒ？」

そう。女の腕の中でハルヒがぐったりとしていた

「テメエ、ハルヒに何しやがった」

「あら怖い。別に怪我なんてさせて無いわよ。ただし、あなたの行動次第では傷ついちゃうかもね」

女はニヤニヤと笑いながら言う

くそっ忌々しい

「どつすねばいい？」

「とりあえず、変身を解いて貰おうかしら？」

「いけません。今戻ったら確実に殺されてしまいます」

「あら、友達思いなのね。でも良いのかしら？神様が死んじゃっても」

女がハルヒの喉元にナイフを突きつける

「くっ、卑怯な」

「卑怯で結構よ。……フフ、今とっても良い顔よ、あなた達」

振り返って見てみると古泉の顔が怒りで歪んでいた。朝比奈さんやなんとあの長門でさえハッキリとわかるぐらい女を強い怒りの眼差しで見ている

「で、どうするの？この子を見殺しにするかあなたが変身を解くか」

女の言葉に俺は黙ったまま変身を解いた

「キヨン君！？」

スミマセン、朝比奈さん。でも、やっぱりハルヒを見殺しになんて出来ないんです

「さあ、変身を解いたぞ。ハルヒを放してくれ」

「うふふ、あなた達の友情に免じて放してあげるわ」

そう言って女はドンとハルヒを押す。当然気を失っているハルヒが立っていられる筈もなく、ゆっくりと倒れて行く。女が押した瞬間、俺はハルヒに向かって走っていた



くそっ、間に合ってくれ。

スライディングをしながらギリギリでハルヒの体を支える。ハルヒは死んでいるんじゃないかと思うくらい冷たくなっていた

「キョン君、前!!」

朝比奈さんの声で顔を上げると剣を振り上げている女の姿が目に入った

「さて、私たちの事を知ったからには死んで貰わなくちゃね。サヨナラ」

やっぱりこうなるのか

俺は目をつぶりハルヒを守るように覆い被さって死を覚悟したが一向に攻撃が来ない。恐る恐る顔を上げると女の腕にさっきまでなかったピンク色の輪っかがついており、女は剣を振り上げた状態のまま微動だにしていない

「どうなってるんだ?」

その時、空から二人の女性が降りてきた。一人は茶色い髪をツインテールにして白いドレスのような服を着た女性、もう一人は金色の髪をツインテールにして、黒い服を着た女性。

「こちらは機動六課、フェイト・T・ハラオウン執務官」

「高町なのは一等空佐です。あなたを民間人攻撃の現行犯で逮捕し

ます。武器を捨てて大人しく投降してください」

二人は手に持っている杖のような物を女に向けながらそう言った

「あらあら、まさかあの高町なのは一等空尉にフェイト・T・ハラ  
オウン執務官直々のお出ましとはね。一般人攻撃の現行犯如きにし  
ては随分おっかない人達が来たものね。こうゆうのはもう少し下の  
奴がやるんじゃないの？」

「あなたに質問の権利はありません。大人しく武器を捨てて投降し  
てください」

「嫌よ」

女は腰から剣を取り出すと輪っかの付いた方の腕を切り落とした。  
こいつ正気か？

「じゃあ、魔王の逆鱗に触れる前に失礼するわ」

そう言うと女は倒れている男を抱えて背後に黒い穴が現れ女が入る  
と閉じた

「君、大丈夫？」

茶色い髪の方の女性

確か高町さん

が話しかけてきた

「はい。それより、あっちの二人を見てやってください」

俺はハルヒを抱えたまま長門と古泉の方を指す。高町さんは心配そ  
うに二人の方へと近づいて行った。俺はもう一人の女性に話しかける

「えーと、フェイトさんでしたっけ？」

フェイト「うん。どうしたの？」

俺は単刀直入に聞く

「あなた達は一体誰で、俺は今度は何に巻き込まれたんですか？」

「今度はって事は前にも何回かこうゆう事に巻き込まれた事があるの？」

「ええ、まあ、何度か」

「なら、話しておいた方が良いね。どちらにしても話さなくちゃいけないかったし。私達は」

「フェイトちゃん」

フェイトさんが話し出したとき、タイミングよくなのはさんが話しかけてきた

「ゴメンね、ちょっと待って……どうしたの、なのは？」

「二人とも結構傷が深いから一度シャマルさんに見てもらった方が良いかも」

「そう、わかった。ごめんなさい、話は私達の本部に帰ってからでも良い？」

フェイトさんが申し訳なさそうにこちらを見てくる。

「ええ。構いませんよ。あいつらをほっといてまで聞くことも思いませんし」

「ありがとう。友達思いなんだね」

フェイトさんはそう言うてにっこりと微笑んでくる。俺は自分の顔が赤くなっているのを悟られまいと古泉達の方を向くと古泉がなのはさんに肩を貸して貰っていた。くそっ、うらやましい奴め。

そして、俺達は機動六課の本部とゆう場所に連れて行かれた

## ステイールハート（後書き）

優希「あとがきコーナー。とゆうわけで今回からあとがきコーナーを始めます」

キヨン「それは良いんだがなんで高町さんたちが地球に居るんだ？」

優希「それについては次回！」

キヨン「あっそ」

優希「聞いてきた割には素っ気無い返事だな」

キヨン「他になんていえばいいんだよ？」

優希「まあ、別に良いけど。とゆうわけで朱神優希とキヨンでした。感想お待ちしてます」

キヨンの決意（前書き）

とある人物が壊れます

## キヨンの決意

機動六課についた俺達は朝比奈さん、長門、古泉はフェイトさんに連れられて医務室に。俺だけは何故か高町さんに応接室のような場所に連れてこられた。今は特に会話もなくソファアに座っている。

……気まずい

キヨン「あの、高町さん。俺も長門達のお見舞いに行きたいんですが」

俺の正面に机を挟んで座っている高町さんに言うと高町さんは少し困った顔をした

「ごめんね、会わせなくちゃいけない人が居るんだ。後、なのはさ  
んで良いよ」

「はあ。じゃあ、なのはさん。会わせたい人って、誰ですか？」

「ごめんな、遅くなってもうた」

俺がそう言うのとほぼ同時に、なのはさんと同い年位の女性が部屋に入ってきた

「遅いよ、はやてちゃん」

「いやーごめんごめん。会議が長引いてしもつてな」

「なのはさん、この人は？」

「あ、さっき言った会わせなくちゃいけない人」

「機動六課の総部隊長八神はやてです。よろしく」

「あ、はい。よろしくお願いします」

慌てて立ち上がって挨拶をする。八神さんはにこにここと笑いながら俺の正面のソファーに腰を掛けた

「そんなにかしこまらんでもええよ。とりあえず、座ったら?」

八神さんに促されるままにソファーに腰をかける

「今回は大変やったな、ごめんな助けにはいるのが遅れて。君の友達も怪我させてしもうたし」

「気にしなくても良いですよ、別に誰かが死んだわけじゃ無いですし、あいつらもそんな事であな達を恨むような奴らじゃないんで」

「そうか。それならええんやけどな」

申し訳なさそうなのはやてさんの言葉に笑ってそう言う。実際あいつ等はそんな事を気にするような奴らではない

「で?」

「ん?どうしたん?」

「それとは別に俺に何か話があるんじゃないですか?謝罪をするな



ら俺じゃなくて寧ろ怪我をした長門達にするべきです。俺だけがここに呼ばれたのは長門達に聞かれてはマズい事を話すからじゃないんですか？」

「ええ勘しとるな、君。キヨン君やったかな？」

「あだ名なんですけどね。ややこしいんでそれでいいです」

「そうか。さて、キヨン君。君が使ってた物今手元にあるかな？」

「あ、はい。これですよ」

横に置いていたメモリと機械を机の上に置く。はやてさんはそれを手にとつてじっくりと観察した後俺の方を向いて

「キヨン君はこれをどこで手に入れたん？」

「それを話す前にあなた達の事も話してください。ここは一体なんの組織であなた達は何者何ですか？それにあの女も」

はやてさんは少し迷った後話し出した

「キヨン君、魔法って信じる？」

「魔法ですか？まあ、信じたくはないですが信じますよ。寧ろ信じない方が難しいぐらいです」

「珍しいな。普通そんな簡単には信じられへんに」

「まあ、環境が環境ですから」

俺は宇宙人、未来人、超能力者と毎日顔をあわせてるんだ、今更魔法使いが現れたって大して驚かない

「まあ、私達は君が考えてる魔法とは少し違うやろうけど魔法が使える、魔導師ゆうやつや」

そして、魔法の事、機動六課の事を聞かされた

「なんとなくは理解出来たかな？」

「はい。まあ、本当に大まかにですけど。それで、あの女についてですけど」

「それやけど、実は私らもあまり知らないんよ。ただ、最近出てきた次元犯罪者としか」

「今回は彼女を捕まえるために地球に行ってたんだけど」

「見つける前に俺達が襲われたってことですか」

「まあ、そうゆうことやね。さて、次はキヨン君の番やね」

俺はハルヒの事、今朝みた夢の事、光の玉の事を話した。ハルヒの事については少し迷ったが話しておいた。

そして話し終って二人の顔を見るとはやてさんもなのはさんも信じられないといった顔をしていた

「宇宙人に未来人に超能力者に世界を自分の思い通りにする女の子

か

「そんな人達が居るんだね」

「せやね、まだまだ世界は広いわ。自分たちの住んでた世界でさえまだ知らんことが仰山あるんやな」

はやてさんは笑いながらそう言った

「自分たちの住んでたって、八神さん達は俺達と同じ世界の出身なんですか？」

「そうだよ。私やはやてちゃんは地球出身。フェイトちゃんはこっちの世界出身なんだ」

「確かになのはさん達の名前おもいきり日本人の名前ですもんね」

ひとしきり話した後ははやてさんは真剣な顔をした

「さて、キヨン君。少し真面目な話しをするんやけど、ヘタしたら君を逮捕せなあかんようになるかもしれんのんよ」

「なっ、ど、どうゆう事ですか？」

逮捕とゆう言葉に体が震える

「この、二つのメモリはさっき説明したロストログアゆう代物なんよ」

はやてさんは机の上に置いてあるメモリを手にとってそう言った

「それで、キヨン君は無断でこれを使用した。これって結構罪が重いんだ」

「でも、あの時は非常事態だったし、そもそも俺はそれがロストロギアだって知らなかったし」

「わかるとるよ、そのぐらい。でも上の連中は頭の固いんばかりや。それにこのデバイスがある」

はやてさんが今度は機械の方を持ち上げる

「ちゃんとした設備で調べないと細かい事はわからないけど、このデバイスはこのロストロギアの力を制御するために作られたみたいなんだ」

「そんな物を持つてるのに知りませんでしたじゃ通用しないって事ですか」

「そうゆう事や。キヨン君が話してくれた夢の事だって言い方は悪いけど頭の可哀想な子の戯れ言ぐらいにしか聞いてもらえん」

確かに言い方は酷いが、自分でもそう思うだろうから黙っておく

「せやから、キヨン君には機動六課に入隊して貰いたいんよ」

はやてさんの言葉で思考がストップする。さて、今この人はなんて言った？俺が機動六課に入隊する？Why、何故？

「機動六課に入ってくれたらあたしが知り合いに掛け合ってキヨン

君を守ってあげることが出来る。それにキヨン君は魔力資質が結構高いから戦力的にもかなり助かるんやけど」

「そんな事言われたって俺は超平凡な高校一年生ですよ。SOS団でも俺だけがなんの力も持ってないし」

「大丈夫やって。私やなのはちゃんも魔法のこと何も知らなかった所から今に至るわけやし、それに私達が魔導師始めたんは小学生の頃やで」

「でも」

「でもやあらへん。キヨン君に残された道は機動六課入って逮捕されんか話し蹴って逮捕されるかのどっちかや」

「それはもう、殆ど脅迫ですよ」

その時なのはさんが横から助け舟を出してくれる

「はやてちゃん、駄目だよ。確かに戦力は欲しいけどそんな脅迫まがいな事したら。ちゃんとキヨン君の意志で決めて貰わないと。ごめんねキヨン君。別に今の話は断ってくれても大丈夫だから」

なのはさんが申し訳なさそうに言う。丁度その時ドアが開いてフェイトさんと朝比奈さんが入ってきた

「あ、フェイトさん、朝比奈さん。長門達の様子は？」

「うん。二人とも命に別状はないからすぐによくなるって」

「でも涼宮さんはまだ目が覚めないんです」

「そうですね。まあ、すぐに目を覚ましますよ。どちらかというと目を覚ました後の言い訳を早く考えた方がいいですね」

俺が苦笑しながらそう言うと朝比奈さんも同じように苦笑を漏らす

「とりあえず、話は以上や。キョン君、さっきの話考えといてな」

「わかりました。考えときます」

「キョン君。なんの話だったんですか？」

「なんでもありませんよ。それより俺も長門達のお見舞いに行きたいんで案内して貰ってもいいですか？」

「あ、はい。わかりました」

そう言って朝比奈さんが部屋から出て行き俺もその後を追って外に出ようとしたら

「あ、私もついて行くよ」

「私もや。ちゃんと君のお友達にも謝罪しとかなあかんしな」

なのはさんとはやてさんが俺達の後を追ってきた

「謝罪なんてしなくてもいいですよ。さっきも言った通り別にそんな事気にする奴らじゃないですから。約一名を除いて」

謝罪どころか慰謝料を請求するハルヒの姿が目には浮かぶ

「せやけどー応謝つとかんとこっちにも面子ゆうもんがあるから」

「そうですか。わかりました」

そこまで言われたら流石に断れない

「それにしても…」

はやてさんが朝比奈さんを凝視する。いや、正確に言つと朝比奈さんの胸を穴が悪ほど見ている

「あ、あの。なんですか？」

「…負けた」

はやてさんがいきなり立ち止まった

「へ？」

「年下に負けたー」

「ふ、ふえ〜!？」

少しのあいだ俯いて肩を震わせたかと思うといきなり暴れ出した

「ちよつ、はやてさん!？」

「落ち着いて、はやてちゃん」

なのはさんと二人で止めようとするが一向に止まる気配がない

「なんで、もうすぐ二十歳のあたしが高校生に負けるんやー」

「成長は人それぞれだから仕方ないよ、はやてちゃん」

「うるさい。この子と同じぐらいあるなのはちゃんにあたしの気持ち  
ちがわかるか」

なのはさんのフォローも裏目にではやてさんの暴走はエスカレーター  
卜する

「うるさいですよ。怪我人が居るんですから静かにしてください」

俺達はやてさんの暴走を止めようと躍起になっていると、近くの  
部屋から白衣を着た女性が現れた

「シャマル」

「どうしたんですか、はやてちゃん？」

「実は…」

泣きじゃくって話が出来ない状態ではないはやてさんの代わりに、な  
のはさんが苦笑いしながら白衣の女性 シャマルさんだよな  
に  
説明をする

「つまり、はやてちゃんの一方的な嫉妬って事ですね」



「まあ、そつゆつ事です」

「おや、騒がしいと思ったらあなたでしたか」

シヤマルさんの後ろから古泉が顔を出した。とゆつことは、ここが医務室か

「よう、古泉。もう立って大丈夫なのか？」

「傷は深いそうですが幸い足に傷を負った訳では無いので立って歩くのに支障はありませんよ」

「そつか。長門は？」

「長門さんは少し血が足りなくて貧血気味で今は寝てます。それにしても驚きましたよ。まさか魔法使いが現れるとは。しかも異世界人」

「確かにな。だがまあ、宇宙人、未来人、超能力者が居るんだ、今更異世界の魔法使いが現れたって大して驚きはしないさ」

「確かにその通りですね」

「ハルヒはまだ寝てるのか？」

「ええ、ぐっすりと。見ていきますか？」

古泉と一緒に医務室に入る。はやてさん達はまだ何か話していたがとりあえずこつちの方が先だろう

「ああ。顔に落書きでもしてやるか」

「ほどほどにしておいて下さいよ」

古泉の笑顔が困ったように歪む。心配しなくても額に肉ぐらいで許してやるさ。古泉に案内されてカーテンで仕切られているベッドまでくる

「僕はシャマルさんに少しお話があるのでここで。本当にほどほどにしておいてくださいね」

古泉は俺にそう念を押すとシャマルさんの方へと向かった

やれやれ、そんなに俺が信用出来ないのかな？

カーテンの中に入ると静かに寝息をたてて寝ているハルヒがいた。早速落書きをしてやろうと近づいてあることに気が付く

「そっぴや俺、今ペン持ってねーや」

全くなにやってんだよ、俺

アホらしくなり近くにあつた椅子に座るとハルヒの顔を見る。気持ちよさそうに寝てるな。ポケットと見つめっているとハルヒの目がゆっくりと開いた

「気が付いたのか、ハルヒ!？」

「……………」

ハルヒは無言のまま上半身だけを起こすと辺りを見回す

「どっ？どっ？」

ハルヒは薄気味悪いぐらい静かに俺に問いかけてきた。いつもなら耳鳴りがするぐらい大声で聞いてくる筈なのに。寝起きだからか？

「病院の一室だよ。それよりお前、なんで倒れたんだ？古泉から聞いて心配したんだぞ」

適当な話をでつち上げる。ここで何か覚えていたら流石に寝起きでも大声をあげるだろう

「変な女がいきなり私の部屋に現れて…そこからは覚えてないわ」

しかし、やはりハルヒは薄気味悪いぐらい静かに、まるで感情が無いかのように喋った

「それだけか？その女にたいしてなんか思ったりする事はないのか？」

「特にないわ」

「なっ」

そんな不思議体験をしたのに特にない？こいつは本当にハルヒなのか？なら

「ハルヒ、さっきここは病院だって言っただけだな、あれは嘘だ。ホントは機動六課って所の医務室で俺達が住んでる世界とは違う異世

界にある場所なんだ。異世界だぞ、異世界。お前が探してた不思議だ」

これは賭だ。もし、これでいつも通りの反応が無かったら、こいつはハルヒじゃない。反応があったら…その時はその時だ

「へえ、異世界ね。確かに私の探してた不思議だわ。でも、何故かしらね？何も感じないわ」

ハルヒがそう言った瞬間、俺は勢いよく立ち上がってハルヒの腕を掴んでいた。立ち上がった勢いで椅子が大きな音を立てて倒れるが今は気にしてられない

「お前は、誰なんだ？」

「何わけのわからない事言ってるの？私はハルヒよ、キヨン」

「違う。お前はハルヒじゃない。ハルヒなら女に襲われた事に苛立ちながらも今の状況を楽しんでる。何も感じないなんて言う奴じゃない」

「ど、どうしたんですか、キヨン君!？」

椅子が倒れた音と俺の怒鳴り声で他の人達が集まりだす。俺はそれを気にせずにハルヒの腕を掴んだまま睨みつける

「痛いわよ。放しなさい、キヨン」

「もしハルヒなら、SOS団を作った時みたいに目を輝かせてくれよ。いつもみたいに笑ってくれよ」

無意識にハルヒの腕を握っている手に力が入る

「キヨン、本当に痛い。放して」

ハルヒの声で我に帰り腕を放す

「なにも感じないの。楽しいも悲しいも、なにも」

目の前が真っ暗になる。足に力が入らない。倒れそうになった俺を誰かが支えてくれた。後ろを見るとそれはなのはさんだった

「少し頭を冷やしに行こっか、キヨン君」

俺はなのはさんに連れられて外に出た。向かった先は海が見える場所だった

「大丈夫？キヨン君」

「ええ、だいぶ落ち着きました。すみません、お見苦しい所を見せてしまって」

「ううん。気にしないでいいよ。今一番辛いのはキヨン君なんだから」

「今日の団活の時のハルヒはいつも通りでした」

俺は唐突に喋りだす。そう。今日学校で会っていた時は普通のハルヒだった

「だから、なにかされたんだとしたら、団活が終わった後、あの女がハルヒの部屋に現れた時しかないんです」

「キヨン君？」

いきなり語りだした俺をなのはさんが不思議そうに見てくる

「なのはさん。俺を機動六課に入らせてください」

「……………」

「俺の自分勝手な理由ですけど、でも今やらないともうハルヒの感情は戻ってこない気がするんです。だから……………」

「わかった、いいよね？はやてちゃん」

なのはさんが茂みに向かって呼び掛けるとはやてさんと古泉が茂みから出てきた

「あはは。やっぱりバレてたか。…………うん、ええよ。元々キヨン君には入って貰いたかったしな」

「あなたも不思議人間の仲間入りですね。おめでとつございます」

「殴られたいか？古泉？」

「遠慮させて頂きます」

「今日はもう遅いから明日ほかの皆に紹介するね」

「はい。わかりました」

「明日からよろしくな、キヨン君」

こうして俺の起動六課入隊が決まった

~~~~~

「今日はここで寝てくれる？」

なのはさんに連れてこられたのは二段ベッドがある二人部屋だった

「あ、はい。わかりました」

「じゃあ、また明日。何か合ったら呼んでね」

なのはさんはそう言って出て行った。とりあえず俺はベッドに寝転がった

「あんなことを言つといて、今更だがホントに俺なんか魔導師？  
なんかをちゃんとやっていけるのか？」

『マスターなら大丈夫ですよ』

「うわっ！っつづ」

いきなりの声にビックリして頭を思いつきりあげると頭をしこたま

上のベッドに打ちつけた

「っつゝ」

『そんなに驚かなくてもいいじゃないですか』

痛む頭を抑えながら辺りを見回すが誰も居ない

『ここですここ』

声のする方を向くとそこにはあの機械があった

「まさか、お前が喋ってるのか？」

『はい。そうですよ。やっと気付いてもらえましたか』

「魔法の次は喋る機械か」

『マスター？』

「いや、何でもなし。それより、ホントに俺なんかで大丈夫なのか？」

『はい。私を使いこなしたマスターなら大丈夫です』  
かなり自信満々に断言された

『それで、マスター。一つお願いがあるんですけど』

「ん？なんだ？」



『私に名前を付けて貰えないでしょうか？』

「名前？」

ハルヒほどではないにしろ、俺だってあまりネーミングセンスが良い方ではない。

「俺がつけなきゃ駄目なのか？」

『はい。駄目です』

また断言されてしまった

「わかったよ。ただ、ネーミングセンスには期待するなよ」

そう言って頭の中で適当な言葉を考える。うーん、何が良いかね

「シャミセンなんてのは…」

『却下です』

言い終わる前に却下されてしまった。仕方がない。なんか他にはないか…

「タナトスなんてどうだ？」

『タナトス、ですか？』

「ああ。この間長門が見せてくれた本に載ってた名前なんだが妙に

印象に残っててな」

『わかりました。他に良い名前も出てきそうに無いのでタナトスでいいです』

「偉そうだな、お前」

『今日からマスターのデバイスとして働かせてもらうタナトスです。よろしく願います』

「あ、ああ。此方こそよろしくな。にしても、なんでなのはさん達の前では喋らなかつたんだ？」

『だって、恥ずかしいじゃないですか』

どんな理由だよ、全く

「明日は早いから俺はもう寝るぞ」

『はい。了解しました』

部屋の電気を消してベッドに潜るとすぐに深い眠りについた

## キヨンの決意（後書き）

優希「あとがきコーナー」

優希「さて、今回はキヨンの能力についての説明だ」

キヨン

使用デバイス・タナトス  
形状・仮面ライダーWのダブルドライバーと同じだが色は黒。待機  
状態は形はそのままの腕時計型。人格は女性

メモリ・ノーマルとファンタジー。ファンタジーの能力で武器を創  
ったり、分身を生み出す事が出来る。生み出した武器は基本的に意  
思は持たない。例外はキヨンの分身。ノーマルの能力はネタバレに  
なるので今回は書きませ。普段はタナトスの中に仕舞われている  
魔力光・薄い黄色

優希「まあ、こんな感じかな？もうちょっと能力は付け加えるつも  
りだけど」

優希「つーか、タナトスって。ホントネーミングセンスがねーな」

キヨン「うるせえ、そんぐらいしか思いつかなかったんだよ」

優希「まあ、今日はこの位にして謝辞のコーナー」

キヨン「なっぺ様。感想ありがとうございます」

優希「とゆつわけで、朱神優希とキヨンでした」

## フォワードとの出会い（前書き）

優希「前書きコーナー」

キョン「今回はアホの作者のせいであーなーになっていた時系列を紹介するぞ」

優希「涼宮ハルヒの憂鬱は『消失』終了後。リリカルなのはs t r i k e r sはティアナがなのはに頭を冷やされた後、ヴィヴィオが出てくる少し前ぐらいの設定です」

本編は何がやりたいのかわからなくなってきた

## フォワードとの出会い

『つぶつぶ』

『キョン!』

あの女にハルヒが捕まっている。近づこうとするが全く体が動かない

『ハルヒ!』

『クスクス。あなたが弱いのが悪いのよ』

そう言いながら女は剣を振り上げてハルヒに向かって振り下ろす。

「ハルヒ!つぶ」

そこで目が覚めて起き上がった。と同時に上にまた頭をぶつけてしまった

『大丈夫ですか?マスター?凄くうなされていましたよ?』

痛む頭をさすっているとタナトスがそう言った。

そうか、今のは夢だったのか。良かった。

着ていた肌着は上下ともに汗でかなりびしょびしょになってしまっていた

「ああ。大丈夫だ。ちょっと嫌な夢を見ただけだ」

『誰かの名前を呼んでいたようですが…』

「…忘れてくれ」

そう言っただけで痛む頭を押さえながらすっかり汗を吸って冷たくなってしまった肌着を風邪をひく前にと上下を脱いで汗を拭こうとタオルを取ろうとしたとき

「キヨン、起き…て…る…?」

なんとも嫌なタイミングでフェイトさんが入ってきた

キヨン「あー、えっと、フェイトさん?」

すぐに近くにあったタオルをとって前を隠すと入ってきた格好で固まってしまった相手に呼びかける

「……………きゅん」

「フェイトさん!?!」

フェイトさんは一瞬でトマトのように赤くなったかと思うとバターンと倒れてしまった

30分後…

ちゃんと服を着た後倒れたフェイトさんを部屋のベッドに寝かせて気が付くまでタナトスとたわいもない話をして過ごす。今タナトスは待機状態とかで腕時計のような形になっている。そして、意外と

感情表現が豊かだ

「う、うーん。ここは……」

「気が付きましたか？」

声が出たのでタナトスとの会話を中断してベッドの方へと行くと目を覚ましたフェイトさんとちょうど目があってしまった

「……きゅっ」

「ちよっ、フェイトさん！？気をしっかり持ってください」

またもや気を失いそうになったフェイトさんに必死に呼びかける

「あ、うん。ごめん」

なんとか気絶しなかったのはさんだがまだ顔は赤い

「大丈夫ですか？」

「うん。なんとか。今何時？」

そういえばさっきのドタバタで時間を見てなかった。壁にかけてあった時計をみる

えーと、今は

「6時40分ですね」



「嘘っ！？つぶ」

フェイトさんは勢いよく起き上がったせいで頭をぶつけてしまっていた

あれは痛い

「大丈夫ですか？」

「な、なんとか。それよりキヨン君、早く着替えて」

「いや、着替えてますが」

「そうじゃなくて、昨日渡した機動六課の制服」

「あ、これですか？」

昨日渡された茶色のスーツみたいな服を取り出す

「そう、それ。早く」

フェイトさんはそう言って急かすが…

「あの、フェイトさん…出来ればその、向こう向くか出て行って貰わないと着替えづらいんですが」

俺の言葉にフェイトさんは一瞬考えた後顔を真っ赤にすると勢いよく立ち上がるうとしてまた頭を打った

「だ、大丈夫ですか？」

「う、うん。ごめんね、すぐ出て行くから。あ、あとデバイスも持ってくるように」

フェイトさんは頭を押さえてそう言つとふらふらとした足取りで部屋の外に出て行った

10分後

「フェイトさん。着替え終わりましたよ？」

「デバイスは？」

「ちゃんとつけましたよ」

右腕に付けたタナトスを見せる

「あ、待機状態にしたんだ。名前はなんて言つなの？」

「タナトスです」

『マスターのデバイスのタナトスです。よろしくお願いします』

「うん。よろしく」

「って、話してる時間はないんだ。キョン、急いで」

フェイトさんが腕を掴んで走り出す。てか、速すぎます。着いたのは昨日と同じ部屋だった

「ゼー、ゼー。速すぎますよ、フェイトさん」

「ごめんね、かなり遅刻気味だったから」

俺が膝に手をつけて息を整えながら抗議の声をあげるとフェイトさんはホントに申し訳無さそうに謝った。そうしていると部屋からなのはさんが出てきた

「遅いよ、フェイトちゃん。なにやってたの？」

かなりご立腹のようだ

「えっと、そのなんて言うか」

「フェイトちゃん？」

フェイトさんがかなり返答に困っている。

そりゃそうだろう。あんなことがあつたなんて言いたくは無いやな。元はといえば俺のせいだし、フォーローしとかないと

「すみません、なのはさん。実は俺が勝手に部屋を出て道に迷っちゃって、フェイトさんは俺を探してて、それで遅くなっただけです」

フェイトさんとなのはさんの顔がこちらを向く。フェイトさんはかなり驚いた顔をしている

「そうだったの？いい？キヨン君。あまり厳しい事は言いたくないけどキヨン君は機動六課に入ったんだから物珍しいのはわかるけどあまり勝手な行動をしたらダメだよ」

キヨン「はい。すみません」

「じゃあ、入ろう。みんな待ってるから」

なのはさんはそう言って部屋に入っていった。俺もそれに続いた。フェイトさんは何か言いたそうだったが何も言わずついてきた。

部屋には俺と同じぐらいのオレンジ色の髪と青い髪の女子と妹と同じぐらいのピンク髪の少女と赤い髪のこちらも妹と同じぐらいの少年の計四人。ピンク髪の足下には竜みたいな人形が置いてある。そして肩に小さい女の子の人形っぽいのを乗せたはやてさんと古泉が居た

「おはようございます。いい夢は見られましたか？」

古泉が近づいてきて声をかけてくる

「ああ。いい夢過ぎて頭をぶつけちゃったよ」

「それはお気の毒に」

「キヨン君も古泉君もお話はその辺にしてな。さて、キヨン君。こっち来て」

はやてさんに呼ばれたので近づくとみんなの方を向かされた

「この子は今日から機動六課のフォワード部隊に入隊する事になった民間協力者のキヨン君。魔法の事とか全然知らんからみんな先輩

としている教えてあげてな」

はやてさんが隣に立って俺の紹介をしてくれた。

「みんな、自己紹介して」

「……はい……」

フェイトさんの言葉で4人が立ち上がった

「フォワード部隊スターズ分隊のスバル・ナカジマ二等陸士です」

「同じくティアナ・ランスター二等陸士です」

「フォワード部隊ライトニング分隊のエリオ・モンディアル三等陸士です」

「同じく、キャロル・ルシエ三等陸士です。それでこの子が私の竜のフリードリヒ。通称フリードって言います」

「キュアアア」

妹と同じぐらいの背のピンク髪の少女の足下の人形……いや、フリードがよろしくとでも言うように鳴いた

「そして私のはやてちゃんのユニゾンデバイスのリインフォース？（ツヴァイ）です。リインって呼んでください」

いきなりはやてさんの肩に乗っていた人形だと思っていたものが宙に浮かんで俺の目の前まで来るとそう言った

「うお!?!」

流石に驚いてのけぞる

「あかんよ、リイン。驚かしたりしたら」

はやてさんがリインに注意する

「あつ。ごめんなさいです。驚かすつもりはなかったんです」

「あ、別に気にしないでくれ。いきなりだったから驚いただけだ。よろしくな、リイン」

肩を落として明らかにしょんぼりしているリインに優しく声をかける

「はいです」

リインは顔をあげて嬉しそうに笑いながら頷いた

「さて、みんなの自己紹介も終わったし、それじゃ質問タイムや。なんかキヨン君に質問ある人？」

はやてさんがそう言うのとほぼ同時に青い髪のスバルが手を挙げた

「キヨンさんって何歳ですか？」

「17だ。因みに呼び捨てのタメ口でいいぞ。キヨンさんってのはなんか背中が痒くなる」

「17: ギン姉と同じか。わかった。これからよろしくね、キヨン」  
スバルはそう言って満面の笑みを向けてくる。なんか照れ臭くなっ  
て頬をかいていると赤い髪のエリオが手を挙げた

「キヨンさんってデバイス持つてるんですか？」

「ああ。こいつが俺のデバイスのタナトスだ」

右腕にはめているタナトスを見せる

「あ、エリオ君と同じだ」

「そうなのか？」

エリオを見て聞く

「はい。これが僕のデバイスのストラダです」

エリオはそう言って右腕にはめている腕時計を見せてくれた。確か  
に待機状態が一緒だな。

次に手を挙げたのはキャロだった

「生まれた世界ってどこですか？」

「地球だ。なのはさんやはやてさんと同じらしい」

「そう。管理外世界97番、地球。キヨン君は私らと同じ世界の出  
身なんよ」

「なら、なんで民間協力者を？あそこは魔法は発達してない筈だ  
ど」

「まあ、いろいろあってな。あまり気にしないでくれ」

ティアナの質問に曖昧に答える。ティアナは不服そうな顔をしたが  
一応引き下がってくれた

「でも、キヨンの名前ってなのはさん達とはちがうよね？」

「別に地球人全員が日本人なわけじゃないしな。まあ、俺の場合単  
純にあだ名なだけだが」

「そうなんだ」

「さて、一通り質問は済んだかな？」

俺とスバルの会話が終わるとはやてさんがそう切り出した

「そうゆうわけで、みんな、仲良くしてあげてな。因みに分隊はス  
ターズ分隊やから」

「私たちはこれから少しお話していくから4人は先に訓練場に行っ  
てストレッチとかしておいて」

「……はい」「」

スバル達は返事をして出て行った。部屋には俺、なのはさん、フェ  
イトさん、はやてさん、そして古泉だけになった



「ごめんな、古泉君。待たせてもって」

「いえいえ。お構いなく」

とりあえず俺達はソファーに腰を掛けた

「まずはこれからの事やけど。キヨン君の事をどう親御さんに説明するかや」

「その事なら大丈夫です。長門さんがなんとかしてくださるそうです」

「長門は力が使えないんじゃないのか？」

「今朝起きたら問題なく使えたそうです」

「そうか」

「なんやようわからんけどとりあえず大丈夫なんやな？」

話についていけない感じのはやてさんが質問してくる

「はい。大丈夫みたいです」

「そうか。じゃあ次や。古泉君たちには地球に帰って貰う事になる」

「ハルヒもですか？」

「ううん。いつまたあの女に襲われるかわからんからこっちに残っ

「でもらじゅう」

「そこら辺も長門さんが何とかしてくださるそうです」

「そうか。それは助かるわ。ええと、後他に言わなあかんことは…」

「あ、そうだフェイトちゃん。ちょっとお願いしてもいいかな？」

「はやてさんが考えている間になのはさんがフェイトさんに話しかけた

「なに？なのは？」

「キヨン君って魔法の事全然知らないから一週間ぐらいマンツーマンで教え込みたいの。で、他のフォワードの皆のことなんだけど」

「そつゆう事。分かった、あの子達は私とシグナムとヴィータで見  
るよ」

「ありがとう、フェイトちゃん」

「気にしないでなのは」

「…うん。特にないな。さてそれじゃ解散しよか」

「はやてさんがそう言って立ち上がったので俺達も立ちあがり部屋を  
出た」

「それではまた。昼食時にでも会いましょう」

「おっ」

「それじゃ、キヨン君ついてきて」

古泉と簡単な別れの挨拶をするとなのはさんの後を追う

10分後

「さて、まずはキヨン君のデバイスを起動しようか」

「はい」

『マスター、先ほど言ったとおりにしてください』

先ほどとはフェイトさんが気絶している間に話していたときに言われた内容の事だ

「ああ、わかった。いくぞ。タナトス、セットアップ！」

『stand by ready、set up』

タナトスをはめている右腕を高く振り上げて唱えると、腕時計の形だったタナトスがメモリを差し込む機械がついたバックルになり腰に装着すると同時にいつの間にか現れたメモリを機械に差し込むと服装が制服から薄い黄色を基調とした服装へと変わる

「あれ、前とは格好が違うな」

自分の格好をみて呟く。前は日曜の朝にやってる特撮ヒーローみたいな格好だったのに対し今回は長袖、長ズボンに薄手のジャケツトとゆう簡単な服装だ

『前はメモリの力をセーブせずに使ったからです。今回は私がセーブしているのでバリアジャケットになりました』

「よくわからんが、まあこっちの方が見栄えはいいよな」

前ので人前に出たら確実に変質者扱いだ

「はい。じゃあ無事起動できたし、次は基本的な注意ね。退屈だらうけどちゃんと聞いててね」

「はい」

なのはさんが長々と注意事項を話し出す

『おはよう』

頭の中で声が響く。流石にもう驚かない

「またお前か」

『そうだよ。あ、声は出さない方がいいよ』

「なんでだ？」

『私の声はあなたにしか聞こえてないから』

「キョン君、ちゃんと聞いている？」

なのはさんが訝しげに見てくる。てゆうか、そうゆう事は早く言え

「あ、はい。聞いてますよ（どうすりゃいいんだよ）」

『そんな風に心の中で言えば良いんだよ』

「（だからそうゆう大事なことは最初から言え）」

表情は変えないまま心の中で怒鳴る

『じめんなさい』

「（はあ、まあ、それはいいとしてだ。お前は俺が変身する度に出てくるのか？）」

『うん。そうだよ。私はファンタジーのメモリに刻まれた記憶だから』

「（記憶ね……。そっぴや名前聞いてなかったな）」

『私の名前？』

「（ああ。名前があった方が会話がしやすいからな）」

『そっぴだね……。ボタンって呼んでくれる？』

「（ボタンって、変な名前だな。でも、まあ、よろしく頼むよ、ボタン）」

『うん』

その時ちようどなのはさんの話が終わったので此方も話を止め気を引き締める

「さて、それじゃあ早速魔法を使ってみようか。とりあえずタナトスの能力確認だね」

「タナトスの能力ですか。確か『幻想を現実に変える力』だったかな？」

『正解。よく覚えてたね』

「幻想を現実に変える力？」

「はい。物を創り出したり、分身を創ったりするんです（俺はそこまで記憶力は低くない）」

なのはさんと話しながら心の中でも話す。我ながら器用なことするな

「やってみてくれる？」

『冗談だよ』

「あ、はい（まったく。人をからかうんじゃないやありません）」

昨日使った両刃の剣を想像すると手の中に光の玉が現れそれが両刃の剣に変わる

「こんな感じですよ」

なのはさんは俺が創った剣を顔を近づけてしげしげと見つめると顔

を離す

「分身も創ってみてくれる?」

「はい。わかりました」

心の中で自分と同じ姿の分身を思い描くと光の玉が現れて俺と同じ姿になる。…なんて言うか、目の前に自分とまったく同じ姿があるってのはなんとなく背筋がゾツとするな

「アクセルシューター」

いきなりなのはさんが分身に向かってピンク色の小さなビームみたいなのを数発撃った。…が分身は手に持っていた剣ですべてを弾き飛ばした

「凄い。ティアナのフェイクシルエットみたいな幻術じゃなくてちゃんとした質量のある分身。それに威力はかなり抑えてたけど、私の魔法を弾き飛ばすなんて」

なのはさんがしきりに感心している。なんか身の危険を感じるので先に注意をしておこう

「なのはさん、あれは俺の心を反映して創られた分身だから多少…とゆうかかなり強くなってますが俺はあんなこと出来ませんからね?」

「そうなの?」

「はい。…ですからその後ろに待機させてるのを消してください」

いつの間にか出していたピンク色の玉をなのはさんは渋々といった感じで消してくれた。危なかった

「それじゃあ今日から一週間、せめてこの分身と同じぐらいにはなつて貰わないとね」

全然危機は回避されてなかった。笑顔が怖いと俺は今日初めて思った

五時間後

「じゃあ、朝の訓練はお終いね。しっかりストレッチして午後に備えてね」

「……………」

『返事がありません。ただの屍のようです』

「勝…手に……………ころ…すな」

「大丈夫？キヨン君」

「大…丈夫…では…な…い…です」

息をするのも辛く、地面に横たわる。体がまったく動かない

「ちょっとやりすぎたかな？」

「流石に、いきなり模擬戦は難しすぎます」



「最初だから力試しのつもりだったんだけど。今日はもう休んだ方が良いかな？」

「すみません。そうさせてください」

そう言っただけは剣を杖に創り変えてよろよろと立ち上がると隊舎の自室へと向かい、到着するとバリアジャケットを解いてベッドに飛び込み泥のように眠った

目が覚めたのはそれから八時間後の午後八時だった。八時間って。いくら疲れてたからって寝過ぎだろ。夜眠れなくなるぞ。それが起きて最初の感想だった。

グギョルルル

腹がかなり大きな音を鳴った。そういや昼飯どこか朝飯も食ってないんだっけ。そりゃ腹も減るよ。とりあえず起きあがろうとするがすぐに倒れた。別に頭を打った訳ではない。筋肉痛で体が動かないのだ。なんとか起きあがろうと四苦八苦していると誰かが部屋に入ってきた

「あら、起きた？」

「この声、シャマルさんですか？」

「そうよ。なのはちゃんに頼まれてね。ちょっと無理させたから見てあげてって」

ちよつとどころでは無いがまあ、それはいいか

「すみません。お手数かけてしまって」

「気にしないで。これが私の仕事だから」

シヤマルさんはそう言って近づいてくる

「どの辺が痛いの？」

「全体的にですね。あそこまで動いたことは無かったんで、筋肉痛が酷くて。ついになのはさんのアクセルシューターが当たった所も」

「そう。わかった。お願い、クラールヴィント」

シヤマルさんがそう言うのと俺の体を緑色の光りが包み込み体の痛みが消える

「スゴい」

楽になった体を上げてしげしげと自分の体を見てシヤマルさんを見ると指輪が光っていた。

「それってシヤマルさんのデバイスですか？」

「そうよ。私のデバイスのクラールヴィント。体の痛みはどう？」

「はい。かなりよくなりました。ありがとうございます」

「そう。痛みは取れても疲れまでは取れないから、ちゃんとご飯を食べてすぐに寝た方がいいわ」

「はい。そつとせて貰います」

立ち上がって部屋を出て行くこととして重大な事に気づく

「どこに何があるのかわからない」

「……私もご飯まだだから一緒に行きましょうか？」

「すみません」

俺はこんなんでこの先大丈夫なんだろうか？先行きにかなりの不安を抱えながら俺の機動六課入隊1日目が終了した。

後日談とゆうか今日のオチ。その後シャマルさんと食堂へ行くところよつどなのはさん、フェイトさん、はやてさん、フォワード部隊の4人にハルヒを除いたSOS団のメンバーが遅めの晩飯を食べていた。

「あ、キヨン、シャマルさん。二人とも今から食事？」

「ああ。そつだ」

「ええ」

スバルに返事をして飯をもらいに行き、SOS団が座っている机の空いた席に座ると古泉が話しかけてきた

「お昼にはこちらにいらっしやらなかったようですが、どうなさったのですか？」

「今まで運動してなかったのが祟って疲れてダウンしてたんだ」

自嘲気味にそう言っただけで食べる

「なのはさん。どんな訓練したんですか？」

ティアナが興味深そうになのはさんに質問する

「えーと…模擬戦？」

「なんで疑問系？てゆうかなのは、初日からそれはキツすぎだつて」

「力試しのつもりだったしかなり手加減はしたんだけど」

「キヨン君はホントの素人なんやからムチャしたらアカンよ、なのはちゃん」

「ごめんなさい」

なのはさんが二人から怒られてしょんぼりする

「そついや、長門、俺やハルヒの事はどうするんだ？」

無理やり話題を変えて話しをそらす。どちらにしてもこれは聞いておいた方がよい内容だしな

「朝倉涼子…モグモグ…とは違って…モグモグ…海外に…モグ

モグ…留学……モグモグ……したことに…ゴクツ……する」

「とりあえず口の中に食べ物が入ってる時は喋らないようにしような長門。海外に留学って、別に転校でも構わないんじゃない？」

「転校の場合あなたの家族も海外に行かなければならない。その場合問題の解決にはならない」

「それもそうか。まあその辺は長門に任せるよ」

長門との会話が終わり腹も膨れたので少し周りを見てみるとフォワード陣がじつとこちらを見ていた

「ん、なんだ？」

「いえ、なんて言うか、その」

「話の内容が」

「かなり物騒っていうか」

「ほぼ犯罪の現場を見たような気分よ。てゆうか朝倉って誰？」

一瞬言っている意味が分からなかったが、よくよく考えてみると確かに端から聞けば犯罪の相談のように聞こえるかもしれない。俺もいろんな意味で感覚が麻痺してるんだな。とりあえず四人にSOS団メンバーの紹介をする。やはりみんな驚愕した顔をする

「へえ、地球って魔法は発達してないけどそうゆうのはしてるんだ」

「いや、リンカーコアを持つとるぐらい希少やけどな」

「そういえば、その、涼宮さんって居ないの？」

その言葉でフォワード陣以外が心配そうに俺を見る。スバルは気づいてないのかニコニコしている

「ハルヒは…よくわからない女に襲われてな。今は感情が無くなっちゃまってここの医務室に居る」

俺の言葉でスバル達がいたたまれないような顔をする

「なんかごめん」

「いや、いいんだ。スバルは知らなかったんだしな。俺が機動六課に入ったのはその女を追いかけるためだ。ハルヒの感情を取り返す為に」

俺が話し終わるとみんなが沈黙し重苦しい空気になってしまった。最初に沈黙を破ったのはスバルだった

「私、キョンを手伝うよ。その女、絶対に捕まえようね」

「僕も手伝います」

「私も」

スバルに続いてエリオやキャロもそう言ってくれた。俺は不覚にも少しばかり目頭が熱くなってしまっていた

「ありがとな」

なんとか絞り出すようにお礼を言う

「あたしもなるべくそっちについても調べてみるな」

「はい。でも、今、追ってる事件があるんじゃない？」

「確かにレリックの事はあるけどキヨン君だけじゃその女の事調べられないでしょ」

「う、確かに」

「だから私たちも手伝うよ。その代わりにこっちも手伝ってもらうけどね」

「はい」

「さて、明日から今まで以上に忙しくなるからみんな気合い入れて行こな」

「」「はい」

こうして今後に不安と同時にみんなのことを心強く思いながら本  
当に俺の機動六課入隊1日目が終わった

## フォワードとの出会い（後書き）

今回はあとがきコーナーはお休みです



## キヨンのレアスキル（前書き）

やっと書けた。戦闘描写がクソです

## キヨンのレアスキル

機動六課に入って早一週間がたった。古泉達は次の日の朝に帰り、なのはさんによる基礎練（1日目以外はあまりシヤマルさんに頼ることは無かった）も終わり今日からスバルたちの練習に合流した。

「今日から改めてよろしく頼むな」

「うん。そっか、キヨンが来てからもう一週間たつんだ」

「そうだな。なんか速いな」

「あれ、そういえばキヨン、デバイスは？」

スバルが不思議そうに右腕を見てくる

「ああ、なんか昨日の訓練が終わった後なのはさんが持って行った」

「ふーん」

「はいはい。おしゃべりはそこまで。今日の演習はキヨン君が加わったから新しいチームプレイの練習で新型も含めたガジェットとの模擬戦を試してみようか」

「……………はい……………」

「へ、でも……………」

周りを見回す。そこは海がよく見える開けた場所だった

「「」でございますか？」

「ああ、「」はね」

その時いきなり周りにビル群が現れた

「これは」

「ビックリした？」

「ああ。ビックリし過ぎて腰が抜けるかと思った」

「あはは。まあ私達も最初はビックリしたけどね。これは機動六課  
自慢訓練スペース。なのはさん監修の陸戦用空間シミュレーター…  
つてのはシャーリーさんからの受け売りなんだけどね」

「シャーリーさんって？」

「はい、私のことです」

いきなり背後で声がする

「ぬわっ！？ビックリした」

「あ、シャーリーさん」

振り返るとメガネをかけた長髪の女性が立っていた

「いきなり出てこないでくださいよ。心臓に悪いです」

「あはは、ごめんなさい。あなたが新しく入った子よね？」

「はい。キヨンです」

「初めまして。メカニックデザイナー兼機動六課通信主任のシャリオ・フィニーノ一等陸士です。みんなはシャリーリって呼ぶからキヨン君もそう呼んでね」

「あ、はい」

「デバイスの調整とか改良は私がやるから、デバイスの相談とかいつでもしに来てね。あ、そうそう、これ」

シャリーリさんがそう言っつてポケットから腕時計…じゃない、タナトスを取り出す

「簡単な調整とかしといたから、今日はその性能チェックとかその他諸々を見させてもらっつね。ちゃんとした調整の時とかの参考にするから」

「はあ、わかりました」

「それじゃあ準備出来たからみんな集まっつて」

「それじゃあシャリーリさん、失礼します」

「っつ」

シャリーリさんにそう告げてからスバルと一緒になのはさんの所に

駆け寄る

「それじゃあ今回は大型と航空型も含めた計30体のガジェット  
の破壊又は捕獲、30分以内。みんな準備はいい？」

地面や空に魔法陣が現れてそこからガジェットが出てくる。

俺たちはデバイスを構えて答える

「「「「はい」「」「」」」

「それじゃあ、レディー、ゴー」

なのはさんのかけ声と共にガジェット達が動き出す

「さて、キヨン。まずはあんたのお手並み拝見させてもらいたい  
んだけど」

「ああ。わかった」

向かってくる小型ガジェット達の正面に立つと大剣を構え、魔力を  
込める

「はあ！」

小型ガジェット達が撃ってくる弾をよけながら接近してそのボディ  
をいとも容易く切り裂く

「へえ、やるじゃない」

「キヨン、スゴい」

「っ、キヨンさん、前」

キャラの言葉で前を向くと球体の巨大なガジェットが向かって来ていた。ガジェットは巨大な腕を振って攻撃する

「はあ」

腕を切り落とそうと大剣を振るが逆に弾かれてしまい、もう一本の腕で殴られて吹き飛ばされる

「馬鹿、大丈夫？」

「あれは一人じゃ無理だよ。みんなでやろう」

「ああ」

二人に軽く返事をして起き上がると大剣を構え直す

「あたしが援護するからエリオとスバルであの腕こじ開けてくれる？でキヨンが本体を攻撃して。キャラはみんなのデバイスの威力強化お願い」

「わかりました」

「了解」

「わかった」

「はい」

「じゃあ行つて」

スバルとエリオが走り出してスバルが右の腕を、エリオが左の腕をそれぞれ自分のデバイスで押さえてティアナが触手のようなケーブルを撃つてスバル達に近づかないようにしている

「キョン、行つて」

「ああ！」

大剣に魔力を溜めながらスバルとエリオの横を通つて大型ガジェットに近づいき一気に大剣を振る

「一撃、必殺！斬鉄剣」

魔力で鋭さを増した大剣は大型ガジェットのボディをいとも簡単に切り裂き、キレイに真っ二つにした。キャロの補助もあるから練習の時よりも切れ味がいいな

「よし」

「スゴい。一週間前まで魔法の事を知らなかったとは思えないわね」

「なのはさんのマンツーマンが大きいな。あれである程度恐怖とかは無くなった」

「あはは」

スバルが苦笑いをする。他の3人も口には出してないが顔が苦笑し

ている

その時、いきなり足下に魔力弾が撃たれた。慌てて周りを見ると航空型のガジェットが数機向かって来ていた

「タナトス、あれとどくと思うか？」

『はい。マスターが強く望めば』

「なら、やってみるか」

空中を飛ぶつてのはイメージがつかないから高く跳ぶイメージで

『ジャンプウイング』

かかと辺りに薄黄色の羽根が現れる。それを確認すると、膝を曲げて跳ぶと一気にガジェット達と同じ高さまで到達する。

…これ、もう殆ど跳躍の域を越えてるな。まあ、そうイメージしたのは俺だけだ

「次はこっちか」

大剣に意識を集中させて大剣から違う武器のイメージを固めると刃が離れてワイヤーのようなもので繋がれた、所謂連結刃になる

「一振、破千！連刃一閃」

そのまま大きく腕を振ると刃が一緒に動きガジェット達を切り裂いてき近くにいるガジェット達が全て破壊される。それはいい。それ



はいいんだが

「マズい、そういやまだこの後どうやって着地するかまでは決めてなかった」

俺がイメージしたのは“跳ぶ”であって“飛ぶ”じゃない。つまり体は重力に従って落ちていくとゆうことだ。

胃が浮くような浮遊感が襲い地面が迫ってくるがいきなり空中に青い道のような物が現れ誰かに受け止められた

「大丈夫？」

スバルが心配そうに顔をのぞき込んでくる。そうか、スバルが助けてくれたのか

「悪い、助かつ…」

そこまで言っただけ自分の状況を確認する。今俺はスバルにお姫様だっこをされているようなもので、つまり色々と体の横に当たっているだけで

「す、スバル。重いだろ、おろしてくれ」

「全然大丈夫だよ。このまま下まで行くから」

いや、俺が大丈夫じゃないんだが。しかしスバルは聞く耳持たずでそのままの状態で地上まで運んでくれた

「まったく、ムチャしてんじゃないわよ」

「すまん」

地上に降りたらティアナに説教された

それから残ったガジェット達を5人で片付けて軽く緊張を解いて息を吐くとなのはさんが近づいてきた

「はい、みんなお疲れ様。みんな動きがよくなったね。キヨン君も初めての実戦訓練にはよくできてたよ。途中危ないところがあつたけど」

なのはさんがジトツとした目で見てくる

「す、すみません」

「さて、次はシュートイベーション行こうか。ルールはこの前と一緒、5分間被弾しないか私に一撃当てること。当たったら最初からやり直しね。みんな準備はいい？」

「「「「はい「「「」

長ったらしくなるのでここから先の訓練の様子はカットする。結果？俺が足を引つ張つたせいで一時までかかってスバルにかなり文句言われたよ

所変わって今は午前の訓練も終わり食堂で昼食だ。ちなみに足を引つ張つた罰として食事を運ばされている

「お腹すいたー」

「わかったから静かにしなさい」

「キヨンさん、少し持ちましようか？」

「いいって。こんぐらい大丈夫だ」

流石に自分より小さいエリオに手伝ってもらう訳にはいかないだろ。危なっかしくかなり大盛のスパゲッティとサラダがのったトレイを持ちながらやつとこさ空いている席を見つけて五人で座る

「いったただつきまーす」

スバルが合掌をすると自分の取り皿にスパゲッティを大盛に盛って食べ始める。俺も自分の取り皿にとって食べる。

俺が最初に取ったのを食い終わる頃にはスバルはまた最初と同じくらい盛って食べていた。エリオもスバル程では無いにしてもかなり大盛で食べてる

食べ終わって一息つく。結局スバルとエリオがほとんど食べてた

「よく食べたな」

「訓練したらお腹がすくからね」

「確かに腹は減ったけど俺は一気にそんなには食べれんな」

「スバルの食欲は異常だから」

「そんなことないよー」

スバルがティアナの言葉で軽く拗ねたような顔になる。「こうゆう所はそこら辺にいる普通の女の子だな」

「あ、そうだスバル、ちょっと手を出してくれないか？」

「へ、うん」

スバルがおずおずと手を出してくる。俺はタナトスからノーマルメモリを取り出して腕に差し込みスバルの手を握る

「ねえ、これ、なにか意味があるの？」

「秘密だ」

「えー、教えてよ」

「また今度教えてやるよ。次、ティアナ、手をだしてくれ」

そう言いながらスバルの手を離して出してきたティアナの手を握る。実は俺もこの行動の意味を知らない。昨日、ボタンからこうしろと言われたからやってるだけだ。ちなみになのはさんにも昨日のうちにやってる。ティアナの手を離してエリオの手を握ろうとしたとき、スバルがこつちをじっと見ていることに気づいた

「どうした？俺の顔になんかついてるか？」

「ううん。前から聞こうと思ってたんだけどさ、キョんって前にあったことある？」

スバルの唐突な質問に首を傾げる

「いや、無いと思うが」

「あたし、四年前に空港で火災事故に巻き込まれてね。その時に助けてくれた魔導師がキヨンに似てたんだ。で、その人に憧れてディバインバスターを覚えたの」

「悪いが、俺が魔導師になったのは一週間前だしディバインバスターは撃てない。…そいつの名前とか聞いてなかったのか？」

「確か…ジヨン・スミスだったかな？確実に偽名だろうけど」

「なっ！」

スバルが言った名前を聞いて危うくエリオの手を握り潰す所だった

「痛っ」

「あ、すまん、エリオ」

「いえ、大丈夫です」

「キヨン、なにか心当たりがあるの？」

「いや、なんにも。地球ではよく聞く名前だったからちょっとびっくりしただけだ」

「そっか」

なんとかごまかせたみたいで、心の中で胸をなで下ろすと、無い頭で考える。何で、ジョン・スミスが四年前に居たんだ？それがもし規定事項だとしても三年前より過去には飛べないはずなのに。それとも本当に別人か？

「おい、お前ら、そろそろ休憩は終わりだぞ」

そんな事を考えていると後ろで偉そうな声がする。振り返るとちよつと俺の目の前に赤い髪を三つ編みにした妹やエリオやキャロと同じぐらいの少女が立っていた

「…誰？」

「スターズ分隊のウィータ副隊長。あたし達の直属の上司だよ」

スバルが簡単に紹介してくれる

「お前がこの間入ったって新人か。なんつーか、なよっとしてるな」  
「どんな第一印象だ。確かに自分でもあんまりゴツゴツしてると思っ  
つてないけど。」

「にしても、エリオやキャロみたいな年でも副隊長つてなれるんだ  
な」

その場の温度が5 ぐらい下がったような感覚に陥る。その元凶であるウィータから放たれる殺意が体に突き刺さる。やばい、地雷だつたらしい

「それはあたしが小せえってことだよな？」

俺がなにかを答える前に、その小さな体のどこにそんな力があるのかというぐらいの怪力で腕を掴まれてそのまま引きずられる。いや、正確には身長差があるから引つ張られて無理やり歩かされるの方がしっくり来るけど。そのまま連れてこられたのは今朝使った訓練場だった。違うところと言えばビル群ではなくて森になってる所だ

「あ、ヴィータちゃん……と、キヨン君？」

先に来ていたらしいなのはさんが俺達をみてキョトンとした表情をする

「なのは、ちょっとこいつ借りるな」

「あ、うん」

なのはさんはヴィータさんの迫力に気圧されたのか若干引きながら答える。そのまま訓練場の中まで連れて行かれてやっと腕を離される

「デバイスを構えろ」

ヴィータさんの手にハンマーが現れて服装が真っ赤なドレスのような格好になる

「へ？」

ヴィータ「死にたくなけりゃ、さっさと構えやがれ！」

ヴィータさんはそう言いながらハンマーを振り上げて突進してくる。とっさに横に飛んで避ける。

危な！確実に殺意があつた

「やらなきゃ殺られる！。タナトス、セットアップ」

起動したタナトスが腰に巻きつき服装がバリアジャケットに変わり、大剣が現れる

「アイゼン！」

『シユワルベフリーゲン』

鉄球のような魔力弾がハンマーに打たれてこちらに向かってくる。イメージが間に合うか？

「連刃一閃」

ギリギリ、連結刃の一閃で全て弾き飛ばす。今は危なかった。

「へえ、少しはやるみたいだな。じゃあ、これはどーだ。コメントフリーゲン」

先ほどよりもかなり大きな鉄球を使った魔力弾が放たれる。

流石にこれは弾けんな。連結刃を元の大剣に戻して剣に魔力を溜めて振る。

「斬鉄剣！」

少しの間拮抗してなんとか魔力弾を切り裂くが、



「テートリヒシュラーク」

が、即座に魔力弾の後ろからヴィータさんが突進してきて鳩尾辺りにハンマーを振ってくる。

『プロテクション』

咄嗟にタナトスがバリアを張ってくれるが、すぐに破れて吹き飛ばされ、後ろの木にぶつかる。

「かはっ」

打ち所が悪かったのか、意識が朦朧としてくる。

『マスターに異常発生。オートモードに移行します』

タナトスのその声を聞いたのを最後に俺の意識は闇に落ちた

ヴィータ視点

この間入ってきたとかゆう礼儀知らずな新人に軽くお灸を据えてやる。

たく、人のことをガキ呼ばわりしやがって。自業自得だぜ。そういや、こいつの名前聞いてなかったな

『マスターに異常発生。オートモードに移行します』

新人のデバイスからそんな声が出たかと思うと木にもたれかかってピクリともしなかった新人がいきなり立ち上がった。

「なんだ？まだやんのか？」

「……………」

「返事ぐらいしろよ」

その時、新人のバリアジャケットが変化しだした。格好はなんつーか、昔地球でみた朝早くにやってる、特撮とかゆづのに出てくるヒーローみたい感じ。

『ステータスロード。ロードファイルネーム“スバル” ウェポンセレクト“リボルバーナックル” “マツハキャリバー”』

なにが起こったのかわからなかった。ただ、リボルバーナックルとマツハキャリバーを装備した新人があたしにリボルバーシユートを撃って来たのとあたしが直感的に飛んで避けたのはほぼ同時だった。

確かに、こいつの能力が物を創り出す能力だつてのは、なのはから聞いてた。だからリボルバーナックルやマツハキャリバーをつけてるのはこいつの能力つて事にしておく。問題はこいつがスバルの魔法を使つたつて事だ。どうゆう仕組みかはしらねーけど他人の魔法が使えるのか？

『ウイングロード』

新人の足下に薄黄色の道が現れる。これも色は違っけどスバルの魔法だ。新人が道を使って迫ってくる。

「シュワルベフリーゲン」

『リボルバーシユート』

魔力弾が全部弾き飛ばされる。

…なんか違和感がある。なんつーか、あいつがデバイスに操ら  
れるみたいな。

『デイバインバスター』

薄黄色の魔砲が迫ってくる。バリアを張って防ぐけど少し押される。

「……………」

癖や攻撃のタイミングはスバルの動きそのままだ。そのくせして  
攻撃や回避行動のスピードはスバルより速い。これじゃ埒があか  
ね。奴もそう考えたのか、ウイングロードを解いて地面に降りると  
リボルバーナツクルとマツハキャリバーが消えた

『ステータスロード。ロードファイルネーム“ティアナ” ウェポン  
セレクト“クロスミラーシユ”』

新しく現れたのはクロスミラーシユだ。遠距離であたしを倒せると  
思ってたのか？

『フエイクシルエツト』

新人がいきなり森の方へ走り出したかと思うと周りに十数体の幻影  
が現れる。今度はティアナの魔法か。けど、所詮は幻影だ。気にせ  
ずに本体を探せばいい。新人が向かった方へ突っ込んで行く。新人  
は簡単に見つかった

「ふん。なんであいつらの魔法を使えるのかしらねーけど、知識が足りねーな。出直してきやがれ」

そのままアイゼンでぶん殴る。確かに手応えはあった。なのにそいつは、幻影のように消えた

### 三人称

ヴィータの考えは概ね正しい。ただの幻影ならば相手にせずは無視をすればいい。ただしここでヴィータは重大なミスをした。それはこの魔法を使っているのが本物だという先入観で突っ込んだことだ。

(なんでだ？確かに手応えはあった。もしあれがフェイクなら手応えがあるわけねえ)

ヴィータは目の前で起こった事を考える事に必死で気づくのが遅れた。ヴィータが殴った瞬間周りの幻影が消えた事にもヴィータの後ろでキヨンがレイジングハートを構えて、魔力を溜めている事にも。

『ダイバインバスター』

「なっ、しまった」

ヴィータが異変に気づいたときにはすでに遅かった。先程のよりも強い魔砲が放たれる。ヴィータは回避行動も取れずに目を瞑った。その時、誰かに突き飛ばされる。振り向くとキヨンがもう一人のキヨンの撃った魔砲に吹き飛ばされる所だった

## キヨソ視点

うつすらと意識が戻ってくる。何回か気絶はしたことあるけど、純粹にダメージで気絶したことは…そういや、冬に一回あったな。朝倉に刺された時。まあ、とりあえず、気分は最悪だった事だ。

あれ、俺って立ったまま気絶したっけ？いや、立ったまま気絶は無理だろ。頭を振って意識をハッキリとさせる。上手く回らない頭でわかったことは、何故か俺の分身が勝手に動いてヴィータさんに向かってなのはさんのデバイスを使って魔砲を撃とうとしてるって事とヴィータさんが何故かそれに気づいてないとゆうことだ。それだけわかったら後は体が勝手に動いた。俺が走り出した瞬間に魔砲が撃たれる

「間に合え」

『ステータスロード。ロードファイルネーム“エリオ”ソニックムーブ』

瞬間、俺の周りで動くもの全てのスピードが遅くなった。それでもかなり距離があったため、ギリギリでヴィータさんを突き飛ばした瞬間、俺は魔砲に吹き飛ばされた。

目が覚めたら、目の前にハルヒの特になんか感情も浮かんでない顔

があった。

「あら、起きたの？」

「ああ。…ここはどこだ？」

「医務室。あんた、半日寝てたのよ」

そうか。ヴィータさんを庇ってディバインバスター喰らってそのまま気絶したのか。

「半日って、今何時だ？」

「19時よ」

ホントに半日だな。起きあがろうとしたら体に鈍い痛みが走り、またベッドに倒れた。

「まだ横になってなさい。あたし、シャマルさん呼んでくるから」  
そう言ってハルヒは医務室から出て行った。少しぐらいなら時間あるな

「タナトス、セットアップ」

俺の服がバリアジャケットに変わる。

「ボタン」

『…なに？』

「今回の事、説明してくれるよな？」

『うん。なにから説明したらいいかな。とりあえず、あなたの希少<sup>レア</sup>スキル<sup>スキル</sup>についてかな」

「俺がレアスキルを？」

レアスキルってキャラの竜召喚みたいなのかだろ？

『あなたが光にお願いしたときに手に入れた力はデバイスとメモリともう一つ、ステータスセーブ・ロードって言うレアスキルなんだ。簡単に説明すると、手を握った相手のステータス…つまり能力を自分の脳に記録して好きなきときにその力を発動する事ができる。でもこれは記録した相手の能力が大きすぎたら脳への負担はかなり大きくなる。だから脳への負担をなくす為にノーマルメモリに記録したデータを移してそれをデバイスを通して使う。手を握る時にノーマルメモリを腕に挿してって言ったのはそのため。ここまでで何か質問はある？』

「…なんで、俺が気絶してたのに分身がヴィータさんと戦ってたんだ？」

『あなたに渡したデバイスはあなたが気絶したら自動で戦闘するようになってるの』

「なんで教えてくれなかったんだ？」

『一気に教えてもこんがらがるだけでしょ？だから少し魔法とかに慣れてそれから教えるつもりだったの』

とりあえず、この事はなのはさん達に言っといた方がいいとゆうことになった。今はシヤマルさんに看てもらっている。

「キヨン君、明日は1日大人しくしときなさい」

「え、そんなに酷いんですか？」

シヤマルさんが深刻そうな顔をしながら言うので少し戸惑いながら聞く

「魔力が異常に消費されてるわ。こんな状態で訓練を受けさせる訳にはいきません。なのはちゃんには私から言うておくから明日は絶対安静。いいわね？」

「は、はい。わかりました」

とりあえず、命に関わる事ではなかったので一安心だな。特にする事も無いので今日はさっさと寝ることにした

後日談というか今回のオチ。次の日、目を覚ますと今度はヴィータさんの顔が目の前にあった。

「お、起きたか」

「ヴィータさん、なんでここに？」

軽く体を起こす。昨日みたいな痛みはないな

「昨日の事が聞きたくてな。なんであたしを庇ったんだ？」



今思い返すと妹ぐらいの背格好の女の子が攻撃を喰らいそうだからって動いたんだよな。そのまま言うとまた地雷踏みそうだな。

「特に理由は無いですよ。意識もハッキリしてませんでしたし」

少し目線をそらしながら言う

「あたしの目を見て言え」

「ホンとのこと言いますからデバイス押し付けるのはやめていただけませんか？」

片方に突起物がついたハンマーが背中から離されたのを確認してから腹を括って話す。案の定不機嫌な顔になる

「ふん、お前みたいな新人りに心配されるほどあたしはやわじゃねーよ」

「それでも心配だったんです。ヴィータさんは女性なんですから、傷とか出来ても大変ですし」

「あたしは女である前に騎士だ」

「騎士である前に女性です。ヴィータさん可愛いんですからもう少しそうゆうの気にしても良いと思いますよ？」

「なっ」

ヴィータさんが赤くなって固まった。少し偉そうに言い過ぎたか？

「可愛いつて、あたしが？」

なんかすごく疑われてるがこれは自信を持って言えるので笑顔で答える

「はい。可愛いですよ」

「／／／／」

ヴィータさんが耳元まで赤くなる

「ヴィータさん！？顔が真っ赤ですよ？熱があるんじゃないですか？」

ヴィータさんのおでこに手を当ててみる。特に熱くは無いか？これって判断基準がよくわからないんだよな。

「熱は無いみたいですけど、大丈夫ですか？つて、ヴィータさん、聞こえていますか？」

なんかもう、煙がでるんじゃないかってぐらい真っ赤だ。やっぱり風邪か？

「シャルルさん！」

「はいはい」

何故か満面の笑みを浮かべたシャルルさんが近づいてくる

「何かいいことでもあつたんですか？」

「別にい。それより、どうしたの？」

「ヴィータさんが風邪っぽいで見てあげてくれませんか？」

「わかりました」

シヤマルさんとヴィータさんがベッドから離れていく。去り際に「頑張つてね、ヴィータちゃん」とか、隣のベッドから「ライバルが増えたわね」とか聞こえた気がするが気のせいだろう

## キヨンのレアスキル（後書き）

優希「あとがきコーナー。今回はキヨンのレアスキルについて説明します」

### ステータスセーブ・ロード

手を握った相手の魔法や戦闘技術を脳内に記録して使用出来る。ただし能力の記録は多すぎると脳への負担が酷く、下手をすると脳が破壊される可能性がある。そのため記録した能力はノーマルメモリへ移してタナトスを使って使用する。戦闘技術はあくまでも参考にする程度だがタナトスのオートモードの場合は動きはそのまま記録された人間と同じ動きになる。メモリを使わずに使用出来る記録はAランクまで。記録は任意で行えるのでメモリを挿して居ないときに無意識に手を握っても記録される事は無い（今回はボタンが指示してメモリを挿していたので記録された）

優希「こんな感じです。矛盾点とかかなりあるとは思いますが作者には文才がないので目をつむってください。ちなみにノーマルメモリもファンタジアメモリもT2メモリと同じ性質なので体に害はありません。…最近、なんで主人公をキヨンにしたのか分からなくなってきた。これももうキヨンの面影ないよ。続いては謝辞をキヨン、お願い」

キヨン「なっぺさん、感想ありがとうございます」

優希「とゆうわけで、朱神優希とキヨンでした。感想お待ちしてます」

機動六課の休日（前書き）

珍しく早めの更新

## 機動六課の休日

「はい、今日の訓練終わり。みんな、集まって」

荒い息を整えながらなのはさんの近くへと集まって座る。なのはさんの隣にはフェイトさんとヴィータさんが立っている。あのちょっとした騒動から早、二週間。次の日練習にでるとヴィータさんが俺の個人スキルの訓練を見ることになったとなのはさんから聞かされた。その時の様子がやれやれみたいない感じだったのはなんでなんだろうか？

「今朝の訓練と模擬戦も無事終了。お疲れ様。でね、実は何気に今日の模擬戦が第二段階終了の見極めテストだったんだけど」

そうやってなのはさんは、フェイトさんとヴィータさんの方を向く

「どうでした？」

「合格」

なのはさんの問いかけにフェイトさんが即答する

「速っ」

「ま、こんだけみっちりやってて問題があるようなら大変だったった」

「あたしもみんな良い線行ってると思うしキョン君もみんなによくついていってるし、じゃあこれにて二段階終了!」

「やった〜」

全員疲れも忘れて喜びだす。俺は話についていけないからぼーっ  
としている。

「デバイスリミッターも一段解除するから、後でシャーリーの所に行  
って来てね」

「明日からはセカンドモードを基本形にして訓練するからな」

「「「「はい「「「」」

「え、明日？」

キヤロがヴィータさんの明日とゆう言葉に反応した

「ああ、訓練再開は明日からだ」

「今日はあだし達も隊舎で待機する予定だし」

「みんな入隊日から訓練漬けだったし、キョンもよく頑張ってるし」

なのはさん達の意図が読めずみんな顔を見合わせる

「ま、そんなわけで」

「今日はみんな、1日お休みです。街にでも出かけて遊んでくると  
良いよ」

「「「「はい」「」」」」

ほんとにこいつらは元気がいいな。俺はついていけん。お休みとゆう言葉を聞いたとたん、元気になって、どこに行こうかなんて話しているスバル達を見ながらそんな、年寄りくさいことを考えたりした

所変わって食堂。ちょうどばったり会ったシャーリーさんとヴァイスさんそれにシャマルさんとザフィーラ達と一緒に食事をしている

「で、お前さんはあいつらと出ないのか？」

「はい。みんなパートナーと一緒に出かけるみたいなんで邪魔するのも悪いですし」

「そういえばシャーリーはライトニングの二人に今日の予定を立ててあげたんだっけ？」

「あ、はい。これです」

そう言ってシャーリーさんは一つのデータを呼び出す

「どれどれ、見せてみる。………これはちょっとガキどもには早す



ぎないか？」

「見せてください」

ヴァイスさんの近くまで行ってエリオとキャロに渡されたであろう予定表をみる。

・レールウェイでサードアビニュームへ出て市街地を散歩。ウィン  
ドショッピングや会話等を楽しむ

・食事はなるべく雰囲気がよくて会話の弾みそうな場所で

・映画は必須。特に恋愛ものがオススメ。今は〜（今流行りらしい映画が長々と並べられている）

・夕方には海岸線の夕焼けを眺めてから帰ること

一通り読んでからイスに座り直す

「ヴァイスさんの言うとおりですね。これはあいっらには早すぎますよ」

「えー、そうかなあ」

「そんなこと無いと思うけどなあ」

「あなた達は10歳の男女に何を求めているんですかっ!？」

「まあまあ、あんまり怒鳴んなって。どうせあいっらのことだから与えられた訓練をクリアするみたいに考えて、雰囲気もなにもあつ

「たもんじゃねーよ」

「あー、それはあるかもですねえ。まあ、なににもせずにはぶらぶらするよりは全然いいじゃないですか」

「ま、それはそうだけだよ。おっと、そついやティアナにバイク貸してくれって頼まれてたんだ。んじゃ、とゆうわけで、お先に失礼」  
そう言つてヴァイスさんは自分のトレーを持って立ち去つた。

「ふっふっふ、やっと行つたわね」

なんかシャーリーさんが黒い笑みを浮かべてる。なに企んでるのは知らんが、巻き込まれる前にさっさと逃げよう

「それじゃあ、俺もこれで…」

ガシ シャーリーさんに腕を掴まれる音

グアシ シヤマルさんに肩を掴まれる音

ドン 二人に無理やりイスに座らされる音

「あの、離してくれませんか？」

「ダメよ。キヨン君にはこれからやってもらつた仕事があるから」

俺の意思は？

「なにを企んでるのかだけ一応聞きましようか？」

「エリオとキャロの尾行をしてどんな感じだったか報告してもらいたいのよ」

「どうせ2人とも聞いても楽しかったですよぐらいしか言わないだろうから、端から見てどんな感じだったか教えて欲しいの」

「そんな2人のプライバシーに関わる事はしたくありません。第一、尾行してるのがバレたら大変じゃないですか」

「大丈夫よ、ちゃんと変装してもらおうし」

「それに、暇なんでしょ？」

「そりゃ暇ですけど」

「それじゃ、決定ね」

強制的に決定されてしまった

「あ、ザフィーラにもついて行ってもらいたいんだけど」

ダツ　ザフィーラが走りだす音

ヒュン　シャマルさんがザフィーラにバインドをかける音

バタバタ　ザフィーラがバインドをとこうと必死にもがいている音

「俺は絶対に行かんぞ」

「いいじゃない。たまには動いた方がいいわよ」

哀れザフィーラ。非力な俺は心の中でザフィーラに合掌することしかできなかった。

30分後

「うん。似合ってるわよ、キヨン君」

「ザフィーラもその姿は久しぶりね」

機動六課の玄関前には帽子とサングラスでバッチリ変装させられた俺と子犬の姿になったザフィーラが居た

「エリオ達はさっき出たみたいだから急げばすぐに追いつけると思うから」

「それじゃ、行ってらっしゃーい」

2人に送り出されて渋々歩き出す

「（どうする？ザフィーラ。追いつけなかったって事で少ししたら帰ってくるか？）」

「（それがいいだろうな）」

ザフィーラと念話で適当に切り上げる打ち合わせをしているとシャルルさんから念話が入る

「（あ、2人とも、ちゃんとしてこないと“OHANASHI”だ

から」

「(ちゃんとやるか)」

「(そうだな)」

やっぱりやるって決めた事は最後までやらないとな。決してシャマルさんの脅しに屈した訳じゃない

駅に着くと意外と簡単に2人は見つかった。髪の色が特徴的だから捜しやすいな。見つからない程度に声が聞こえる位置まで近づく

「えーと、シャーリーさんが作ってくれた今日のプランは」

少しの間2人であのプランを見ると顔をあげる

「な、なんだか難しいね」

「とりあえず、順番に頑張ってみよう」

「うん」

順番に頑張るって…訓練とかじゃないんだから。ザフィーラもそう感じたのか、犬なりに呆れたような顔をしている。2人は時間を確認すると歩き出す

「(2人が行くみたいだから俺達も行くぞ、ザフィーラ)」

「(ああ)」

2人を追って同じ列車に乗る。ザフィーラの姿のせいで少し手間取ったが、ザフィーラが人型になることで話は落ち着いた。まあ、いきなり筋骨隆々の長身の男に変わった時はちよつとビビったけどな

「(にしても、ザフィーラ、人型にもなれたんだな)」

「(ああ。ただ、耳や尻尾が残ったりするからあまり人前に出ることは出来ないがな)」

「(とりあえず、駅員が貸してくれた服と帽子があるから大丈夫だろ)」

そんな事を話していると目的地に着いたらしく2人が席から立ち上がって出口に向かう。俺達も少し遅れて立ち上がる。列車から出ると、なにがあつたのか2人は手を繋いで歩いていた。

なんだ、案外いい雰囲気じゃねーか。

ザフィーラが借りた服はこの駅の駅員に渡して2人を追いかける。今は公園のベンチに座って一休みしているところだ

「(にしても、のんびりだな。ここまでゆっくり出来たのも久々だ

な」

「…確かお前は地球から来たんだっただな？」

「（ああ。ザファイーラ達も地球から来たんだろ？）」

「（主はやてが地球出身だからな。お前は訓練が辛いと思った事は無いのか？正直ここの訓練はハードだ。この間まで魔法を知らなかった民間協力者が受けるようなものでは無い）」

「（辛いとは毎日思ってるな。けど、俺のワガママで機動六課に入隊させてもらっておまけに強くしてもらってるんだ。感謝しなくちゃいけないぐらいだよ）」

「（そうか）」

そのときタナトスにスバルから通信が入った。とりあえず、エリオ達に見つからないように少し離れた場所に移動しながらでる

「こちらスターズファイブ」

『はい、こちらスターズスリー…って、あれ？キヨン…だよね？』

「他に誰がでるんだよ？」

『なんでそんな格好してんのよ』

「気にすんな。それよりなんの用だ？」

『いや、なにしてるのかな…って。キヨン、こっちの事知らないか』

ら、遊びにも出れてないだろうし」

「残念だったな。今はザフィーラと外出中だ」

『え、ザフィーラと？』

『ねえ、さつきエリオ達にも連絡したんだけどそこ今あんたが行る場所が似てるんだけど』

「気のせいだろ」

バレたらどうなるかわからんからな。バレるのだけは避けないと

「（2人が動き出したぞ）」

「（わかった）ザフィーラが呼んでるからもう、切るな」

『え、ちょ』

強制的に通信を終わらせて緊急以外の通信を拒否設定にしてザフィーラの所まで戻って2人の尾行を続ける

「（む？）」

「（どうした？）」

街中を歩いているとザフィーラが耳をひくひくさせながら立ち止まった。目の前でエリオも立ち止まる。マズい、バレたか？けどこっちを一向に向く気配が無い



「（何か重たい物を引きずるような音が聞こえた）」

「（音？そりゃ街中だからな。色んな音はするだろ）」

エリオ達は軽く周りを見ると裏路地の方へと走っていった。俺達も慌てて追いかけるとちょうどマンホールから足に四角い箱が鎖に繋がれている足枷をつけた少女が這い出してくる所だった

「なっ」

急いでエリオ達の元へと駆け寄る

「時空管理局です。一般の人は近づかないでください」

エリオが近づいている俺達を見つけて証明書をだしながらそう呼びかける。変装していると意外とわからないもんなんだな

「よく見ろ、俺だ」

変装用につけていた帽子とサングラスを外す。ザフィーラは子犬の姿から元の狼の姿になる

「キヨンさんにザフィーラ!？」

「エリオ、お前は全体通信で今の状況を伝える。キャロ、すぐにレリックの封印を」

「は、はい」

さて、このぶんだと休日は終わりだな

## 機動六課の休日（後書き）

優希「あとがきコーナー」

キヨン「特にやることも無いな」

優希「謝辞のコーナー。なっぺさん、感想ありがとうございます」

キヨン「感想お待ちしてます」

遭遇（前書き）

ここから前よりもっと原作を無視していきます

## 遭遇

「エリオ！キャロ！キヨン！ザフィーラ！」

「スバル、ティアナ」

スバルとティアナがこちらに駆け寄ってくる。ティアナは少女を見て眉をひそめる

「この子が。また随分とボロボロね」

「地下水路を通ってかなり長い距離歩いてきたんだと思います」

「ケースの封印処理は？」

「それはキャロに頼んで済ませてもらった。ガジェットが見つける心配は無いだろう」

「そう」

「それと、これ」

そう言ってエリオは少女の足枷に繋がっていた鎖を持ち上げる。その鎖は三つにわかれており、そのうちの一本は千切れたような跡があった

「ケースはもう一個あった？」

「多分な。今ロングアーチに調べてもらっている」

「そう。…隊長達とシャマル先生、リイン曹長がこっちに向かつてくれてるそうだし、とりあえず、現状を確保しつつ、周辺警戒ね」

「はい」

数十分後、なのはさん達が到着した。

「バイタル、安定してるわね。危険な反応もないし、心配ないわ」

「よかった〜」

「ごめんね、みんな。お休みの最中だったのに」

「いえ」

「平気です」

「女の子とケースはこのままへりで搬送するから、みんなはこっちで現場調査ね。ザフィーラも一緒に来てくれる？」

「……はい」「……」

「わかった」

「なのはちゃん。この子、へりまで抱いていってくれる？」

「はい」

なのはさんが少女を抱きかかえてへりの方まで歩いていく。

「シャマルさん」

「ん？なに？」

「これ、持つてても邪魔なんでついでに持つて帰ってください」

変装道具の帽子とサングラスを渡す

「はいはい。じゃあ、帰ったらお話聞かせてね？行きましょ、ザフィーラ」

シャマルさんとザフィーラはへりの方へと歩いていった。デバイスに全体通信が入る

『ガジェット来ました。地下水路に数機ずつのグループで少数。16...20』

敵のお出ましか。海上方面にも航空型が出たらしいがなのはさんとフェイトさん、ヴィータさんとラインが出るそうだ。そして、こっちにも応援が来てくれるらしい

「みんな、短い休みは堪能したわね。これから気合いいれて行くわよ」

「」「はい」

「ああ」

『stand by』

「セートアップ」

少女が出てきたマンホールから地下水路に入り目的地へと向かう。その途中でティアナが誰かと通信を始めた。

「ギンガさん、お久しぶりです」

『うん。ティアナ、現場リーダーはあなたでしょ？従つから指示をくれるかな？』

サウンドオンリーで顔は見えないが声からして、女性か？

「はい。…ひとまず南西のF94区画を目指してください。途中で落ち合いましょう」

『F94………了解』

「ギンガさんって、スバルさんのお姉さんですよね？」

「そう、あたしのシューティングアーツの先生で、年も階級も二つ上」

「ああ、ギン姉って、そのギンガって人か」



「そうそう。キヨンと同年なんだよ」

そんな話をしているとギンガさん（同年らしいけどとりあえずさん付け）がここに来た経緯を話しだす

『私が呼ばれた事故現場にあったのはガジェットの残骸と壊れた生体ポットなんです。ちょうど5、6歳の子供が入るぐらいの。近くに何か重いものを引きずったような跡があってそれを辿って行こうとした最中、連絡を受けた次第です』

5、6歳と重いものを引きずったような跡とゆう言葉でさっきの少女が思いだされる。

『それから、この生体ポット、少し前の事件でよく似たものをみた覚えがあるんです』

『人造魔導師計画の素体代用器。…これは、あくまで推測ですがあの子は人造魔導師の素材として作り出された子供ではないかと』

「人造魔導師って」

「優秀な遺伝子を使って人工的に生み出した子供に投薬とか、機械部品の埋め込みで後天的に協力者な魔力や能力を持たせる。それが、人造魔導師」

「ふざけてやがる」

「そう。倫理的な問題は勿論、今の技術じゃどうしたって、色んなムリが生じる。コストも合わない。だから、よっぽど、どうかして

る連中でも無い限り手をだしたりしない技術のはずなんだけど」

ティアナの話聞きながらふと、横を走っているエリオの方を向くと、なにかを思い悩むような顔をしていた。

「どうした、エリオ？」

「え、なにがですか？」

「なんで、そんなに暗い顔してんだ？」

「な、なんでもありません」

エリオは笑顔で答えてくるがその笑顔は痛々しくてしかたがない。しかし、俺がなにかを言う前にキャラのデバイスに反応があった

『動体反応確認。ガジェットドローンです』

「来ます！小型ガジェット六機」

立ち止まって周りを警戒する

ヴィータ視点

「シュワルベフリーゲン」

よし、今ので1グループ目終了だ

「おし、いい感じだ」

「リインも絶好調です」

「ガンガン行くぞ。さっさと片付けてキヨンの……ゴホンゴホン、他の奴らのフォローに回らねーと」

「最近、ヴィータちゃんはすっかりキヨン君の事がお気に入りみたいです」

「なっ、誰があんな奴。あんなひよろつとした野郎なんかどうでもいいっつーの」

なんでここであいつの事が出てくんだよ。そりゃ、意外と筋がいいし、あたしの事可愛いって言ってくれたし、笑顔が意外と格好いいし……ってあたしはなに考えてんだよ!?

「あー、くそ。リイン、さっさと次行くぞ」

「は、はいです。って、ちょっと待って下さい。あれ!」

リインが指差した方を見る

「なっ、増援?」

増援らしき航空型がこちらに向かって来ていた。

「くそっ、キリがねえ」

シュワルベフリーゲンで一掃するけど、後から後からわいて来やがる。それに所々幻影も混じってる。

『ヴィータ!』

「はやて!なんで、騎士甲冑つけてんだよ」

『なんや、悪い予感がしてな。そこは私がなんとかする、なのはちやん達にはへりの方へ向かってもらったから、ヴィータは地下の方へ行ってくれんか?』

「わかった」

はやてとの通信を切ってキヨンがいる地下の方へ向かおうとしたとき、周りに体が青白い巨人が現れた。

キヨン視点

「ステータスロード“ティアナ”」

『ステータスロード。ファイルネーム“ティアナ”』

「ヴァリアブルシュート」

クロスミラーシユを元にして創った銃で鉄甲狙撃弾を放つ

「にしても、あなたのレアスキルってホント、使い勝手がいいわよね。全ポジション状況に応じて使い分けられるんだから」

「まだまだ、技術が追いつかないけどな」

あらかたのガジェットは落としたかな?

「ケースの推定位置まで、もうすぐです」

「うん」

突然、横の壁が吹き飛んだ。全員がそちらを向いて身構える。砂煙が晴れてくるとスバルと同じようなデバイスをつけた長髪の女が立っていた。スバルとティアナがその姿を見て笑顔になる

「ギン姉！」

「ギンガさん！」

どうやら、この人がスバルの姉のギンガさんらしい

「一緒にケースを探しましょう。ここまでのガジェットはほとんど、叩いてきたと思うから」

「うん」

スバルの奴、嬉しそうだな。

「じゃあ、行きましょう」

再び目的地に向かって駆け出すがすぐにガジェットの大群が押し寄せてくる

「たく、キリがないな」

「ボヤいてないで、いくわよ」

「やれやれ、わかったよ」

『ステータスロード。ロードファイルネーム“エリオ”ソニックムーブ』

「ソニックレイヴ」

高速で移動しながら、斬鉄剣でガジェット達を切り裂いていく。周りにいるガジェット達を一掃してひと息つくど、ちようど、スバルとギンガさんが大型をスクラップにした所だった。他の奴らも自分の相手が終わったらしく、集まってくる

「じゃあ、先を急ぎましょ」

「うん」

少し走ると目的地についた。

「意外と広いが、どうする?」

「手分けして探しましょう。あたしとスバルとキャロはあっちを。ギンガさんとエリオとキヨンは向こうをお願い」

「わかった」

「行くわよ、スバル、キャロ」

「それじゃ、私達も行きましょうか、エリオ君、キヨソ君」

「キヨソでいいですよ、ギンガさん」

「なら、私もギンガでいいし敬語もいらわないわ。同い年なんでしょう？」

「わかった。よろしくな、ギンガ」

「ええ」

「じゃあ、見つけたら通信してください」

「わかったわ」

ティアナ達と別れて奥の方へと進みながらケースを探すがなかなか見つからない

「向こうも見つからないみたいだしね。この辺にあることは間違いないんだけど」

そう言いながら探しているとそいつは居た。まるでそこに居るのが当然のように。そいつはそこでキャロぐらいの少女を見下していた。自分で斬ったはずの腕は元通りになっている。その姿を忘れられる訳もない

「デメエ、なにやってんだ？」

「あら、お久しぶりね。言うことを聞かなかったから少し躡てただけよ？」

そいつは…ハルヒの感情を盗んだ、その女は至極当然のようにそう言った

「その子から、離れる」

「あなたに指図される筋合いはないわ」

「離れるって言ってんだよ！」

『ステータスロード。ロードファイルネーム“スバル”』

「はあ」

マツハキヤリバーを使って高速で近づいてリボルバーナックルで殴りかかるが避けられる。だが、少女から引き離す事は出来た

「ギンガ、手伝ってくれ。エリオ、その子を連れて安全な所へ。ついでにスバル達を呼んで来てくれ」

「わかったわ」

「は、はい」

エリオが少女を抱えてスバル達の方へと走っていく

「させないわ」

「あなたの相手は、私達よ」

「ちっ」

エリオの方へ行こうとした女をギンガが牽制するように攻撃して動



きを止めさせる

「ハルヒの感情を返してもらおうか」

「何の事？私は感情をうばってはないわ」

「とぼけるな！お前が奪ったんだろっか」

「私が奪ったのは彼女の能力よ」

「能力って、ハルヒの世界を改変する、あのはた迷惑な力か？」

「そうよ。ただ、あの子の能力を奪ったら、感情が消えただけよ」

「ハルヒの能力を取るなんて、そんなこと……」

「出来るわ。それは、あなたが身を持って体験した事じゃないの？」

「こいつ、あの冬の出来事を知ってるのか？」

「どちらにしても、だからって、感情が消えるなんて」

「あなたはあの冬、対有機生命体コンタクト用ヒューマノイド・インターフェースに能力を取られた後の彼女を見たのかしら？」

「やっぱりこいつは、12月に起こった3日間の悪夢を知ってる」

「見てないわよね？だから、もし私が嘘をついていてもあなたにはわからない。私が盗んだかもしれないとゆう仮定と私が盗んでないかもしれないとゆう仮定の両方が存在する。まさに、シユレディン

ガ―の猫箱」

「ややこしいわね。どちらにしるあなたがなにかを盗んだからそうゆう結果になっただんでしょ？」

「あら、気づいた？ふふふ、あなたは、もう少し頭を柔らかくした方が良いわよ？」

クスクスとバカにしたような…いや、実際にバカにした笑みを浮かべられる

「（なにがあつたのかは知らないけど今はこの女を捕まえる事に集中して。この女を捕まえれば帰ってからいくらでも話をする機会はあるから）」

「（ああ。すまん）」

「あなたを公務執行妨害、その他諸々の罪で逮捕します。今投降すれば刑を軽くする事もできます。大人しく投降しなさい」

「嫌よ」

「ならば実力を持って取り押さえます」

「やれるものなら」

女が急に消えた。いや、これは、あの男みたいに目に止まらないぐらい速いんだ

「きゃあ」

「ギンガ！」

背後から攻撃されたらしいギンガが前のめりに吹っ飛ぶ

「ぐあつ」

俺も前から蹴られて壁に叩きつけられる

「うふふ。呆気ないものね。そうだ、おもしろいものを見せてあげる」

そう言つて女が出した画面に映し出されたのは青白い赤い目玉のよ  
うなものがある巨人。これは…

「見たことあるでしょ？」

ああ。忘れるはずもない。ハルヒの作り出す神人だ。

「ハルヒの力は奪つたんじゃないや無かつたのかよ？」

「奪つたつて使えなきゃ意味ないでしょ？これは彼女の能力を付与  
させた実験体を作り出した神人よ。確か、あなたのお仲間が近くに  
いるはずよ？」

『くそつ、なんなんだよ、こいつら。速くキョンの…じゃなくてあ  
いつらの所に行かなきゃなんないのに、変な巨人とか出てくるし』

この声と口調はまさか？

画面が拡大されて予想が当たっていた事がわかる。赤いドレスのよ  
うなバリアジアケットにハンマーのようなデバイス。オレンジ色髪  
を三つ編みにした、ヴィータさんがそこに居た。よく見るとリイン  
も一緒だ

「神人ぐらい古泉でも倒せる。ヴィータさんなら少し足止めできる  
ぐらいだ」

「バカね。そんな弱いのをわざわざ送り込むわけないでしょ。あな  
たが見たことあるのよりも強いわよ」

『くそっ、こいつら、硬え』

確かに、画面の中のヴィータさんはかなり苦戦してるようだ

「交換条件よ。あなたのお仲間がさっき連れて行った子ともう一人  
のケースを持ってた子も返してくれる？そうすればこの子達を返し  
てあげるわ」

くっ、どうする？ヴィータさんを助けるにはあの子達を渡す必要が  
ある。けどそんなこと出来るはずがない。必死に考えていると事態  
は思わぬ方向に変化していた。

『あれ？こいつら消えてくぞ？』

『あ、ホントです』

「なっ！？」

なんか知らんが閉鎖空間が消えたらしい。女の意識が向こうに移っ

てる。やるなら今だ

『ステータスロード。ロードファイルネーム“なのは”クリスタル  
ケージ』

女を三角形の檻のような物で囲う

「しまった!」

「それは簡単には破れないそうだ」

レイジングハートを創り出して構えて、この間俺が喰らったのとは  
比べものにならないほどの魔力を収束する

「少し頭を冷やせ」

『スターライトブレーカー』

収束した魔力を一気に魔砲として放つ。

うわあ、クレーターが出来てるよ。非殺傷設定だから死んでは無い  
よな？

煙が晴れるとボロボロになりながらもしっかりと立っていた

「ふふふ、少し油断したみたいね。それに少し手違いもあったよう  
だし、今日の所は大人しく帰ってあげるわ」

「逃がすと思ってるのか？」

レイジングハートを女に向ける。正直言って今の魔砲にほとんどの魔力を持っていかれて立っているのも辛かったりもするが、そこは気合いだ

「ええ。こんな所で捕まるつもりは無いもの」

なにをしてくるのか警戒してレイジングハートを強く握る。その時

「っ!？」

いきなり横から撃たれた。タナトスが張ってくれたバリアのおかげで当たりはしなかったが一瞬女から目を離してしまった。

「じゃあねえ」

女はその隙をついて黒い穴を作り出してそれに逃げ込んだ。俺を撃つて来た奴は俺が女に気を取られてる隙に逃げられた。完全にしてやられた形になった

「なんだったの、あの女は？」

「わからん。とりあえずスバル達の所に戻ろう」

「ええ……つとと」

ギンガは立ち上がるうとして大きくふらついてペタンと尻餅をついた

「大丈夫か？」

「うん。ちょっと今の魔砲を見て腰が引けたかな？」

「ああ、俺も今初めて使ったけど異常な威力に正直俺自身も驚いてる。…手を貸そうか」

「ええ。お願いするわ」

「よっと、うわっ」

ギンガの手を掴んで引っ張ろうとするが、足腰に限界が来ていた俺は逆に引っ張られてギンガに覆い被さるような形になってしまった。

「おーい、キヨン…ってなにやってんの？」

しかも、タイミングが悪いことにちょうどスバル達が来た

「いや、これはその」

「…キヨン、ちょっと“OHANASHI”しようか」

有無を言わさぬ口調でそう言われて引きずられていく。一瞬見えた目の色が緑から黄色になってた気がするけど気のせいだよな？

ギンガの説得によつて俺はなんとかOHANASHIから逃れられた。今は地下水路から出て休憩してる所だ。ケースはスバル達の方にあつたらしい。ただ、見つけたのが戦闘を始めた直後だったから気づけなかつたらしい。ケースは既にキャロが封印をしたらしいからこれ以上ガジェット達が来る事も無いだろ。

「おい、お前ら大丈夫か？」

ヴィータさんが到着したらしい

「はい。ケースも無事、手に入りました。後、敵と関係があるかもしれない少女も」

「そうか。悪いな、すぐにごつちに行けなくて」

「いえ。こちらこそすみません。敵を逃がしてしまって」

「それは仕方ねえ。気にすんな」

そんな話をしているとちょうど少女が起きた

「……ここは？」

「あなたが倒れてた地下の上よ。あなた、名前は？」

「……ルーテシア・アルピーノ」

「地下で何をしていたの？」

「……」

「答えなさい！」

キョン「やめろ、ティアナ。そんなにキツく言ったら余計言えなくなるだろ。それにまだ、敵の仲間だと決まったわけじゃない。もし、無理やり連れて来られただけの一般人だったらどうする？」

「それは……」



ティアナが悔しそうに黙る。俺はしゃがみこんでルーテシアの目線にあわせてなるべく笑顔を意識して問いかける

「なあ、ルーテシア。なんであそこに居たのか教えてくれないか？」

ルーテシアは少し悩むような素振りを見せた後ポツポツと話し出してくれる

「……ドクターのお願いでレリックを探してたらレインが来て、ドクターより大切な仕事が入ったからって連れて行かれそうになって、嫌って言ったら攻撃された」

「そのドクターってのは、ジェイル・スカリエッティでレインってのは、あの女でいいんだな？」

ルーテシアがこくりと頷く。

「……でも、ドクターはみんなが言ってるほど悪い人じゃない。全部レインがドクターに着せた濡れ衣」

ルーテシアは自分の母親が何年も目覚めてないこと。それをジェイル・スカリエッティが助けようとしてくれていることなどを話してくれた

「そんなもの信じられるはずないでしょ」

「やめねーか、ティアナ」

俺がティアナの方を向いたとき指のようなものがティアナの足下を

動いていた

「ティアナ！足下に何かいる」

「へっ！？」

指はルーテシアの所まで来たかと思うと地面から水色の髪の女が出てきた。腕には誰かを抱えている。ルーテシアに似てるな

「敵か！？」

「まって。あたしは戦いに来たんじゃない。お願いがあるんだ」

ヴィータさんがアイゼンを向けると女は慌てて腕をふる

「…セイン。なんでお母さんを？」

あれがルーテシアの母親か

「ルーお嬢様とメガー又さんをあなた達に保護して欲しい。レインの奴は裏切ったルーお嬢様に確実に危害を加えようとする。だから…」

「お前はどつするんだ？」

「ドクターは私も保護して貰えって」

「なら、一緒に来て貰おうか。スカリエツティやそのレインってやつのことについて少しでも情報が欲しいからな」

「わかった」

こうして、この事件は一応の終幕となった

三人称

レインはある男の部屋で今日の事を男に問いつめていた

「なぜ、神人が消えたの!？」

「あの力は強大すぎる。普通の人間では制御できない」

「それを可能にする人間を作るのがあなたの仕事じゃ無いのかしら?  
?ドクター・スカリエッティ」

「君は人の命をなんだと」

スカリエッティはレインを睨みつけるがレインは冷たい目でスカリエッティを見つめる

「それはあなたが言える事では無いわ。あなただって自分の為に戦闘機人を作ったでしょ？」

「それは…」

スカリエッティは痛い所をつかれたのか、視線を逸らす

「ああ、そうそう。戦闘機人と言えばセインが裏切ったみたいね。もう一人の裏切り者ルーテシアの母親連れて機動六課の所に行ったみたいじゃない」

「……………」

「まあ、今回は大目に見るけど、これ以上裏切り者は出てほしく無いわね」

レインは冷たくそう言い放つとスカリエッティの部屋から出て行く。部屋の扉の前には女のような顔の男が立っていた

「話は終わったのか？」

「ええ。それにしても、聖王の器と召喚師が居なくなったのはつらいわね」

「あんたが少し反抗したぐらいで殴りだすからだろ」

「私に反抗していい人間なんか居ないのよ。それなのに部をわきまえずに反抗してきた小娘にちよつとお灸を据えただけじゃない」

「それがいけないんだよ」

「あなたまで私に意見するのかしら？」

レインの冷たい目に軽く睨まれて男は少し冷や汗を流す

「別にそうゆう事じゃない」

「ふふふ。私をがっかりさせないですよ？式見堂君？」

レインは楽しげに笑うとそのまま歩き去った。

「はあ、死にてえ」

蛭はポツリとそう呟くとレインとは反対方向へと歩きだした

## 遭遇（後書き）

優希「あとがきコーナー」

キヨン「最後に出てきたの誰だよ」

優希「とある小説の主人公。次の次ぐらいには本格的に登場させる予定」

キヨン「ふうん。つか、原作ブレイカーすぎじゃないか？スカリエッテイいい人っぽくなってるとるじゃん」

優希「その辺の事情は次回書く。とゆうわけで、次回予告よろしく」

優希「とゆうわけで、朱神優希とキヨンでした。感想お待ちしてます」

**事情（前書き）**

意味不明な点があったら質問してください

## 事情

昨日の一件から一夜明けた本日、少し広めの会議室に機動六課の主要メンバーとセインとギンガ。そしてわざわざ学校を休んで貰ってまで長門と古泉にきて貰っていた

はやて「ほな、セイン。スカリエッティ達の事について話してくれるか？」

セイン「はい。ドクターは確かに管理局に恨みを持って、復讐のためにあたし達戦闘機人を作りました。でも、作ってるうちに自分のやっていることが愚かしい行為だって気づいたんです」

確かにそんな経験誰にでもある。俺が映画作りの時にハルヒを殴ろうしたのと同じようなもんだ。突発的な怒りなんて次の日になったら意外と引いてる。

セイン「それで、ドクターはあたし達を自分の娘として育てながら静かに暮らすつもりだったんです。でも……」

セインは少し顔を伏せて震えるような声で言う

セイン「あのレインって女が現れてから全てが狂った。あの女はあたし達姉妹が束になってもかなわなかった。そして、レインはあたし達を攻撃しない代わりにドクターを隠れ蓑にして酷い実験をした。そのせいで、ドクターは次元犯罪者として広域指名手配されてしまった。…メガー又さんはその実験の被害者なんです。そしてその娘であるルーお嬢様も」



はやて「ケースを持つとったあの女の子の事は何かわかるか？」

セイン「レインがなにかの目的のためにドクターに無理やり作らせた人造生命体だって事は知ってますが他の事についてはなにも…すみません」

セインが本当に申しわけなさそうに俯く

はやて「別に気にせんでもええよ。よく話してくれたな」

ヴィータ「なあ、あたしからも質問していいか？」

セイン「は、はい」

ヴィータ「あたしが遭遇した青白い巨人。あれはなんなんだ？」

セイン「それは……」

古泉「失礼、その事についてなら、僕や長門さんの方が説明できます」

突然古泉が話しに割って入った

古泉「多分それは神人です」

なのは「神人？」

古泉「涼宮さんの力が涼宮のストレスを発散するために生み出す巨人です。元々は閉鎖空間とゆい特殊な空間にしか出てこないはずなんです」

長門「何らかの方法で涼宮ハルヒの能力を蒐集、そして使用されたと思われる」

フェイト「ハルヒって結構おつかない能力持ってたんだね」

はやて「ほんまやな」

古泉「しかし、現状で相手は涼宮さんの能力を制御できていないようです」

ヴィータ「だから急に消えたのか」

古泉「しかし、相手がいつまでも制御できないとは限りません。早めに対策を練るべきでしょう」

はやて「せやな。ほんなら、今日の所はこれで解散しよか。グリフイス君となのは隊長とフェイト隊長。それから、古泉と長門さん。セインは残ってくれるか？」

古泉「僕達もですか？」

はやて「せや。神人ちゅうのについてもうちよい詳しく説明して貰いたいし、対策を練るなら実際に戦ったことがある人の意見があった方がええしな」

古泉「わかりました。あまりお役にたてるかはわかりませんが」

俺たちは六人を残して会議室から出た。

スバル「これからデスクワークかあ。憂鬱だなあ」

ティアナ「少しなら手伝ってあげるからさっさと行くわよ」

スバル「ホントに？ありがとーティアナ」

ティアナ「はいはい。キヨンはこれからオフシフトだけ？」

ティアナが俺の方を見ながら聞いてくる

キヨン「ああ。民間協力者にデスクワークはさせられないんだとよ」

スバル「いいなー、キヨンは」

キヨン「スバルもさっさと終わらせれば後はオフだろ？頑張れよ」

スバル「あたしはデスクワークが苦手なんだよ」

ティアナ「勉強の成績自体はいいはずなのにね」

キヨン「そうなのか？」

スバルがバリバリ勉強してる姿：全然想像つかない

ティアナ「一応訓練校を首席で卒業してるわよ」

キヨン「マジか！？」

イメージとかけ離れてる。ハルヒの成績がいいこと以上に驚きだ。

スバル「そこまで驚くこと無いじゃん」

キヨン「あ、悪い。なんとなくイメージ出来なくてな」

そうこうしてるうちにオフィスについた

スバル「それじゃ、また後でね」

キヨン「ああ」

軽く手を振って別れる

さて、これからどうするかね。ヴィータさんに頼んで訓練するのは  
疲れるし、パスだな。長門達もまだ話の途中だし、今はハルヒと会  
いたくないしな

キヨン「なんかしたいことあるか？ルーテシア」

隣にいるルーテシアに聞いてみる

ルーテシア「……特に無い」

キヨン「そうか」

結局食堂でなにもせずぼーっとする事になった。こうなると古泉で  
もいいから話相手が欲しいもんだな。目の前にルーテシアが居るけ  
ど長門並みに喋らないし

????「暇そうだな」

いきなり後ろから声をかけられる。振り向くとピンク色の髪をポニーテールにした、女性、シグナムさんが立っていた。

キヨン「おはようございます、シグナムさん。ええ、まあスバル達はデスクワークで古泉達ははやてさん達とお話中ですから暇と言えば暇ですね」

シグナム「そうか。ならば稽古でもつけてやろう……と言いたい所だが、これから少し用事があってな」

キヨン「用事ですか？」

どちらにしても、ルーテシアをダシにシグナムさんの稽古を断るつもりだったのは内緒だ。いや、かなりキツイし。一回個人スキルの訓練の時に見て貰ったけど、次の日バリバリ筋肉痛になったし。

シグナム「ああ。お前達が保護した少女とメガーヌ・アルピーノの精密検査の結果がでたらしいのでな。今から向かう所だ」

キヨン「そうですか」

そのときルーテシアに軽く裾を引っ張られた。

キヨン「どうした？ルーテシア」

ルーテシア「……………」

ルーテシアは何も言わず俺の顔をじっと見ている

キヨン「もしかして、母親に会いたいのか？」

俺の言葉にルーテシアがほんの数ミリ小さく頷く。長門でなれてなきやわからんぐらいだな

キヨン「シグナムさん。ルーテシアも一緒に連れて行ってあげてくれませんか？」

シグナム「それは構わんが責様も一緒に来い」

キヨン「へ？なんでですか？」

シグナムさんが近づいて来て耳元で小さく囁いてくる

シグナム「私をこの子と2人つきりにするな。気まず過ぎる」

ああ、確かに無口無表情な奴と長時間一緒に居るのは耐性が無いとかなり辛いかもしれない。俺も最初の頃は長門と2人つきりは気まずかったしな

キヨン「わかりました。じゃあ、行くか。ルーテシア」

ルーテシア「……うん」

キョン「それにしても、すみません。無理言って」

シグナム「気にするな。子が親に会いたいと思うのは至極当然のことだ」

今はシグナムさんが運転する車に乗って病院へ向かっている所だ

ルーテシア「……………」

ルーテシアはズーッと窓の外を眺めている。何か面白いものでもあるのか？俺がぼーっとルーテシアを眺めていると突然シグナムさんに通信が入った

???「騎士シグナム。聖王協会シャツハ・ヌエラです」

シグナム「どうされました？」

シャツハ「すみません。こちらの不手際がありまして。少し目を離れたスキにあの子が姿を消してしまいました」

シグナム「わかりました。すぐに向かいます。…………少しとばすぞ。しっかりと掴まっておけ」

俺が返事をする前にシグナムさんはアクセルをベタ踏みにした。おいおい、捕まるぞ。…………いや、俺達が捕まえる立場で今は緊急事態だからいいのか？

10分後、少し体を痛めながらも病院についた。玄関の方からさつき通信してきた女性が駆け寄ってくる

シャツハ「申し訳ありません。…えつとそちらの方達は？」

シグナム「先日機動六課に入隊した新人のキヨンとここに入院しているメガーヌ・アルピーノの娘のルーテシアです」

キヨン「はじめまして」

ルーテシア「……………」

シャツハ「はじめまして。聖王協会のシスター、シャツハ・ヌエラです」

シグナム「それで状況は？」

シャツハ「特別病棟とその周辺の避難は住んでいます。今の所、飛行や転移、侵入者の反応は見つかってません」

シグナム「外には出られない筈ですね」

シャツハ「はい」

シグナム「ならば、手分けして捜すか。すまんがキヨン。ルーテシアとロビーで待っていてくれないか？」

キヨン「俺も捜すの手伝いしましょうか？」

シグナム「お前まで捜す羽目になりかねんから大人しくしていきなれ」



確かに、ここ広いし俺まで迷子になる可能性あるな

キョン「わかりました。行くか、ルーテシア」

シグナムさん達はどこかに捜しに行ってしまったので俺達も移動する。玄関を入れてすぐのソファアに座る

キョン「すぐに見つかりやいいけど」

それにしてもものが乾いたな。

キョン「ルーテシア、なんか飲み物いるか？」

ルーテシア「……うん」

キョン「適当になんか買ってくるから座っててくれ」

まあ、自販機探すぐらいなら動いても大丈夫だろ

自販機はすぐに見つかった。見つかったけど

キョン「ろくな飲み物が無い」

ゲルルンジュース（桃味）とかゆう果汁150%の怪しい飲み物？とか、四ツ矢サイダー（カレー味・キムチ味・野菜味）とかマウ○テンデューとか魔女の秘薬（ポリジュース薬風味）とか。

キョン「なんでマ○ンテンデューがあるんだよ。あと、三○矢サイダーパクってる」

とりあえず地球でもたまに見かけるジュースがあることに突っ込んだ。つーか、これ病院の自販機だよな？

しゃーない、マウンテンデューとなんかもう一本ネタ的なのを買うか。マウンテ○デューを買ってもう一本ゲルルンジュースでも買おうとボタンを押そうとしたとき、自販機のガラスに金髪の少女が映った気がした。振り向くと、窓の外でこの間の少女がふらふらとした危ない足取りで歩いている所だった。ガタンとジュースが落ちてくる音がした。無意識にボタンを押したらしい。

キョン「今はあの子が優先だよな」

落ちてきたジュースはひとまずほっという外に出る出口を探す

キョン「どこ行った？」

外に出てさっきの所まで来たが居なくなっていた。動いてたんだから当たり前だが。少し探しながら歩いているとガサガサと茂みが揺れて少女が飛び出してきた

キョン「ここに居たのか。ダメだろ、抜け出したりしたら」

????「っ……………」

めっちゃ警戒されてる。どうしようか悩んでいると突然目の前にバリアジャケットを着たシャツハさんが飛び込んできた

キョン「シャツハさん!？」

シャツハ「下がって。どんな潜在的危険を持っているかわかりません」

危険って、こんな子供がか？

????「ふえっ」

少女は急に出てきて自分に敵意を向けるシャツ八さんが怖いのか、泣きそうになりながら後退りして地面にへたり込んだ。シャツ八さんも流石にこれには気が引けたのか、少し困った顔になる

キヨン「シャツ八さん、ちょっといいですか？」

シャツ八「あ…はい」

そう言つて少女に近づくと腰をかがめて頭を撫でながら笑顔を意識して話しかける

キヨン「怖かったな。大丈夫か？」

????「……うん」

キヨン「立てるか？」

????「うん」

軽く手を引つ張つて立つのを手伝つてやり砂を手で払つてやる

キヨン「（とりあえず今のところ危険は無さそうですね）」

シャツ八「そうですね）」

キヨン「俺はキヨンだ。お前は？」

「……ヴィヴィオ」

キョン「ヴィヴィオか。なあ、ヴィヴィオ。病室を抜け出してどこに行くつもりだったんだ？」

ヴィヴィオ「……ママ……」

キョン「は？」

ヴィヴィオ「……ママ……居ないの」

ママ……か。確か人造魔導師ってのは元にした人間の記憶を持つてることもあるってフェイトさんが言ってたな

キョン「そうか。ママを捜してたのか。なら、俺と一緒に探してやるよ」

精一杯笑顔を作る

ヴィヴィオ「……うん」

シグナム「全く、ロビーに居ると言った筈なんだがな」

いつの間にか来ていたシグナムさんが呆れたような顔をして立っていた

キョン「すみません。飲み物買いに来たらちよつど見つけたので……って、あ！」

ヴィヴィオ「ひっ」

いきなり大声をだしたせいかわいヴィオの一度引っ込んでいた涙がまた目にたまってきた

キヨン「あ、すまんヴィヴィオ。ヤバい、ルーテシア、待たせたまんまだ」

シグナム「なにをやってるんだ、お前は。さっさと行くぞ」

ヴィヴィオを抱き上げてルーテシアの所に戻る

キヨン「悪いな、ルーテシア」

ルーテシア「……別に」

かなり怒ってるな。ルーテシアは長門より表情はよみやすいから感情はわかりやすい

キヨン「悪かったって。行こう、ルーテシア。シャツ八さん、案内してもらえますか？」

シャツ八「はい」

ルーテシアは心無しブスツとした顔でシャツ八さんの後をついていく。ヴィヴィオは疲れが溜まっていたのかここに来る途中に寝てしまった

シャツ八「ここです」

シャツハさんが一つの部屋の前で止まる。ルーテシアは一瞬躊躇した後部屋に入る。俺もヴィヴィオを抱いたまま部屋に入る。

部屋にはルーテシアの母親のメガー又さんが眠っていた

シャツハ「ひどい傷が何ヶ所か見つかりましたが幸い命に別状はありませんでした。ですが、昏睡状態は続くと思います。正直、あそこまでの傷を負って生きているのは奇跡に近いですね」

シグナム「それだけスカリエッティの技術力が高いということか」

ルーテシアはなにも言わずじっとメガー又さんを見ている

キョン「ルーテシア…」

ルーテシア「…大丈夫」

ルーテシアの声は震えていた

キョン「泣きたいのなら、我慢せずに泣けばいいからな」

ルーテシア「……………うん」

ルーテシアは声を出さずに涙を流した。俺は泣き止むまで優しく頭を撫でてやった。後日談とゆうか、今回のオチ。ヴィヴィオは六課が…とゆうか俺が預かる事になった。理由はなんか異常に懐かれてしまったからだ。帰ろうとしたら俺にしがみついてメチャクチャ泣かれたので仕方なくつれて帰ってきた。今は俺の膝の上で嬉しそうに食事中だ。

キョン「なあ、ヴィヴィオ。俺が食べにくいから膝の上から降りて隣の椅子で食べてくれないか？」

ヴィヴィオ「いや」

即答かよ。…それにしても、さつきから妙に悪寒がするな。風邪でも引いたか？

ヴィータ「……………」

ルーテシア「……………」

ヴィータさんとルーテシアが睨んでる気がするけど気のせいだよな？なんか、なのはさんもこっちちらちら見てる気がするけど

古泉「本当に鈍感ですね」

キョン「なんか言ったか？古泉」

古泉「いえ、何も」

キョン「そういえば、聞きたいことがあるんだが」

古泉「なんででしょうか？」

キョン「ここ最近、ハルヒの閉鎖空間は発生したか？」

古泉「いいえ。涼宮さんの感情が消えてから今日まで、一度も発生していません。機関もこれは流石に異常事態だと思っていました。まさか盗まれているとは」

キヨン「やっぱり認めるしかないか」

できればハツタリであって欲しかったんだがな。キヨン「そっぴや、長門は？」

古泉「あちらでスバルさんとエリオ君と一緒にお食事中ですよ」

古泉が指差した方を見るとなんか大食い大会みたいなことになっていた。…あ、エリオがフオーク置いた

エリオ「もう無理です」

キャロ「エリオ君はよく食べたよ」

ティアナ「てゆうか、食べ過ぎよ」

セイン「よく食べるなあ」

キャロがエリオの所に駆け寄り、ティアナとセインが呆れたようにまだ食べているスバル達を見ている。

ヴィヴィオ「お姉ちゃん達スゴイ」

キヨン「ヴィヴィオ、絶対真似しちゃダメだぞ」

ヴィヴィオ「うん」

最終的に食堂のスタッフが勘弁してくれと言うまでその勝負は続いた



オマケ

病院から帰る少し前の話

キヨン「あ、そういや、ジュース置いたまんまだった」

ジュースを買った自販機まで戻ってきて取り出すと、ゲルルンジュースじゃなく四ツ矢サイダー（野菜味ホット）だった。ボタン見てなかったから押し間違えたのか？つーか、なんで炭酸系にホットがあるんだよ

キヨン「どうすっかなこれ」

とりあえず持って行ってルーテシアにどっちを飲みたいか聞いてみる

ルーテシア「こっち」

ルーテシアは即答で○ウンテンデューを指差した。そりゃ、サイダーの野菜味のホットなんか飲みたくないよな。仕方ないのでサイダーの方は俺が飲んだ。激マズだったのは言うまでもない

## 事情（後書き）

優希「あとがきコーナー……は特に書くことが無いので今回はお休みします。とゆうわけで、朱神優希でした」

明かされた真実・キヨンの怒り（前書き）

内容が微妙だ

## 明かされた真実・キヨンの怒り

朝、目が覚めると隣に少女が寝ていた。……………いや、別にやましいことなんか無いぞ。昨日ヴィヴィオをなのはさん辺りに預けようとしたらめっちゃ泣かれたから仕方なく一緒に寝ただけだ。

ヴィヴィオ「ムニャムニャ」

小さい子供の寝顔ってのはなんとなく癒されるものがあるな。思わず頬が緩む。……………今、ロリコンって思った奴は後でSLBな。

ヴィヴィオを起こさないように細心の注意を払って訓練着に着替えて訓練場へ向かう。起きたときに誰もいないのは心細いだろうからザフィーラに居て貰うように頼んだ

キヨン「（悪いな、ザフィーラ）」

ザフィーラ「（気にするな。この位どうとゆうことはない）」

キヨン「（そうか。じゃあ、ヴィヴィオが起きてぐずるようだったらフェイトさんの所にでも連れて行ってくれ。フェイトさん結構なれてるみたいだったから）」

ザフィーラ「（ふっ）」

キヨン「（ん？どうした？）」

ザフィーラ「（いや、お前がヴィヴィオの父親のようだなと思ってな）」



セインの話によるとレイン達の拠点は移動型で、バレそうになると場所を移動するらしい。だから、もう、セインが知っている場所にレイン達は居ない可能性がある。なのでレインが次の行動を起こすまではセインとルーテシアも一緒に訓練を受けることになった。

セイン「それにしても、キヨン達って結構キツイ訓練してるんだね」  
キヨン「最近は慣れたな。セインとルーテシアは初日からこれはキツかったんじゃないのか？」

セイン「あたし達もこんぐらいの事は向こうでもやってたからね。こっちに比べたら優しい方だったけど」

キヨン「ふーん」

そんな事を話ながら歩いているとザフィーラに乗っかって散歩しているヴィヴィオを見つけた

キヨン「おい、ヴィヴィオ」

ヴィヴィオ「あー！おい」

ヴィヴィオがこっちに気づく。ザフィーラがヴィヴィオを乗っけたままこちらに近づいてきた

キヨン「大丈夫か？ザフィーラ」

ザフィーラ「まあ、これぐらいどつとゆつことはない」

キヨン「（そうか。悪いな）おはよう、ヴィヴィオ。ちゃんとい子にしてたか？」

ヴィヴィオ「うん」

キヨン「そうか。偉いな」

軽く頭を撫でてやる。ヴィヴィオは嬉しそうに目を細める。

ルーテシア「……………」

また、昨日のような悪寒に襲われる。やっぱり風邪か？

スバル「ほら、ヴィヴィオ、キヨンが挨拶したんだからヴィヴィオもおはよーって言わないと」

ヴィヴィオ「おはよー」

スバルに促されてヴィヴィオが挨拶してくれる

キヨン「ヴィヴィオは朝ご飯食べたか？」

ヴィヴィオ「朝ご飯？」

キヨン「その様子だとまだ食べてないみたいだな。一緒に行くか」

ヴィヴィオ「うん」

スバル「今日のメニューはなにかなあ」

ティアナ「スバル、涎ふきなさい」

セイン「みんな、楽しそうですね、ルーお嬢様」

ルーテシア「……………うん」

朝ご飯を食べた後、はやてさんに呼び出された。ヴィヴィオをまたザフィーラに預けて部隊長室に向かう

はやて「ごめんな、いきなり呼び出して」

キヨン「いえ、別に構いませんけどどうしたんですか？」

はやて「キヨン君って確か今日も何も用事は無かったよな？」

はやて「ええ、まあ、今日、ライトニングはセインが教えてくれた場所に行くみたいですし、スバル達みたいにデスクワークも出来ませんし」

はやて「せやろ。それでな、キヨン君にはセインと一緒にライトニングについて行って貰いたいんだよ」

キヨン「別にいいですけど」

ヴィヴィオがぐずるだろうなあ。まあ、ザフィーラを気に入ったみたいだし、少しなら大丈夫か

はやて「ほんなら、30分後に屋上に行ってな。セインにはもう言っているから」



キヨン「わかりました」

キヨン「じゃあ、ヴィヴィオ、大人しくしてるんだぞ」

ヘリが待機している屋上でヴィヴィオの頭を軽く撫でる

ヴィヴィオ「うん」

キヨン「ヴィヴィオを頼むな、ザフィーラ」

ザフィーラがコクリと頷く。

フェイト「じゃ、行こうか」

フェイトさんがヘリに乗り込むのに続いて乗り込む

エリオ「それにしても、キヨンさんってヴィヴィオのお父さんみたいですね」

キヨン「そうか？ザフィーラにも言われたんだが」

飛び立ったヘリの中で目的地まで適当な雑談をする

キャロ「確かに、優しいお父さんみたいでした」

キヨン「お兄さんじゃなくてお父さんなんだな」

フェイト「あはは。多分、キヨンのヴィヴィオへの接し方がそう見えるんじゃないかな？」

キヨン「よくわかりませんが」

フェイト「そのうちわかるよ。さて、ちょっと真面目な話をしようか」

フェイトさんが少し顔を真剣にする

フェイト「地上本部へのテロがあるかもしれないんだ」

エリオ「テロって地上本部へですか？」

まず、地上本部ってなんだ？と聞きたかったが話の腰を折る訳にもいかないので黙って聞く

フェイト「うん。セインが話してくれた内容なんだけど、今度の公開意見陳述会を狙ったテロをレインが計画してるらしいんだ」

キャロ「そうなんですか？」

キャロが俺の隣に座っているセインの方を見る

セイン「うん。目的まではわからないけど、やるらしい。多分、あ

たしの姉妹達も来る」

エリオ「でも、確かに、管理局施設の魔法防御は鉄壁ですけど、ガジェットを使えば」

フェイト「そう、管理局法では、質量兵器の保有は禁止だからね。対処しづらい」

キャロ「質量兵器？」

フェイト「おおざっぱに言えば魔力を使わない物理兵器………で、いいのかな」

それから、フェイトさんは質量兵器について簡単な説明をしてくれる。

キョン「つまり、地球で言う爆弾とか、ミサイルみたいなものって考えればいいですか？」

フェイト「まあ、大体そんな感じ。と、まあ世界の歴史は置いていて」

フェイトさんが手で置いといてとジェスチャーする

フェイト「まあ、そうゆう事だからしつかりやるって事」

ヴァイス『フェイトさん、そろそろ着きますよ』

ヴァイスさんがモニター越しにフェイトさんにそう伝える

フエイト「わかりました。じゃあみんな、お仕事頑張るっね」

「「「はい」」」

それから数分後、セインの案内で森の中にある、洞窟へと入る。中は人が住んでいたような痕跡はあるが、人の気配や装置のようなものは無かった

フエイト「何かしら手掛かりがあればと思って来たんだけど」

キヨン「何もありませんね」

セイン「流石にあたしが寝返ったから場所を移したみたいですね」

なにが起こるかわからない為、警戒をしながらも奥に進んで行くと天井が崩れ落ちて道が塞がれていた

セイン「前はこんなもの無かったのに」

フエイト「なにかを隠すためにわざと天井を壊した？それともなにかの罠？」

エリオ「どちらにしても進むには慎重に岩をどかす必要がありますね。これがどれくらい厚いのかもわかりませんし」

エリオが岩を軽く触りながら見上げる。

セイン「それなら、あたしのISなら向こう側に行けるよ」

キヨン「そういや、お前って地面を潜る事が出来るんだっけ？」

一番最初に会った時も確か地面から出てきたしな

セイン「そう。あたしのIS“ディープダイバー”は無機物を透過し自在に潜行できる。ただ、フィールドやバリアを張ってる人や物を移動させられないし、密着してないといけないから1人ぐらいと一緒に連れていける限界だけだね」

フェイト「でも、敵がそれをわかってない筈が無いし、もしかしたらエリオの言うように向こう側に罠があるかもしれないから、最初は私がセインと一緒に行く。その後、安全が確認出来たらキャロ、エリオ、キヨンの順番で」

キヨン「わかりました」

フェイトさんがセインに連れられて岩に潜って行く。なんとなくホラー映画っぽいなとか思いながら見ていると完全に岩へと入っていた

????「やつと行ったか」

突然背後から声がしたので勢いよく振り向くと、青い銃を持った俺

と同年ぐらいの女顔の男とあの夜、俺達を襲ってきた、ヴィラとか言う男が立っていた。

エリオ「いつの間に。気配はしなかったのに」

????「姿と気配を消してたからな。流石に、5対2は分が悪かったから、向こう側に行くまでまって貰ったんだ」

女顔の男が淡々と語る

ヴィラ「んなもん、どうでもいいんだよ。とりあえずこいつらを殺せばいいんだよな？」

????「あの一番大きい男は殺すな。他もなるべく殺さずに捕まえる」

ヴィラ「ちっ、つまんねーな」

最初に来たときとだいぶ性格が変わったな。その時突然フェイトさんから念話が入る

フェイト「みんな、やっぱり、こっちにガジェットがかなり居た」

キョン「すみません、フェイトさん。こっちも敵と遭遇してます」

フェイト「………わかった。こっちは1人でも大丈夫だけどそっちは大丈夫？」

キヨン「（多分、大丈夫です）」

フェイト『（じゃあ、なるべく早く終わらせてそっちに行くから）』

そこで念話が終わり再び目の前の敵に集中する

キヨン「（とりあえず、目の前の敵を倒すぞ、エリオ、キャロ）」

エリオ・キャロ「（はい）」

「セツトアップ」「」

デバイスを起動させてバリアジャケット姿になる

ヴィラ「じゃあ、遠慮なく、殺らせて貰うぜ」

「???」「殺すなよ」

ヴィラの姿が消え、殴りかかってくるがそれはエリオのストラーダによって防がれた

ヴィラ「なっ」

ヴィラは受け止められたことに驚いているようだ

エリオ「お前の相手は僕がする」

エリオはヴィラの腕を弾き飛ばして斬りかかるが、ストラーダは男の撃った銃弾に弾かれた

???「僕が居ることを忘れないでよ」

男が銃を連射するが、それは連結刃で弾いた

キヨン「なら、俺が居ることも忘れるな。エリオ、そいつは任せてもいいか？」

エリオ「はい」

エリオはそのままヴィラに突っ込んで行った。俺は男と睨み合う

タナトス『ステータスロード。ロードファイルネーム“シグナム”』

キヨン「紫電一閃」

大剣に炎を纏わせて斬りかかるが男は難なくそれを避ける

ヴィラ「そんな直線的な攻撃は当たらないよ」

キヨン「ちっ」

背中を撃たれるが、バリアジャケットのおかげで大したダメージは無い。その時、ヴィラの攻撃をエリオが防げず、吹っ飛ばす

エリオ「ぐあっ」

キヨン「エリオ！」

???「余所見してていいのかい？」



エリオの方に気を取られ男の接近に反応できなかった。俺も殴られて吹っ飛ぶ。

ヴィラ「ふん。人造魔導師つてのがどれくらいのもんか気になつてだが、大した事は無いな」

キヨン「は？人造魔導師つて、誰が？」

ヴィラ「おんやあ、知らないのか？その赤髪のカキは死んだガキを元に造られた人造魔導師なんだよ」

キヨン「なっ」

エリオの方を見ると苦痛をつけているかのように顔が歪んでいた

ヴィラ「その様子だとほんとに知らないみたいだな。そいつはプロジエクトFによって造られた人間だ。その金髪の女もな」

後ろを振り向くとフェイトさんがセインと一緒に岩から出てくる所だった

ヴィラ「そいつらは死んだ所で誰も悲しまない、造られた人形だ」  
ニタニタと笑うヴィラを見た瞬間、俺の中でなにかが壊れた。

キヨン「……け……なよ」

ヴィラ「あん？」

キヨン「……ふざけるなよ」

怒りの感情が溢れる。この感覚は前にもあった。ハルヒが朝比奈さんを自分の玩具呼ばわりしたときだ

キヨン「お前だけは、絶対に許さん」

三人称

ヴィラ「テメーなんか許される筋合いはねーよ」

ヴィラがキヨンに突っ込むがキヨンはそれを大剣で受け止めた

キヨン「はあ」

キヨンが受け止めた腕を弾き飛ばすと武器をバルディッシュに変える

タナトス「ステータスロード。ロードファイルネーム“フェイト”」

キヨン「ハーケンセイバー」

回転する雷の刃を放つがヴィラは避ける

キヨン「ストライクレイド」

キヨンがよけたられた瞬間に雷を纏ったバルディッシュをブーメランのように思いっきり投げる。本物ではなくて、造った偽物だからこそ出来る技だ

ヴィラ「ぐっ」

ヴィラは急な事に反応出来ずに腕で弾き飛ばすと、目の前に両手にリボルバーナックルを装着したキヨンがいた

キヨン「リボルバーカノン」

両手のリボルバーナックルから衝撃波が放たれる。ヴィラは耐えられずに壁に叩きつけられると同時にバインドがかけられる

ヴィラ「ぐっ」

キヨン「これで終わりだ」

タナトス「チャージ、デイバインバスター」

キヨンはデイバインバスターの威力を纏わせたリボルバーナックルでヴィラを思いっきり殴る

キヨン「バスターナックル」

キヨンの拳がヴィラの鳩尾に決まり背後の壁にめり込む。バキンと嫌な音がして負荷に耐えきれずリボルバーナックルが壊れる。

キヨン「後はお前だけだ」

キヨンが男の方を向く

「???」はあ、死にたい。悪いけど逃げさせてもらっよ流石に部が悪いからね」

そう言っつて男はどこからともなくカードを取り出すと銃に装填して

引き金を引く

『カメンライド・ライオトルーパー』

すると、銃口から三体の鎧のようなものを着た人間が現れる

「????」そいつらの相手は頼んだよ

『アタックライド・インビジブル』

男はそう言つてヴィラを掴んでカードを使つと男とヴィラの姿が消えた

キヨン視点

男が召喚した奴らはそこまで強くは無く簡単に倒すことが出来た。しかし、男が逃げるには十分な時間を稼がれてしまった。

今、俺達はヘリに乗って隊舎に帰っている所だ

エリオ「…僕が人造魔導師だった事黙つててすみませんでした」

エリオが唐突にそう言い出した

キヨン「別に気にしてねーよ。言いたくなかつたんだろ？言いたくない事を無理に言う必要は無いさ」

エリオ「でも、僕はキヨンさんやキャロとは違つ、造られた人間なんですよ」

キヨン「だから？」

エリオ「へ？」

俺の言葉にエリオが間抜けな顔をする

キョン「どう生まれたかなんか関係無い。お前が今どう生きてるかの方が大事だろ？お前は人造魔導師としてじゃ無く、1人のエリオ・モンディアルとして生きてる。セインもフェイトさんもだ。ならそれでいいじゃねーか」

エリオ「……………」

キョン「誰かが文句言うなら俺が相手してやる。俺だけじゃない。スバルやティアナやキャラ、全員で。みんなでお前を守ってやる」

あの日の長門を思い出しながら、エリオの頭を撫でてやる。

キャラ「そうだよ、エリオ君。エリオ君はエリオ君だよ。誰にも文句なんか言わせないよ」

キャラがエリオの手を強く握る。

エリオ「…ありがとうございます」

エリオが涙を流しながらお礼を言ってくる。それからヘリが六課につくまでエリオは泣いていた

オマケ・とある医師と執務官の会話

「…とゆうことがあって」

「へえ、そんな事があつたんだ。彼もいいこと言つわね。それで、その時の彼の顔が頭から離れなくなつたと」

「はい」

「それは、恋ね」

「恋？」

「そうよ。女性が男性の事を四六時中考えるようになつたらそれは恋いよ」

「そうなんだ…。これが恋」

「頑張つてね。彼、結構人気あるから」

「え、そうなの？」

「ええ。私の知ってる限りじゃ、あなたを含めて5人居るわ。1人は微妙だけどね。彼、人がいいからもつと増えるかもしれないわよ？」

「そう。わかった、私、頑張るよ」

「ええ、応援してるわ」

「話を聞いてくれてありがとう」

「いえいえ、いつでも相談してね」

部屋から執務官が出て行き、医師だけになる

「さて、はやてちゃんに教えないとね」

医師もウキウキとした表情で部屋から出て行った

明かされた真実・キヨンの怒り（後書き）

優希「あとがきコーナー」

銀時「今回もなにもやること無いんじゃないかねーのか？」

優希「まあ、そうなんだけど、重大な事に気がついた」

キヨン「なんだよ？」

優希「アギトとゼスト、いつだそう」

銀時「そついや、全然出てないな」

優希「どつちも出す機会がないんだよな。他にもカリムさんとかクロノ君とかユーノ君とか」

キヨン「どつかで無理やりにも出せばいいだろ？」

優希「とりあえず、アギト達は地上本部の時にだそう。ユーノ君はキヨンを無限書庫行かせるとして、カリムさんとクロノ君はほんとどつしよ」

銀時「ホントに計画性がねーよな」

優希「うるさい。なにか、案がありましたら感想の所に書いてくださると嬉しいです。とゆうわけで、朱神優希と坂田銀時とキヨンでした。感想お待ちしております」



## 爪と仮面 眼鏡と幻（前書き）

今回から文字数節約の為、「」の前で名前は書かないようにします

## 爪と仮面 眼鏡と幻

キヨーン視点

この間の一件から一週間が経った。

今までと変わらない何時もの朝練

「アクセルシユーター」

レイジングハートを構えて魔力弾をエリオに向かって放つ

「ストラダー！」

『ソニックムーブ』

エリオが高速で魔力弾をよけて背後に回り雷を纏ったストラダーで突いてくる。

違う武器の創作をする時間は無いな

「タナトス！」

『ステータスロード。ロードファイルネーム“シグナム”』

「紫電一閃」

炎を纏ったレイジングハートでストラダーを弾きそのまま突く

「うわっ!？」

ストラーダを弾かれてバランスを崩したエリオが吹っ飛ぶ

「そこまで」

なのはさんが間に入って来てキャロがエリオの方へと走っていく

「大丈夫？エリオ君？」

「いたたた。な、なんとか」

「悪い、強くやりすぎたか？」

俺もエリオの方へと近づいていく

「いえ、大丈夫です。まさかレイジングハートで紫電一閃が来るとは思ってたんですけど」

「他の武器を創作する時間が無かったからな。意外とやってみるもんだな」

「じゃあみんな整列して」

エリオが立ち上がるとなのはさんが集合をかける

「今日の朝練はここまで。お疲れ様。…あ、そういえば今日はキヨン君とルーテシアとヴィヴィオは病院だよね？」

キヨ「はい。ヴィヴィオとルーテシアの付き添いですけど」

週に一度、ヴィヴィオは病院で検査を受けている。俺は他の奴らよりも幾分か暇なのでその付き添いとしてについていき、ルーテシアもメガー又さんのお見舞いをするために一緒に着いて来ていた

「フェイトちゃんが送るからご飯食べたら来てだって」

「わかりました」

「じゃあ、解散」

なのはさんの解散の言葉を聞いてみんなで隊舎へと歩いていくと向こうから小さい影が此方に向かってきていた

「パパー」

よく見るとヴィヴィオがザフィーラと一緒にこちらに走って来ていた

「あう」

しかし、なにかに躓いたのか盛大に転けた

「ヴィヴィオ、大丈夫かー」

「ううう」

返事の代わりに小さな泣き声が聞こえてくる。

駄目だなあれは。

俺はヴィヴィオの所まで走っていくと立ち上がらせて砂を払ってやる

「大丈夫か？ヴィヴィオ？怪我とかは……してないみたいだな」

「つく…つく」

「ほら、泣くなって」

頭を優しく撫でてやる

「最近キヨンの父親つぷりが板に付いてきたよね」

「少し甘やかしすぎな所があるような気もするけどね」

「……………ねえセイン、私も転んだら頭撫でて貰えると思う？」

「え、えっと、どうでしょう？」

後ろを向くと他の奴らが少し遅れてこちらに歩いて来ていた。

スバル達が何か話してるみたいだが距離があるからよく聞こえないな。それとセインがなんかいたたまれない顔でこっちを見てるんだが、なんでだ？

ヴィヴィオの方へ向き直ると目元に涙の跡があるが、とりあえず泣き止んでいた

「もう大丈夫か？」

「うん、もうだいじょうぶ。いこつ、パパ」

「なあ、ヴィヴィオ、そのパパってのは止めてくれないか？俺はまだ未成年だし」

「イヤ」

また笑顔で即答か。なんか最近ヴィヴィオが俺のことをパパと呼び出した。他の呼び方にしてくれと言っても今みたいに笑顔で拒否される。電話で古泉に相談してみた所、あいつ曰わく

『元々ヴィヴィオちゃんは本当の母親ではなく自分に優しくしてくれる人間を捜していたのではないでしようか？ですから自分に一番優しくしてくれる人、つまりあなたをママ……では少々おかしいのでパパだと思いそう呼び出した、と考えるのが妥当かと思えます』  
だそうだ

別になつかれるのは良いんだがパパってのはなあ、なんか自分が老けたみたいだ。せめてお兄ちゃんとか、妹みたいにキョン君とか

「まあ、良いじゃない。端から見てもキョンってかなり父親っぽいし」

「いつそのことホントにお父さんになっちゃえば？」

「いやなこった。この年で父親になる気は無い」

「パパ、はやくいこ」

ヴィヴィオがズボンを引っ張って急かしてくる。やれやれと思いなからスバル達との会話を打ち切って食堂へと向かう。

まあ、いいさ。そのうち勝手に飽きてくれるだろ

所変わって病院。フェイトさんに車で送って貰った所だ。

「じゃあ、終わったら連絡してね。もし私が忙しくて行けなかったらシグナムかシャーリーに来て貰うから」

車から降りて扉越しに話す

「何時もありがとうございます。忙しいのに送って貰って」

「う、ううん、全然いいよ。寧ろこっちからお願いしたいぐらいだし」

キョ「は、はあ」

急に勢いよく喋りだすフェイトさんに一瞬呆気にとられる。寧ろこっちからって、そんなに子供の相手するのが好きなのか？

「と、とにかく終わったら連絡してね。それじゃ」

フェイトさんはそれだけ言つと車を急発進させて凄いスピードで走り去った。

ちゃんと法定速度守ってるんだらうか？まあ、フェイトさんだからその辺はちゃんとしてるだらう。

病院に入ってルーテシアと別れる。

「じゃあ、ルーテシア、後で行くから」

「……うん」

ルーテシアはすぐにメガーヌさんの病室へと向かう。今のところメガーヌさんが起き出す兆候はないそうだ。それだけ傷が酷いとゆうことでもあり、だからこそ、あそこまで回復させたスカリエッティの力が凄いとゆうことらしい。

「あ、おはようございます。キョンさん。ヴィヴィオちゃん」

「おはようございます。リアラさん」

「おはようございます」

ヴィヴィオの検査を担当しているリアラさんが検査室の前で待っていた。ヴィヴィオがしっかりと頭を下げた丁寧な挨拶する横で軽く会釈をする

「じゃあ、行きましようか、ヴィヴィオちゃん」

「よろしく願います。ヴィヴィオ、いい子にしてるんだぞ」



「うん」

ヴィヴィオはとてととと走って行ってリアラさんと検査室に入って行った。

さて、ルーテシアの所に行かないとな。

「あの…」

ルーテシアの病室に向かう途中で後ろから声をかけられた。振り返るとこの間会ったシャツハさんと同じ服を着た女性が立っていた。

「キヨンさんですよね？」

「ええ、そうですが」

「お話したい事があるので少しお時間宜しいでしょうか？」

「えっと、人を待たせてるんで、後でも良いですか？」

あんまりルーテシアを待たせる訳にも行かないからな

「今じゃないと駄目なんです。あまり長い間お時間はとらせませんので」

「ですが……」

「お願いします」

……これはあれだな。RPGとかでハイって答えるまで延々と同じ内容が繰り返される強制イベントみたいなもんだな。仕方ない。こうしてる時間も勿体無いし

「わかりました。少しだけなら」

「ありがとうございます。ここではなんなんでも少し場所を移動しましょう」

そう言って歩き出した相手の後をついていく。着いたのはあまり人気がない庭の一角。

「それで、話って」

何なんですか？と続くはずだった言葉は途中で止まった。何故なら女性の姿がシスターの服を着た長い茶髪の姿からセインが着ていたのと同じ服の長い金髪に巨大な爪のような武器を持った姿に変わったからだ

「なっ、敵か!？」

「待って下さい。私に交戦の意思はありません」

タナトスを起動させようとする俺に女性はそう言つと爪を手の届かない所へと投げる

「悪いが一応デバイスの起動だけはさせといてくれ」

それでも一応警戒の為にタナトスを起動させる

「それで、話って？」

「その前に自己紹介ですね。私はナンバーズのNo.2ドゥーエです。話というのは今のドクター達の居場所とあなたが保護している聖王の器についてです」

「聖王の器？俺が保護してるってことはヴィヴィオの事が」

「ええ。彼女が人造生命体であることは知っていますね？」

「ああ」

「彼女が作られた理由。それは“ゆりかご”とゆうロストロギアを動かすためです。彼女は“ゆりかご”の鍵である、聖王オリヴィエ・ゼーゲブレヒトの細胞を使って作られた人造生命体。そして、彼女自身も“聖王の鎧”とゆうロストロギア級の力を持っています」

その言葉で以前シャツハさんが言っていた言葉を思い出す

「潜在的危険……ね」

「この事はまだバレては無いようですが、もしバレれば彼女は確実に管理局に監禁されてしまうでしょう」

最悪の事態を想像して背中に嫌な汗が流れる

「この事を知ってるのは？」

「ドクターとレイン。それとナンバーズのNo.1ウーノ、No.4クアットロぐらいですね。後の妹達は存在を知っているかどうか

も怪しい所です」

「セインはなんとなく知ってたな。けど、肝心な事は殆ど何も知らなかった」

「レインは私達に余計な情報を持たせないようにしているんです。私たちが捕まった時に無駄な情報の漏洩を防ぐために。私やこの事を知っている姉妹はある程度情報を知っておかないと仕事が出来ないからという理由で知っているんです。まあ、裏切られるとは思ってなかったでしょうけど」

「いいえ、ドゥーエ姉様。残念ながらそう思われていたようですよ」  
「？」

その声と共にドゥーエの体を何かの爪のようなものが貫きゆっくりと引き抜かれた。

「なっ、ドゥーエ！」

ドゥーエの後ろに蜘蛛のような足を持ったガジェットのようなものとその近くに眼鏡をかけて髪を下の方で二つに分けている女が急に現れた

「……クアツ………トロ」

クアツトロってナンバーズの？なんでこんな所に

「駄目じゃないですか、ドゥーエ姉様。私たちを裏切ったりしたら。妹は悲しいですよ？」

「ふざけ……ないで。あなたも……ドクターに造られた戦闘機人なら……わかってるでしょ？ドクターが……どんな世界を……望んでいるか」

「……今のドクターは昔のドクターじゃない。私は神が無理やり敷いたレールを歩むつもりはない」

「だからって……レインの言いなりに……なるというの？」

「言いなりって酷い言い方ですねえ。単純に目的が一緒だから協力してるだけですよ」

「あなたは……」

「ドゥーエ、傷が酷いからあまり喋るな。今治癒魔法をかける」

「あら、その辺の対策を私がしていないとでも？強力なAMFで念話すら使えないわよ？」

確かに全くと言っていいほど魔力が結合しない。そりゃそうだ。なんの用意もなく攻撃してくるはずがないか

「あなたを殺すなという命令が来ているから殺さないけど抵抗するなら手足をもいで連れて行くのも許可されてるの。あまり抵抗しないでね？」

くそっ、どうする？せめてルーテシアとヴィヴィオを逃がしてやりたいけどルーテシアに念話を通じない。武器の創造は魔力を使わなからAMFがある状況でも使用できる。けど魔法が使えずに相手の能力がわからない状況で剣を削って接近戦をするわけにもいかな

い。レアスキルも魔法が使えない今はあまり役に立たない。なら、選択肢はこれしかない。

「諦めはついたかしら？」

「悪いが、諦めるわけにはいかないんだよ」

俺は一つの武器を創造する。それは弓矢。レヴァンティンの三つ目の形態、ボーゲンフォルム。それをクアットロに向けて構える。近接戦闘を避けるには今の俺にはこれしかない

「なっ、魔法は使えないはずよっ」

「悪いな。この力は魔法じゃなくてロストロギアなんだ。AMFを解いて投降しろ」

「ふ、ふん。良いのかしら？私を攻撃すればガジェットがドゥーエ姉様を殺す。 “バギン” なっ！？」

なにかが破壊される音に振り返ればガリユーがガジェットを破壊した所だった。ガリユーの後ろにはルーテシアが立っている

「ルーテシアお嬢様、何故ここに？」

「……キヨンが遅いから捜してたら偶々クアットロの声が聞こえたから。とりあえずガジェットを壊した」

「スマン、ルーテシア。助かった。さて、クアットロ、形勢逆転だな。大人しく投降しろ」

改めてクアットロにレヴァンティンを突きつける

「ちっ、今日の所はここまでにしておくわ。ご機嫌よう」

クアットロがそう言うのと姿が透明になって消えた。追跡したいがそれよりも先にドゥーエだ

「ルーテシア、俺はドゥーエに治癒魔法をかけるから急いで医者を呼んできてくれ」

「わかった」

ルーテシアが駆け出すのと同時にドゥーエの所に駆け寄ってセーブしているファイルを呼び出す

『ステータスロード。ロードファイルネーム“シヤマル”』

薄黄色の光がドゥーエを包み込み傷口が少し治り溢れ出ている血量が少し少なくなる

「……何故、クアットロを追わなかったの？すぐに捜せば姿が消えていても見つけられる可能性はあったはず」

「バカ言つなよ。死にかけてる奴が居るのにそいつをほっといて追いかけるわけが無いだろうが。傷が酷いんだ、死にたくなかったら喋るな」

それから数分後、ルーテシアがヴィヴィオの検査を終えて俺を捜していたらしいリアラさんを連れてきて、すぐにドゥーエは治療室に運ばれ一命を取り留めた。しかし傷が酷かったため入院する事にな

った。

迎えを待ちながらクアットロが言っていた言葉を思い出す。神が無  
理やり敷いたレールつてのはなんだ？多分セインに聞いてもわから  
ない。ドゥーエに聞きたいが今はグッスリと眠ってるから聞けれな  
い。やっぱりクアットロを追いかけた方が良かったのか？

「どうしたの？パパ？むずかしいかおしてるよ？」

「いや、なんでもない」

俺の膝の上に座って心配そうに顔を覗いてくるヴィヴィオの頭を撫  
でてやりながらふと思いついた質問を試してみる。

「なあ、ヴィヴィオ。もし欲しいものがあつて急いでる時に困つて  
る人が居たら、ヴィヴィオならどうする？」

「そんなのきまつてるよ。こまつてるひとをたすける」

「それで自分の欲しいものが手に入らなかったとしてもか？」

「こまつてるひとをほつといてほしいものをもらつてもうれしくな  
いもん」

そうだ。もしあの場でクアットロを追いかけて捕まえることが出来  
たとしてもドゥーエは助からなかったと思う。それだとなんの意味  
もない。困ってる人を見捨てたら駄目だよな。

「ありがとな、ヴィヴィオ」

「よくわからないけど、どういたしまして」



ヴィヴィオの頭を撫で続けているとルーテシアが横から服の裾を引っ張った

「……私も頑張ったから撫でて」

「褒めてじゃなくて撫でてなんだな」

まあ確かに助かったのは事実だしな。素直に頭を撫でてやるとルーテシアも嬉しそうに顔を綻ばした。後日談とゆうか、今回のオチ。

一週間後、ヴィヴィオをリアラさんに預けてルーテシアと一緒にドゥーエのお見舞いに行くと、すっかり元気になったドゥーエの姿があった。リアラさんによると、後、2、3日もすれば退院できるそうだ。

「にしても、体を貫かれたのに、よくこんなに早く回復したな」

「ええ。体を機械で弄くっているからね。普通の人より頑丈には出来てるわよ」

「そうか。なあ、ドゥーエ。お前、今後の身の振り方はどうするんだ？一応、うちの部隊長はお前を隊に受け入れても良いって言うてるんだが」

「……そうね。その部隊長様のお言葉に甘えさせて貰うわ」

「意外とあっさりだな。やっぱり妹が居るからか？」

セインにドゥーエの事を話したらかなり会いたがってたからな。まあ、流石に六課を離れるのは色々問題があるからということでもまだ

セインとドゥーエは会えてないんだが

「それもあるけれど、一番の理由はあなたよ」

「は？俺？」

意味が分ならず首を傾げる。

「……ドゥーエ、もしかして」

「多分、ルーテシアお嬢様の考えている通りです」

ルーテシアが顔をしかめて、ドゥーエを見る。なんか思い当たる事でもあるのか？

「……絶対に渡さないから」

「ふふふ、大丈夫ですよ。奪ってみせますから」

ルーテシアとドゥーエの会話についていけない俺は、とりあえず時間なので睨み合いを始めた2人をほっといてヴィヴィオの迎えに向かった。決して面倒になつたからじゃ無いぞ

ヴィヴィオを連れて戻ってくるといまだに2人は睨み合いを続けていた。

「そろそろ帰るぞ、ルーテシア」

俺が声をかけるとルーテシアはこちらを向いて、もう一度だけドゥーエの方を向くと、すぐに椅子から立ってこっちに来た

「じゃあ、今日は帰るな。さっき部隊長に連絡したら、色々面倒な手続きのために来るらしいから」

「ええ、分かったわ。じゃあね、キヨン、ルーテシアお嬢様、ヴィ  
ヴィオちゃん」

俺達は笑顔のドゥーエに見送られて病室を出た。

それから更に数日後。ドゥーエは無事退院して機動六課に入隊した

## 爪と仮面 眼鏡と幻（後書き）

優希「閲覧数一万突破しました」

キヨン「唐突だな」

優希「いいじゃん。喜ばしい事だよ。こんな駄文を読んでくださる人が居るんだから」

キヨン「まあ、確かに。よくこんなのがそこまで読まれたもんだよ」

優希「これからも頑張っていきますので応援よろしくお願いします。じゃあキヨン、謝辞のコーナーよろしく」

キヨン「なっぺ様感想ありがとうございます」

優希「ついでに次回予告もお願い」

キヨン「次回『書き換えられた予言』」

優希「とゆうわけで、朱神優希とキヨンでした。感想お待ちしております」

書き換えられた予言（前書き）

今回は主人公が出ません。あと、後半グダグダです。まあいつもの事ですが

## 書き換えられた予言

はやて視点

「ふう、これで仕事は一段落や」

開いていた画面を消して伸びをする

「お疲れ様です。はやてちゃん」

「ん、ありがとな。ライン」

隣で同じように仕事をしとったラインがふよふよとこちらに飛んでくる。どうやらちょうどラインも仕事が終わったみたいや。その時々くくとあたしとラインのお腹が同時に鳴った。時計を見てみるとちよっとお昼ご飯には遅い時間になっていた。

「もうこんな時間か。ちょうど仕事も終わったしご飯食べにいくか？ライン」

「はいです。もうラインはお腹ペコペコです」

オフィスを出て食堂に向かう。時間が時間やから人はあまりおらん。なにを食べようかなとメニューを見ていると突然通信が入った。

『はやて。カリム・グラシアです』

通信はカリムからのものやった

「なんや、カリムかいな。どないしたん？」

『すみません、はやて。今すぐ聖王教会へ来ていただけませんか？』  
今すぐて。今からご飯やのに

「あたし、今からご飯なんやけど」

せやからこの声はかなり不機嫌になっってもあたしのせいやない

『ごめんなさい。でも、大事なことなの。機動六課の今後の活動にも影響するような』

カリムの声は切羽詰まったような声だった。しゃーないな

「わかった。今からすぐに行くわ」

『本当に無理を言っでごめんなさい』

「ええよ。流石に六課の活動に影響ある話を聞かんわけにはいかんしな。ほなら通信切るな」

そう言っで通信切る

「しゃーない。お昼はサンドイッチやな」

それで足りるとええけど

「送ってもらって、ありがとうな、ヴァイス君」

「いえ、帰りはまた連絡くださいね」

ヴァイス君にへりで聖王教会まで送って貰い、今はシスターシャツハにカリムの所まで案内して貰っている。シスターシャツハが一つの部屋の前で止まる

「騎士カリム、騎士はやてをお連れしました」

「はい。どうぞ入ってください」

カリムの返事を聞いてシスターシャツハの後に続いて部屋に入る。部屋にはカリムの他にクロノ君とロツサも居た。

「どうぞ、座ってください」

カリムに促されるまま空いている椅子に座る

「それで、騎士カリム。今回はどうして僕達を呼び出したんですか？」

クロノ君の言葉からすると此処に居る皆は今回呼び出された理由を知らんみたいやな



「……実は…私の予言が書き換わりました」

カリムの言葉にこの場に居る人全員に衝撃が走る

「まさか。姉さんの予言は今まで変わったことは無いはずだ」

「だからこそ、こうして集まってもらったのよ、ロツサ」

「それで、その内容はこういったものなのですか？」

「今から読みます」

クロノ君のその言葉にカリムが席を立ちカーテンが閉められると束  
にされた預言書を取り出して彼女のレアスキル『預言者の著書』プロフィール：シュリフティンを  
発動して読み出す

「『神は気まぐれに世界を作り替えた。闇を光に変え、新たな闇を  
作り出す。闇は神へと取り憑き光により神と共には永久とわの眠りにつ  
く』……これが書き換えられた預言の全てです」

「意味が分からないな。最初の行の世界を作り替えたという所。未  
来ではなく過去形。それがもう起こった後とゆうことかな？」

「せやね。もしそれが次元震のことやとしてもそんな大規模な次元  
振、起こってへんよな？クロノ君」

「ああ。ここ最近はこの間、極小規模なものがあった程度で平和そ  
のものだ」

流石にそんな規模で世界が変わるとは到底思えへんしな

「これは無限書庫への調査依頼が増えたな」

「クロノ君、そんなんやから司書達の間で嫌な提督No.1になるんやで。たまに資料を渡されたとき一緒にユーノ君から愚痴られる私の身にもなつてーな」

「知ったことか。それがあいつの仕事だ。それに僕は仕事を依頼する度に散々嫌みを言われてる」

「二人とも、話がそれてるよ」

私達の言い争いにロツサが割って入る

「そういえばはやて。この間言っていた新しい戦闘機人の子はどうしてる?」

「まあ、それなりにみんなと仲良くやつとるよ。けど、この間の子と同じであんまり詳しいことは知らなかった。収穫といえばナンバーズ全員のISが分かったこととヴィヴィオの事だけや」

「確か『聖王オリヴィエ・ゼーブリヒト』のDNAを使った人造魔導師だったっけ?」

「せや。しかも、作った理由が『聖王のゆりかご』ゆうロストロギアの使用の為。カリム、聖王のゆりかごって聞いたことある?」

いつの間にか椅子に座り直していたカリムの方へと向く

「ええ。大昔、ベルカ戦乱の時代。聖王戦争で使われた最凶のロス

トロギア。その力は一瞬にして何万もの人間を死に至らしめたと言われています」

「そんなものが使われたらこの世界は大惨事に見舞われるな」

「一応、日中はザフィーラについてももらっとるし、なにかあったらすぐにでも駆けつけられるようになってる。警備は万全……とまではいかんけど、しつかりとはしとるよ」

「そうか。確かこの事はまだ上には報告してないんだったよな？」

「せや。こんな事を上がったら確実にヴィヴィオを隔離施設に飛ばしてしまふ。それだけは絶対に避けなあかん」

「そうだね。その意見には僕も賛成だよ」

それから少ししてクロノ君がクラウドディアに戻らないといけなくなつたので、カリムの書き換えられた預言の意味は分ならず終いでこの集まりはお開きとなつた。

書き換えられた予言（後書き）

優希「あとがきコーナー。まずはじめに、タイトル変えました」

キョン「これで二回目だぞ」

優希「いやあ、前のタイトルってみる度に変だなあって思ってた友達に指摘されたから無難なのに変えた」

キョン「無難過ぎる気がするけどな。どっかで見たことあるぞ」

優希「ふっふっふっ。こんな事もあるうかとこんなものを用意したぜ」

ラジカセのスイッチオン

ハルヒ『この小説はフィクションであり実在する人物、団体、事件、その他の固有名詞や現象などとはなんの関係もありません。嘘っぱちです。どっか似ていたとしてもそれは他人の空似です』

優希「これでよくない？」

キョン「今のハルヒに力は無いからなんの意味も無いと思うが」

優希「良いの良いの。気分の問題だから。あと、もう一つ。二作品目を作りました。まだ呼んでない人は絶対に読んでください。次は謝辞のコーナー」

キョン「なっぺ様、感想ありがとうございました」

優希「とゆうわけで朱神優希とキョンでした。感想お待ちしており  
ます」

割と暇なキヨンの休日の使い方(前書き)

やっと書けた

## 割と暇なキヨンの休日の使い方

### キヨン視点

「あ、そうだ。キヨン君は今日はこれから休みね」

ある日の朝練終了後。食堂で唐突になのはさんにそう告げられた。

「休みですか？」

「うん。こないだの休日は途中でつぶれちゃったからね。一遍に大勢休むわけにはいかなから何人がずつに分けて」

「それで今日は俺が休みってことですか」

「そういうこと」

「えー、良いなあ、キヨン」

「ちゃんとスバルにも休みはあるから」

スバルの言葉になのはさんが苦笑で返す

「他に誰か休みなんですか？」

「あたしも休みだ」

「私も」

そう言ったのはヴィータさんとフェイトさん。隊長陣が二人も休んで大丈夫なのか？

「んだよ、その顔は。あたしが休んじやいけねーのかよ」

ジトツとした目でヴィータさんに睨まれたので慌てて弁解する

「あ、いえ。そうゆうわけじゃないんですけど。隊長陣が二人も休んで大丈夫なのかなーって」

「それなら大丈夫。なのはやシグナムが居るし他のフォワードはちゃんと待機してるから」

それなら大丈夫なのか？まあ、俺が心配するようなことでもないか。じゃあ、次に考えなければいけないことはどう有意義に休日を通すかだな

「ヴィヴィオ、なにかしたいこととかあるか？」

膝の上にいるヴィヴィオに聞いてみると少しの間考えた後

「んーと、おでかけしたい」

と満面の笑顔で言ってきた。

お出掛けねえ。あんまりこの辺の地理に詳しくないからな。下手に動いて迷子になってもいけないし……

「他にやりたいこととか

」



「パパとおでかけしたい！」

しかし、ヴィヴィオは頑としてお出掛けを主張してくる。

はあ、仕方ない。シャーリーさんになんかプランでも立てて貰おう。エリオ達のデートプランを作れるくらいだ。地図付きのお出掛けプランを作るのなんてお手の物だ。そんな事を考えているとルーテシアに声をかけられた

「……私もキヨンと一緒に お出掛けしたい」

「あら、ルーテシアお嬢様抜け駆けは駄目ですよ。キヨン、私と一緒に出かけない？」

何故か二人が睨み合いを始めた

「あれ、でも、ルーテシアはメガー又さんのお見舞いにいつてるけど、基本的に二人とも六課の隊舎からちゃダメなんじゃ無かつたっけ？」

スバルの指摘に二人とも「そういえば」みたいな顔してる。

確かにルーテシアは週一でメガー又さんの所に行ってるけどセインも含めてこいつらは基本的に隊舎から出ることを許されていない。表向きの理由は危険にさらさない為の保護だが、実際は軟禁のようなものだトウエ自身が言っていた。

つまり、監視の眼が無いところで敵と繋がらないように常に監視できてる人が居る隊舎で監視しているということだ。

ルーテシアが例外なのはあの病院が聖王教会系列の病院で怪しいのが居たらすぐにわかるからだそうだ。……ドゥーエとかクアット口とか普通に潜り込んでたけど突っ込んだじゃ駄目なんだろうな

「……でも、キヨンが見張りって事にすれば」

「キヨン君はただの民間協力者だからそうゆうのは難しいかな」

なのはさんの返事にルーテシアは肩を落とすが、ドゥーエは何か思いついたようにニヤリと笑うと何事かフェイトさんとヴィータさんに囁いた。すると

「な、なら、私と一緒に行くよ」

「あ、あたしも。それなら文句ねーよな。なのは」

と、急に今回のお出掛けに同行すると言い出した

「い、いや。私に言われても。決定権は部隊長のはやてちゃんにあるわけだし」

なのはさんが二人の勢いに若干引き気味だ。

「なら、すぐにはやてに許可貰って来る」

そう言っつてヴィータさんはそれはもう、ソニックムーブを使っただけじゃないかとゆうぐらいのスピードで走っていった。ドゥーエは一体なにを吹き込んだんだ？

「計画通り」

お前はどこの死のノート所持者だよ

結論から言うとフェイトさんとヴィータさんが付き添いでドウエとルーテシアのお出掛けは案外あっさり許可された。はやてさん曰わく、『隊長陣が二人も居れば万が一なんて事も無いやろっし、たまには大勢の人と触れあうのも大事や』とゆうことらしい。

「とゆうわけで、遊園地へ来たわよ」

「誰に喋ってるんだ、ドウエ」

呆れながらドウエに突っ込む。

ドウエの言うとおり俺達はドウエの勧めで、最近地球にある遊園地をイメージして作られたらしいここへ来ていた。入場券を買いに受付に向かう

「家族でお出かけですか？」

この受付は笑顔でなんて事聞いてくるんだ。どうみたって違うだろうが

「そう見えますか？」

なんで少し嬉しそうなんですか、フェイトさん

「ええ、私と彼が夫婦です。この人は姉」

さらっと嘘をつくなドゥーエ。何故かフェイトさんがすんごい睨んでるから

「嘘つかないで、ドゥーエ」

よかった。ルーテシアはまとも……………

「私とキヨンが夫婦なの」

じゃなかった。てか、その嘘は無理があるぞルーテシア。受付もそんな犯罪者を見る目で俺を見るな。

「パパー、早く入ろうよ」

うん。正論なんだが、今の状況でのパパは話がややこしくなるから出来れば止めて欲しかったな

「キヨ、キヨンと夫婦なのは……………あ…あた……………／／」

恥ずかしいなら無理してつきあわなくても良いですよ、ヴィータさん。

と、よくわからん一悶着の末無事に入園券が買えたかとゆくと、そ

うではなく、もう一つ一悶着があった

「だーかーらー、あたしは大人料金だっって言ってるだろうが」

「小学生は子供料金です」

ヴィータさんの入園料についてだ。

ヴィータさんとしては自分は大人だというプライドとして大人料金で入りたい。受付としては商売として見た目子供なのだから子供料金しか受け取る気はない。別に儲かるんだから少しくらい融通をきかせれば良いのになんて思っていると思外にもヴィータさんが先に折れた

「ちっ、しゃーねーな。ここで言い争っても埒があかねーし他人に迷惑掛かるし時間が無くなるから、もう子供料金でいいよ」

……ヴィータさんが譲歩したみたいになってるけど、そうでもない。まあ、めんどくさくなるから言わないけど。

とゆうわけで、今度こそ全員で入場した。

中は結構広く、とても1日で回りきれぬ量ではなかった

「うわー、すごい」

「……ホントに凄い」

ヴィヴィオが目を輝かせながらぐるぐると回りを見ている。ルーテシアもこうゆう所は初めてらしいが気に入ったようだ。

「さて、それじゃ色々見て回りましょうか」

ドゥーエの言葉で全員一塊になって移動する。ここから先はその一部だ

・コーヒーカップ

大きさに3人が限界なので俺とヴィヴィオとルーテシアで1つ。ドゥーエ、フェイトさんは外で見学。ヴィータさんは何故かヤケになって1人で残像が出るほどカップを回していた

「グルグル回って楽しかったー」

「き、気持ち悪い」

「そりゃ、残像が残るくらい回せばそうなりますよ。俺の残りですが飲み物いりますか？」

「お、おう。あんがと（これって、間接キス／＼）」

・ジェットコースター（ヴィータさん、ヴィヴィオ、ルーテシアは身長制限に引っかかった）

「うう、怖かった」

フェイトさんがふらふらになっている

「いつも魔法で飛んでるじゃないですか」

「私もそう思ったんだけど自分で制御出来ないのは怖いんだよ」

「そうゆうもんですか……。まあ、自分で飛ぶときは安全飛行ですもんね」

とりあえず背中をさすってあげる

「あ、ありがとう／＼／」

「納得いかねえ」

ヴィータさんは身長制限に引っかかった事に文句を言っていた

・お化け屋敷

「パパ、て、つないで」

「……キヨン、私も」

ヴィヴィオとルーテシアが俺の手をギュッと握りしめる。まあ、これは良い。二人ともまだ子供だし普通の反応だ。仕掛けが作動してびっくりしたときに手が思い切り握られて痛い、まあ、許容範囲だろう。しかし……

「へ、へん。こんなの子供騙しだ」

「そ、そうだよ。ロストログアに比べればこれくらい」

そう言ってるフェイトさんとヴィータさんは俺の腕にガッチリとしがみついていた。こっちは力を入れられたら痛いなんてレベルじゃ無い

「そう言っただったら腕を放してくれませんか？歩きづらんです  
が」

『やだ！』

「怖いなら怖いって言いましょうよ」

ぶしゅー 空気と一緒に仕掛けが作動する音

『きゃーー』

「いたたたたた！腕！腕が折れる！」

そんな事をしているうちに出口の近くまで来た

「……………そういえば、ドゥーエは？」

「そついえば途中から姿が見えないな」

「私、綺麗？」

突然顔がグチャグチャになったドゥーエ出てきた



『キヤー』

女性陣は一目散に出口へと駆けだしていった

「こんな所でライターズマスクを使うな！」

軽く頭を殴る

「あら、バレちゃったの？面白くないわね」

(この後ドワーエはフェイトさん、ヴィータさん、ルーテシアに  
HANASHIされた)

・観覧車

『最初はグー、じゃんけんほい!!』

何故か観覧車の前でじゃんけん大会(俺とヴィヴィオ抜き)が開か  
れている

『あいこでしょー!』

しかも、あいこ、これで二十回目だ

「ぐっばで別れば良いだろうに」

丁度六人なんだから三人ずつで分けられるし

『それじゃ意味が無いんだよ!』

「は、はあ。そうですか」

女性陣（ヴィヴィオを除く）の異常なテンションについていけず、軽く引く。

結局勝負が付かなかったので全員と2人つきりで乗ることになった。

……いや、なんでだ

そんなこんなで時間は経って帰る時間になった。ヴィヴィオは遊び疲れて寝てしまった。今はフェイトさんの車で隊舎まで戻っている

「意外と楽しかったな（今度はキヨンと2人つきりで行ってーな）」

「そうだね。また、行きたいな（今度はキヨンと2人つきりで行きたいな）」

「ええ、そうね（今度はキヨンと2人つきりで行きたいわね）」

「……うん（今度はキヨンと2人つきりで行きたいな……）」

「そうですね（今度はハルヒやフォワードの皆と一緒に行きたいな）」

……意見は皆一緒なのに疎外感を感じるのは何でだろう。まあ、皆が満足したのなら良いか。実際俺も楽しかったし

こうして、ちょっと特殊な休日幕を閉じた

後日談とゆうか今回のオチ。

次の日の朝練後

「そういえば、キョンが昨日行った遊園地ってさ、ちょっとした迷信があるんだ」

隊舎への帰路の途中にスバルがそう切り出してきた

「へえ、どんな？」

「観覧車に男女が2人つきりで乗ると結ばれるっていう」

「ふうん。地球でもよく聞く類の迷信だな」

「つて、まてよ……確か、俺、全員と2人で乗させられたよな……  
……て事はまさか……いや、無い無い。吼太じゃあるまいし。じゃあ、なんでだ？……ま、俺が幾ら考えたってわかる訳ないか。とゆうわけで考えるのを止めた」

## 割と暇なキヨンの休日の使い方（後書き）

優希「あとがきコーナー」

キヨン「今回はなんか疲れた」

優希「次回はどうしようか」

キヨン「どつって？」

優希「サウンドトラックにするか、ギンガを六課に来させるか」

キヨン「一応サウンドトラックの方は作成中なんだろう？」

優希「ただ、めっちゃ長くなるんだよな」

キヨン「それはお前がどうにかする事だろうが。俺は知らん」

優希「まあ、頑張るよ。次は謝辞のコーナー」

キヨン「なっぺ様、水橋様、感想ありがとうございます」

優希「とゆうわけで、朱神優希とキヨンでした。感想お待ちしております  
ります」

【番外編】クリスマスの準備 聖王の願い（前書き）

テンションで書き上げた作品。いつも以上に駄文です

## 【番外編】クリスマスの準備 聖王の願い

キヨン視点

さて、冬も深まり吐く息も白くなってきた12月半ば。そういえば長門による世界の改変から丁度一年たつんだなあなどと感慨深くなりながらフォワード陣+ と休憩室で談笑していたところにザフィーラとの散歩から帰ってきたヴィヴィオが走ってきて腹にダイブしてきた。地味に痛い

「ねえ、パパ」

「ん？どうした、ヴィヴィオ」

「ヴィヴィオ、いい子にしているからサンタさん来るよね」

ヴィヴィオが無邪気に最も恐れていた質問をしてきた。多分ヴィヴィオは知らないだろうと高をくくっていたのだが

クリスマス。それは地球で後一週間もすれば訪れるオモチャ屋と特撮アニメのスタッフの策略が渦巻き、世のバカップルが愛を確かめ合う行事。

そして……子を持つ親が避けて通れない財布の中の大掃除イベントのひとつ（後は元日と誕生日）。特に子供は誕生日と違ってサンタという架空の人物が持ってくるものだと思っているため遠慮なく高いものを要求してくる。

何が言いたいのかと言うとヴィヴィオはサンタを信じている。そし

て今のヴィヴィオの保護責任者は名目上はなのはさんだが、実質的には俺だ。つまりヴィヴィオのクリスマスプレゼントを買ってやらなくてはいけないのである。

「誰から聞いたんだ？」

「はやてさん」

あの人か。まったく、行事好きはいいんだが、下手に夢を与える知識を教えんで欲しいな。夢を壊さんように努力しなくちゃならないから。その時、横で話を聞いていたドゥーエが割り込んできた

「ヴィヴィオちゃん。サンタはね、おー　むぐう」

いらんことを口走りそうになったドゥーエをバインドで簀巻きにして休憩室からつまみ出す。

「そうだな。ヴィヴィオはいい子だったから多分来てくれるさ。サンタさんになにお願いするんだ？俺がサンタさんに頼んどくよ」

「えー、はやてさんがサンタさんは子供の心を読むロストログアを持ってるんだって言ってたよ」

なんて厄介な嘘を教え込んでくれたんだ、あの方は。その時、隣に座っていたルーテシアが袖を引っ張ってきた

「……キヨン。サンタさんって？」

「あれ、ルーテシアは知らないのか？ドゥーエが知ってるからっきり知ってると思ってたんだが」

「赤い服着てるお爺さんで、一年間いい子にしてた子供の所に来て欲しいプレゼントを置いていってくれるんだよ」

スバルの説明にルーテシアは少し考えた後納得したような顔になった

「……毎年誰かが赤い服着て部屋に侵入してると思ってたんだけど、サンタさんだったんだ」

多分それはスカリエツティじゃないか？

「あー、あのおっちゃんか。誰か来た気配で起きたら凄いスピードで逃げ出して行った」

感づかれてるじゃねーか。スカリエツティ。フーか待てよ

「（なあ、スバル、ティアナ、エリオ、キャラ。これって二人ともまだサンタを信じてるよな）」

フォワードメンバーに念話を送る

「（あー、うん。そうっぽいね。ドゥーエは知ってたみたいだけど）」

「（え、サンタさんを信じてるって、実在する人物でしょ？）」

「（毎年クリスマスプレゼント、枕元に置いていって来てますよ）」

エリオとキャラの衝撃的な言葉に俺とスバルとティアナが固まる。



いや、世間一般から隔絶されていたセインやルーテシアはまだわかるにしても、エリオとキャラは普通にそろそろサンタの正体を知ってても良いと思うんだが

「(フェイトさん、過保護だから)」

なんでだろう。スバルのその一言で納得した自分がいる。当の二人は首を傾げてるが

「(どうする？確実にセインとルーテシアにもプレゼントいるよな？)」

「(だよねえ。いきなりプレゼントが来なくなったら怪しむだろうし)」

エリオとキャラを抜きにしてティアナとスバルとだけ話す。

「(とりあえず皆のプレゼントの希望を聞かないことにはどうしようも無いわね)」

「(つつてもヴィヴィオははやてさんの嘘を信じ込んでるみたいだしな)」

「(それは流石に嘘って事にすれば良いでしょうか)」

「(それもそうか)ヴィヴィオ、流石にサンタがロストログアを持つてるってのははやてさんの冗談だ。それだとサンタは捕まらないといけないからな」

「えー、そうなの？」

「（キヨンが持つてるメモリってロストロギアじゃなかったっけ？）」

「（今は細かいこと気にしないの）」

「だから俺になにが欲しいのか言ってくれるか？サンタに伝えとくから」

「えーとね。ウサギさんのぬいぐるみ」

「そうか。じゃあ、そう伝えとくな。ルーテシアとセインもついでに伝えとくから教えてくれるか？」

「新しい服！」

「……髪飾りかな」

ここら辺は二人とも女の子って所かね。その後、通販サイトにて三人の好みの物を選んで貰い、三人の居ない所でなければなしの給料を使って購入した。後はクリスマス当日を待つだけだそして、クリスマス当日。その日は訓練や仕事は早めに切り上げられ、短い時間で盛大なクリスマスパーティーが開かれた。その時、エリオやキャロがジューズと間違えて酎ハイを飲んでしまっただけでベロンベロンに酔ったり、ドゥーエやセインが隠し芸としてISを使ったりヴァイスさんがこれまた酔っ払ったシグナムさんになにやら小言を言われていたり一騒動あったが長くなるので割愛させてもらう。

そして

夜も耽り深夜。ディープダイバーを使い音もなくルーテシアとセイ  
ンの部屋にプレゼントを置いて（不法侵入とか言うな。そんな事言  
ってたらサンタだって不法侵入の危ない爺さんだ）部屋に戻ってヴ  
イヴィオの枕元にプレゼントを置いてやるうとする。その時、何を  
失敗したのかヴィヴィオが起きた。俺は何故か咄嗟にライアースマ  
スクを使って髭もじやの爺さんに変装した

「……………んう、サンタ……………さん？」

「う、うむ、そうじゃ。メリークリスマス、ヴィヴィオちゃん。こ  
れが言われていたプレゼントじゃ」

そう言っつて枕元に置こうとしていたプレゼントを差し出す。

何をやってるんだ、俺は。まあ、子供の夢を壊す訳にもいかないし  
仕方ないか。などと自分を自分の中で正当化する

「ウサギさんのぬいぐるみ？」

「ああ、そうだよ」

それを聞いたヴィヴィオの顔は何故か嬉しいとゆうよりどちらかと  
言っつと悲しいになっていた

「どうしたんじゃ？ウサギのぬいぐるみが欲しかったんじゃろ？」

「うん。でも、本当は一番欲しいのはこれじゃなかったの」

「じゃあ、何が欲しかったのかね？」

ヴィヴィオは少し俯いた後俺の顔を真つ直ぐ見て

「パパやるつかのみんなとずーっといつしよにいられますようにって。ヴィヴィオはほんとのママやパパをしらないけどヴィヴィオにやさしくしてくれるパパやみんながだいすきだから」

そう言った。

それは、サンタの仕事じゃ無いし、ヴィヴィオには出来ればこの事件が終わった後は里親を見つけてそっちで幸せに暮らして欲しいんだが

「そうか。ならそうなるようにしよう。大丈夫、サンタさんを信じなさい」

そう、言って頭を撫でてしまった。多分朝になったら夢だと思ってくれる筈だがそれでもなにかに怯えるようなヴィヴィオの目を見るとそうせずにはいられなかった

その後すぐにヴィヴィオが寝てくれたのでバリアジャケットを解いて俺も眠った後日談とゆうか今回のオチ。

翌日、ではなく本日、12月25日の早朝7時。珍しく俺より早く起きたヴィヴィオの歓声で目が覚める。夜遅くまで起きていたのと昨晚の宴会の時にドゥーエに無理やり飲まされた酒のせいでハッキリしない頭でヴィヴィオの方を見ると俺が買った大きめのウサギの人形（ヴィータさんのバリアジャケットについているのろいうさぎとか言う代物では無い）を嬉しそうに抱いていた

「サンタさんが来てくれた」

それはもう凄いハシャギようである

「よかつたなヴィヴィオ」

「うん!」

こんなに喜んでもらえるならばプレゼントした甲斐があるな。昨夜の事はまた時間がある時に考えよう。まだ少しなら時間はあるだろう。とても良い笑顔でハシャクヴィヴィオを眺めながらそう考えた

【オマケ1】

「頭が痛いです」

「私もクラクラします」

朝食の席でエリオとキャロが頭を押さえながら酷い顔で席に座っていた

「そりゃ昨日あんだだけアルコールを摂取したんだから二日酔いよ」

「お酒は二十歳になってからって意味が分かった？」

『はい……』

「ヴィヴィオもお酒は二十歳からだぞ」

「うん!」

この後の訓練は酔っ払い多数の為急遽のオフシフトとなり、その埋め合わせの為次の日スバル達は地獄を見ることとなった。俺はというと、これよりも酷い地獄を体験しているのでスバル達よりは傷は浅かった

【オマケ2】

「そういえば、地球にもクリスマスってあるんだよね？」

「ああ。キリストとか言う昔のえらい人の誕生日だ。まあ、やることはこっちと対して変わらないが」

「ふーん、確かこっちのも誰かの誕生日だったよね？ティア」

「聖王オリヴィエでしょ。つまりヴィヴィオの元」

「えーと、てゆう事はヴィヴィオの誕生日でもあるって事？」

「ちげーよ。ヴィヴィオの誕生日は此処に来た日って決めてるんだ。あいつはヴィヴィオだ。聖王なんかじゃない」

「別にそこまでムキにならなくても。ちょっとそうかなって思っただけなんだから」

「父親には譲れない所があるのよ」

「俺はヴィヴィオの父親になったつもりはねーよ」

「周りから見るとあんた普通に一児の父よ」

休憩室にてスターズ分隊のとある会話

【オマケ3】

「そういえば、エリオとキャロの所にもサンタ来たのか？」

「はい。来ましたよ」

「ちなみに何貰ったんだ？」

「新しい訓練着を貰いました」

「私は手袋を」

これで満足してるんだからフェイトさんは楽だなと思うと同時にそろそろサンタの正体を教えた方が良さだろーと思うた

【番外編】クリスマスの準備 聖王の願い（後書き）

優希「あとがきコーナー」

キヨン「もうクリスマスか。今年も後少しだな。お前はなにかリアルの方で用事は無いのか？」

優希「それは彼女が居ない僕への当てつけか？リア充め」

キヨン「リア充って……どこがだよ」

優希「ふん、お前が気づいてないだけだ。謝辞のコーナー」

キヨン「なんか納得いかん。なつぺ様、水橋様、犀龍様、感想ありがとうございます」

優希「犀龍様、今度は感想板の方へ書き込んでくださいね。とゆうわけで、朱神優希とキヨンでした」



【番外編】機動六課の大晦日（前書き）

ちくしょう。年内に更新出来なかった

## 【番外編】機動六課の大晦日

大晦日。それは一年の最後にして一年で最も忙しくなる日。それは地球から遠く離れたここ、ミッドチルダでも、同じ事だった。今日だけは、急ぎの用事が無い人は皆隊舎の掃除である。俺も、オフシフトを返上して身の回りの掃除をしている

「パパー、まどふきおわったよー」

窓拭きをしていたヴィヴィオが汚れた雑巾を持って近づいてくる。俺は掃除機を止めてそちらを向いて次の指示をする

「じゃあ、洗面所に行ってその雑巾を洗ってから机とか拭いてくれるか？多分アイナさんが居るはずだから上手く出来なかったら手伝ってもらえ」

ヴィヴィオは笑顔で「はい」と言うと、部屋から出て行った。それと入れ違いにティアナとスバルが入って来る

「どう？キヨン。掃除ははかどってる？」

「ああ。ヴィヴィオが手伝ってくれるからすぐに終わりそうだ」

「良いわね、あんたは。こっちは誰かさんがすぐに休憩するから今日中に終わるかどうかわ怪しい所よ」

ティアナが半眼でスバルを睨む。睨まれた本人は居心地が悪そうに「あはは……」と苦笑した

「いやあ、掃除ってやらなきゃいけないことはわかってるんだけどいざやるつもりと思つとめんどくさくなるんだよね」

「スバル、その気持ちは痛いほどよくわかるぞ。俺も出来る事ならサボりたい……が、ヴィヴィオがやけに掃除に積極的でな。その目の前でだったら出来ないだろ？これが妹や赤の他人なら無視出来るんだが、なまじ自分と接点がある分下手な格好は見せられないからな。だから頑張ってるんだよ」

「へえー」

「パパー、ぞうきんあらつてきたよー。あ、ティアナさん、スバルさん、こんにちは」

ちようどその時ヴィヴィオが部屋に帰つて来た。ティアナ達へのちやんと挨拶も忘れていない。

「こんにちは。偉いわね、ヴィヴィオ、パパの手伝いしてるんだ」

「うんー！」

ティアナの質問にヴィヴィオが満面の笑みで答える

「（確かにこれはサボり辛いわね）」

「（だろ?）」

「じゃあ、いつまでも邪魔しても悪いしあたしらもサッサと部屋の片付けに戻るわ」

「ああ、スバルもサボってないで手伝ってやれよ」

「はい」

結局ティアナ達の部屋が片付いたのは、俺達の部屋が片付いた一時間後だった。

時間は過ぎて23時。後一時間で来年だ。今回も、祭り好きのはやてさん監修の元、短いながらも豪華な宴会が開かれたが今回も時間の都合上割愛させて貰う。

流星に、ヴィヴィオは九時には就寝して、今は隊長陣とスターズとライトニングの5人。それと一部のお祭り好きのロングアーチスタッフ数名が仲良く年越しそばを食べながらどうやっているのかは知らないが地球の紅白歌合戦を見ている。途中、めちやくちゃフェイトさんに声が似ている人が居て一騒動があったりしたが概ね何事もなくとうとう今年も後数分となった

「今年ももう終わりね」

「そうだな。全く。今年もろくな事が無かったな。つか、未だに現在進行形で続いているが」

「まあまあ、そのおかげでこうして巡り会えたわけだし」

「そつですよ」

「きゅくるー」

「ま、それも、そつだな。まあ来年もよろしくな」

「はい。とはいっても今年は後五分もないけですど」

それから、更に数分後唐突にはやてさんが立ち上がった。

「よっしゃ。来年へのそれじゃカウントダウン始めるで」

タナトスで時間を確認すると23時59分45秒、確かにそろそろカウントダウンだ

「とゆうわけで、あたしからな。 “ 10 ” 」

ちょうど50秒になるとはやてさんがそつ切り出した

「 “ 9 ” 」

なのはさんとフェイトさんが続ける

「 “ 8 ” 」

他の隊長陣

「 “ 7 ” 」

ロングアーチスタッフ

「 6 ” “ 5 ” “ 4 ” “ 3 ” “ 2 ” 「

スターズとライティングで続ける

「 1 ” 「

最後に俺が言う

『 “ 0 ” あけましておめでとー————— 』

全員で大合唱する。地球なら確実に近所迷惑になるが気にしない。  
こうして、機動六課の大晦日は終了した

【番外編】機動六課の大晦日（後書き）

殆ど新年にかかっているけどギリで大晦日に更新できた………と思っ  
たら、ギリで更新出来なかった。まあとりあえず今年もこんな駄文  
ですがよろしくお願いします

【番外編】機動六課の元旦（前書き）

元日の話。大晦日の話は大晦日に更新出来なかったけどなんとか元日の話は間に合った



## 【番外編】機動六課の元旦

「改めて、あけましておめでと」

1月1日の朝八時。食堂ではまたもや宴会が開かれていた。宴会続きだな

「お正月ゆつたらお節料理やけどこれメツチャ美味しいな」

なのはさん達から聞いた話によると料理の腕は下手な料理屋より上とゆつはやてさんの舌を満足させる料理が机の上に並べられていた

「ホントにこの料理、ギガウマだな。はやてが誉めるだけの事はある」

ヴィータさんも大絶賛だった

「つーか、これキョンが持って来たんでしょ？あんだ、こんな料理作れたの？」

ティアナが食べながらそう聞いてくる

「まさか。俺がはやてさんが唸るほどの料理を作れるわけがないだろうが。これは知り合いの3人が作った料理だよ。つーか、普通に教師やってるより料理店出した方が儲かるだろ、これ」

今度ライトに進めてみるかな。

それから少しして、プロ顔負けの料理がそんなに長いこと余るはず

もなくすぐに料理はなくなった。

流石にスバルとエリオが本気で食べると料理がすぐに2人の胃袋に消えてしまいかねないので二人には自重して貰った。

「はい、エリオ、キャロ、お年玉」

「ありがとうございます。フェイトさん」

「大事に使いますね」

みんなの憩いの場と化している食堂でエリオとキャロがお年玉を貰っていた。はあ、仕方ない

「ほれ、ヴィヴィオ、ルーテシア、お年玉だ」

ポケットからお年玉袋を取り出して2人の目の前に差し出す

「わーい、パパ、ありがとう」

「……ありがとう、キヨン」

2人とも嬉しそうに受け取ってくれたな

「ただし、額には期待するなよ。ただでさえ民間協力者だから給料は雀の涙程度しか貰えてないんだからな」

あまり金額に期待されても困るので念を押ししておく

「ねえ、キヨン。あたしの分は？」

セインが物欲しそうな顔をして聞いてくる

「お前は何歳だよ。あるわけないだろうが」

「いや、何歳って、稼動してからまた、十年も経ってないんだけど」

あー、つーことは、長門と同じか理論か。いや、あいつは生まれてからまだ今年で五年だから下手したらセインの方がお姉さんなのか？

「どっちにしても用意してねーよ。ヴィヴィオとルーテシアのお年玉だけで精一杯だ」

「「えー」」

なんかスバルが混ざってる

「セインはわかるがスバル、お前も一緒に言う意味が分からん」

「いやあ、アタシもお年玉欲しいなあって」

やれやれ、なんでお前にやらなくちゃならないんだ

「全く。スバル、あんたもう何歳よ」

後ろで声がして最初はティアナだと思ったが俺の隣に居るので不思議に思い振り返るとそこにいたのは予想外の人物だった

「ぎ、ギン姉！？お父さんも！？」

後ろに居たのはギンガと中年を超えた男性　ナカジマ家父らしいであった

「全く、キヨンに無茶言うんじゃないわよ」

「たく、悪りいな、坊主、家の娘が無茶言つて」

「あ、いえ、大丈夫です」

なんとなく頭があがらない気がして腰が引ける

「そついや、名乗ってなかったな。俺はゲンヤ・ナカジマ三等陸佐だ。スバルがいつも世話になってるみたいだな」

「えー、あたしがキヨンのお世話してるんだよ」

『嘘つけ（つかないの）』

ギンガとゲンヤさんとティアナと俺の声が被る

「皆酷っ!?!?」

スバルが涙目になるが、まあ、何時もの事である。それから少しして

「それじゃ俺はちょっと子狸に挨拶に行ってくるわ。またな、スバル、ティアナ、坊主」

坊主じゃなくてせめてキヨンでもいいから名前で呼んで欲しい

「あ、俺もちよっとトイレ行ってくる」

「まったく、お手洗いとかもうちよっとオブラートに包めないの?」

「オブラートに包んだところで場所は変わらんだろうが」

ティアナとそう言いあいながら席を立ててトイレに向かう

用を済ませてトイレから出ると誰かとぶつかってしまった

「あ、すみません」

「いえ、此方こそ、ちゃんと前を見てなかったの」

ぶつかった人は後ろで纏めたブロンドの髪と眼鏡をかけた翠色の目が特徴的な、かなり童顔の男性だった

「なにをやってるんだユーノ」

ぶつかった男性 ユーノさんらしい の連れとおぼしき黒髪で長身の男性と緑色の髪を肩よりやや長めに揃えている男性が近寄ってきた

「ちょっとぼーっとしてたらこの人とぶつかっちゃって」

「全く、どうせ昨日まで徹夜してて寝不足なんだろ」

「誰のせいで徹夜続きになると思ってるんだ」

なんか、いきなり一触即発の雰囲気になり俺がどうしようかと（とゆうか、無視してさっさと逃げようかと）悩んでいると緑髪の人が仲介に入った

「ほらほら、クロノもユーノ先生もこんな所で喧嘩しない。見られてるよ」

二人は一瞬顔を見合わせて俺の方を見ると居心地が悪そうに顔を背けた。男性がクスクスと笑いながら話しかけてくる

「悪いね、君。いきなり目の前で喧嘩し出すからビックリしたかもしれないけどあれは彼らなりのおふざけだから許してあげてくれ」

「は、はあ」

「ああ、自己紹介が遅れたね。僕はヴェロツサ・アコース査察官だ。で、こっちの2人が」

「待て、ロツサ。自己紹介ぐらい自分です。クロノ・ハラオウン提督だ」

「ハラオウンって、フェイトさんと同じ」

「ああ、フェイトは僕の義理の妹だ」

「へえ」

「それで僕がユーノ・スクライア。一応、無限書庫で司書長をやっています」

「あ、えと、 “ ” です。キヨンって呼んでください」

「ああ、君がなのはが言ってた地球出身の民間協力者か」

「なかなか筋が良いらしいな。なのはが生き生きと話していたぞ」

「はあ、恐縮です」

それにしても、この三人の声どつかで聞いたことがある気がする。特にクロノさんとヴェロツサさん。毎日聞いてた気がするんだが

「それにしてもクロノとキヨンの声はとっても似てるね」

「「は？」」

クロノさんと綺麗にハモってしまった。それはもうひとりしか喋っていないみたいに

「確かに。中の人と一緒になんじゃないかい？」

「「中の人ってなんだ!？」」

やはりそれから何分かして

「そういえば僕達ははやてに会いに行く途中じゃなかったのか？」

「そういえばそうだったね。時間もないし、そろそろ行くところか？」

「そうですね。じゃあ、キヨン君。またいつか」

「ええ、失礼します」

3人が隊長室がある方へと向かうのを見送ってから食堂へと戻る

「遅かったわね、キヨン。お腹でも壊したの？」

「いや、フェイトさんのお義兄さんって人と査察官って人とどっかの書庫の司書長って人と話してただけだ」

その言葉にフォワード陣とギンガがシンとなる

「それって、クロノ・ハラオウン提督とヴェロッサ・アコース査察官とユーノ・スクライア司書長？」

「ああ」

「話ってどんな？」

「普通の雑談だが。それがどうかしたのか？」

俺の返事にティアナが机をバンと叩いて顔を近づけてきた

「あんだね。普通そんな人達はあたし達みたいな階級の奴が気軽に話して良い相手じゃ無いのよ。特にあんたは民間協力者なんだから」

そんな事言われてもどうしようもないんだが

「パパー、フェイトさんとなのはさんからお年玉もらえたー」

ゾクッ

一瞬ユーノさんが言っているのかと思えば背筋が震えたが振り向いた先に居たのはヴィヴィオだった



「あ、ああ、そうか。よかったな」

ヴィヴィオの頭を撫でてやりながらユーノさんの声が聞き覚えがあるのはヴィヴィオに似てるからかと思った。

その日の晩、古泉から連絡があった

『新年あけましておめでとございます。あなたも涼宮さんもお変わりありませんか』

「ああ。平和な正月を迎えてるよ」

そんな事を話ながら、ああ、ヴェロツサさんの声は古泉に似てたのかと思った

【番外編】機動六課の元旦（後書き）

優希「あとがきコーナー。キヨンはクロノのステータスデータを手に入れた。ユーノのステータスデータを手に入れた。ヴェロツサのステータスデータを手に入れた」

キヨン「なんでだよ」

優希「あの後色々あったから」

キヨン「ならそれを書けよ」

優希「そこまでの文の構成力がないから、無理。どちらにしても、フォワードとなのは以外はデータを貰う過程を書いてないのに手に入れてるし大丈夫だよ。多分」

キヨン「苦情が来ても俺は知らんぞ」

優希「その時はその時。続いては謝辞のコーナー……の前に、前回の後書きで謝辞のコーナーを忘れてました、すみません」

キヨン「お前かなり切羽つまってたからな」

優希「しかも結局大晦日までに更新出来なかったんだからカッコ悪いよね。まあ、なにはともあれ謝辞のコーナー」

キヨン「なっぺ様、水橋様、感想ありがとうございました」

優希「次は水橋様の所とのコラボになると思います。とゆうわけで、

朱神優希とキヨンでした」

【番外編】ヴェザードとの特訓（前書き）

今回は水橋様とのコラボです。水橋様、こんなんで良かったでしょか？

## 【番外編】ヴェザードとの特訓

ライト視点

「げっ、なんであんたがここに来るのよ」

はやての家に行くとは何故か家の中には桂花しか居なかった

「はやてと火斐に用があるからだよ。はやては居ないのか？」

「今、黒物物体と一緒に買い物に行ってるわよ。チビは犬と散歩」

チビと犬は分かるとして、なんだ？黒物物体って。シャマルの料理を指してるのか？

「じゃあ火斐は？」

「あいつは戦闘バカと一緒に道場。他の奴らも一緒よ」

あちゃー、こりゃ本格的にタイミングが悪かったな

「で、はやてと戦闘バカ二号に何の用なわけ？」

「二号って……」

「いや、良い。また出直して来る」

そう言っただけから出て行こうとした瞬間、俺と桂花の足下に魔法陣が出現した

「なっ、これって転移魔法!？」

「ちよっ、あんた、なんとかしなさいよ」

「無理だよ!」

「ホントに使えないわね!」

などと言い合っているうちに魔法が発動して俺たちはどこかに飛ばされた

キヨン視点

「はい、皆集合」

朝練が終了したのはさんの前に並ぶ。

「今日の練習は皆動きが良くなってとても良かったです。明日以降も今日の動きを意識して頑張つて　「きやああああ　へっ!?!」

急に誰かの叫び声が聞こえてきた。

なんか聞いたことがあるな、と考えながら嫌な予感がして上を見上げると同時に誰かが俺に落下してきた

「ぐぶっ」

背中が!背中が!やっと、この間ライトの世界で一真さんが背中に落ちてきた時の痛みが治った所なのに

「げっ、何であんたがあたしの下に居るのよ。マジで最悪」

「大丈夫か？キヨン」

俺の上でライトの所の毒舌女　桂花だっけか？　の声が聞こえてきた。

「っーか、ライト。綺麗に着地する暇があるならこいつも上手いこと地面に下ろせよ」

「先ずは人の上に落ちてきた事に対して謝ったりライトみたいに心配したらどうだ？っーか、さっさと俺の上から退ける」

未だに俺の上に乗っかっている、ハルヒの上に行く憎らしい顔を肩越しに睨みつける

「ふん、なんであんたなんかに謝ったり心配したりしなきゃならないのよ。軟体動物なんだから、怪我なんかしないでしょ」

「ちゃんと骨のある人間だろうが。どこをどう見たら軟体動物に見えるんだよ！」

「あんたをそのまま見たら軟体動物に見えるのよ」

自分でもわかるくらいなんとも低レベルな言い争いである。それから、我に返ったのはさんが止めに入るまでこの不毛な言い争いは続いた。

（『何時も自分達はあんな低レベルな言い争いを人前でしていたの

かと思うと自分が情けない』と偶々その光景を見ていた某団長は後に語る)

### 閑話休題

「で、突然転移魔法が出現してこっちに飛ばされたと」

あの後なのはさん達にライトを紹介して、今は隊舎に居る。毒舌女はスバルにネコミミフードを弄られて遊ばれていた。今回の教訓。天然に毒舌は通じない(朝比奈さんみたいなタイプは別)

「ああ、なにか心当たりとかないか？」

「さあな。俺はチート組みたいに平行世界を渡る力はないからなるとも言えんな」

「そうか……ま、なにはともあれ今の所帰り方とかわからないし、キョン、模擬戦しようぜ」

「……まあ、良いけど」

なのはさんに話を通すと案外すんなりと話が通った。なんでも平行世界の人間の戦闘はどんなものか知りたいらしい。

「じゃあ高町が審判になって有効打が入ったら終了」

流石に他の世界なのはさん呼び捨てには出来ないという事でライトなのはさんの事を高町と呼ぶことにしたらしい

「じゃあ、両者とも準備は良いね？」



「はい」

「ああ」

俺はいつもの大剣じゃなくストライダーを造り出して構え、ライトも槍型のデバイスを構える

「それじゃあ、レディーゴー！」

三人称

なのはの合図と共に二人が動き出す

「ハアアア」

「ふんっ」

お互いの得物がぶつかって火花が散る

「スピーアアングリフ」

「地橋流奥義 壱の型 【くまんばち躯万蜂】」

両者とも魔力を込めた刃がぶつかりまた火花が散る

「ソニッククレイヴ」

キヨンのスピードが音速を越え、魔力で強化したストライダーで連続で斬りかかる

が

「おいおい、今のを全部防ぐって、ありがよ」

キヨンが放った全ての斬撃が防がれていた

「伊達にチートに鍛えられてねーよ」

「それを言うなら俺もだよ」

ライトはディックをランサーからデスサイズに変えて斬りかかる。キヨンもとっさにストラダーダをバルディッシュに作り替えて防ぐ

「お前、なんでバルディッシュを使ってるんだよ。それはフェイトのだろうが」

「知らなかったか？俺が使ってるロストロギアのカだよ」

少しの間鏢迫り合った後二人とも後ろに飛んで距離を取る

「ハーケンセイバー」

「レイジング・ガン  
雷電砲」

キヨンが雷の刃を飛ばすがライトの放った雷の砲撃に飲み込まれ、キヨンは急いで回避する

「っと、斬撃と砲撃じゃ割に合わんだろ。ストライクレイド！」

キヨンが急に雷を全体に纏ったバルディッシュをライトに投げる。  
ライトは一瞬呆気を取られるがすぐにバルディッシュを弾き飛ばすとバルディッシュが跡形もなく消える

「は？」

ライトはまた呆気を取られて一瞬動きが止まった。それを見逃すほどキヨンも素人ではなくなっている

「タナトス、チャージ、スターライト」

『all right チャージ、スターライトブレイカー』

キヨンが新しく創り出した、リボルバーナックルのギアが激しい音を出しながら回転しだす

「ぶつ潰す！バスタアアナックル！」

「くつ、地橋流奥義 四の型 【異楓撞撞】」

キヨンの攻撃とライトの防御がぶつかって爆発が起こった

キヨン視点

衝撃でリボルバーナックルが壊れ、爆発で出た煙が晴れていき

「嘘だろ……」

目の前には傷一つついていないライトが立っていた俺にデバイスを鼻先に突きつけてきた

「はい、そこまで」

なのはさんがその言葉でライトがデバイスを待機状態に戻し、それに続いて俺もデバイスを待機状態に戻した

「傷がついてないって、かなり自分に自信がなくなって来るんだが」

「いや、結構良かったよ。ま、もう少し突破力があればよかったな」

「言つとくが、体に負担がかかる隠し玉を除いたら今のが一番強いんだぞ」

「なら今の技は、もっと改良する余地があるな」

まあ、まだまだ頑張らないといけないとゆうことは分かった

「おー！」

その時、ライトの足下に魔法陣が現れた

「時間みたいだな」

「結局なんだつたんだろうな？」

「さあ？ま、お前も色々あるみたいだけど頑張れよ」

「ああ。とりあえず、お前の防御を貫ける攻撃が目標だな」

「はは、楽しみにしてるよ。じゃあな」

そうして、ライトは目の前から消えた後日談とゆうか、今回のオチ  
ライトが消えて数分後、俺はそれはもう、綺麗なorzをしていた  
「なんで、お前はまだ此処に居るんだよ」

「知らないわよ、聞くならあたしをこっちに飛ばした奴に言いなさいよ、カス」

「そこでカスをつける必要性は無いだろうが」

そう、何故かライトと一緒に来ていた毒舌女が未だにこの世界に居たのだ

「ちょっと待て。ライトと一緒に来たんだからライトと一緒に帰るんじゃないのか？」

「だから知らないって言うてるでしょうが。あんたは一度言われた言葉がわからないの？何？バカなの？死ねば」

酷い言われようだ。つーか、え？まさか……

「お前、ライトの世界に帰る方法見つけるまで此処に居るのか？」

「は？当たり前でしょ。まさかあんた、こんなか弱い少女を1人寒空の下に放置する気？本格的にバカなの？臍嚙んで死ねば？」

それは中の人が違う。つーか、お前のどこがか弱い少女だよ。と思  
いながら、俺は本格的に落ち込んだ。

それから、長門に送って貰うとゆう考えが浮かんで送り返されるまでの一週間、俺のテンションが低かったのは言うまでもない。  
つか、最初から長門に頼っとけば良かった

【番外編】ヴェザードとの特訓（後書き）

優希「あとがきコーナー。今回はゲストとしてライトに来てもらっています」

ライト「どうも」

キヨン「よう、ライト」

ライト「よう、キヨン。あー、悪かったな、うちの桂花が」

キヨン「あー、いや、別にいいんだけどな。ハルヒと言い争いしてるみたいで少し楽しかったし」

ライト「はっ！楽しかったって、お前やっぱりMだったのか」

キヨン「ちげーよ」

優希「いやあ、それにしてもコラボって大変だね。こうして書いてみると大量コラボとかしてたなっぺ様や水橋様の苦勞が分かるね」

キヨン「お前の文才がないだけだろうが」

優希「それはそうだけどそんなにはっきり言わないで欲しいな」

ライト「まあ、結構楽しかったよ。また来るから」

優希「ありがとうございます。じゃあ、ライトに謝辞のコーナーもやって貰おうかな」

ライト「なっぺ様、水橋様、感想ありがとうございます。なんか、うちの後書きはユニゾンデバイス達がやるから新鮮だな」

優希「ありがとうございます。とゆうわけで、朱神優希とMとライトでした」

キョン「Mじゃねーって言ってんだろぅが!!」

水橋様、こんな感じで良かったでしょうか？駄目でしたら書き直しますので仰ってください



キヨン、久し振りに日本へ戻る1（前書き）

とりあえず、投稿。長くなるので数話に分けて投稿します。一言言  
いたい。何故こうなった

キヨン、久し振りに日本へ戻る1

キヨン視点

「派遣任務ですか？」

「しかも異世界に？」

何時も通り朝練を終えてヴィヴィオを足に乗せながらの朝食時間はやてさんに呼ばれていたのはさんが帰ってきて告げた言葉をスバルとティアナがそのまんま復唱した

「うん。決定事項。緊急出勤がなければ二時間後に出発だそうだから、スバル、ティアナ、キヨン君。ご飯食べ終わったら出勤準備しておいてね」

「……はい」「」

「パパ、どっか行っちゃうの？」

ヴィヴィオが俺を見上げながら泣きそうな声でそう聞いてくる

「いつもと一緒だ。すぐに帰って来るから」

優しく頭を撫でてやる

「あー、今回ヴィヴィオも連れて行くことになってるから」

「へ、そうなんですか？」

なんとなく拍子抜けした気分なのはさんに聞き返す

「うん。今回は今言ったように異世界への派遣任務だからこっちなにかあってもすぐには駆けつけられない。だから今回に限ってはヴィヴィオも一緒だよ」

なのはさんの言葉にヴィヴィオは満面の笑みを浮かべた。

「よかったね、ヴィヴィオ。キヨンと一緒に居られて」

「うん！」

「じゃあ、さっさとご飯を食べて支度しないとな」

「うん！！」

「でも、ピーマンは残すなよ」

「えー」

「えー、じゃありません」

「最近キヨンが普通に父親に見えてきたんだけど」

「あたしもよ」

嫌がるヴィヴィオにピーマンを食べさせようと四苦八苦している横でスバルとティアナが何か言っていたがよく聞こえなかった

場所は変わって屋上ヘリポート。早めに来ていたスバル達と合流して他の人達を待っている。とエリオ達が走って来るのが見えた

「あ、おーい、エリオ、キャロ」

「スバルさん、ティアナさん、キヨンさん、ヴィヴィオ」

「すみません、遅くなりました」

「まだ時間あるわよ。隊長達も来てないしね」

「エリオおにーちゃん、キャロおねーちゃん、こんにちは」

「こんにちは、ヴィヴィオ。ヴィヴィオはキヨンさんのお見送り？」

「ううん。きょうはヴィヴィオもいっしょに行くの」

ヴィヴィオの言葉にエリオもキャロも驚いた顔をしている。そんな二人に、ティアナが説明している

「あ、そうゆう事ですか。確かに、そうですね」

「おー、皆お揃いやね」

不意にかけられた声に全員が振り返る

「あれ、八神部隊長にヴィータ副隊長」

「シグナム副隊長にシャルルさんも」

「私も居るですよ！」

「リイン曹長も」

「後……ハルヒ、なんで、お前が此処に」

「なに？。私が居たらいけないの？」

「い、いや、そうゆうわけじゃ無いけど」

「まさか、この全員で出動ですか？」

「うん。部隊はグリフィス君が指揮をとってザヒィーラヤルーテシアやドゥーエやセインがしっかり留守を守ってくれる」

「詳細不明とはいえロストログアメンバーだし、主要メンバーは全員で出撃って事で」

「後は、行き先もちょっとね」

「行き先ってどこなんですか？」

エリオの質問にはやてさんが答える

「第九十七管理外世界。現地確認名称、地球。その世界の小さな島国の小さな町、日本、海鳴市。ロストロギアはそこに出現したそうや」

「地球って昔フェイトさんが住んでた……」

「うん。私とはやて隊長はその生まれで、キヨン君とハルヒちゃんも場所は違うけど地球出身者」

「ハルヒちゃんを連れて行くんはヴィヴィオと同じ理由や」

つまり、ザフィーラだけだと警護仕切れないから連れてくるって事が

「八神部隊長、そろそろ出発しませんと」

シグナムさんの言葉にはやてさんが時計を確認する

「あー、せやね。じゃあ、機動六課前線メンバー出発や」

『はい』

トランスポーターがある場所まではヘリで向かう。つくまでは簡単な雑談をしながら過ごす

「丁度この間皆の故郷の話をしたばかりで、なんか、不思議な夕イミングですね」

「ん？そんな話したのか？俺は知らないんだが」

「あー、キヨンはまだ居なかったからね」

「それ、いつの話だ？俺が来たの4ヶ月以上前だぞ」

俺達が話している横でキャロとティアナがなにやら調べている

「えっと、第九十七管理外世界、文化レベルB……」

「魔法文化無し、次元移動手段無し……って、魔法文化無いの！？」

なんか、ティアナが驚いていた

「なに驚いてんだ、ティアナ。俺が自己紹介をしたとき自分で魔法が発達してないって言ってただろうが」

「いや、なのはさんや八神部隊長みたいなオーバーSランクやあんたみたいなレアスキル持ちを見てたから失念してたわ」

俺達の話聞いたはやてさんが苦笑しながら話に加わってくる

「あたしらのリンカーコアは突然変異とゆうか偶々々みたいなもんなんやけどな」

それに驚いたティアナが慌ててそちらを向く

「わっ、あっ、すみません」

「ええよ。別に」

「私もはやて隊長も魔法に出会ったのは偶然だしね」

「俺も今回の事が無かったら魔法には出会ってなかったな。まあ、遅かれ早かれ出会ってたとは思うが、自分が当事者になるとは思ってなかった」

『へー』

そんな話をしている間もやはりハルヒは興味なさそうに外を眺めている

「はい、リンちゃんのお洋服」

「あ、シャマル、ありがとうございますー」

ハルヒから目を逸らしてシャマルさん達の方を向くと明らかにリンよりも倍以上もある

「リン、その服って」

「はやてちゃんの、小さい頃のお下がりです」

「あ、いえ、そうではなく」

「なんか、普通の人のサイズだなーって」

「あ、フォワードの皆には見せたこと無かったですね」

「？」

キャロやスバルやヴィヴィオが首を傾げている。ヴィヴィオはフォワードじゃ無いだろうが



「システムスイッチ。アウトフレームフルサイズ」

リインがそう言うところリインの足元に魔法陣（ベルカ式とか言ったっけ？）が現れ体が大きくなった。

とは言ってもエリオやキャロと対して変わらんが。なんとかヴィヴィオより大きいぐらいだ

「と、一応これぐらいのサイズにもなれるですよ」

「デカっ」

「いや、それでもちっちゃいけど」

「普通の女の子のサイズですね」

「リインさん、ヴィヴィオよりせがたかい」

「通り女性陣が反応する」

「向こうの世界にはリインサイズの人間も、フワフワ飛んでる人間も居ねーからな」

「あの、一応ミッドにもいないとは思いますが」

ヴィータさんの言葉にスバルが突っ込む

「ふうむ、大体、エリオやキャロと同じぐらいですね」

ラインがエリオの横に立って身長を比べながらそう言う

「ですね」

「ラインさん、可愛いです」

なんとなく気になってハルヒの方をしてみるがやはり此方には興味なさそうに窓の外を見たままだ。昔なら確実に大騒ぎしてた筈なのにな。……昔のハルヒだとラインを解体しかねんな。くわばらくわばら

「ライン曹長、そのサイズで居た方が便利じゃないんですか？」

「こつちの姿は燃費と魔力効率があんまりよくないんですよ。コンパクトサイズで飛んでる方が楽チンなんです」

「なるほど」

そんなこんなで時間は過ぎて。はやてさんと副隊長達は寄る場所があるとかで先にどこかへ向かった。そして俺達もトランスポーターを使って現地入りをした

「はい、到着です！」

トランスポーターを使って辿り着いたのは湖のあるコテージのような場所だった

「ここが、なのはさん達の故郷？」

「そつだよ。ミッドとあまり変わらないでしょ」

「空は青いし、太陽は1つだし」

まず太陽が1つ以上ある世界があるのか？

「山と水と自然の匂いもそっくりです」

「きゅくるー」

「とゆうか、ここは具体的にはどこでしょう。なんか、湖畔の「コテ」ジって感じですが……」

「現地の住人の方がお持ちの別荘なんです。捜査員待機所としての使用を快く許諾して頂けたですよ」

「現地の方？」

「うん。キャラ達も会った事はあるはずだよ」

キャラ達が会った事がある現地の人間？その時向こうの方から黒塗りの高級そうな車が走って来て目の前で止まった

「自動車？こつちの世界にもあるんだ」

そして扉から出て来たのは

「お久しぶりです。涼宮さん、 “ さん ”

「古泉！」

そう、車から出てきたのは古泉だった。数ヶ月振りだが身長から胡散臭い営業スマイルまで何一つ変わってないな

「ご無沙汰してます。とは言っても最後に会ってからまだ半年も経っていないわけですが」

「それでも去年一年はほぼ毎日顔を会わせてたからな。数ヶ月会ってないだけで結構久し振りに感じるな」

俺と古泉が再開の挨拶をしている後ろでハルヒは興味なさげに突っ立っておりヴィヴィオは初めて会う古泉に戸惑っているのか俺の足にしがみついていた

「涼宮さんもお久しぶりです。そして、この子がヴィヴィオちゃんですね。初めまして。古泉一樹です。あなたのお父様の友人ですよ」

その自己紹介は止める。俺はヴィヴィオの父親になったつもりは無  
いぞ

「パパのおともだち？」

「ええ、親友と言っても差し支えありません」

「友達が良いとしてもお前を親友と思っただ事は無いぞ」

「おやおや、これは手厳しい」

「えっと」

そんな俺達の話についていけないらしいティアナが話に割り込んでくる

「確か古泉一樹さんでしたよね。キヨンの同級生だとか。あなたが此処の所有者ですか？」

「ええ。正確には親戚の所有物なのですが、快く此処の使用を許可してくださいましたよ」

一応機関の事は伏せておくんだな。まあ目の前にハルヒが居るからな

「さて、積もる話もあるだろうけどとりあえずお仕事の話をしても良いかな？」

「あ、はい。すみません」

なのはさんから今回の任務について簡単な説明を受ける。とは言っても探索魔法を張ってサーチャーとセンサーの反応を待ちながら市街地の探索をするという至極簡単なものではあるが

「じゃあ、副隊長達には後で合流して貰うので先行して出発しちゃおう」

『はい』

「悪いな、古泉。久々の再会なんだが、これから仕事だ」

「いえ、お構いなく。涼宮さんとヴィヴィオちゃんと一緒に帰りをお待ちしておりますよ」

俺はお言葉に甘えて古泉にヴィヴィオとハルヒを任せて市街地へ向かった。

まあ、ヴィヴィオも最近は人見知りが少なくなってきたし古泉もあれで小さい子供の扱いは慣れてるし大丈夫だろ。ハルヒの扱いなんか、俺よりあいつの方が慣れてるし。こう考えると俺って結構あいつを信頼してるんだな。

そんな事を考えながらなのはさん達の後を追った

「キヨンはスターズなんだからあたしと来るんだよ」

「スターズはラインと一緒に行くんだから良いでしょ。こっちの方が人が少ないんだからキヨンを借りても良いはずだよ」

何故こうなった。単純にはやてさん達も合流したから俺が誰について行くか話し合ってただけなのにどうゆうわけかヴィータさんとフエイトさんの激しい口論に発展してしまった

「あの〜、ラインがライティングと一緒に行くって選択肢は……」

ラインがおずおずと手を挙げて言った意見は見事に二人から無視された

「ダメやで、ライン。あの二人の邪魔したら馬に蹴られて死んでまうよ」

「ライン、お馬さんに蹴られちゃうですか!？」

「はやてさん、それは人の恋路に首を突っ込んだ人だけですよ」

「ああ、それならお馬さんに蹴られるのも納得です」

「納得された!?!」

なんでだ?あの口論は単純にどちらの部隊に連れて行くかを決めるだけだよな?

「あんたよく鈍いつて言われない?」

「いや、言われたことは……あるな」

古泉に何回か。そんなに鈍いつもりは無いんだが

そう言うとティアナどころかスバルやはやてさんにまで溜め息をつかれた。

???意味が分からん

「時々鋭い所があるのに、こつゆう所やとダメダメやな」

酷い言われようだ

結局、ジャンケンの末、ヴィータさんと一緒に行くことになった。

「フェイトさん、あまり落ち込まないでください」

「そうですね。次がありますから」

エリオとキャラコがそれはもう、灰のように真っ白に崩れ落ちている

フェイトさんを慰めている。流石にそこまで落ち込まなくても良いような。

「じゃあ、皆、探索魔法とサーチャーの設置お願いね。フェイトちゃんも落ち込むのはわかるけどお仕事はキチンとしてね」

『はい』

「……うん」

俺達に少し遅れてフェイトさんがそう覇気のない返事をした

今現在俺達はなのはさんに指定された上空からセンサーの散布を行いなから探索魔法の練習をしている

「あー、違ってます。そこはこう」

「えーっと」

どうも今日のヴィータさんは機嫌がすこぶる良いらしく、探索魔法について文字通り手取り足取り教えてくれている。

「とゆうか、別にくつつく必要性無いですよ？それに、ラインや



シヤマルさんのステータスをロードすれば探索魔法は使えるんですが」

「細けー事は気にするな。それに、お前はレアスキルに頼り過ぎなんだよ。もうちょっと自前の魔法を鍛えろ」

それもそうですが、だからって今やる必要は無いと思います。それに結構密着されてるから色々当たってるし。流石にヴィータさんのような小さい『ゴスツ』……………こ、小柄な体格の女性に欲情するほど俺の趣味は特殊では無い。

…………がそれでもやはりヴィヴィオやキャロのような小ささとヴィータさんとは少し比べるベクトルが違う気がするわけで。

と、外見年齢がさして妹と変わらない女の子にくつつかれて、わけのわからない事を考えてしまつぐらいテンパっている男子高校生の姿がそこにはあった。悲しいことにそれは俺だった

それから俺は軽く理性と戦いながらサーチャーの散布を終え、さっきのコテージに帰ってきた。

## キヨン、久し振りに日本へ戻る1（後書き）

優希「あとがきコーナー」

キヨン「久し振りの地球だな。まあ、ミッドも地球とあまり変わらないけど」

優希「今回の話はドラマCDなんだけど、実際の時系列はホテルアグスタよりも前だからヴィヴィオとか入れるのに苦労した」

キヨン「苦労したって言うても何時も通り駄文にはかわりないけどな」

優希「うう、主人公が酷い」

キヨン「作者がいじけて地面にの字を書き出したから謝辞のコーナーに移る。なっぺ様、水橋様、感想ありがとうございました。作者が言うには次回はなるべく早く更新するそうだ。とゆうわけで、キヨンと朱神優希でした」

キヨン、久し振りに日本へ戻る2（前書き）

前回の続き。後二話ぐらい続きます

キヨン、久し振りに日本へ戻る2

ちようど、コテージの前で皆と合流した

「キヨン、あんた、ちよつとやつれた？」

「そうか？」

「逆にヴィータ副隊長はツヤツヤしてるけど」

「ねえ、ヴィータ、どんな事してたのかな？お話聞かせて？」

「ちよつ、怖えーよ、フェイト」

ヴィータさんがフェイトさんにどこかに連行された

「そういえば、駐車場に車が増えてましたけど誰か来たんでしょうか？」

確かに、古泉が乗ってきたのもう二台、古泉が乗ってたのと同じぐらい高級そうな車が並んでいる

「それにしても、良い匂いがするねー」

「そうか？全然匂わないんだが」

「あたしも」

「きゅくる〜」

スバル意外が首を傾げる中、フリードが「自分も匂う」と言わんばかりに鳴いた。この中でフリードしかわからないということは、スバルの嗅覚は龍並か

「ちよつ、私の鼻はそんなに良くないよ」

「地の文に反応するな。つーか、フリード意外わからないんだからそつゆう事だろつが」

「まあ、スバルは食べ物匂いには敏感だから」

「つまり食い意地が張ってるつて事だな」

「ティアもキヨンも酷い！」

「あ、でも、確かにちよつと良い匂いがしてきましたよ」

確かにコテージに近づくと、少しずつ良い匂いが漂って来だした。コテージに入ると、朝よりも人が多くなっていた。

「あ、キヨン君、お帰りなさい」

「朝比奈さん!？」

中で料理をしていたのは、何を隠そう、SOS団唯一の良心にして、俺の中のマイエンジェルこと朝比奈さんだった。他にも知らない顔の人が居るけど

よく見るとテーブルの隅の方で、長門とヴィヴィオが並んで本を読

んでいる

「おや、お帰りなさいませ。朝比奈さんと長門さんには八神さんから事前に連絡が行っていたようで、あなた方が出て行ってすぐに此方に到着したんですよ」

古泉がどこからともなく現れてそうつける

「そうなのか。お久しぶりです、朝比奈さん。長門も、元気だったか？」

「健康状態の変化とゆう意味ならば問題は無い」

長門の相変わらずの答えに少し安心感を覚える。流石に数ヶ月で変わるわけではないか

「(ねえ、キヨン)」

スバルに念話で呼ばれたのでそちらの方を向くと、なのはさんが朝は居なかった女性2人と話していた。その光景はいつものキビキビした姿からは想像できない年相応の姿だった

「(なのはさんが普通の女の子に見えるんだけど、キヨンはどう思う?)」

どう思うもなにも

「(別に。確かに、何時もの姿からは想像出来ないが、俺からすれば、なのはさんもフェイトさんもはやてさんも年相応の女性だからな。ヴィータさんやシグナムさんやシャマルさんでもそれは変わら

ん。まあ、単純にお前らと違って階級の上下関係とか気にしてないだけだが」

「（確かに、あんた民間協力者だからそうゆうのは気にしないわよね。異世界人だから特に）」

「ちゃあー」

突然、扉が開いて誰かが入ってきた。一瞬声で鶴屋さんが来たのかとも思つて扉の方を見たが、あの特徴的な緑色の髪は見当たらず、扉の前には見慣れない女性2人と子供1人（犬耳と尻尾が出てる）であつた

「お姉ちゃん、S参上！」

少女が胸を張つてそう言ったが、どう見ても、エリオやキャロより小さい。ヴィヴィオとどっこいどっこいって所だ

「お姉ちゃん!?!」

「アルフにエイミーさんも」

なのはさんがメガネをかけた女性の方へ。エリオとキャロが他の2人の方へと向かつた

「（うーん。あれって誰かの使い魔かな?）」

「（犬耳に尻尾……わんこ素体?）」

「（いや、案外ザフィーラと同じ狼じゃないのか?）」

エリオやキャロと仲が良さそうに話している姿を見ながら3人でそんな話を話し合っている。扉が開いてボロボロのヴィータさんを引きずってフェイトさんが入ってきた

「あ、アルフ、来てたんだ」

「おー、フェイト……って、ヴィータどうしたんだ？」

「いや……なんでも……ねーよ」

ヴィータさんはそう言ってフラフラと机まで歩いて行くと倒れるように座った。

「それにしても、この良い匂いって」

「あ、これは、八神さんが晩御飯の用意をしてくれてるんですよ。私はその手伝いで」

「おー、皆お帰り。ちょうどご飯が出来たよ」

樽をすればなんとやら、大きなお皿を持ったはやてさんが台所から出て来た。後ろにはシャルマさんとハルヒも居る……ってハルヒ！？

「お前も手伝ってたのか、ハルヒ」

「当たり前でしょ。何時もずーっとお世話になってるんだから少しくらい働かないと。別に体のどこかが悪いわけじゃなくて、感情が抜け落ちてるだけなんだから」



「あたしらは、気にせんでもええよって言ったんやけどね」

まあ、ハルヒの事だ。感情がなくても押し強さは変わらないだろ。寧ろ、無表情で言われる方が効果的かもしれん

「シャマル、お前は手を出して無いだろうな？」

「あー、シグナム酷い」

「ちょっと手伝ってくれたよな。材料切りとか」

「まあ、切るだけなら大丈夫だな」

「シャマル先生、もしかして……」

シグナムさんとシャマルさんのやりとりにスバルがちょっと引きつった笑顔で質問する

「違うもん。シャマル先生、お料理ヘタなんかじゃないもん！」

「……………」

沈黙が重い。てゆうか、シャマルさん、その喋り方は見た目的に如何なものかと。決して口には出さないけど。リンカーコアぶち抜かれたくないから。

「キヨン君、今よからぬ事考えなかった」

「いえ、滅相もない」

慌てて首を振る。

まあ、どんなに酷くても吼太の世界のアリスが作ったショートケーキの名を語る何か（カップの腕）よりは良いだろ。あれは軽くトラウマものだからな。今から思うとよくあんなの食べようって気になったな、俺。実際食べてたら死ぬじゃすまなかった気がする

「んー、みんなに食事と飲み物は行き渡ったかな？」

はやてさんがざっとみんなの手元を確認する

「うん。大丈夫」

「えー、ではみなさん。任務中にも関わらずなんだか、休暇みたいになってますが」

「ちょうどサーチャーの反応と広域探査の結果待ちとゆうことで、少しの間休憩出来ますし」

「六課メンバーはお食事で英気を養って、引き続き任務を頑張りましょう」

「」「」「はい」「」「」

「現地のみなさんはどうぞゆっくり」

「……………はい……………」

「それで、折角の機会なんで、協力者のみなさんと、六課メンバー、初対面組の各自の自己紹介など」

「では、そっちの端っこからどうぞ」

指さされたのは古泉だった。古泉は何時も通りの笑顔を見せながら立ち上がる

「現地の一般人、古泉一樹です。今回はこのコテージを待機所としてお貸しさせて頂きました。そちらにいる“ ”さんの同級生です。お見知りおきを」

パチパチとまばらに拍手が起きる。次に立ち上がったのは朝比奈さんだった

「えっと、その、同じく現地のいっぴゃん……………一般人の朝比奈みくるです。キヨン君の1つ年上で、でもでも、キヨン君には色々な場所です。助けてもらっていて……………」と、とにかくよくお願いします」

また、まばらな拍手が起こる。まあ、あの朝比奈さんにしては上出来だろう。ちよっと囁んでたけど。次は長門

「現地の一般人、長門有希」

「……………」

みんな続きを待っているようだが、これで終わりである。長門に慣れない人は啞然としているが、まあ、これが長門の長門たる所이다よな。

「涼宮ハルヒ。今は訳あつて機動六課にお世話になってます」

ハルヒが抑揚の無い声でそう言った。

それから自己紹介は続き、なのはさん、フェイトさん、はやてさんの十年来の親友というアリサさんと月村さん。フェイトさんの使い魔のアルフ。フェイトさんの義姉でクロノさんの妻のエイミィさん。なのはさんの姉の美由紀さん。そして俺達も自己紹介を終え、一層食事が盛り上がった

「ジュースがもう無いかな？」

はやてさんが空になったペットボトルを持ちながら古泉に聞く

「いえ、まだ5、6本ボトルがありますよ。湖の水で冷やしています」

「なら俺が取りに行ってくる」

そう言つて立ち上がると横に座っていたティアナも立ち上がった

「あんた一人で全部持つてこれるわけ無いでしょ。手伝つてあげるわよ」

「あ、ならアタシも。エリオとキャラ口も手伝つてくれる？」

「はい」

スバルとエリオとキャラも手伝ってくれるみたいだ

「それにしても、賑やかだよな」

コテージから出て湖に向かう途中でスバルがそう言った

「そうだな。少なくとも任務中とは思えないな」

「でも、ホントああゆう温かくて賑やかな家族と友達なら全身全霊で守りたいって思いますよね」

「そこるところどうなのよ？キョーン」

「なんで俺に話を振るんだ」

「あの中で友達が居て尚且つ色々聞きやすいからよ。で、どうなの？」

「そうだな……まあ、あいつらに迷惑をかけた程度には頑張りた  
いとは思っよ」

特に古泉。アイツは神人退治に命をかけてたからな。もしかしたら  
長門以上に迷惑をかけてたかもしれん。朝の親友発言も少し嬉しか  
つたしな

「あのですね」

キャラが唐突に話し出した

「私、最近、機動六課もなんだか家族みたいだなんて思うんです」

「そうか？」

確かに普通の場所よりは仲がいいんだろうけど。他の場所を知らないからなんとも言えないが

「私が前に居た自然保護隊も隊員同士は仲良しでしたけど六課のはそれとはちよつと違ってて」

「隊長達が仲良いし、シャーリーさんとかリイン曹長とかも気さくな感じだしね」

「アルトさんとかルキノさんとか、メンテスタッフの方も優しいです」

「勿論、スバルさんとティアさんとキヨンさんも」

「えへへ」

「ん、ありがとう」

「ありがとな」

そんな話をしているといつの間にか湖まで来ていた

「あ、ジュースってこれですね」

「わー、沢山」

キャロがそう言って湖の中のジューズを取りだそうとするがすぐに手を引っ込める

「水、冷た〜い」

「そりゃ、時期が時期だからな。落ちるなよ」

「えへへ、大丈夫で〜す。……つきゃあ」

「キャロ！」

言ってる傍からキャロが足を滑らせたが、エリオがすぐに腕を掴んで事なきを得た

「たく、だから言っただろうが。後は俺達で持つてくから先に戻つて  
る」

「はい……」

エリオとキャロがボトルを一本ずつ持ってコテージへと戻って行った。残ったボトルを湖から引き上げる。確かに、痛いぐらいに冷たいな

「あんな風に思ってくれてたんだね」

帰り道でスバルが唐突に呟いた

「家族みたいって言ってたあれか？」

「うん」

「大人びてる所はあるけどまだまだ十歳だしね。家族とかそうゆうのに憧れてるんでしょ」

「エリオといい、キャロといい色々重たい事情があるからな。ああ言うってくれるのは、まあ、嬉しくはあるよな」  
「そうだね」

それから、ドンチャン騒ぎはご飯が無くなるまで続いた



キヨン、久し振りに日本へ戻る2（後書き）

優希「あとがきコーナー」

キヨン「今回は短いんだな」

優希「前回は結構長かったからね。次回はスーパー銭湯だ！」

キヨン「銭湯か。小さい頃に行ったきりだな」

優希「さて、特に報告する事も無いので謝辞のコーナー」

キヨン「なっぺ様、水橋様、感想ありがとうございます」

優希「とゆうわけで、朱神優希とキヨンでした。感想お待ちしております  
す」

キヨン、久し振りに日本へ戻る3（前書き）

次でスーパー銭湯編完結。今回はツツコミどころが多いですけど、スルーしてください

キヨン、久し振りに日本へ戻る3

そして、食事も終わり

「いやあ、食った食った。やっぱり、はやての料理はギガウマだな」  
いつの間にか復活していたヴィータさんがそう言いながら爪楊枝を使っている。なんとなく、おやし臭い

「さて、ご飯も食べたし、サーチャーの反応を監視しつつ先にお風呂済ませよか」

「まあ、監視と言ってもデバイスを身に付けてればそのまま反応を確認出来るしね」

へえ、それは便利だ

「最近ほント、便利になったよね」

「技術の進歩です！」

魔法にも技術の進歩があるのか。てゆうか、なのはさん達が使う魔法って、ある程度デバイスの機能性にも左右されるよな。最終的には使用者の力量やらリンカーコアの大きさやら魔法の適性だけど、デバイスに組み込めば使える魔法なんかも結構あるし

「すみません、このコテージは浴室がついてないんですよ」

古泉が表面上はそれはもう申し訳なさそうに言う。内心で何を思っ

てるかはこのポーカークフェースから読み取る事は出来ない

「おいおい、どうすんだよ。まさかあの氷水みたいな湖で水浴びしろなんて言わないよな？」

どんなお笑い芸人だ。手をつけただけで痛かつたんだぞ

「そこら辺は大丈夫だよ、キョン君。こうゆう時は、地球の、しかも日本にしかない文化を頼るから」

なのはさんの言葉に首を傾げる。地球の日本にしかない文化？それが今の状況になにか関係あるのか？

「では、六課メンバーは着替えを持って集合」

「これから、市内のスーパー銭湯に向かいます」

なる程、確かに銭湯は地球の日本にしかない文化だな。

「スーパー……」

「銭湯？」

スバルやティアナが首を傾げてる所を見るとミッドチルダにも無いみたいだな

それから、数十分後、俺達は古泉、アリサさん、月村さん、が乗ってきた車に別れて乗り込み大きな銭湯の前に来ていた。

「いらっしやいませ。海鳴スパラクーアへようこ……団体様ですか？」

ぞろぞろと入って行くと受け付けの人が少し引きつった笑顔で聞いてきた。そりゃこんな大人数で押しかけたら笑顔もひきつるわな

「えーつと、大人17人、子供5人です」

「エリオとキャロとヴィヴィオと……」

「私とアルフです！」

「あれ、ヴィータさんは？」

「あたしは大人だ！」

ああ、そういえばこの前の遊園地の時にも言ってたな。別にそこまですごい所じゃないと思うんだが

「あ、良かった。ちゃんと男女別だ」

エリオが心底安心したような顔をする。そりゃ、山奥の温泉とかに行かない限り混浴はそうそう無いだろ

「広いお風呂だって。楽しみだね、エリオ君」

「あ、うん、そうだね。スバルさん達と一緒に楽しんできて」

エリオの言葉にキャラコが本当に不思議そうに首を傾げる

「え、エリオ君は？」

「え！？ば、僕はほら、一応男だし……」

エリオが手をあたふたさせながら慌ててそう言う

「でも、ほら、あれ」

キャラコが嬉しそうに指差した先には注意書きが書かれている看板があった

「注意書き……えーっと、女湯への男子入浴は11歳以下のお子様のみでお願いします」

「んふふ、エリオ君10歳」

こりゃ、エリオが不利か？

ソファに座って傍観しながら他人事のようにそう考える。実際他人事だしな

「折角だし、一緒に入ろうよ」

「フェイトさん！」

おお、フェイトさんが加勢に入った

「えっ、あ、い、いや、あ、あのですね。それはやっぱり、スバルさんとか隊長達とかアリサさんや朝比奈さん達も居ますし」

「別にあたしは構わないけど？」

「てゆうか、前から頭洗ってあげようか？とか言ってるじゃない」

あー、確かに言ってたな。エリオは言われるたびにソニックムーブ使って逃げてるけど

「あたしらも良いわよ。ね？」

「うん。良いんじゃない？仲良く入れれば」

「そうだよ。エリオと一緒に風呂は久し振りだし、入りたいな」

とゆうことは前まで一緒に入ってたのか。羨ましい

「私達も別に構いませんよ。仲良く入りましょう？」

朝比奈さんもやんわりとエリオを追い詰めて行ってるし

「えっ、あ、あの。お気持ちは非常に………なんですが、すみませ  
ん。遠慮させていただきます！」

「「えー」「」

キャロとフェイトさんが心底がっかりした声をだす。別にそこまで残念がる必要はないと思う

「さ、先にながって、この辺で待ってますので、すみません。失礼します」

そう言うとエリオは走って男湯の脱衣所に逃げていった。

まあ、こうなることは目に見えてたけどな

「ねえ、パパ」

一緒にソファに座っていたヴィヴィオが袖を引っ張ってくる

「ん？どうした？」

「ヴィヴィオもパパと入りたい」

まあ、これも予想の範囲内。許可しないけど

「二人で来てるならまだしも、ハルヒや他の人達が居るんだから、一緒に女湯に入れ」

「えー」

「えー、じゃありません」

ヴィヴィオを長門に任せて（何故かヴィヴィオが異常に懐いていた）古泉と一緒に男湯へと向かう



中に入ると中年のおじさんにロッカーの使い方を教えて貰っている  
エリオの姿があった

「よう、エリオ。災難だったな」

「あ、キョンさん。見てないで助けてくださいよ」

「あの状況で俺に出来る事なんか傍観以外にねーよ」

そう言い合いながら俺達は着々と服を脱いでいく。その時、また誰  
かが入ってきた

「はい、どうぞ」

「「ありがとうございます」」

聞き覚えのある。とゆうか、数分前まで聞いていた声に顔をあげ、  
頭を抱えた。そこにはバスタオルを巻いただけのキャロとヴィヴィ  
オがいた。それだけならまだ良かった。どうにでもなる。横でエリ  
オがテンパってるが知ったことか。俺が頭を抱えた理由は、その後  
ろにヴィヴィオ達と同じ格好のヴィータさんが居ることだ

「なんでこっちに来てるんですか、ヴィータさん」

「う、うるせー。細けー事は気にすんな」

「いや、全然細かいくないですよ」

子供扱いは嫌いなんじゃないやなかつたんですか!?

「まあ、とりあえずはいりませんか？流石にその格好でいつまでもいると風邪をひきますよ？」

古泉の声で自分たちの格好を確認する。全員バスタオル一枚。確かにこれじゃ風邪をひく。特に最近はずいぶん寒いしな

「しゃーない。なんとなく女湯に帰れって言うても無駄な気がするし、さっさと入るか」

もうどうにでもなれとゆう気持ちでさっさと浴場へと入った

「いいか、こつこつ所に来たらまず最初にか湯をしてから入るのがマナーだ」

とりあえず、銭湯に来たことがない3人に銭湯でのマナーを教える

「後、出来れば体も洗ってから入るのがベストなんだが。まあその辺は任せる」

実際俺は先に体を温めてから体を洗うしな

「それと、風呂に入る時はバスタオルを浸けるなよ」

バスタオルを巻いたまま風呂に入ろうとしていたエリオとヴィータさんの肩がビクッと震える

「てゆうか、ヴィータさん、昔はこつこちに居たんだからそれぐらい知ってるでしょ？」

「あ、ああ」

「パパー」

ヴィヴィオに呼ばれてそちらを向けば、大きめのお風呂で泳いでいるヴィヴィオとキャロに密着されて顔色がとんでもないことになっているエリオだった

「ヴィヴィオ、お風呂で泳ぐな。キャロはエリオにあまり近づきすぎるな」

「「えー」」

「えー、じゃありません」

はあ、頭が痛い

ヴィータ視点

ちくしょう。シャマルとはやてにそそのかされて来ちまったけどよく考えると朝密着してたのとはわけが違うんだよな。

「ヴィヴィオ、お風呂で泳ぐな。キャロ、あんまりエリオに近づきすぎるな」

良いな、キャロとヴィヴィオの奴。あんな風にキヨンに構ってもらえて

自分の何倍も年が離れたガキに嫉妬してる奴の姿が此処にあった。つーか、あたしだ

そんなことを考えながらキヨンを眺めつつ風呂に浸かっていると不意にキヨンと一緒に居た奴が近づいてきた。確か名前は……

「古泉……なんだっけ？」

「一樹ですよ」

「ああ、そんな感じ。で、どうしたんだよ？」

「いえ、あなたがとても羨ましそうな顔で彼らを見ていたので」

なっ！？顔に出てた！？

「その表情から察するに、凶星ですか」

「なっ、テメエ、鎌掛けやがったな」

なんつー野郎だ。アイゼンが手元にあつたらぶん殴ってやれるのに。更衣室において来ちまったからな

「彼の事が好きなのですね」

「なっ、なな！？なんで」

自分でも、顔が赤くなってるのがわかる

「見ていればわかりますよ。しかし、彼を振り向かせるのは容易ではありませんよ？なにせ一年間、さりげなくとはいえ女性にアピールされてもなお、気が付かなかつたぐらいですからね」

あいつが鈍感なのは薄々気づいてたけど、そこまでなのか

「おいこら、古泉、ヴィータさんに変な事したらSLB撃つぞ」

こっちに気が付いたキヨンが真顔で恐ろしい事を言いやがった。古泉の奴もあれの威力は知らないだろうけど本能的に危険を感じたのか冷や汗を流してる

「いえ、そんなつもりは毛頭ありませんよ。ただ、あなたの日頃の姿を聞いていただけです」

「なら良いけどな。あ、こら、だから風呂で泳ぐなって言ってるだろうが」

キヨンはそう言うと再びヴィヴィオ達の監視に戻った。けど、あたしを心配してくれた。それがメチャクチャ嬉しかった

フェイト視点

「ヴィータは後でおしお……OHANASHIかな」

意味が変わってない気がするけど、こつゆうのは気分の問題だよな。まさかいつつも自分は大人だって言ってるヴィータが子供を装って男湯に行くとは思わなかった。

「それだけキヨンの事が好きって事だよな」

何か間違ってる気がするけど。私もうかうかしてられないな

そう思いながら私は広いお風呂の隅っこでポツンと座っているハルヒを見る。

涼宮ハルヒ。今回のレリック事件の途中に起こった事件の被害者で、キヨンが必死になって救おうとしている少女。確実にただの友達ってわけじゃないよね。でも恋人ってわけでもなさそうだし

「なにかあたしの顔についてるかしら？」

「きゃっ！？」

ぼーっとしてたせいでハルヒが近づいて来てるのに気がつかなかった。

「う、ううん。なんでもない。ごめん、ちょっとぼーっとしてただけ」

「そう」

ハルヒはそれだけ言うと黙った。元の場所に戻る気は無いらしい。他のみんなはいろんな場所に散ってるから今此処に居るのは私とハルヒだけ。

「……………」

「……………」

き、気まずい。ハルヒは感情がないから無表情で無口だし、私もあまり明るい性格とは言えないから空気が重い

「あ、あの」

私が空気に耐えられず別に何も考えてないのに声をかけてしまった

「？ なにかしら？」

「え、えと」

なにも考えてなかったから言葉に詰まる。けど、口は私の意思とは別に勝手に動いた

「ハルヒはキヨンの事どう思ってるの？」

「……好きよ。異性として」

ハルヒは一瞬、間を空けると淀みなくそう答えた

「最初は恋なんて、ただの精神病の一種だと思ってた。けど、キヨンと一年間SOS団で活動して、今は感情がなくなっちゃってるけど、それでもあたしははつきりと言えるあたしはキヨンが好き」

なんの感情の起伏もない、単調な口調で告げられた言葉は、でも、どんな感情的な声よりも私の心に響いた

「それは、あなたも同じでしょ？」

「え？」

「あなたもキヨンが好きなんでしょ？」

「なっ!?!」

いきなりの事にとっさに言葉が出て来なかった

「最近のあたしは1日の大半をキヨンの日常を見ながら過ごしてるのよ。それくらい気づくわ。てゆうか、あからさますぎたし」

そんなにあからさまな行動してたかな? 思い出してみるけど、ヴィータとキヨンの個人スキルの訓練をどちらが見るか揉めたり、一緒にご飯食べようとルーテシアやドワーエと席を奪い合ったりはしたぐらいで気づかれるような行動……………ばっかりしてるね

「うん。私もキヨンが好きだよ」

「そうでしょうね。頑張りなさい。あのバカの鈍さは尋常じゃないものがあるわよ。なんたって、あなた達の端から見ればあからさまな好意を全然分かってないしね。だからってあたしも諦めるつもりはこれっぽっちもないけど」

その時のハルヒは感情がないのにとても楽しそうだった。私も頑張らないとな

キヨン視点

「あー、うー、気持ちわりい」

「のぼせるまで入ってるからですよ。キャロ、悪いがヴィータさん連れて行ってくれるか? ヴィヴィオも手伝ってやってくれ」



「はい」

キヤロとヴィヴィオが元気な返事をしてヴィータさんを引きずるようにして女湯の方へと消えた

「さて、我々も湯冷めしないうちに服を着ましょう」

古泉に促されてさっさと服を着て食堂なんかがあるフロアに出とちよつどいい具合に女性陣も出て来たので合流する

「いやー、なんだかすつかり堪能してしまいました」

「日頃の訓練の疲れもちよつと取れたでしょ？」

「はい」

まあ、色々騒がしかったけどゆつくりと湯船に浸かれたのはよかったかな。向こうだと基本的に他の隊員もいるからゆつくりと浸かるつてことが出来ないからな

そんな事を考えていると、なんか嫌な笑みを浮かべたはやてさんとシヤマルさんが近寄ってきた

「で、キヨン君。ヴィータに変なことかしてないやろな？」

「なにをしたのかゆつくりと聞かせて貰いたいな」

「ずずい、と顔を近寄せてくる二人。」

はあ、ヴィータさんが自分の意思で男湯にくるとは思ってなかった

けど、多分この二人がけしかけたんだな

「別になにもしてませんよ。普通に風呂に浸かってただけです。ヴィヴィオ達の監視が大変でしたけど」

「なんや、つまらんなあ」

「もうちょっとハプニングがあったら面白かったのに」

ダメだこの人達。なんとかしないと

俺が頭を抱えていると、タナトスからサーチャーが反応したことを伝えてきた

そういえばすっかり忘れてたけど、俺達って此処に仕事で来てたんだよな。

「悪いな、古泉、長門、朝比奈さん。また仕事だ」

「いえ、お構いなく。僕達は先にコテージへと戻っていますよ」

「気をつけてくださいね、キヨン君」

「……………気をつけて」

三者三様の反応に見送られて俺達は急いで反応があった場所へと向かった

キヨン、久し振りに日本へ戻る3（後書き）

優希「あとがきコーナー。なんか、今回は書いてて死にたくなっ  
た」

キヨン「じゃあ、死ねよ」

優希「最近キヨンが冷たい！今回は謝辞のコーナーだけでさっさと  
終わらせよう」

キヨン「なっぺ様、バルディッシュ様、感想ありがとうございます」

優希「とゆうわけで、朱神優希とキヨンでした。感想お待ちしてお  
ります」

キヨン、久し振りに日本へ戻る4（前書き）

スーパー銭湯編完結。今回は短いです

## キヨン、久し振りに日本へ戻る 4

ロストロギアの反応があつたのは銭湯からほど近い河川敷のグラウンドだった。そして、そこにあつたのは……

「なにこれ？」

「ぶよぶよスライム？」

スバルの言ったとおり、ピヨピヨ跳ねるスライム状の物体だった

「ちょっと可愛い」

「これ、全部本体ですか？」

いや、それはないだろ。その場合全部封印処理するのにどんだけ頑張らなきゃなんねーんだよ

『危険を感じると複数に分裂して、ダミー体を増殖する。そやけど本体は一つや』

はやてさんの説明に安心する。そりゃそうだよな

『本体を封印すればダミーは全て消えるです』

なら、とつとと本体探してキャロに封印して貰わないとな

「てやあ！」

「ハア！」

気合いと共に打ち出されたスバルの拳とエリオの斬撃はしかし、  
とも簡単にスライムのボディに弾かれた

「打撃無効!？」

「斬撃も無効です」

ティアナとキャラも苦々しい表情で合流してくる

「こっちの火炎と通常魔力弾も効果なし」

「さすがロストロギア」

「打撃も斬撃も魔力弾も火炎も駄目なら、押しつぶしてみるか？」

ギガントフォルムのグラーファイゼンを作り出して思いっきり振り  
上げる

「剛鉄爆砕！ギガントシュラーク」

一体のスライムに向かって全力で振り下ろして叩き潰すが

「これも効果なしか」

スライムは押しつぶされて少しの間平たくなっていたがすぐに元に戻った

「たく、めんどくさいな。バインドで4つひとまとめにしたら消えねーか？」

「そんな、ぷよぷよじゃないんだから」

「なんでスバルがぷよぷよ知ってんだよ」

「余計なお喋りしてる暇はないわよ。キヨンとスバルとエリオはこれ以上ダメーが広がらないように止めてて。あたしとキャラで本体を特定して封印する」

「了解」

とは、言ったものの、どうすつかな。デカいの撃って本体に当てるわけにもいかないし。大剣で地道に殴るか

「てやあー！」

ぶによん

叩き潰した時には分からなかったが、こいつを攻撃したときの感触メチャクチャ気持ち悪い。スバルやエリオはなんともなさそうに攻撃してるけど

「反応が違う、こいつが本体？」

聞こえてきた声に振り向けばちょうどキャラロが本体らしきスライムをアルケミックチェーンで捕らえようとしてる所だった。

やれやれ、やっと終わ

「バリア展開!？」

らなかった。スライムはなんとも往生際悪く、バリアを展開してチェーンを弾き返そうとしゃがった。……なら

『ステータスロード。ロードファイルネーム“キャラロ”』

「キャラロ!そのまま抑えてる。錬鉄召喚!アルケミックチェーン」

キャラロが呼び出したチェーンの上から更にチェーンで縛りあげる。流石に耐えられなかったのかバリアに罅が入り、割れて本体を捕らえた

「バリア破壊。クロスミラージュ、バレットS!」

『ロードカートリッジ』

「我が請うは捕縛の檻。流星の射手の弾丸に封印の力を」

キャラロの補助魔法を受けて、ティアナの持っているクロスミラージュが桃色に薄く光る

「シーリングシュート!」



撃たれた弾はスライムに当たり、周りにいたダミーが雲散霧消した

「封印成功!」

今度こそ終わりだな

「後は、キャロ。完全封印処理お願いね」

「はい」

キャロが完全封印処理をするために機能が停止したスライムへと走っていった。やれやれ。これにてやっと一件落着だな後日談とゆうか、今回のオチ。ロストロギアの確保も終わり、六課メンバーはミッドに帰る事となった

「もう帰っちゃうんですね」

「すみません。まだ向こうでやらなきゃいけないことが山ほどあるので。ハルヒの感情も」

「またいつでも遊びに来てください。歓迎いたします」

「ああ。出来ればさっさとゴタゴタを全部片付けて帰って来るよ」

「……無事を祈っている」

「いや、別に戦地に行くわけじゃねーから」

相変わらずな三人に苦笑しながら帰りの支度をするためにコテージの中に戻るとどこか不機嫌そうな顔をしたティアナが立っていた

「どうした、ティアナ。せっかく任務が終わったんだ。少しぐらい嬉しそうな顔をしてもらいたる」

「いや、今回のあたし、どうもイマイチね」

「そうか？かなり良かったと思うが」

「隊長達や副隊長達なら、それこそ一瞬だったろうなって」

俺はティアナの言葉を聞いて軽く溜め息をつくときティアナの頬を横に引っ張った

「いひゃっ。にやにしゅんによよ（痛っ、なにすんのよ）」

俺は少しの間ティアナの頬を引っ張って遊んでから放してやり、溜め息混じりに軽く説教する

「あのな。別に俺達がなのはさん達みたいになれるわけないだろうが。例えばキャラがスバルみたいに近接戦闘出来るようになると思っつか？」

「……無理ね」

「じゃあ逆にスバルがキャラみたいに補助魔法使えるようになると思っつか？」

「絶対に無理ね」

即答なうえに絶対までつけたか。まあ、そこはスルーだ。

「じゃあ、それを隊長達に置き換えてみる。なのはさんがシグナムさんみたいに近接戦闘出来るか？」

「それも……無理ね」

「そうゆう事だよ。誰にでも得手不得手があるんだ。それこそ、なのはさん達でもな。お前はお前の出来る事をすればいい。出来ない事は俺達で補ってやるから」

そう言つて少し笑う。すると、ティアナは少し、顔を俯かせた後……俺の鳩尾に正拳付きをした

「がはっ、な、なにしやがんだ」

「うつさい、馬鹿。あたしの頬を引っ張ったお礼よ。それと、今日からあたしの事はティアアって呼びなさい。良いわね？」

「は？なんで「良いわね？」……はい」

あまりの迫力に俺は頷くしかなかった。それに満足したのかティアナ「キヨン？」……ティアはそれだけ言つと自分の荷物が置いてある部屋の方へと向かった。

まったく、なんなんだ一体？

そこからは特に問題なく、俺達は機動六課の隊舎へと帰った

キヨン、久し振りに日本へ戻る4（後書き）

優希「あとがきコーナーとは言っても今回も特にやることはない」

キヨン「ねーのかよ」

優希「そろそろバレンタインネタを本格的に書かないとなーと思ってる今日この頃です」

キヨン「今言う必要があるのか？それは」

優希「とりあえず、謝辞のコーナー」

キヨン「バルディッシュ様、水橋様、なっぺ様、感想ありがとうございます」  
ざいます」

優希「次回はバルディッシュ様とのコラボを予定しています。とゆうわけで、朱神優希とキヨンでした」

【番外編】烈風の訪問者（前書き）

今回はバルディッシュさんとのコラボです

## 【番外編】烈風の訪問者

いつもどおり朝練が終わり、スバル達と隊舎に帰っていると、いきなり目の前に魔法陣が出現した

「これは、転移魔法!？」

「なっ、敵!？」

全員がデバイスを起動して警戒する。そして、そこから出てきたのは見覚えのある顔だった。誰だったかな？

「ここは何処だ?つて、お前は確か……キヨン?」

「あ、思い出した。吼太の所で会った、確か……ヒスイさん。どうして此処に」

「ヒスイで良い。俺にもよくわからん。いきなり魔法陣が現れて此処に連れてこられたからな」

ライトの時と一緒に。また長門に送ってもらおうか？

「ちょっとストップ。キヨン。とりあえず、この人が誰なのか説明しなさい」

あー、そういえばスバル達は知らないんだよな

「ヒスイ・ハーツだ。此処とは違う平行世界から来た」

ヒスイが簡単な自己紹介をしてくれる。

「この間来たライトと同じ感じだと思ってくれれば良い。とりあえず、なのはさん達には報告しとかないとな」

前回ライトが来た為、説明はかなり簡単だった。とりあえず、長門に送って貰うにせよ、ライトと同じように自動で帰るにせよ、ちょっと時間がかかるんだよな。それまでどうして貰うところか

「あ、そうだ、キョン。お前も一応バグ程度には強いよな？ 模擬戦やらないか？」

結局こうなるのか。

今回も訓練場はあつさりと貸し出され、俺とヒスイは森になったフィールドの開けた場所に向かいあう

「ゲイルアーク、セットアップ。2ndモード」

『All right! setup and vex form』

ヒスイが双剣型になったデバイスを構える。俺もタナトスを起動し

ていつもの大剣を構える

「それじゃあルールはライトの時と同じ、なのはさんが審判で有効打が入ったら終了だ」

「わかった」

「それじゃあ、レディー、ゴー」

なのはさんの掛け声で俺とヒスイは同時に駆け出した

「虎牙破斬！」

切り上げと切り下げの斬撃を危なっかしく受け止め

「紫電一閃！」

炎を纏った大剣で斬りかかるが上手いこといなされる。

「魔神連斬！」

ヒスイが衝撃波を四発飛ばしてくれば



「空牙！」

此方も衝撃波を飛ばして相殺する。さつきからこんな感じの繰り返しで埒があかない。とは言っても、砲撃を溜める時間もない

「突き抜ける闇念。シャドウエッジ」

「危なっ！」

ヒスイの詠唱と同時に足下から突き出てきた黒い巨大な槍を間一髪で避ける。ああゆうのがある分、こっちのが不利だよな。元々の経験値の差もあるけど

「よく避けたな」

「ハルヒのおかげで危機察知能力は高い方だからな」

とは言っても、いつまでも避けられるわけがないし、持久戦に持ち込まれたら確実に負ける。それどころか、こっちには決め手になる技を溜める時間も少ない。こうなりゃ、一か八かだ

ヒスイの攻撃を避けながら大剣を消してボーゲンフォームのレヴァンティンを作り出し、ソニックムーブを使って距離を取る

「ボーゲンフォームのレヴァンティンか。なら、俺も！ゲイルアーク！」

『Lord Cartridge! Arbalist Mode  
Standby!!』

ヒスイのデバイスが双剣から巨大な弓へと変化する。レヴァンティンみたいだな

「この一撃で終わらせる！」

「それはこっちのセリフだ。駆けよ隼」

ヒスイのデバイスが二発カートリッジをロードした。

良いよな、カートリッジシステム。俺の場合カートリッジがいる技でも自前の魔力だけで無理やり同じ威力まで高めるから魔力消費が激しいんだよな

「あらたか荒鷹・たいが大牙！」

「シュツルムファルケン！」

俺とヒスイの攻撃がぶつかりあい爆発が起こる

「威力は俺の方が上だと思っただがな」

「ああ。単純に戦闘の経験値だな」

一瞬で間合いを詰められ、双剣で首を挟まれるような形になった俺は深く溜め息をついた

「剣は最近シグナムに習いだしたばかりだが、意外と使えるようになったってな」

「マジかよ。俺は一応最初の頃から大剣を使ってるのに。かなりへ  
こむな」

「まあ、その辺は元々の戦闘経験の差だ。俺とお前じゃ戦闘してきた年月が違う」

「まあ、そりゃそうだけどさ。」

その時、ヒスイの足下に魔法陣が現れる

「お、時間みたいだな」

「だな。ライトへの目標はあいつのシールド破壊だから、ヒスイは  
剣で勝つだな」

「ふっ、まあ、楽しみにしてる。じゃあな」

そう言ってヒスイは元の世界へと帰った

平行世界のバグキャラとの戦闘記録。二戦0勝2敗

【番外編】烈風の訪問者（後書き）

優希「あとがきコーナー。今回のゲストはヒスイ・ハーツさんです」

ヒスイ「どうも」

優希「とは言っても、いつもの如くやることないんだけどね。今回は謝辞のコーナーをヒスイにやってもらうかな」

ヒスイ「バルディツシユ様、なっぺ様、水橋様、感想ありがとうございます。……自分の作者に様づけるのは変な気分だな」

優希「あはは、とゆうわけで、朱神優希とヒスイ・ハーツでした。感想お待ちしてます。バルディツシユ様、こんな感じでよろしかったですでしょうか？」

フォワードの新メンバー現る(前書き)

内容は題名通り。口調が曖昧

## フォワードの新メンバー現る

キヨン視点

いつも通り朝練が始まるのを待っているとスターズとライトニングの隊長陣全員と何故かギンガともう1人緑の髪メガネをかけた女性がやってきた

「さて、今日の朝練の前に一つ連絡事項です。陸士108部隊のギンガ・ナカジマ陸曹が今日からしばらく六課に出向となります」「108部隊ギンガ・ナカジマ陸曹です。よろしくお願いします」

ギンガが敬礼をしながら自己紹介する。

「それから、もう一人」

フェイトさんが緑髪の女性の方を向く

「十年前からうちの隊長陣のデバイスを見てくださっている、本局技術部の精密技術官」

「マリエル・アテンザです」

「地上でのご用事があるとのこと、しばらく六課に滞在していた、ただ事になった」

「デバイス整備を見てくれたりもするそうなので」

「気軽に声をかけてね」

「「「「はい「「「」

はやてさんとかシャーリーさんみたいに結構フランクな人っぽいな

「おーし、じゃ、紹介が済んだ所で早速、朝練行つとくか」

「「「「はい「「「」

「キヨンは今日は高速戦闘の応用をやるうか」

「ちげーよ、今日は突撃型の捌き方の訓練だ！」

「ヴィータは昨日やったでしょ？」

「うっせえ。こつゆつのは間を空けちゃ駄目なんだよ」

そのままフェイトさんとヴィータさんの口喧嘩が始まった。

……………今日はシグナムさんに剣を教えて貰うつもりだったんだけど、これじゃ聞いてくれないだろうな

「ちよっ、ヴィータもフェイトちゃんも落ち着いて」

「ほづつておいてください。最近はいつもの事です」

目の前の光景にオロオロするマリエルさんにシグナムさんが溜め息をつきながらそう言った

「そ、そうなの？」

「ええ。まったく、こんな事をしている暇があるのならさっさと告白してしまえば良いのに」

「あ、そういえば、シグナムの彼氏。ヴァイス君だっけ？とどこまで行ったのか聞きたいな」

「なっ、何故ヴァイスの事を／＼／」

「はやてちゃんが嬉しそうに話してたわよ。『シグナムが最近可愛くなった』って」

向こうは向こうでなんか恋バナが始まってしまった。俺とエリオ、キャロ、ティアナは置いてけぼりになってしまった。

「あつちでスバルとギンガさんが模擬戦やるから見に行きましょう。終わる頃にはあれも終わってるでしょ」

もはや、ティアナですらフェイトさん達の喧嘩をあれ呼ばわりだ。突っ込むと面倒くさいから突っ込まないけど

「それもそうだな」

こっちの事はガン無視で訓練場の準備を進めているのはさんを見て、やっぱり大物だと思った



「じゃあ、皆集合」

時間は流れて、スバル達の模擬戦も終わり、フェイトさん達の喧嘩も終わって（今回はフェイトさんに軍配が上がった）一時間ぐらいたった現在。なのはさんに集合がかけられた

「折角だから、ギンガも入れたチーム戦、やってみよっか。フオワードチーム六人対前線隊長四人チーム」

「……………へ？」

ギンガの目が点になってる。まあ、いきなり言われればそうゆう反応だよな

「いや、あのね、ギン姉。これ時々やるの」

「隊長達、かなり本気で潰してきますから」

「まずは地形や幻術を駆使してなんとか逃げ回って」

「どんな手を使っても決まった攻撃を当てれば、撃墜になります」

「ギンガはスバルと同じくデバイス攻撃ね。左ナックルと蹴り」

「はい」

「今日のキヨン君の武器はストラダーとレヴァンティン。使うせー

ブデータはエリオだけね」

「はい」

こうゆうチーム戦の時は基本使える武器とセーブデータを制限される。まあ、それに文句があるわけでもないけど

結果を言えば惜しい所までは行ったが結局、後一步の所で全員撃墜されてしまった

「最後のシフトが上手く行ったらば逆転出来たのに！」

「うぁー、くーやーしー」

「まあ、ヴィータさんとフェイトさんは墜とせだし、まあまあのお出だろ」

「いや、あれは他に気を取られてたからだったって」

みんな思い思いの事を言いながらストレッチに入る

「それにしても、みんな凄いね。朝からこんなにキツイの？」

「隊長戦は特別だが、まあ基本こんな感じだな」

「緊急の出動があっても良いぐらいには、限界ギリギリまで」

その時、視界の端に此方へ走ってくる人影が映った

「パパー」

声の方を向けばヴィヴィオがこっちに向かって走って来ていた。そして、そのままの勢いで横腹へとタツクルをかましてきた

「がはっ」

肝臓へ10000のダメージ！正直、今日一番の痛みだ

「あら、その子、こないだの下水道の時に保護した子よね？なんでキヨンがパパ？」

「色々あるんだ」

肝臓が痛む今の状態ではそれだけしか言えなかった

後日談とゆうか、今回のオチ。横腹の痛みも引いて、食堂にて朝食をとりながら、ギンガにヴィヴィオが俺をパパと呼び出した経緯を話す。とは言っても、なにかきっかけがあつた訳でもないから少し説明しづらいが

「へえ、大変ね、キヨンも」

「すぐに飽きると思ってたんだが、思ったより長いこと呼ばれ続けているからもう馴れた」

「それがキヨン、結構親バカでさあ。何かにつけてはヴィヴィオを心配してるんだよ」

「この間もちよっと風邪をひいただけで大慌てして　むぐう」

とりあえず、いらんことを言うサインとドゥーエをバインドで縛り上げる

「いらんことを言うな」

「まあまあ。パパって呼ばれてるのは懐かれてるって事だし、悪い気はしてないんでしょ？」

「それは……まあ」

「なら良いじゃない」

「別に嫌がつてるわけでもないんだがな……あ、こら、ヴィヴィオ、ピーマンだけ避けるな」

何気なく膝に乗っているヴィヴィオを見下ろすと、上手いこと避けられたピーマンが目についた

「えー、にがいのきらーい」

「えー、じゃありません。好き嫌いせずに食べないと、大きくなれないぞ」

「そうよ、私みたいに綺麗になれないわよ」

いつの間にかバインドを抜け出したドゥーエがそう言った。自分で言うのはどうかと思うぞ。まあ、確かに綺麗だけど

「……………」

横でキャラコがスプーンに人参を乗せてエリオの皿に移そうとした体

勢のまま固まっていた

「どじするっ。」

「食べます」

お、キャラは潔く食べたな

「ほら、ヴィヴィオも」

「うー」

ヴィヴィオも唸りながらだが、ちゃんと食べた

「よし、偉いぞ、ヴィヴィオ」

「えへへ」

ちゃんと食べたので頭を撫でてやる

「くくくく………」

ゾクッ

久し振りに悪寒が走った。つーか前より酷くなってる

「ホントに親バカなのね、キヨン」

「ギンガまでそう言うのはやめてくれ。俺はこの年で子持ちになるつもりはないんだ」

最近この言葉も言い飽きてきたな

## フォワードの新メンバー現る（後書き）

優希「あとがきコーナー。やっとギンガが出せた」

キヨン「今更だけど姉妹なのにスバルとは性格が真逆だよな」

優希「お前の妹もお前の性格とは似ても似つかないだろうが」

キヨン「まあ、それはそうだが」

優希「続いては謝辞のコーナー」

キヨン「水橋様、バルディッシュ様、なっぺ様、感想ありがとうございます」  
「ございました」

優希「次回はオリジナル展開。やっとあの二人が登場！」

キヨン「誰だよ」

優希「秘密。とゆうわけで、朱神優希とキヨンでした」

【番外編】バレンタインは戦争です（前書き）

バレンタインネタ。サブタイは気にしないでください



【番外編】バレンタインは戦争です

「よう、キヨン」

午前の訓練も終わり、午後からはオフシフトな上にヴィヴィオはザフィーラと散歩に出掛けてしまったので暇を持て余していると、ヴァイスさんに声をかけられた

「どうも。なにか用ですか？」

「ああ、ちょっと付いてきてくれ」

そう言うとヴァイスさんは俺の返事も待たずに勝手に歩きだした。ヴァイスさんについて行った先は小さな会議室だった。中には、ヴァイスさんの他にエリオとグリフィスさんも居た

「キヨン、お前は今日がどうゆう日か知ってるよな？」

今日ってなにかあったっけ？誰かの誕生日？そんなのー々覚えてられないんだが

「その顔は分かってねーみたいだな。今日はバレンタインだろうが」

ああ、確かにそんなイベントがあったな。自分にはほとんど関係のないイベントだったからすっかり忘れてた

「それでだな。今日は此処にいる四人で誰が一番本命チョコを貰えたかを競う！」

「は？」

この人の頭は大丈夫か？よく見るとエリオとグリフィスさんも呆れたような顔をしていた

「テメーら、俺を可哀想な奴を見る目で見るな」

「はあ、単純にヴァイスさんがシグナムさんにチョコを貰えるのを自慢したいだけでしょ？」

「なっ、なな、何でそこで姐さんの名前が！？」

この人は、あれで隠せてるつもりだったのか？

「シグナム副隊長があんな無防備な笑顔向けるのはヴァイスさんだけですよ？」

「それに、偶に2人のオフシフトが重なると2人とも姿が見えなくなりますし」

「気づいて無いのはヴィヴィオぐらいなもんですよ」

上からエリオ、グリフィスさん、俺。ヴァイスさんは殆どの六課メンバーに知られていることに気づいてなかったらしく、顔を真っ赤にさせてオロオロしている

「とっ、とにかくそうゆう事だ。良いな！9時にもう一度此処に集合だ！」

ヴァイスさんはそう言うつと会議室から出て行った

「どうします？キヨンさん」

「まあ、別に良いんじゃないのか？そんな面倒な事でもないし」

実際、なにか特別な事をするわけでもないしな

「そうですね。まあ、本来の目的は別にあるみたいですが」

なんか、グリフィスさんが意味深な事を言っていたが聞き返す前に出て行ってしまった

場所は変わって隊舎の廊下

俺は別に谷口のように、女性に媚びてまでチヨコを貰うつもりはないし、そんなお情けで貰いたくはない。そもそもヴァイスさんが指定したのは本命のチヨコだ。

「あ、キヨン君」

その時、ちょうど廊下の進行方向からなのはさん、フェイトさん、はやてさん、ラインが歩いてきた（ラインははやてさんの肩に乗っ

てるけど)

「今日はバレンタインだから、はい、チョコレート」

そう言って取り出された赤い包装紙に包まれた箱を受け取る

「六課の隊員みんなに配ってるんやで」

それは言う必要ないと思います。と思いながら緑色の包装紙に包まれた箱を受け取る

「ライン達の手作りですよ」

そう言いながらどこから取り出したのか、ラインの体の倍ほどある水色の包装紙に包まれた箱を受け取る

「え、えっと」

「フェイトちゃん、はよ渡してあげんと。この為に徹夜したんやから」

職場の人達に渡すチョコを作る為に徹夜したのか。なんかフェイトさんらしいな

「き、キヨン。これ受け取って！」

そう言って差し出されたのはなのはさん達よりも少し大きめの黄色い包装紙に包まれた箱だった

「は、はい」

フェイトさんの気迫に圧されて少し声の上擦りながら受け取る

「じゃ、じゃあ、他の人達にも渡さないといけないから」

フェイトさんはそう言つと凄いスピードで去つていった

「（これは告白出来るようになるんはまだまだ先やな）キヨン君、ちゃんと味わつて食べんとあかんよ。それじゃあ」

はやてさんはニヤニヤと笑いながらそう言つとフェイトさんが走り去つた方へと歩いて行き、なのはさん達もそれに続いた

場所は変わつて自室。とりあえず、なのはさん達から貰つたチョコを机に置いてこれからどうしようかと考えていると、扉がノックされた

「キヨン、居る？」

扉の向こうからスバルが声をかけてきた

「居るぞ、勝手に入つてくれ」

「りょーかい。お邪魔しまーす」

そう言つてスバルとスバルの後ろに隠れるようにしてティアが入ってきた

「今日はバレンタインデーだからね。はい、義理チョコ」

「一々義理をつけるな」

まあ、ありがたく受け取るが

「ほーらー、ティアもチョコ渡してあげないと」

「わ、わかってるわよ。は、はい、義理チョコ。か、勘違いしないでよ。あたしは作る気なんかなかったんだけど、スバルが作ったからついでに一緒に作っただけだし、あんたにあげるのも単純におんなじスターズだからってだけだから！」

「そうか。悪いな。なんか気を使わせたみたいで。別に無理に作ってくれなくてもよかったんだぞ」

ツンデレは通用しない人に使用するところになります

「べ、別に無理して作ったわけでもないから。とにかく、渡したわよ！それじゃ」

ティアはそう言って逃げるように部屋から出て行った

「あたしも行かなくちゃ。お返し期待してるからね、キョン」

「あまり期待しないでくれ」

俺の返事にスバルは笑いながらティアの後を追った

それから数分もしない内に今度はルーテシアとドゥーエが訪ねてきた

「あら、意外と貰ってるのね」

部屋に入ってきて机の上に置いてあるチョコを見つけたドゥーエが開口一番にそう言った

「意外は余計だ。……自分でもそう思うが」

「昨年までは家族からも貰ってなかったからな。そう考えれば今年は義理ばかりだがかなりの量貰ってるな」

「はいこれ。手作りよ。ありがたく受け取ってね」

「……私も。ドゥーエから作り方教えて貰って、自分で作った」

「ありがとな、二人とも」

「お返し期待してるわよ」

「スバルと同じ事言っな。あまり期待しないでくれ」

「なら、体で返してくれても」しっかりとお返ししてやるから楽しみにしとけ」

身の危険を感じたのでドゥーエの言葉を遮る

「あらそう」

ドゥーエは少し不満そうな顔をしたが直ぐに笑って

「なら、お返しは高級チョコね。楽しみにしてるわよ」

「……私も楽しみにしてるから」

は、嵌められた

「それじゃあねー」

「……それじゃあ」

ドゥーエとルーテシアは笑いながら出て行った

「はあ、やれやれ。これは破産も有り得るな」

ま、ウダウダ考えてても仕方がないし、ヴィヴィオを迎えに行くか部屋からでて玄関に向かうと物陰から声が聞こえてきた。少し覗いてみるっキャラがエリオにチョコを渡している所だった

『あ、アノ、エリオ君、は、ハイ、コレ、チョコレート』

『あ、アリガト、キャラ。トツテモウレシイヨ』

エリオもキャラも、緊張しすぎて片言になってるじゃねーか

「キユクー、キユクキユク（本当に二人とも緊張しすぎです。もうちょっとリラックスすれば良いのに）」

「うん、なに言ってるかはわからんが呆れてるのはわかった」



突然フリードが頭に乗ってきて溜息のような鳴き声を漏らす

「ヴィヴィオを捜しに行くんだが、一緒に行くか？」

「キュー、キュクルー（はい。今の主達の近くには居たくありませんから）」

なんとなく、了解を得た気がしたのでフリードを頭に乗せたまま歩き出す。が、近くの休憩室から聞こえた声にまた立ち止まる

『はい、グリフィス君、チョコレート』

『ああ、ありがとう、シャーリー』

『グリフィスさん。私のチョコも貰ってください』

『ルキノもありがとう』

「おお、モテモテだな、グリフィスさん」

「キュークー、キュクルー（あなたが言わないでください）」

なんか、フリードに馬鹿にされた気がするが、気のせいだろ

玄関を出て、ヴィヴィオ達の散歩コースを捜すが、なかなか見つからない。いつの間にか、整備ドックまで来ていた

一応中を覗くと、そこには、チョコを渡しているアルトとそれをデレレと受け取っているヴァイスさんが居た。

「ヴァイスさん、シグナムさんが居るのに、デレデレして。それに、アルトもヴァイスさんには彼女が居るのに」

「いや、自分の彼氏がモテているのは別にいいのだ」

「！？シグナムさん、居たんですか！？」

急に後ろで急に声がして、ビクツとしながら後ろを向くと、レヴァンティンを手に持ったシグナムさんが阿修羅のような殺気を纏って立っていた

「だがな。やはり、自分の彼氏が他の女にデレデレしているのを見るのはいい気がしないな」

「そ、そうですね」

シグナムさんの殺気に声が震える。気づくと、フリードはどこかに行っていた

「そ、それじゃあ、俺はヴィヴィオを捜さないといけないので失礼します。非殺傷設定は解除しないでくださいね」

それだけ言っつてその場をそそくさと立ち去りながら心の中でヴァイスさんに合掌しておく。

ドックから少し遠ざかった場所でフリードが帰ってきた

「どこ行ってたんだよ」

「キュー（あの場所に居るのは無理です。耐えられません）」

「なに言ってるのかわからないけど、気持ちは痛い程よく伝わった」  
とりあえず、またフリードを頭に乗せて隊舎に戻る

「おい、キヨン」

廊下を歩いていると、ヴィータさんに呼び止められた

「どこかしましたか？ヴィータさん」

「あ、えっと、その」

ヴィータさんはなにか言い辛そうに少し俯いて口ごもった後、決心したように顔をあげてポケットから箱を取り出して

「こ、このチョコ」「papier」

しかし、その声は後ろから走ってきたヴィヴィオの声に遮られた

「ヴィヴィオもチョコレートつくったからたべてー」

ヴィヴィオの方を向くと、確かに手のひらサイズの箱を持っている。すぐに受け取ってやりたいけど、今はタイミングが悪い

「悪いな、ヴィヴィオ。今ヴィータさんと話してるから少し待ってくれるか？」

「うん」

「ありがとな。えっと、なんの話でしたっけ？」

ヴィータさんの方へ向き直るともの凄い不機嫌な顔になっていた

「これ、はやて達が作ったたやつ之余りで作ったチョコ。お前にやるよ」

そう言っつて無造作に渡してくる

「ありがとうございます」

「別に、余りで作ったんだし。それにお前は結構もらってんだろ」

「え、ええ、まあ、全部義理ですけど。でも、貰えるのは嬉しいですから。ありがとうございます」

全部義理の辺りでフリードに溜息をつかれた気がするが気のせいだよな

ヴィータさんかというと、何故か真っ赤になっていた

「ヴィータさん、顔真っ赤ですよ！？熱があるんじゃないですか？」

「別に熱はねーから大丈夫だ。じゃあ、あたしは仕事に戻るから。

後、あたしのは義理じゃないからな」

そう言っつとヴィータさんは駆けて行った

義理じゃないって、他に何があるんだ？

なんでそこで本命とゆう可能性が思い浮かばないw

「フリード、ブラストレイ」

「キョクルー」

ギャア

「パパ、あぶないよ」

「大丈夫だ。殴っても潰しても凍らしても死なないから。それより、ヴィヴィオもチョコ作ったんだな」

「うん。アイナさんに教えてもらったんだよ」

「そうか、ちゃんとお礼言ったか？」

「うん」

そんなことを話ながら部屋に戻ると、机の上に置いてあったチョコの数が増えており、手紙が置いてあった

【あたしからのバレンタインチョコよ。ちゃんとお返しは二倍返しにすること】

てことは、ハルヒからのチョコか。あいつもくれるとはな。感情をなくしても、お祭り好きは変わらないか

「結構貰えたな。全部義理ってのが少し寂しいところだが」

まあ、でも、貰えたんだから喜ぶべきだよな。ヴィヴィオを捜している間にもイベント好きの女性局員から何個か貰えたし。谷口辺りが見たら襲いかかって来たかもな

後日談とゆうか今回のオチ。その後、晩飯も終わり、9時になったので、昼に集まった会議室に行くと、服が所々焦げ、精気を吸い取られてげっそりとしたヴァイスと、他二人が既に来ていた

「じゃ、じゃあ今日の収穫の発表だな。まずは俺からだな」

先ずヴァイスさんがそう言って十数個のチョコを取り出す。その中にはやてさん達が配ってたのもある

「これは、本命はシグナム副隊長とアルトの2つですね」

「ヴァイス陸曹、彼女が居るのに本命が二個あるのはどうかと思いますよ」

「べ、別に良いだろ。チョコを貰うぐらいわ」

「それでシグナム副隊長から折檻を受けたんですから反省してください」

「うっ、はい」

「じゃあ、次は僕ですかね」

グリフィスさんもチョコを取り出す

「これも本命はシャーリーさんとルキノさんの二個ですね」

「こいつだって本命二個もらってるじゃねーかよ」

「グリフィスさんは別に誰とも付き合ってるじゃないでしょ」

「ちなみにどうなんですか？二人とは」

「黙秘権を使わせて貰います」

「次は僕ですよ。えっと、これです」

エリオが渋々といった感じにチョコを取り出す

「エリオは本命はキャラだけか。ま、これは妥当だな」

「そうですね。ちなみに、エリオもキャラとはどこまで行ったんだ？」

「僕も黙秘権を使わせてください」

さて、最後は俺か。とは、言っても本命なんか一つも貰ってないから気が滅入るな

「さて、キヨンが出す前に予め聞きたいんだけど、本命何個貰ったと思うてる？」

「0個ですよ。なんですか、本命二個貰えたのがそんなに嬉しいんですか？浮気陸曹」

「ちげーよ。しかもなんだ、その不名誉な呼び方は。まあ良いや、さっさと出せよ」

ヴァイスさんに促されてチヨコを取り出す。すると、3人が呆れた顔をしてひそひそと話し出した

『どこが本命は一個も貰ってないだよ』

『殆ど本命ですよ、これ』

『僕達が貰ってない人のもありますしね』

3人は話終わったらしくこちらに向き直った

「あのな、キヨン。ヴィータ副隊長とかドワーエとかルーテシアとかのチヨコは誰も貰ってないんだよ」

「へえ、渡し忘れたんですかね」

「いや、ちげーだろ。それに、フェイトさんのチヨコだって俺達が貰ったのお前がもらったのは大きさが違うだろうが」

「箱がこれしかなかったんじゃないですか？」

「絶対ちげーよ。お前、わざとだろ。ホントは気づいてんだろ」

「へ？なんのことですか？」

「駄目ですよ。ヴァイスさん。キヨンさんホントにわかってません」



「鈍感もここまでくると、一種の犯罪ですね」

3人の話の内容についていけず、俺はただ首を傾げるしかなかった

【番外編】バレンタインは戦争です（後書き）

優希「あとがきコーナー。この鈍感が！」

キヨン「いきなりなんだ？」

優希「うっせ、このリア充が。爆発しやがれ」

キヨン「意味がわからん」

優希「ふん。謝辞のコーナー」

キヨン「なんか、釈然としねーな。なっぺ様、バルディッシュ様、水橋様、感想ありがとうございます」

優希「次回こそはオリジナル展開。とゆうわけで、朱神優希とキヨンでした。感想お待ちしてます」

燃え盛れ、烈火（前書き）

やっと書けた。いつも以上にぐだぐだです。シグナムさんは出ませ  
るのであしからず。後、今回は霊亀さんの贈り物を使っています

## 燃え盛れ、烈火

今日の俺達は珍しくレリックの回収へと向かっていた。いやまあ、それが本来の仕事なんだけど

「実際現場に出るのは久々だよな。スライムの時以来か？」

「なに？スライムって」

「あ、ギン姉は居なかったんだっけ？この間97管理外世界に行った時に回収したロストロギアなんだけど」

スバルはギンガにこの間の事を説明しだした。俺は手持ち無沙汰になって適当に窓の外を眺めながら、今回の任務のおさらいを頭の中でしておく

今回反応があったのは少し人里離れた大きな湖がある森の中。そして奇妙なのがガジエットの反応が一つも無い事だ

『おい、そろそろ降下ポイントに着くぞ。準備しろ』

と、そこでヴァイスさんの声が聞こえたので思考を中断する。さて、気合い入れないとな

「今回はガジエットの反応がないけど、しっかり気を引き締めて。何らかの罠って可能性もある」

「……はい……」

こうして、簡単な作戦会議も終わり、俺たちはへりから降りて森へと入っていった

レリックは割と簡単に見つけた。しかし、オマケ付きで

「来やがったな！ルールーを攫った極悪集団共め！」

レリックが入っているであろうケースの前に露出度の高い悪魔のよ  
うな格好をしたラインサイズの少女がフワフワと浮いていた

「（あれってユニゾンデバイス！？ライン曹長の他にもいたんだ）」

「（そんな事よりも、ルールーって誰よ？あたし達が攫った事にな  
ってるけど）」

「（聞いてみるしかないだろ）おい、ルールーって誰だ？俺たちは  
そんな奴を攫った覚えはないぞ」

「しらばっくれんじゃねー。四番から聞いたぞ。テメーらが下水道  
の所でルールーを攫ったってな！」

下水道って……ルーテシアの事か。となると、多分四番ってのはク

アット口の事だな。あいつらの名前って数字になってるらしいし

「待て、俺達はルーテシアを攫ったない。保護したんだ。クアット口が嘘をついてるんだ」

「うっせえ、んなの信じられるか！死ね！」

相手はそう言うのと大きめの火炎弾を撃ってきた。けど

『ステータスロード。ロードファイルネーム“ユーノ”』

「ラウンドシールド」

俺の張ったシールドでなんなく防ぐ。シールドには傷一つ入っていない。

流石、ユーノさんのセーブデータ。なのはさんのディバインを防ぐ盾は伊達じゃない。

「なっ！？」

自分の攻撃を防がれたのがショックなのか固まってしまっている。隙だらけだな

「フープバインド」

「うわっ！？」

とりあえず、バインドで縛りあげる

「このっ、放しやがれ。卑怯だぞ！」

「落ち着いてくれ。俺達はルーテシアを攫ってない。保護したただだ」

「だから、んなの信じられるかって言ってるんだよ」

「じゃあ、どうしろってんだよ」

「知るかよ。クソツ、テメーらなんか旦那がいれば簡単に蹴散らせるのに」

誰だよそれ、と問いかける前に木々の間から敵つい顔をした槍型のデバイスを持った男が高速で突っ込んで来た

「アギトを返して貰おうか」

「なんでさっきから俺達は人攫いみたいになってんだよ」

男が振るってきたデバイスをシールドで受け止める

「頼むから少しぐらい話を聞いてくれ」

受け止めたデバイスを弾いてレヴァンティンを創り出して構える。が、男は俺ではなくスバルとギンガを見ていた

「お前達のそのデバイスは……クイントの」

「母さんを知ってるんですか!？」

スバルとギンガの顔が驚愕に染まる。さて、話がややこしくなつて来たぞ

「ゼスト・グランガイツだ」

男はそう名乗った。ゼストさんの話によると、八年前、ゼストさんはスバル達の母親、クイントさんとルーテシアの母親、メガー又さんの上司として管理局の局員で部隊の部隊長をしていたらしい。そして、とある事件を調べている最中に、クイントさんは死亡、メガー又さんは重傷を負い、ゼストさんも一度死んだが、スカリエッティに人造魔導師として蘇生させられたらしい。そしてゼストさんと先程のユニゾンデバイスのアギトはルーテシアと一緒にメガー又さんを治せる可能性があるかとスカリエッティが言っていた?? 番のレリックを探していたらしい。

「そしてアギトはルーテシアが単独行動をした時にお前達がルーテシアを連れ去って拷問しているとクアットロに聞かされたらしい。その時俺はその場に居なくてな。今朝アギトの姿が無かったから慌てて探していたら」

「アギトをバインドで捕縛してる俺達を見つけたって事ですか」

「そうゆう事だ」



なんとも傍迷惑な話だ。

「でも、ゼストさんはその話を信用しないんですね」

「ああ、スカリエッティから情報が来ていたからな。機動六課とゆう部隊がルーテシアを保護していると」

「それならなんでアギトはこんな行動を？」

「あいつはスカリエッティ達の事を信用していないんだ。だから、クアットロの嘘を信じてしまったのだらう」

スカリエッティ達を信じてなくてクアットロを信じるって矛盾してるな

「アギトはルーテシアの事をとても気にかけているからな。ルーテシアがどこかへ行ったとゆう不安がクアットロの嘘を信じさせたのだらう」

まあ、あまりアギトを責める気にはなれないな。本当に心の底から心配してたんだらうな

「とりあえず、このレリックは回収するとして、ゼストさん達はどうしますか？少し話を通せばルーテシアに会えると思いますけど」

「そうだな。どうする？アギト……アギト？」

アギトを縛り上げていた筈の場所にアギトの姿は無かった

「やばっ、バインド解かれてる」

「なにやってんのよ、あんたは！」

「まさか、保護者が居るのに逃げ出すとは思ってなかったんだよ。それに、それを言うならお前だつてアギトがバインド解いたことに気づかなかつたんだからお互い様だろうが」

「そんなくだらないこと話してる暇は無いでしょ。捜すわよ」

ギンガの叱咤で正気を取り戻した俺達はバラバラになって捜し始めた

あれ？でも、別に捜す必要無くないか？

#### アギト視点

あたしはあの地味な男のバインドから抜け出して適当に飛んでる。

くそっ、なんなんだよ、あいつら。四番はルーラーを攫った悪党だつて言うし、けど、旦那はあいつらと普通に話してるし

「あー、もー、ムシヤクシヤする」

イライラしながら湖の近くまで来ると地面に降りて休憩する

「っーか、なんであたし逃げて来たんだろ。旦那がいたんだから逃げてくる必要なんて無かつたのに」

それもこれも、全部あの地味な男のせいだ。……なんとなく

その時、ジャリツと砂を踏む音と何かが近づいてくる音がした

くそっ、もう追いついて来やがったのか？それとも旦那が迎えに来てくれたとか？

そう思いながら後ろを向くと

「は？馬？」

そこに居たのはさっきの局員共でも旦那でもなく、目が真っ赤に染まった背中に翼が生えた馬だった

「なんでこんな所に馬が……」

あたしがそう呟いたのと、馬が飛びかかって来たのはほぼ同時だった。あたしは突然の事で反応出来ずに、目を瞑っちまった。けど、来るはずの痛みはなく

「バスタアアアスパイク！」

とゆう、叫び声と爆音、そして、そのすぐ後に何かが地面に叩きつけられる音がして、目を開けると馬は少し遠くで倒れていて、目の前にはさっきバインドをかけてきた男が片足だけ裸足の状態で立っていた

#### キヨン視点

とりあえず、手分けしてアギトを捜していたら、意外とあっさり見つかった。が、またしてもオマケ付きで

「なんでこんな所にペガサスが。つーか、実在したのか」

しかも、ペガサスはアギトに襲いかかりアギトは反応出来てない

「くそっ、タナトス！」

『ステータスロード。ロードファイルネーム“フェイト”ソニックムーブ』

高速でアギトの方へ向かいながらマツハキャリバーを創り出す

「チャージ、プラズマザンバー」

『all right チャージ、プラズマザンバーブレイカー』

片足に砲撃の威力を溜めて跳び

「バスタアアアスパイク！」

ペガサスの横腹をソニックムーブの加速で威力を上げた跳び蹴りで蹴り飛ばす。リボルバーナックルと同じようにマツハキャリバーも負荷に耐えられず壊れた

「テメー、なんで」

「死ぬよりは良いだろ。それに、お前をルーテシアに合わせなくちゃならないからな」

ペガサスの方を見るともう立ち上がっていた。しかもピンピンしてる。ちよっとショックだな。かなり本気で蹴ったのに

「けど、あたしはお前らを殺そうと」

「別に死んでないし、あんなの、怖いとも思えねーよ。一回背中刺されてるからな。だから気にしてねーよ」

それよりも、今は目の前のペガサスだ

『マスター、あのペガサスからレリックの反応がします』

「なっ、タナトスが普通の言葉を喋った!？」

『驚く所はそこですか!？』

だって、本当に久しぶりだからな。っと、今はペガサスに集中しないと

「レリック反応って、呑み込んだらどうか？」

『いえ、寧ろ埋め込まれて操られている可能性の方が高いかと』

「どうすっかな。殺すのは気がひけるし」

『でしたら、高出力の魔力ダメージでレリックだけを破壊する事を推奨します』

「それしかないか。けど、バスタースパイクでダメージ与えれなかったのに、魔力ダメージ通るのか？」

『そこは……気合いで!』

「無茶苦茶言うな！」

気合いでなんとかなるのは漫画の中のキャラかチートだけだ。そんな事をタナトスと話てる間に本当にダメージが抜けきったのかペガサスが襲いかかって来た

「くそっ」

それをシューターや大剣を使って牽制しながら逃げ回る

「おい」

襲いかかってくるペガサスを必死に牽制しながら逃げ回っていると急にアギトに声をかけられた

「どうか、のわっ、したか？つと、出来れば手短にして欲しいんだが、っつ、危ね」

くそっ、このペガサス、動き良すぎだろ。マジで危ない

「あたしとユニゾンしろ。そうすりゃ、もし　まあ、ほぼ確実にだけど　適合率が低くても少しは技の威力が上がる筈だ」

「は？いきなりなに言って」

「あたしをルーラーに会わせんだろ。だつたらやれ」

ティア達がいつ来るかもわからないし、此処は仕方がない

「わかった。じゃあ、行くぞ、アギト」

「ああ」

「ユニゾン・イン」

三人称

キヨンがアギトとユニゾンした瞬間、周りの気温が急激に上がった。それは、この時期では有り得ない温度まで。髪は赤く染まり、目は烈火の如く朱色に染まった

『なんだ、これ。全然適合率が低くない。それどころか、コイツの魔力』

「アギト、考え事は後にしてくれ！」

キヨンは自分の中で何かを考えているアギトに声をかけながら襲いかかってくるペガサスの攻撃を避ける

『あ、ああ』

「お前は魔力をタナトスに流してくれ。タナトス、砲撃一個、即興で創れるか？」

『マスターが望むなら』

その返答にキヨンは少し笑うと魔法を構築しようとするが

「って、構築してる暇がない」

ペガサスの攻撃により、中断された。考えてみれば当たり前的事だ。唯でさえ、砲撃魔法は撃つのに溜めがいるのに、今回は魔法自体を作らなくてはいけない。ペガサスが攻撃して来る中でそんな暇があるわけない

「あ、いた。キヨン！……だよね？」

キヨンがどうしようかと悩んでいるとタイミング良くスバルとキヤロが合流した

「他に誰が居るんだよ」

「いや、髪とか目とか、後バリアジャケットがガラツと変わってるから」

「ああ、これ今アギトとユニゾンしてるんだ」

「「ええ！」」

「つか、説明してる暇がない。ちょっと準備するからスバルはこいつの気を引きつけてくれ。キヤロ、補助魔法を頼む」

「わ、わかった」

「は、はい」

スバルがペガサスの方へ向かって行き、キヤロはキヨンの近くへと駆け寄っていき、補助魔法の準備をする。キヨンは目を閉じて魔法の構築に専念する



「キャラ、頼む」

「はい。我が請うは破滅の光。紅蓮の砲撃手に明星の加護を」

『Buster up』

キヨンの目の前に陽炎が上る魔力の塊が出来上がり大きさを増していく

「スバル、退け！」

キヨンの声を聞いたスバルが退けると、ペガサスは、キヨンが放とうとしている砲撃の威力を本能的に察知したのか、逃げだそうと後ろを向くが足下から鎖が出て来てその動きを止めた

「ナイスだ、キャラ」

「キヨンさん、早くしてください。長くは持ちません」

「ああ、分かった。燃え盛れ、地獄の劫火」

魔力の塊が一際大きくなり、

「ブラストバアアアンブレイカアアア」

膨れ上がった魔力は未だ鎖から逃れようとするペガサスに向かって放たれた

キヨン視点

「それで、キヨン。なにか言い訳は？」

「レリック壊すのにあれぐらい必要かと思って」

砲撃の直撃で、気絶したペガサスの隣で正座した俺を真上から睨みつけてくるティアの視線に耐えられずに下を向いて、言い訳をする

「あんだねえ、だからって、結界も張ってないのにSLB並みの砲撃を撃つバカがどこにいるのよ！」

「いや、あそこまでの威力が出るとは思わなかったんだよ」

「言い訳しない！」

ティアは溜め息をつきながら俺が作ってしまったクレーターを見る

「どっすんのよ、これ」

「まあまあ、被害が甚大になる前に抑えたって事で」

「あのね、そんなことで」

「それに、そんなに怒っていると嫌われちゃうよ？」

スバルの言葉にティアの怒りのボルテージが下がって行くのが分かる。？怒ってるティアを鎮める程嫌われたくない相手って誰だ？

『…………お前、よく鈍感って言われるだろ』

出すのをすっかり忘れていたため、未だに俺の中に居るアギトが溜め息と共に言ってくる

「（ああ、たまに言われるけど。なんで今）」

『はあ、こりゃ重症だ』

??なんだってんだ

後日談とゆうか、今回のオチ。その後、ユニゾンを解いて、ヴァイスさんに迎えに来てもらい（ペガサスもなんとか詰め込んだ）隊舎へと帰ってきた俺達は

「ルルー！」

「……アギト、ゼスト」

アギトをルーテシアと合わせる事が出来た。アギトもゼストさんもルーテシアの元気な姿に安堵してるようだし、ルーテシアも2人に会えて嬉しそうだった

「これでハッピーエンドに行けば文句のつけようが無かったんだがな」

自室の机に向かってしている状態で溜め息をつく

『口より手を動かしてください、マスター』

わかってるよ。そう返しながら、改めて机の上に堆く積み上げられている書類を見てもう一度溜め息をつく。

今回のあれはこの、最低でも3日は掛かりそうな始末書やその他諸々の書類整理でチャラとゆうことになった。とは言っても、元々こうゆうデスクワークはやったことがないのでかなり苦戦している。なので、ティアやスバルが少し手伝ってくれてはいる

「ティア達には今度なにか奢らないとな」

『手を動かしてください』

「へいへい」

タナトスにせき立てられて仕事を再開した

アギト視点

「話ってなんだよ？旦那」

夜、旦那に呼び出されたあたしは建物のロビーみたいな場所に来ていた

「お前はこれからどうするんだ？」

「どうするって、旦那の手伝いを」

「その後だ。ここの部隊長の八神が、魔力に最大限までリミッターをかけてデバイスも預けるとゆう条件で今度の公開意見陳述会に連れて行ってくれると言ってくれた。そこでレジアスと話が出来れば俺の目的は果たされる」

「なら、ルールの……」

「それだって、いつかは片付く。俺とルーテシアの目的が果たされた後、お前はどうするんだ？」

「そんなの……」

なにも考えてない。とゆうか、そんなの考えたことも無い

「例えば、俺以外のロードを見つげるとかな」

旦那の言葉で真っ先に思い浮かんだのは昼間のあの男

「まあ、まだ時間はある。ゆっくり考えろ」

そう言って旦那は行ってしまった。1人残されたあたしは近くにあった椅子の上に降りる

……あたしは、これからどうすればいいんだろ

## 燃え盛れ、烈火（後書き）

優希「あとがきコーナー。閲覧数が五万を越えたぜ」

キヨン「また唐突だな」

優希「なので、なにか、記念話を書きたいんだが、アイデアが出て来ない」

キヨン「それよりさっさと続きを書け」

優希「後二、三話ぐらいオリジナルを書いたら六課襲撃を書くから」

キヨン「なにをそんなに書くことがあるんだよ」

優希「今回のペガサスの事とか、お前のフルドライブの事とか」

キヨン「おい、ネタバレになってるぞ」

優希「こんぐらいなら大丈夫。最後に謝辞のコーナー」

キヨン「バルディッシュ様、なっぺ様、感想ありがとうございます  
た」

優希「とゆうわけで、朱神優希とキヨンでした。感想お待ちしてま  
す」

キヨンとタナトスを徹底的に調べてみる（前書き）

遅くなりました。最後の方はかなり強引かな？

## キヨンとタナトスを徹底的に調べてみる

アギト達に来てから3日。書類整理も終わり、ぐったりしていると突然マリエルさんに呼び出された

「急に呼び出してどうかしましたか？マリエルさん」

「うん、今日はキヨン君とタナトスを調べてみようと思ってね。あ、後、マリーで良いよ」

「は、はあ。わかりました。それで、調べるって具体的にはなにするんですか？」

「そりゃ、麻酔うつて体を……」

「失礼します」

身の危険を感じたので、踵を返して早急にこの場を立ち去ろうとして

「ご、ごめん。冗談だから、逃げないで！」

マリーさんにごつちりと腕を掴まれてしまった。因みに今俺達が居るのは六課のロビー。なので、周りの視線が痛い。しかも、所々殺気があるのが尚恐ろしい

「ちょっと、わかりましたよ。だから腕放してください」

「ぶふふ」



なんか、詰められた気がする

「それで、結局、調べるってなにやるんですか？」

「キヨン君の魔力値を測定したり、タナトスの精密メンテナンスをしたり、後はアギトとのユニゾンの適合率の測定かな？」

「最初の二つは、まあ良いとして、最後のは必要ですか？俺、もうアギトの奴は俺とユニゾンする気なんてないと思うんですけど」

「まあまあ、そう言わずに。報告書みただけど、あれだけの威力を出せるって事はかなりの適合率って事だし、データを採るだけだから…ね？」

「まあ、それなら。アギトが良いって言うならやりますよ」

「ありがとね。それじゃあ、アギトに確認取って、それから本局へ移動ね」

そう言っただけで歩き出したマリーさんと一緒にアギトとゼストさんがいる部屋に行き、アギトに確認を取ると想像以上にあっさりについて来てくれると言った

「どつゆつ風の吹き回しだ？お前は俺の事嫌ってると思ってたんだがな」

「うつせえ。旦那に此処に居る間はなるべくお前らに協力しろって言われたからだよ」

「ふうん」

そんな感じで、場所は変わって本局のよくわからん研究スペースみたいな場所。俺はこれまたよくわからん測定器みたいなものを体にペタペタと貼られる

「それじゃあ、始めるよー」

マリーさんの声を合図に周りの機械が動きだすが、特に俺の方に違和感があるわけでもない

程なくして、周りの機械が止まり、貼られていた機械のコードみたいなのも外される

「それで、どうでしたか？」

「んー、一言で言うなら、キョン君、何者？」

マリーさんはそう言いながら一つの画面を見せてくるが、如何せんこういった事に全く知識がない俺である。どうゆう結果が書かれてあるのか全然わからなかった

「この数値で行くと、最低でもSS、最高でSSSぐらいかな。ほんと、なのはちゃんといい、はやてちゃんといい、なんで97管理外世界出身者はこんなに魔力量が高いの？」

「いや、俺に聞かれましたも」

俺の知ったこつちや無い。あえて言うならハルヒがそう望んだとか？いや、なのはさん達が魔導師になったのは十年前。ハルヒの力が現れたのが三年前。流石にハルヒの力も時間を遡りはしないだろ

「それで、次は？」

「先にアギトとの適合率はかって、それからタナトスのメンテナンス」

「じゃあ、さつさと終わらせましょう。適合率も此処ではかるんですか？」

「ううん。別の場所。流石に此処でユニゾンされたら、色々被害が出るからね」

まあ、確かにそうだな。とゆうわけで、またまた所変わって今度は屋内の訓練場みたいな広い場所。その中央あたりに俺とアギトと、それといつ合流したのかリインと一緒に居た

「なんているんだよ」

「マリーのお手伝いです。ユニゾンのことなら同じユニゾンデバイスのリインも居た方が良くもって」

「へえ」

それまでジツとリインを見ていたアギトが唐突に口を開いた

「なあ、あたしこいつ嫌いだ。チビだし、頭バツテンだし」

……ほんとに唐突だな、おい

「なっ、いきなりなんなのですか！？失礼ですよ、アギト」

「うつせえ、バツテンチビ」

「ば、バツテンチビ!？」

「頭バツテンでチビなんだからバツテンチビだろ」

「この髪飾りははやてちゃんとお揃いですし、身長はアギトだってリインとあまり変わらないじゃないですか!」

「あ?バツテンチビのクセにやんのか、コラ!？」

「ま、またバツテンチビって。……もう怒りました。アギトとは少  
SHOHANASHIする必要があるみたいですね!」

「はっ、そりゃこっちのセリフだ。あたしの前に跪かせてやるよ」

まさに一触即発の雰囲気。これを治めるのも俺の仕事なんだろう?は  
あ、めんどくさい

「その辺にしとけ、二人とも。リイン、お前今仕事なんだろうが  
アギトも、ゼストさんに協力しろって言われてるんだろ?だったら  
あんまり突っかかるな」

二人ともまだ睨み合っているが、とりあえず今すぐドンパチやりだ  
すって事態は避けられたみたいだ

「ふん、今日は見逃してやるよ。バツテンチビ」

「それはこっちのセリフです!バカアギト」

うわあ、犬猿の仲ってこういう事を言うんだろつな

『さて、そろそろケンカ終わった？』

通信でマリーさんが聞いてくる

「いや、見てたんなら手伝ってくださいよ」

『いやー、キヨン君そつというの慣れてるっぽかったし、あたしどうもそつゆづの苦手です』

「まあ、良いですけど。とりあえずユニゾンすれば良いんですよ」

『うん。後はこっちで適当に調べるから』

「わかりました。とりあえず、ユニゾンするぞ、アギト」

タナトスを起動してアギトを呼ぶ。未だに睨み合っていたアギトが渋々といった感じでこちらに来る

「じゃあ、行くぞ」

「ああ」

「ユニゾン・イン」

アギトとユニゾンした瞬間俺の姿が変わる。とは言っても、2Pキヤラみたいに色が変わるだけだが。これで二回目だがどうにも慣れないな、この変化

『あ、あれ？おつかしいな、故障？』

「どづかしましたか？」

『う、うん。ちょっとね。ごめん、一度ユニゾン解いてくれるかな？』

「はあ…」

言われるままユニゾンを解く

『あれ？直った？……ごめん、もう一回ユニゾンしてくれる？』

「たく、なんなんだよ、ユニゾンしろって言ったり解けて言ったり」

「文句言っなって」

ぶつぶつと文句を言うアギトを宥めながら言われたとおりもう一度ユニゾンをする

『……………これは……………キョン君、アギトとユニゾン解いてラインとユニゾンしてみて』

「え、いきなりなに言ってるのですか？マリー」

マリーさんの発言にラインが戸惑ったように聞き返す

『私の考えが正しいなら、多分、大丈夫』

「……一応やってみるか、リイン」

「……わかりました」

アギトとのユニゾンを解いてリインに近づぐ

「いくぞ、リイン」

「はいです」

「ユニゾン・イン」「」

リインとユニゾンした途端周りの温度が下がった気がした

『これは、凄い。下手をするとはやてちゃんより適合率が高い』

『うん、その通りだよ。三人ともユニゾン解いてこっちに来てくれるかな』

言われるままユニゾンを解いてマリーさんが居る場所に向かう

「それで、なにかわかったんですか？」

「うん、キヨン君の魔力はアギトとユニゾンした時もリインとユニゾンした時も反応が消えてる。逆にアギト達の魔力反応は異常に高くなってるの」

「つまりどうゆう意味だよ？もうちょっと分かりやすく言ってくれ」

アギトが首を傾げてマリーさんに聞き返した

「うーん、つまりね、キヨン君の魔力はユニゾンした時完全にリイン達の魔力と同じになってるの。だから、適合率も100%だし、普通にユニゾンするよりかなり強くなる」

「そんな奴がいるんだな」

「だからはやてちゃんより適合率が良かったんですね」

「そうゆうこと。これはちょっとした戦力アップだね。アギトだけじゃなくてリインともユニゾン出来るのはかなりプラスだと思うよ」

「いえ、ですからアギトはもう俺とユニゾンする気は無いんですけど」

「は？あたしがいつお前とユニゾンしないって言ったんだよ」

俺の言葉を否定したのは、なんと、アギト自身だった

「つーか、お前は今日からあたしの新しいロードだからな」

「ロード？」

「えーっと、簡単に言えばご主人様って事ですよ」

「はあ！？」

リインの説明に驚いている俺をよそにアギトは話を進める



「いや、旦那に言われたんだよ。旦那達の手伝いが終わったらあたしはその後どうするのかって。別に旦那達にずつついててもいいんだけど、やっぱりあたしはユニゾンデバイスだから新しいロードを探してそいつに仕えるのもありかなーって」

「で、それがキヨン君って事？」

「ああ。こんなに適合率が良いんだ。他に居ないだろ」

「出来れば他を当たって欲しいんだが」

「却下だ」

一瞬で却下された

「まあ、運命だと思って諦めなよ、キヨン君」

無責任な言葉を投げかけてきたマリーさんを少し恨めしく思ったのは内緒だ

その後タナトスを預けてその日は終わった

後日談とゆうか、今回のオチ。

次の日タナトスを返して貰うためにマリーさんのもとを訪れた

「タナトスのメンテ終わりましたか？」

「うん。それでね、1つ聞きたいことがあるんだ、キヨン君。タナトスは既存のデバイスとは違う技術で作られているからあまり細か

い部分はつづけなかつたんだけど、1つだけ人の手が加えられてど  
うやっても閲覧できない場所がある」

そう言つてマリーさんが1つの画面を開く

「それが此処。フルドライブに関するデータ。なのはちゃんもシャ  
ーリーもこれには手を出してないって言つてたから、これをいじつ  
たのはキヨン君だよね？」

「はい」

嘘をついてもどうしようもないから素直に答える

「中身を見せてくれないかな？」

「……お断りします……と言つたら？」

「無理やりにもこじ開ける」

「冗談を言うような雰囲気じゃないよな。多分マリーさんは本当にや  
るつもりだ」

「わかりました。ただ、絶対に前線メンバーには教えないくださ  
い。後、見ても止めないでください」

「……言わないでつてのは、隊長陣やフォワードメンバーって事？」

「はい。後は、ラインとザフィーラにも」

「……わかつた。約束する」

俺はタナトスを受け取って閲覧禁止のロックを解除する

フルドライブの内容を見たマリーさんの顔がみるみるうちに強ばっていく

「……これは、危険すぎる。使ったらキョン君の体はただじゃ済まないよ」

「危険なのは承知の上です。それにこれはまず使いませんし使わないといけない状況にもなりづらいはずですよ。所謂保険ですよ」

「でも……」

「止めないでくださいって言いましたよね」

俺の確認にマリーさんは言葉を詰まらせ、そして諦めたように溜め息をついた

「わかった。これ以上口出しはしないし、約束通り前線メンバーには誰にも言わない」

「ありがとうございます」

「ただし、私からも約束させて。本当に危険な時にしか使わないって」

「わかってますよ。俺もまだ死にたくないですから」

その後少し話をしてからタナトスを受け取って帰った

マリエル視点

キヨン君が帰ってから大きく溜め息をつく

「教え子は教官ににるのかなあ？」

けど、キヨン君のフルドライブはなのはちゃんのブラスターシステムより危険だ

「願わくば、彼があれを使わないといけない状況が訪れませんかよう」

私は切にそう願うのだった

キヨンとタナトスを徹底的に調べてみる（後書き）

優希「あとがきコーナー」

キヨン「簡潔に遅れた理由を言え」

優希「学校の課題に追われてた」

キヨン「本当は？」

優希「後輩に借りた俺妹ポータブルとリトバスやってた」

キヨン「SLBとPZBどっちが良い？」

優希「どっちも遠慮したいなあ」

キヨン「そうか、トリプルブレーカーか」

優希「いや、言ってないよ!？」

なのは「全力全開！スターライト」

フェイト「雷光一閃！プラズマザンバー」

はやて「響け終焉の笛！ラグナロク」

優希「ちよっ、もう3人とも撃つ準備万端だし！」

3人「ブレーカー!!!」

優希「 # & \* \* % < 」 声にならない断末魔

キョン「さて、作者も死んだし、謝辞のコーナー終わらせて帰るか。なっぺ様、バルディツシユ様、霊亀様、サーペント様、感想ありがとうございました」

優希「じ、次回から閲覧数五万人突破記念としてコラボをします。なので多分また更新が遅くなります」

キョン「まだ生きてたのか。ブラストバーン」

優希「止めて！これ以上の追い討ちはマジで洒落にならない！！」

キョン「ブレーカー！！！！」

優希「 # & \* \* & \* \* # # % ° < ° < 」 声  
にならない(ry

キョン「とゆうわけで、炭化したなにかとキョンとなのはさん、フ  
イトさん、はやてさんでした。感想お待ちしてます」

【閲覧者五万人突破記念 番外編】バグとチート（前書き）

今回はなっぺさんとのコラボです

【閲覧者五万人突破記念 番外編】バグとチート

「暇だな」

朝練も終わって特になにもする事がなくヴィヴィオと一緒に散歩をしながらいたらと時間を過ごしていたら、少し遠くから誰かの口論が聞こえてきた

………なんか声に聞き覚えがあるな

少し気になったので覗いて見ると、たまに見かける六課の局員と、どこからどう見ても小学生女子しか見えない異世界の俺の友人、吉谷吼太がなにやら口論していた

「だーかーらー、俺は子供じゃないし、女でもない！」

「うんうん、わかったからお父さんとお母さんを探しに行こうね、お嬢ちゃん」

「だーかーらー！」

このままだと延々と同じ事を繰り返しそうなので止めに入っている

「その辺にしろといて下さい。俺の知り合いです」

局員は俺の顔を見ると何故か納得した顔をして去っていった

「いやあ、助かったぜ、キヨン。まったく他の世界に来るとなんでい



「つつもあんな扱いなんだ？」

「そりゃ、お前の容姿が幼すぎる上にお前の顔が女  
童顔だから」

「今確実に女顔って言おうとしたよな」

「仕方ないだろ。お前、普通に下手な女優より可愛いんだから」

「全然嬉しくねえ！」

とりあえず、今まで通りなのはさんに報告。今はヴィヴィオを連れて食堂に来ている

「どこの世界も六課の中はあんま変わんねーな」

「そりゃ変わったらびっくりだよ。……そういや、お前今何歳だ？」

「今年で二十歳だな」

……

「一応言っとくが嘘は言ってねーからな」

「……あ、ああ。全然変わらねーな、お前。最初にあっただのはお前が中学生の時だっけ？」

「ああ。俺からするともう三、四年ぐらい前になるな」

「俺的にはまだ半年も経って無いんだがな」

平行世界は時間の流れに差があるらしいからな。これは仕方ないか  
ひとしきり世間話を終わらせて本題に入る

「で、今日はどうしたんだ？ 吼太。流石に世間話をするために来た  
わけじゃないだろ？」

「ああ、暇だったから暇つぶしにライトを殴りに行こうかと思った  
んだけど、最近そればかりで飽きたからキヨンと模擬戦やろうか  
と思っただけな」

「色々ツツコミたい所はあるが、なんで俺なんだ？ 他にも俺より強  
い知り合いぐらい居るだろ」

「ついでに鍛えるためだ。お前、俺の知り合いの中で一番弱いから  
な」

まあ、弱いのは事実か。実際まだライトにもヒスイにも一度も勝っ  
たことないし。ただ、面と向かって言われるとちよっとキツいな

「わかった。鍛えてくれるんなら有り難い」

「よし、じゃあ、やるか」

「但し、ハンデぐらいつけてくれよ」

三人称

場所を移して訓練場。キヨンはアギトとユニゾンして吼太と対峙する

「手加減無しで行くぜ」

「俺を殺す気か？」

「大丈夫、セツトアップはしないし、リミッターも解かないでおくから」

キヨンは何時もの大剣を創り出して構える

「じゃ、行くぜ！ガードスキル、ハンドソニックver1」

吼太の腕が剣のようになり、突っ込んでくるのを、とっさにバックステップで避けるが、素早く追撃する

「アギト！頼む」

『おつよ、烈火刃』

キヨンの大剣が炎に包まれ、吼太の剣を受け止める。が、大剣を弾かれ、開いた腹に蹴りをもろに喰らい吹き飛ばされる

「ぐっ、まだまだ」

『ステータスロード。ロードファイルネーム“ティアナ”』

キヨンがレアスキル発動と共にフェイクシルエットを発動する

(なんだ？今のこの状況でこの魔法を使う意味があるのか？)

フェイクシルエットは文字通り偽の影であり、実体はない。その上  
使用には相当な集中力を必要とし、動くことすら出来なくなる。そ  
れ故に1対1、しかも目の前に敵が居る今の状況では自分を不利に  
するだけである

(よくわかんねーけど、実体は目の前に居るんだ、さっさと潰す)

吼太は周りに居るシルエットを無視して目の前で魔法を使っている  
実体を攻撃しようとして

「っ！」

左右と上から感じた魔力と殺気にとっさに後ろに飛び退いた

すぐに前を向くと、左右にリボルバーナックル片方ずつ付けたキヨ  
ンとマツハキヤリバーをつけたキヨンが立っていた。マツハキヤリ  
バーをつけたキヨンの立っている地面は抉れている

「ブラストバアアアン」

そして、先程までフェイクシルエットを発動していたキヨンがいつ  
の間にか砲撃を溜めており

「ブレ カアアア！」

躊躇なく放った

キヨン視点

どうだ？やったか？

流石に魔力がキツくなったのでその場に座り込む

「リミッターかけたまんまだったら危なかったな」

吼太がいつの間にか俺の横に立っていた。まあ、当たるとは思ってたけどどな

「リミッター解かないんじゃないのかよ」

「あんなのリミッターかけたまんま諸に喰らえるか！」

「まあ、リミッターを外させる事が出来たと思うか。悪いが、もう動けんぞ」

「なあ、さっきのフェイクシルエットはなんだったんだ？」

ああ、あれか

「俺は自分の分身を創ることが出来るんだよ。だから、そのカモフラージュにフェイクシルエットを使ったんだ。尤も、これはタナトスが一回使ったのをちょっとアレンジしただけなんだけどな」

「ふうん、そうか」

吼太は俺の説明を聞きながらジツパーの中からなにかを取り出した。

「けん玉？」

しかも普通よりかなり大きいけん玉だった。つか、どうやって出した？あのジツパーは四次元ポケットか？

「まあ、確かに形はそうだけだな。バツボ、Systemギンタ、Ver4 アリス」

吼太の声と共にけん玉が女性の形になり俺の体が軽くなった

「よし、これで動けるだろ？」

元に戻ったけん玉を仕舞いながら聞いてくる

「ああ。かなり楽になった」

「そうか。ディメンションアーム、修練の門」

目の前の地面に扉が出来る。嫌な予感がする

「なら、これから修行だな」

「い、いや、この後仕事が……」

「この中は時間の流れがこっちの60分の1倍の速さだから充分時間はある。つべこべ言わずに来い！」

腕を握られて有無を言わせずに門の中に連れて行かれた

帰って来たのは、こっちの世界での二時間後。死ぬかと思った

【閲覧者五万人突破記念 番外編】バグとチート（後書き）

優希「あとがきコーナー。今回は吼太に来て貰いました」

吼太「どうも」

優希「とは言ってもなにもして貰うことが無いんだよね」

キヨン「毎回そんなんじゃないか？」

優希「じゃあ少し近況報告を。昨日終業式だったんだけど、見事留年を免れました！」

キヨン「ゲストが来てる時にする話じゃなーよな」

吼太「とりあえず、おめでとう」

優希「ありがとう。じゃあ、吼太に謝辞のコーナーをやって貰ってから終わりにします」

吼太「バルディッシュ様、なっぺ様、霊亀様、サーペント様、感想ありがとうございます。……なんでうちのまで様付けにしないくちや」

キヨン「それはうちの作者が小心過ぎるからだ」

優希「いらんことを言わなくても良いの！とゆうわけで、朱神優希とキヨンと吼太でした。今回は霊亀様とのコラボです。感想お待ちしています」



なっぺ様、こんな感じでよろしかったですか？

【閲覧者五万人突破記念 番外編】人狼の子守（前書き）

今回は壺亀さんとのコラボです

【閲覧者五万人突破記念 番外編】人狼の子守

「で、なんでまた俺は呼び出されたんだ？」

朝練の一時間前。目の前に座っているライトが不機嫌そうに聞いてくる

「いや、今日ザフィーラが留守でさ、ヴィヴィオの相手をしてやって欲しいんだ」

「嫌だ」

「頼むよ。朝練が終わるまでで良いから」

両手を合わせて懇願する

「……はあ、わかったよ。但し、なんか奢れよ」

「ああ、今度スバルオススメのお菓子を買ってやるよ」

とりあえず時間が近づいて来たので、後はライトに任せて朝練へと向かった

「あ、因みに、狼の状態だからな」

「さっさと行けよ」

ライト視点

たく、キヨンの奴め。こっちだって忙しいんだぞ

ぶつぶつと文句を言いながらヴィヴィオが起きるのを待つ

「ん、んー？」

「お、起きたか？」

少ししてヴィヴィオがむっくりと体を起こす

「あれ？ライト？」

「ああ」

「ザフィーラは？」

「ザフィーラは今日は出掛けてるんだと。だからキヨンが帰ってくるまで俺が面倒を見ることになった」

「そーなんだ」

ヴィヴィオはまだ眠いのか時々船を漕ぎながら相槌を打ってくる

「ほれ、そろそろ起きて顔洗え。寝癖もついてるぞ」

「うん」

のろのろと布団から這い出たヴィヴィオは危なっかしい足取りで洗

面所の方へ向かう

そーいや、キヨンに狼の姿で世話しろって言われたんだよな。どーすっかな

「あらってきた」

「早いな。なあ、ヴィヴィオ。俺がこのまんまと狼の状態になるの、どっちが良い？」

「モフモフー」

つまり狼って事だな。ちくしょう

諦めて狼に変身すると、ヴィヴィオが飛びついてきた

「やっぱりライトのモフモフきもちいー」

「ザフィーラとどっちの方が良い？」

「んー、どっちも」

ま、そりゃそうか。俺って答えられても困るしな

「さて、これからどうすっかな。いっつも何やってるんだ？」

「えーつとね。ザフィーラといっしょにおさんぽして、それからパパのおむかえ」

「そうか。じゃ、散歩に行くか」

「うん！」

部屋から出るとちよつどこつちの世界のはやてに会った

「おはようございます。はやてさん」

「あ、おはようさん、ヴィヴィオ。……そちらの犬は？」

「犬じゃ無くて狼だ。ザフィーラが居るんだからそれぐらい区別してくれ」

「あ、ごめんなさい。……って、誰!？」

あ、しまった。ここのはやてには会ったこと無いんだった

「高町から話は聞いてるだろ？ライト・T・ハラオウン。異世界のキヨンの知り合いだ」

「ああ、そういえばこの間なのはちゃんから聞いたわ。それで今日はどないしたんですか？」

「なんか、今日はザフィーラが居ないからってヴィヴィオの子守を頼まれたんだ」

「そうだったんですか。わざわざすみません」

「いや、別にはやて……八神が謝る事じゃねーよ。それより仕事のほうは大丈夫なのか？」

俺の問いにこっちはやては腕時計を見て慌てだした

「やばっ、またリインに怒られる。それじゃ、ライトさんゆっくりしていつてください。ヴィヴィオ、迷惑かけたらあかんよ」

そう言うてはやては早足で去っていった

「それじゃ、今度こそ散歩に行くか。とはいっても、具体的にどこに行くってんだ？」

「えーっと、たてものまわりをグルーってまわるの」

「そうかなら行くか」

「うんー！」

ヴィヴィオを背中に乗せて歩き出す。

「ライトのせなかもふもふー」

ヴィヴィオが背中にか抱きついてくる……とゆうよりこれはもう締め付けてる、だな

「落ちるなよ」

「うん」

そのままぶらぶらしていたらいつの間にかヴィヴィオが寝てしまった

「おーい、起きろ、ヴィヴィオ。落ちちまっぞ」

反応なし。駄目だこりゃ。幸いヴィヴィオは俺の毛をしっかり掴んでるしこのまま落とさないようにキヨンの所に行くか

こないだキヨンと模擬戦をした場所に向かうとちょうどキヨン達が建物の方へと帰って来ている所だった

「あれ？ライトさん、また来てたんですか？」

俺に気づいたエリオが問いかけてくる。……改めて見るとこっちのエリオとキャロはうちのより少し大きいな

「ああ、キヨンにヴィヴィオの子守を頼まれたからな」

「あ、それで背中にヴィヴィオが乗ってるんだ」

「悪かったな、ライト。てゆうかヴィヴィオはまた寝てるのか」

「よっぽどライトさんの毛が気持ちよかったのね」

「そのまま起きるまで乗せといてくれないか？」

「またかよ？」

「今起こすのもかわいそうだろう？」

ま、それもそうか。そんなに重いわけでもないし、起きるまでのせとくか

十分後



「ほんとにもふもふですねー、ルーお嬢様」

「……うん」

「結構気持ちいいな」

「どうしてこうなった？」

頭の上にアギト、背中にヴィヴィオでその横にセインとルーテシア……ほんとにどうしてこうなった？

「おまえの毛が気持ちいいからだろ」

「ぜんぜん嬉しくねーよ！」

結局開放されたのは三十分後。なんか最近俺こんな役ばっかじゃね？

キヨンに買わせたチョコ菓子を持って帰りながらそんなことを思った

【閲覧者五万人突破記念 番外編】人狼の子守（後書き）

優希「あとがきコーナー。今回はライトに来てもらってます」

ライト「こつちの世界での俺の立ち位置って一体」

キヨン「もふもふな犬（おおかみ）」

ライト「なんか、漢字が間違ってる気がする」

キヨン「気のせいだ」

優希「それじゃ、謝辞のコーナーよろしく」

ライト「なんか、納得いかねーけど。霊亀様、なっぺ様、バルディッシュ様、感想ありがとうございました」

優希「次回はオリジナルをやって、それから六課襲撃をやるつもりです。とゆうわけで、朱神優希とキヨンとライトでした。感想お待ちします」

## キヨンのペット？（前書き）

今回はご都合主義＋グダグダに満ち溢れています。が気にしたら負けです（なにに？）

## キヨンのペット？

皆は俺がプラスチックバーンをぶっ放したペガサスを憶えているだろうか？俺は忘れてた

まあそれは置いて、その存在をキャロに言われて思い出した俺は、午後からオフシフトだというフェイトさんとスバルとキャロに同行してもらい保護されている場所に様子を見に来たわけだが

「なんか懐かれた」

「くー」

なぜか小さくなっていくペガサスに懐かれてしまった

「いやー、この子全然元気がなくてさー。良かった良かった」

このペガサスを世話していたらしい女性が笑って言うがこっちは笑い事じゃない。フェイトさんもキャロもスバルも微妙な顔をしている

「つつても、俺こいつを一回のしてるしな」

力加減がわからなかったとはいえ、本気で

「だからじゃないの？この子が操られてるのを止めたんでしょ？だから命の恩人だと思ったとか」

スバルが少し考えた後で言うてくる

「そうなのかねえ。とゆうかこいつ何でこんなちいさくなってんですか？前は俺より大きかったはずなんですけど」

「ああ、その子、ほんとはまだ子供だったのよ。それがレリックの力で無理やり大人の姿にされてたの」

女性の説明を聞いたキャラコの顔が暗くなる

「昔の私の暴走みたいですね」

「それはキャラコに悪意があったわけじゃないじゃん。そうですよね？フェイトさん？」

「う、うん。キャラコが気にすることじゃないよ」

フェイトさんたちがフォローするが、場を沈黙が支配する。

く、空気が重い。なにか話題を変えねーと

「そついえば、こいつどうするんですが？」

少し気になった事を聞いてみる

「（キョンナイス）」

スバルが念話で話しかけてくる

「（あの空気には耐えれないからな）」

「んー、出来れば引き取ってくれない？」

「は？」

「いやー、いつまでもここに置いてくわけにもいかないしさ」

目の前の女性はあっけらかんと笑ってる

「それに、あんまりここに置いていたら実験台にされかねないからね」

「……キヨンさん」

はあ、そんな事言われたらキャラ口が同情して

「……キヨン」

そんなキャラ口にフェイトさんが過保護を発動させて

「……わかりましたよ」

俺が流されるんだよな

「どんまい、キヨン」

くそ、スバルめ、人事だと思って

「でも、結構可愛いじゃんこいつ」

結局連れて帰って来てしまったペガサスは、意外なことにナンバーズ組に大好評だった

「くりゅー」

「もうこの子の名前は決めてるの？キヨン」

ああ、そういえばぜんぜん決めてないな

「なんかいい案あるか？ドゥーエ」

「そうね……羽馬、羽馬……ディーノなんてどうかし」

「却下だ」

それは『はねうま』間違いだ

「じゃあじゃあ、シンプルにペガ君」

「シンプル過ぎないか？セイン」

しかも名前に君が入るのはどうかと思うぞ。

みんなが腕をくんで考え込む

「こつゆうのはキャラ口が適任なんじゃないのか？フリードってキャラが名付けたんだろ？」

「確かにそうですけど、私もあんまりネーミングセンスいいわけじ

「やないですよ？」

「そうか……ルーテシアはどうだ？」

「……私もあまり得意じゃない」

……俺が考えるしかないのか、これ。羽か、羽ねえ。羽……ウイング

「ウインディとかどうだ？」

ウイングを少しもじったただけだが

「……………」

なんかナンバーズ組の表情は微妙なんだが

「まあいいんじゃないの？その子も気に入ってるようだし」

「くー」

「じゃあ、今日からお前はウインディな」

「よかったねー、ウインディ（語感がウェンディに似てるんだよねー。実際一文字しか使わないし）」

ひとまず名前は決まった

「で、キヨンはこの子を使役獣にするつもりなのかしら？」

「使役獣？」



「キャラのフリードみたいなものよ。この子はあなたの事をかなり気に入っているみたいだしISすら使えるあなたの力があればキャラの竜魂召喚の真似事は簡単だと思うのだけど」

確かに、簡単ではないにしてもキャラのセーブデータを軸にしたこいつを強化する魔法は作ることは出来るだろう。けど

「お前はどうしたい？」

こいつは一度レリックの実験台として利用されている

そんなこいつをまた戦いに利用するような真似をしても良いのか？

「くりゅー！」

だが、帰ってきたのはやる気に満ちた鳴き声だった

「この子はきつと命の恩人であるキヨンさんの役にたきたいんですよ」

「くりゅー！」

キャラの言葉に同意するようにウィンディが鳴く

「ふふ、あなたが心配する必要もなかったわね、キヨン」

「そうみただな。じゃあ、やってみるか。タナトス、キャラ、ルーテシア、手伝ってくれるか？」

『マスターを補助するのが私の仕事ですから』

「私に出来ることがあるなら、出来る限り手伝います」

「……キヨンのためなら何でもやる」

あんまり男に向かって何でもやるとか言わないほうがいいぞ、ルーテシア。その気持ちは嬉しいけどな。

こうして俺たちは空いた時間を少しずつ使って魔法を作っていた

後日談とゆうか今回のオチ。数日後、俺たちは訓練所にいた

「じゃあ、行くぞ。天を奔る疾風、わが脚となり大地を駆ける。来よ、我が獣ウインディ。獣魂召喚！」

俺の詠唱が始まると同時にウインディの足元に魔方陣が現れ光に包まれ、光が消えると姿が変わり大きくなっていった

「成功ですね」

「おー、可愛いかったのがずいぶんかつこよくなったね」

「最初に会ったときの姿をモチーフにしてるからな」

魔法を解いてウインディの姿を元に戻す

「くりゅー」

俺の肩に乗ってきたウィンディの首筋を撫でてやると気持ちよそ  
うに脱力する

「これからよろしくな、ウィンディ」

「くりゅー」

キヨンのペット？（後書き）

優希「あとがきコーナー」

キヨン「なあ、今回の話必要だったか？」

優希「必要だったよ。ただ強引だったとは思うけど」

キヨン「だったらもう少し何とかしろよ」

優希「仕方ないだろ。これが僕の限界なんだよ！」

キヨン「開き直るな！」

優希「はい…。謝辞のコーナー」

キヨン「霊亀様、なっぺ様、バルディッシュ様、感想ありがとうございます」

優希「次回はとうとう六課襲撃。ところで、セインがこっちの仲間である今の状況でチンクの救出は誰にさせればいいんだろう」

キヨン「それを考えるのがお前の仕事だろうが」

優希「まあ、そうなんだけども。とゆうわけで、朱神優希とキヨンでした。感想お待ちしてます」

超今更ながら改めてキヨンとタナトスの設定を書いてみる（前書き）

優希「まえがきコーナー」

キヨン「おい、六課襲撃を書くんじゃない無かったのかよ？」

優希「ちゃんとそれも更新してるよ。ただ、少しキリが良いからキヨン達の設定をちゃんと書こうと思ってさ」

キヨン「前書いてたのとは違う設定の場所がいくつかあるんだが」

優希「その辺は最近考えた場所。元の設定とは違う場所とかあるけど、深く気にしたら負けだよ」

キヨン「何にだよ。まあ、良いか」

優希「とゆうわけで、朱神優希とキヨンでした。この話のあとがきコーナーは無いです」

超今更ながら改めてキヨンとタナトスの設定を書いてみる

キヨン（本名不明）

年齢 17歳

魔力量SSS〜SSS

魔力変換資質 『火』『雷』『氷』（フェイト、シグナム、エリオ、リイン、クロノのセーブデータ使用時）

インテリジェントデバイス タナトス

魔力光 薄い黄色

希少技能（レアスキル） 記録と使用と改造（セーブ&ロード&チート）

能力説明 手を握った相手の能力を記録<sup>セーブ</sup>して使用<sup>ロード</sup>出来る。これはIS、レアスキルのような魔法以外の能力にも適応される。そして、その能力を改造<sup>チート</sup>することが出来る

例：キャラの竜魂召喚 獣魂召喚 スバルのリボルバーキャノン  
リボルバーキャノン セインのISをバリアジャケットを纏ったまま  
使用できるようにする、等

タナトス

バツクル型インテリジェントデバイス

待機状態 時計型

女性人格

基本的に待機状態、バックルモード、フルドライブしか存在しないが、やろうと思えば真・ソニックフォーム、ブラスタースystem、ギア・エクセリオン等を使うことも出来る

## 六課襲撃1（前書き）

とゆうわけで、六課襲撃1です。何話ぐらいやるかの目処は立って  
いません（オイ



## 六課襲撃 1

今日はだいぶ前にフェイトさんが言っていた地上本部警備の日がやってきました

「え、俺隊舎で待機ですか？」

「うん。この間の出張任務みたいにヴィヴィオを地上本部に連れて行くわけにもいかないから、キヨン君とライトニング部隊は隊舎で待機。地上本部も大切だけど敵にヴィヴィオをさらわれるのはなんとしても避けなくちゃいけない事態だから」

確かにそうだ。ヴィヴィオは『聖王のゆりかご』とかゆうロストロギアの鍵でドゥーエの話じゃ、レインはもうそのロストロギアを手に入れてるらしい。だから敵は絶対ヴィヴィオを狙ってくる。そんな時に全員が地上本部に行くのは愚の骨頂だ

「私達隊長陣はみんな向こうの警備にまわるけど緊急事態にはグリフィス君が指揮を執ってくれるしザフィーラやシャマルさんがいるから大抵の事は大丈夫なはずだよ」

まあ確かに。それにドゥーエやセイン、ルーテシアもいるんだ。なんとかなるだろ

それがどれだけ甘い考えだったかを知った時にはもう全てが終わっていた

スバルたちが地上本部に向かって四時間。とりあえず今のところ異常もなくいたって平和だ

「きゅーー!!」

「くりゅー!!」

「またか」

「またですね」

目の前でフリードとウィンディが喧嘩してなけりゃもっと平和なんだがな

どうもこの二匹は反りが合わないらしくよく喧嘩をする。しかも一度喧嘩し始めると緊急事態にでもならない限り決着がつくまでキヤロの言うことすら聞かなくなるから性質が悪い

「まあ、喧嘩が出来るのも平和な証拠だよ」

「そうね。このまま何もなければいいのだけれど」

そのときだった。突然隊舎中に警戒のアラートが鳴り響いた

「来たようね」

『敵襲。バックヤードスタッフは直ちに避難してください。スターズ5、ライトニングFは直ちに迎撃の準備に入ってください』

「行きましよう、キャラ、キヨンさん」

「うん。フリード」

「ああ。ウィンディ」

さっきまで二匹が喧嘩をしていた方を見るといつの間にか止めて大人しく待機していた

「……私も行く」

「今回はあだし達も手伝う事になってるからね」

「行きましよう」

途中でシャマルさんとザフィーラに念話でハルヒとヴィヴィオの安全を確認して敵の反応が向かって来ている場所へと向かった

「ここがロングアーチからの報告があった敵の向かって来ている方向の真正面なんだけど、まだ姿は見えないわね」

その時、なにかが、凄いスピードで迫って来た

「みんな下がれ！ラケーテンハンマー！」

とつさにラケーテンフォームのアイゼンを作り出して迫って来た何かを殴りつけるが、当たる直前で、後ろに跳ばれあまりダメージをあたえれなかった。その姿はルーテシアのガリユーに似ていた

「流石、チートに鍛えられただけあってこの程度は見切るか」

声と共に今まで誰も居なかった目の前の空間に数人の人間が現れた

「てめえは、あの時の」

真ん中に居たのはセインに教えられた基地跡に行った時に出会った女顔の男だった

「また会ったな。僕のこと覚えてたんだ」

「まあな」

その横に居る髪の長い女性が口を開く

「お久しぶりです。ドゥーエお姉様、セインお姉様」

「ええ、久しぶりね、ディード、オットー」

「おひさー」

「まさか、お姉様方が寝返るとは思いませんでした」

長髪の隣の中性的な顔のぱつと見は男にも見えなくはない女（ドゥーエから姉妹は女だけだと聞いている）が話に入る。

つまりあの二人はナンバーズとゆうわけか

「私はレインのやり方が気に入らないのよ。それより、その小さな子は誰かしら？初めて見る子だけけれど」

「彼女はルーテシアお嬢様の遺伝子を元に作られた人造魔導師の」

「エグザです。よろしく」

男の横の竜に乗っているキャロヤルーテシアぐらいの女の子が後を引き継ぐ

確かに顔はルーテシアに似てるが、性格は真反対みたいだな

「こちらの要求は2つだ。1つは『聖王の器』ヴィヴィオ、『神の器』涼宮ハルヒ、ルーテシア・アルピーノの引き渡し。2つ目は機動六課の本拠地であるその建物の完全なる破壊だ。この条件を呑むなら君達は勿論、他の人間も傷つけない事を誓う」

「そんな条件、呑むと思ってるのか？」

「はあ、死にたい。そう言うと思ったよ。交渉は決裂だ。此处からは、実力行使で行くよ」

男が銃を撃ってくるのをかわして、クロスミラーージュを創り出して魔力弾を撃つ

「キヨン！」

「お姉様方のお相手は私達です」

「じゃあ、私の元と他二人は私の獲物ねー」

「くっ」

「どうやら、二手に分けられたみたいだ」

「そういえば、お前の名前、聞いてなかったな」

「式見虫だ」

「やっぱり日本人か。お前はなんでこんな事を」

「大切な人達を守る為だよ」

「分かり切ったことだが、説得は無理か。」

「来よ、我が獣ウィンディ。獣魂召還！」

「ウィンディを戦闘モードにする。」

「こうなったら仕方ない、今出せる全力で相手する」

## 六課襲撃1（後書き）

優希「あとがきコーナー」

キヨン「最近更新速度が速いな」

優希「ゲームが一段落ついたし、学校が休みだからね」

キヨン「ふうん。次回は俺と式見の戦闘か？」

優希「うん。ただ、頭の中では出来てるんだけど、文章にするのに時間がかかるかも」

キヨン「早く書けよ」

優希「努力します。謝辞のコーナー」

キヨン「バルディッシュ様、霊亀様、なっぺ様、感想ありがとうございます」

優希「とゆうわけで、朱神優希とキヨンでした。感想お待ちしてます」

## 六課襲撃2（前書き）

よし、書き終わった。式見螢に対するツッコミは極力無しの方  
向でお願いします



## 六課襲撃2

「そういえば、君のデバイスはタナトスって言うんだっけ？」

「それがどうかしたか？」

お互い睨み合ったまま会話をする。相手の武器が銃である以上迂闊には動けない

「別に。ただ僕の知り合いに同じ名前の女の子が居るだけだよ」

「そうかよ」

「あ、そういえば、1つ言ってなかったけど」

刹那、式見が腰のケースからカードを取り出して銃に装填し、引き金を引く

『カメンライド デンオウ、ゼロノス、キバ』

電子音と共に目の前に赤い装甲とを纏った人間が二体と緑の装甲を纏った人間が一体現れる

「俺、参上！」

「最初に言っておく。俺はかーなり、強い」

「キバって行くぜ」

最後の奴の声が俺に似てるのは気のせいか？

「僕自身は戦わないから。僕が呼び出す奴らを全員倒せたら、僕は諦めるよ。行け」

式見の号令と共に一斉にかかってくる

三人称

「タナトス！チャージ、アクセル」

『all right チャージ アクセルシューター』

キョンが両腕にリボルバーナックル、足にマツハキヤリバーを創りだし、片腕だけにアクセルシューターをチャージして、かかってくる奴らの攻撃をかわして腹に一発ずつ入れてやる

シューター系のチャージはバスターナックルで唯一装備を壊さずに連続で攻撃が出来るチャージだ。その分威力は落ちるが、相手に隙を作るには十分の効果がある

「蹴り上げる、ウィンディ」

その隙にウィンディの蹴りが作られた奴らを吹き飛ばし、その姿が消えた

「はあ、死にたい。やっぱりこんなじゃ無理か」

「最初からわかってたんなら出すなよ。お前が自分で来た方が早いんじゃないのか？」

「いや、あいつらはただの小手調べさ。悪いけど、もう君が有利になることは無いよ」

そう言っつて式見は二枚のカードを取り出す

そこに書かれているのは仮面ライダーではなく、人間が書かれている

『ヒーローライド ネギ・スプリング・フィールド、アイカワアユム』

電子音と共に十歳前後の少年とキヨンと同年ぐらいの青年が現れる

「さっきの奴らの方が強そうなんだが」

「見た目はね。行け」

青年の方だけがキヨンの方に向かう。

「ガアアア！」

その青年に向かってウィンディが攻撃しようとするが

『モンスターライド ベヘモス』

「お前の相手はそいつだよ」

式見が召喚したモンスターに行く手を阻まれた

「ウィンディ、お前はそっちに集中しろ！」

キヨンそう指示してバスターナツクルは発動したまま殴りかかる

「……………200%」

青年とキヨンの拳がぶつかり、キヨンの方が吹っ飛ばされた

「なっ!?!」

(俺が押し負けた!?!まだアクセルシユーターはチャージしたまま  
だったはずなのに)

すぐさま体勢を整える。どうやら青年は無駄に追撃する気は無いら  
しい

(確かに舐めてかかったら駄目だな)

「チャージ、デイバイン」

『all right チャージ デイバインバスター』

(さっきの威力ならデイバインよりは弱いはず)

キヨンの準備を待っていたかのように男が走ってくる

「……………500%」

「ぐっ!?!」

またも押し負けてキヨンの体が吹っ飛ぶ

（また押し負けた！？あいつの攻撃さつきよりも威力が上がってやる）

「……魔法の射手・雷の千一矢（サギタ・マギカ・コンウエルゲンティア・フルグラリス）」

少年の詠唱と共にシューターのようなものが一斉にキョンに向かって飛ぶ

『ステータスロード。ロードファイルネーム“ユーノ”』

「ラウンドシールド多重展開！」

キョンは咄嗟にラウンドシールドを五重に作り出して防ぐ

「……600%」

しかしいつの間にか接近してきていた青年の拳がラウンドシールドを砕いた。

（嘘だろ、少し脆くなってるにしてもユーノさんのラウンドシールド五枚だぞ！？）

「くそつ、出し惜しみしてたら死ぬ。チャージ、スターライト」

『fall right チャージ スターライトブレイカー』

「流石に、今の状態じゃあれは無理か」

それを見た式見が腰からカードを取り出し装填し撃つ

『フォームライド マソウシヨウジヨ』

電子音と共に青年の服装がフリフリの可愛い女物の服に変わる

「ふざけてんのか?」

「僕はいたって真面目だよ」

「……1000%」

青年の眩きと共に衣装がさらに可愛くなっていく

「マジでふざけてんじゃねーのか?」

「だったら試してみればいいだろ」

式見がそう言うのと同時に青年が駆け出しキヨンに殴りかかる。それをキヨンも真っ向から迎え撃ち、両方の拳がぶつかった衝撃で二人とも吹っ飛び土煙があがる

「ぐっ、どうなった?」

土煙が晴れるとそこに青年の姿は無かった

「負荷に耐え切れずに消えたか」

「何とか……倒せたか」

キヨンが荒い息を整えながら咳く

「勝負ありだよ。もうその腕は使い物にならないだよ」

確かに、一番強く負荷がかかったキヨンの右腕は使い物にならなくなっていた

「んなわけねーだろ。たとえ右腕が使えなかつても降参はしねえ」

「はあ、君は僕に似てるな。けど、君程度の力じゃ何も守れやしない」

そう言つて式見は一枚のカードを使う

『フォーミュライド 雷天双壮（タストラパー・ヒューペル・ウーラヌー・メガ・デユナメナー）』

電子音と共に少年の体が雷になる

「力の差を思い知れ」

式見のセリフがキヨンに届く頃には、キヨンは少年に殴られていた

キヨン視点

「か…はっ」

全然見えなかった。それどころか気配すらわからなかった

こんな事を考えている間にも俺は現在進行形で殴られ続けている。

しかも、その一撃一撃が重たい

ドスッ

「っ……」

最後の一撃とばかりに今までで一番強く殴られる。もう声すらあげられない。俺を殴っていたガキはもう十分だと思ったのか、式見の所に戻って行く

「グウウウ」

ウィンディが吹っ飛ばされるのが目の端に映る

そして、式見に呼び出された奴らはその姿を消した

「わかっただろ？それがお前の実力だ。諦めろ」

式見はそれだけ言うと俺に背中を向けて歩きだした

ふざけんなよ。俺はまだ、やれる

レイジングハートを創りだして文字通り杖にして立ち上がる

「……ディバ……イン」

「はあ、死にたい。諦めが悪い所も昔の僕にそっくりだよ」

『ファイナルアタックライド ディ・ディ・ディ・ディ・ディエンド』

「バス……ター……」



「デイメンションシュート」

俺が撃った砲撃は、式見が撃った水色の砲撃に呑み込まれ、俺の意識は途切れた

## 六課襲撃2（後書き）

優希「あとがきコーナー。今回はキヨン不在の為、式見蛭君に来て貰っています」

蛭「普通、僕が来ても良いの？」

優希「いいの、いいの。さて、今回はお前とキヨンの戦闘だったわけだが」

蛭「正直に言つて、今回の無理がありすぎるよ。第一、今回の話は原作の僕を知つてなくちゃ理解出来ないでしょ。いや、知つても理解しづらいと思うけど」

優希「いや、大丈夫な筈だ。多分」

蛭「多分じゃ駄目なんだよ」

優希「うるさい。お前の能力とかについては後々本編で語るから」

蛭「あなたが何をしたいのかわからないよ」

優希「……それは自分でもわからない。とりあえず、謝辞のコーナー」

蛭「逃げたな。なつぺ様、バルディッシュ様、感想ありがとうございます」

優希「次回はルーテシア達かドゥーエ達のどちらかの視点を書こう

と思っています。とゆうわけで、朱神優希と式見瑠でした。感想お待ちしてます」

### 六課襲撃3（前書き）

今回はナンバーズ組。次回はルーテシア達をやって六課襲撃編は終わりです

## 六課襲撃3

ドゥー工視点

「はあっ!」

デイドの固有武装であるツインブレイズを私の固有武装であるピアッシングネイルで受け止める

「もう、おやめください、お姉様。あなた方と私達では、勝負になりません」

「あら、お姉様を舐めていたら痛い目にあつわよ?」

ツインブレイズを弾いてバックステップで距離を取る

デイドには余裕そうな顔をしたけれど、実際には余裕なんてない。

私達とこの子達では、まずISの用途が違うのだ。

この子達のIS、ツインブレイズやレイストームが戦闘用なのに対して私達のIS、ライアーズマスクにディープダイバーは隠密行動に特化した、戦闘とはかけ離れた能力。

そして、固有武装。辛うじて私のピアッシングネイルが武器として使えるけれど、セインのペリスコープアイは今の状況下ではなんの役にも立たない

つまり、私達が勝てる確率は限りなく低い

「レイストーム」

「っ、ドゥーエ姉!」

セインに腕を引っ張られて地面の中に潜り込み、距離を取って地上に出る

「どうしよ、ドゥーエ姉、あたし達めっちゃ不利だよ」

「そんな事、言われなくてもわかってるわよ」

勝てる見込みは限りなく低い。なら無駄だとしても話をしてみましよう

「オットー、デイド。あなた達は別にレインに忠誠を誓ってるわけじゃないのしょう?」

「ええ、その通りです」

「ならあなた達も此方に来れば良いじゃない。私達が戦う必要性は無いわ」

私の言葉に二人は顔を見合わせて……笑った

常に無表情の二人が声をだして笑っているとゆう光景は、あまりにも異質で歪でおぞましいものだった

「そうでした、お姉様は裏切ったから私達の現状を知らないんです」

「……現状？」

「教えて差し上げます。セインお姉様がルーテシアお嬢様とメガア又様を連れて逃げ出した時はまだなにもありませんでした。しかし、ドゥーエお姉様が裏切った時は違った」

「レインは私達が二度と裏切らないようにと拷問し始めたんです」

私が裏切ったせいで、この子達が……拷問を？」

「セインお姉様、トーレお姉様とチンクお姉様の性格は知ってますよね？」

「うん。2人ともすごい妹思いだよ。トーレ姉は否定するけどね」

「そうです。そして、お二人は私達を庇う為に私達の分まで拷問を受けてるのです」

そんな……

「今のお姉様達は私達戦闘機人の体が耐えられるぎりぎりまで消耗しています。あなたのせいです、ドゥーエお姉様」

わたし……の……せい？

セイン視点

「ちよつと、ドゥーエ姉？ドゥーエ姉！」

だめだ、あの双子の言葉で完全に混乱してる。ただでさえ勝てる確

率が低かったのにドゥー工姉がこんなじゃ絶対無理だ

「っ！」

その時デイドがツインブレイズで斬りかかって来た。ドゥー工姉が動いてくれないから回避が一瞬遅れて頬を掠める

掠めたところから血が出る

さっきまで非殺傷設定だったのに、今のこの二人、本気であたし達を殺す気だ

「こんな所じゃ死ねない」

妹に背中向けるのは情けないけど仕方ない。ドゥー工姉をしつかりと掴んでデーパーダイバーを使って地面に潜る

こうなったらヴィヴィオとハルヒを連れてとりあえず逃げよう

ペリスコープアイを使ってヴィヴィオたちが避難してる場所に向かうと、そこにはキヨンと戦っていたはずの式見螢が立っており、その横には気絶しているヴィヴィオとハルヒを抱えているガジェット？型がいた

「ん？セインか。お前がここに来たってことはオットー達が負けた……ってことじゃないみたいだな」

あたしが抱きかかえているドゥー工姉を見ながら式見が言う

「あんたこそ、どうやってここに」



「僕はお前とは違う」

それって、キヨンを倒したってこと？

「そこをどいてくれないか？」

「嫌だっって言ったら？」

キヨンを倒すようなやつに勝てるとは思わないけど、それでも隙さえあればガジェットくらいどうにかできる

「邪魔はさせない」

『ヒーローライド タチバナカエデ』

『アタックライド ハンドソニック Ver.1 デイレイ』

目の前に女の子が現れたと思った瞬間、あたしの意識は刈り取られていた

### 六課襲撃3（後書き）

優希「あとがきコーナー。とはいっても何もやることが無い」

蛭「知らないよそんなこと。自分で何とかしてくれ」

優希「……今回はさっさと終わろうか。謝辞のコーナーよろしく」

蛭「はいはい。霊亀様、なっぺ様、バルディッシュ様、感想ありがとうございました」

優希「とゆうわけで、朱神優希と蛭でした」

## 六課襲撃4（前書き）

これで六課襲撃編は終わりです。それと、ルーテシアたちの出番は少ないです

## 六課襲撃4

ルーテシア視点

「じゃあ、改めまして自己紹介しまーす。ルーテシア・アルピーノの遺伝子を使って作られた人造魔導師のエグザちゃんです。よろしく」

改めて見ると確かに顔は私にそっくり。だけど性格は全然似てない

「ルーちゃんに全然似てないね」

「うん」

エリオとキャロもそう思ったのか私の隣で呟いている

「それで、この子がガリユーの遺伝子使って作られた人造生命体。名前はギリユー」

どこかの特戦隊みたいな名前ね

「私の目的はー、私のオリジナルを連れて行くことだからー、その2人は邪魔しないでねー」

「嫌だよ。ルーちゃんは連れて行かせない」

「悪いけど、ルーは諦めてくれるかな？」

2人の言葉が嬉しい。私はここに居ても良いんだと思える

「だよー。じゃ、仕方ないね。ギリユー、お願い」

エグザの号令と共にギリユーがすごいスピードでこちらに迫ってくる

「させない！」

それをエリオが受け止めた

「コイツの相手は僕がやるから、2人はあの子をお願い」

そう言っただけでエリオとギリユーは遠ざかっていく

「フリード、エリオ君の援護お願い」

「……ギリユーも行っただけ」

フリードとギリユーがエリオの援護に向かう

「フリードはともかく、ギリユーまで向かわしたのは私を舐めてるんじゃないの？」

エグザが私達を睨んでくる

「……別に。私と同じ能力なら私達だけでも十分」

「それを舐めてるって言うてんのよ」

私の言葉を聞いた瞬間エグザの雰囲気が変わった

「いいわ。ただのオリジナルと強化されたコピーとの違いを見せてあげる」

エグザがなにかしようとしてるけど、やられる前にやる

「トーデス・ドルヒ」

「シューティングレイ」

私とキャロが同時に射撃魔法を撃った。けど、それはエグザが張ったシールドに防がれた

「こんなもん？じゃあ次は私の番ね」

そうやってエグザが私と同じ射撃魔法を撃ってきた。私もそれをシールドで防ごうとするけど

「なっ!？」

「ルーちゃん!？」

簡単に破られた!？

「まったく。おんなじ遺伝子だからって力がおんなじな訳無いじゃん。ちゃんとレインに改造されてるわよ」

そうだった、何で忘れてたんだろ

「じゃあ、十分にいたぶってから……なによ、こんなときに……..  
……ちっ、しかたがないわね」

目の前のエグザがいきなり、顔をしかめたかと思うと、とても不機嫌な顔になる

「はあ、他の二人は片付いたからさっさとしろって。もうちょっと遊んでいたけど、無理ね」

他の二人って、ハルヒとヴィヴィオのこと？じゃあ、キョンとドウ  
ーエたちはやられたの？

「ぐあああ」

その時、エリオの叫び声と共に、なにかが壁に叩きつけられる音が響いた

「あっちも終わったみたいだし、こっちも終わらせましょうか」

その声と共に私達は吹っ飛ばされて、意識を失った

式見視点

「ごめーん、遅れたー」

そう言っただけでエグザがこちらに飛んできた。その横にはルーテシアを抱えているギリユーもいる

「よくやった。さて、次は六課隊舎の破壊だな」

「もうちょっと褒めてくれてもよくない!?!」

エグザがギヤーギヤー言ってるけど、それは無視。今はこっちに集中する必要性がある。僕の頭の中にある知識を総動員してカードを三枚即席で創り出す。そして、カードを僕のデバイスのディエンドライバー 通称エンド に一枚装填して撃つ

『アンチヒーローライド ボシヨノヌシ』

エンドの声と共に目の前にフードを被った女性？が現れる。こいつは情報が少ないから出来がまいちな

「僕達以外のあの建物の中にいる人間の転送を頼む」

女性は頷くと何かの魔法を使って六課隊舎の中に居た人間を全員を被害の無い場所まで飛ばし、消えた

「建物内の生命反応全部消えました」

「わかった」

オットーの報告を聞いてからもう一枚のカードを使う

『ヒーローライド ブラゴ』

呼び出したのは王者の風格を持った重力を操る魔物の子、ブラゴ。創った自分が言うのもなんだけど、普通に怖いな。まあ、今回はこいつの力が最適なんだけど

『アタックライド バベルガ・グラビドン』

最後の一枚を使って、ブラゴに技を放たせる。流石に威力はかなり



抑えてあるがそれでも、隊舎を全壊させるにはお釣りが来るほどの  
威力があった

役目を終わらせたプラグも消える。これで僕が頼まれた仕事は終わ  
った

後は僕の好きにさせてもらっよ、レイン

## 六課襲撃4（後書き）

優希「あとがきコーナー」

蛍「次からは地上本部襲撃編だったよな？」

優希「そうだよ。それが終わったら少しオリジナルをはさんでゆりかご編突入」

蛍「どうせ、その間に番外編も挟まるんでしょ？」

優希「それは、その時の気分次第。謝辞のコーナーよろしく」

蛍「バルディッシュ様、なっぺ様、サーペント様、感想ありがとうございます  
ございました」

優希「とゆうわけで、朱神優希と、式見蛍でした。感想お待ちします」

地上本部襲撃1(前書き)

今回は少し長めです。ちよつとご都合主義かも

## 地上本部襲撃 1

スバル視点

地上本部の警備についてから三時間、特にこれといった事件もなく、  
言ってしまうえば暇だ

「ふわああ」

「ちよつと、スバル。もうちよつと緊張感持ちなさいよ」

「だってさあ、暇なんだもん。ティアだって、キヨンがいなくて暇  
でしょ？」

「へー、そうなのか」

ゼストさんと一緒に来たアギトも話に入ってきた

「なつ、ななななんそこでキヨンが出てくんよ。そ、そんな事  
思ってるわけないでしょ！」

「おー、タコみてーに真っ赤だな」

ホント真っ赤。わかりやすいなあ。けどあんまりからかったら後が  
怖いから、これ以上言わないけど

「こつちも向こうも何もなければ良いね」

「無理でしょうね。特に向こうにはヴィヴィオが居るから」

「だよ。でも、キヨンなら大丈夫だと思うよ」

魔力量もそうだけど、あのレアスキルならそう簡単には負けないと思う

「わからないわよ。ライトさんやヒスイさんみたいにキヨンより強い奴なんていくらでも居るんだから」

「うーん、でもあんまり悪い方へ考えても仕方ないし、大丈夫だよ」

「あんたのそのお気楽さが羨ましいわ」

「ぶー、私だって悩んだりする事はあるよ」

「大半は今日何食べようかって事でしょ」

「あー、こいつの食い意地ならあり得るな」

「ティアもアギトも、酷っ！」

「お前ら、仕事なんだからもう少し静かにしろ」

あつ、ヴィータ副隊長に怒られちゃった。もうちょっと静かにしよう

勿論あたしがそんな事出来るはずもなく、この後何回かヴィータ副隊長に怒られた

### 三人称

そこから時間は少し遡って、地上本部内。そこに緊張の面持ちで、

しかし堂々と歩いている二人の人間がいた。1人は八神はやて、そして、もう1人は管理局の制服を着たゼスト・グランガイツ

「いやあ、それにしても、本当に堂々としとれば気づかれんもんですね」

「まあな。俺の場合居なくなっってから数年経っているから忘れられているとゆうこともあるだろうが」

2人はゼストの目的であるレジアスに会うために彼が通るであろう場所へと向かっていた

「それにしても、レジアス中將がレイン達と繋がってたとは」

「いや、まだその可能性がある、とゆうだけの話だ。だからこそ会って話をして確認しなければならぬ。俺の死にあいつも関わっていたのかどうかを」

ゼストの言葉にはやての顔が険しくなる

「もし、関わってたらどないするんですか？」

「俺は確認しただけだ。その後の事はその時に考える」

「そうですか」

それから数分後、とうとうその時が来た

はやて視点

騎士ゼストには一旦別の場所で待機してもらってレジアス中将だけを呼び出すことになった

「レジアス中将、少しお時間よろしいでしょうか？」

「八神二佐か。今から公開意見陳述会だとゆうことはわかっているだろ。後にしろ」

まあ、それが普通の反応やね。せやけど、こっちだって引き下がれん

「大事な話なんです。……八年前の戦闘機人事件の事で」

後の方はレジアス中将にだけ聞こえるように言う。すると、レジアス中将は驚いた顔で私を見る

ま、そらそやるな。いきなりそんな昔の、しかも自分が関わっている事件の話だと言われたら驚くやろ

「此処ではなんなんで場所を移動しましょう」

私の言葉に少し唸った後

「すまん、少し八神二佐と話をして来る」

レジアス中将が周りの局員にそう言った。私はその事に内心でほくそ笑んで、騎士ゼストがある場所に向かって歩き出す

「どうゆつつもりだ、八神二佐」

「会って貰いたい人がおるんです。話はそこについてから」

少しして、目的地である物置のようになっていた小さな会議室につく。その中に入ると、騎士ゼストが椅子に座っていた

「久しぶりだな、レジアス」

三人称

レジアスの顔は驚愕に染まっていた。無理もないだろう。なにしろ、八年前に死んだと思っていた親友が目の前にいるのだから

「ゼスト、お前は死んだんじゃ」

「ああ、一度死んだ。そして人造魔導師として今此処にいる。レジアス、お前に聞きたいことがある」

「……なんだ」

「八年前、俺が死んだ戦闘機人事件。あれにお前は関わっていたのか？お前が指示を出して俺達を殺したのか？」

ゼストの質問は単刀直入だった。レジアスは動揺しながら、しかし、しっかりと答える

「違う。あの事について俺は一切関わってはいない。だが、裏でスカリエツティと繋がっていたことや戦闘機人の製造計画を進めていたことまで否定するつもりはない」

「それが人の倫理から外れた行為だとゆうことも分かっていたはずだ」



「ああ。だが俺はただ、昔お前と語り合った正義を、世界を守りたかっただけなんだ」

「レジアス……」

「すまん、ゼスト。そろそろ時間だ」

「……ああ、お前が関わっていない事だけでも分かってよかった」

レジアスは気まずそうに部屋から出て行った

「あれでよかったですか？」

「ああ、とりあえず俺が聞きたいことは聞けたんだ、それだけで十分だ」

はやては何か言いたそうにしたが結局口を開かなかった

スバル視点

公開意見陳述会が始まってから四時間。もうそろそろ中は終わる頃だよ

「最後まで気を抜くんじやないわよ」

「わかってるよー」

「ほんとかしら」

「ほんとだよー」

その時、建物の中から爆発音が響いた

「これって」

「ええ、襲撃でしょうね。中に入るわよ。なのはさん達にデバイスを届けなきゃ」

「うん」

アギトやヴィータ副隊長達と一緒に緊急時の集合場所へと向かう

ギンガ視点

今私は右目に眼帯をした小柄な戦闘機人と対峙している

「タイプゼロ・ファーストか。こんなときに」

「あなたを本部襲撃の現行犯で逮捕します。大人しく投降して下さい」

「すまないが、こんなところで捕まるわけにはいかないんだ」

そう言って目の前の戦闘機人は投げナイフのようなものを取り出す。あの固有武装と身体的特徴は多分？5 チンク。確かドゥー工達の情報によるとこいつのISは鉄を爆発物に変える能力ランブルデトネーター

「IS ランブルデトネーター」

チンク（仮）が投げた投げナイフ　確か名称はスティンガー  
が彼女が指を鳴らすと同時に爆発する

やっぱり。あの能力は厄介だけどそれにさえ気を付ければ何とかなる

はやて視点

ガジェット達の襲撃と共に一度部屋に閉じ込められたけど、なんとか扉はこじ開けられた。そして、そこに騎士ゼストが入ってきた

「八神、俺のリミッターを解除してくれ」

「え、でも」

「向こうにはルーテシアがいる。俺はあの子を守らなくてはいけないんだ」

騎士ゼストの目は本気だ

「わかりました。ゼスト・グランガイツのリミッターを解除します。デバイスは高町空尉達と合流してからにした時に渡して貰ってください。非常事態の時に集合する場所は決まっていますから」

リミッターの解除が終わり、集合場所を聞いた騎士ゼストは一目散に走っていった

「さて、私も私ができる事をやらんと」

なのは視点

私達が集合場所につくのとスバル達が来たのはほぼ同時だった

「なのはさん、デバイス、届けに来ました！」

「ありがとう、スバル」

スバルからレイジングハートを受け取る。その時、ロングアーチから通信が入った

『……こちら……ロングアーチ』

「グリフィス！？どうしたの！？」

『……隊舎を襲撃されました……スターズ5とライトニングF、ドゥーエ、セイン、ルーテシアが迎撃に向かいましたが現在スターズ5とは連絡が取れず、現在はこちらが不利です』

キョン君と連絡が取れない……もしかして撃墜された？

「ギン姉！？ギン姉！？」

「どうしたの、スバル」

「ギン姉と連絡が取れないんです」

「多分、戦闘機人と接触してると思います。ドゥーエも何体かはこちらに来るだろうと言っていましたし」

「……分散しよう。スターズはギンガの所へ。フェイトちゃんとアギトはこのまま隊舎に向かって。ヴィータちゃんとリインは、はや

てちゃんの所にデバイスを持って行ってあげて」

「了解！」

「わかった」

「任せとけ」

皆が了承の意思を伝えてくれる

「待っていてくれ」

「旦那！」

私達が動き出そうとした時、ゼストさんが走ってきた

「俺も一緒に隊舎に向かう。八神からの許可は取っている」

「わかりました。ゼストさんはフェイト隊長と一緒に六課隊舎へと向かってください。ヴィータちゃん、確か持つて行くデバイスの中にゼストさんのものもあったよね？」

「ああ、これだ」

ヴィータちゃんがゼストさんにデバイスを渡す

「それじゃあ、スバル、ティアナ、行くよ」

「はい！」

こうして私達は別れた

## 地上本部襲撃1（後書き）

優希「あとがきコーナー」

蛭「にしても、今回は長い上に視点がコロコロと変わったな」

優希「いやあ、次の話に繋げやすくするためだったんだけど、今から考えるとかなり読みにくいかも」

蛭「なら、直せよ」

優希「だが断る！これが僕の限界だ！」

『ヒーローライド ティオ』

『アタックライド チャービル・サイフォドン』

優希「ギヤアアア！！！！！！」

蛭「開き直るな」

優希「あい。謝辞のコーナー」

蛭「靈亀様、バルディッシュ様、なっぺ様、ああ様、感想ありがとうございました」

優希「次回は確実に更新が遅くなります」

蛭「なんで？」

優希「全然構想が練れてないから」

『ヒーローライド セラフィム』

『アタックライド ヒヤッキザンサツ』

「我が剣の極意は、秘めたる剣にあらず。木の葉の如く舞い飛ぶ剣

即ち。飛剣、百鬼漸殺」

優希「ギヤアアア……!!!」

蛭「まったく。とゆうわけで、式見蛭とバカ作者でした。感想お待ちします」



地上本部襲撃2(前書き)

今回は色々と酷いです

## 地上本部襲撃2

ギンガ視点

「くっ」

「あなたが万全の体調だったら結果は違っていたかもしれないけど。あなたの負けよ」

リボルバーナックルでチンクを押さえつけながら言う

総合的な強さで言えばチンクの方が強いかもしれないが、動きのいたるところがまるで重傷を負っているかのようにスキが多かった

「……こんな所で、捕まる訳には」

「話ならちゃんと聞いてあげる。だから大人しくついてきて頂戴」

チンクをバインドで縛って連れて行くこうとした時、私の体が吹っ飛ばされた

「まったく、使えないコマね」

体勢を立て直して顔をあげると、そこには、以前下水道で対峙したレインとゆう女と資料で見たヴィラとゆう男が立っていた

「あなたは」

「この前会ったわね、タイプゼロ・ファースト。悪いけど、貴女にも此方に来て貰うわ」

「お断りします」

「残念だけど、強制よ」

レインとヴィラはそう言っ<sup>て</sup>私に襲いかか<sup>つて</sup>来た

スバル視点

あたしは今、ギン姉が居たであろう場所に全力で向か<sup>つて</sup>いる

『ちよつと、スバル、先行しすぎ！』

「ごめん！でも、大丈夫だから！」

ティアに怒られたけど、今はそんな事言<sup>つて</sup>る場合じゃない。もしギン姉が戦闘機人と戦<sup>つて</sup>るならあたしが助けなきゃ

少しして広い部屋へと出る。そこに居たのは小さな戦闘機人とその頭を踏みつけている男、そして、血だらけのギン姉の髪を掴んで持ち上げている女が居た

「タイプゼロ・セカンド。またタイミングが悪いわね」

ギン……姉？

「う、うあああああ」

あたしの中で何かが壊れた

三人称

「かえせ」

リボルバーナックルが四発カートリッジを吐き出す

「ギン姉を、かえせよお！」

「はあ、メンドウね。タイプゼロ・ファーストは捕まえれたし、セカンドはいいわ。私は行くから役立たずと一緒に始末しといてね」

レインはそう言って立ち去ろうとする

「あああああああ」

それを、スバルが追いかけてようとして

「てめーの相手は俺だ」

ヴィラのシールドに阻まれた。しかし、それはスバルのIS『振動破碎』によって壊され、ヴィラの体が吹っ飛び壁に叩きつけられる

「がっ!?!」

「うあああああああ」

レインとギンガの姿はもう無い。しかし暴走しているスバルはそんなことお構いなしにヴィラに襲い掛かる

「くそがっ」

立ち上がったヴィラが放った突きがスバルの左腕を貫く。それすらも意にかえさないように右腕でその腕を掴んでマツハキヤリバーで何発も蹴る。その一発一発に振動破砕が発動し、蹴る度にマツハキヤリバーに罅が入っていく

ヴィラも掴まれていない方の腕で殴るがスバルは皮膚が抉れても蹴り続ける。そしてヴィラの腕を放し

「デイバイン……バスター」

ゼロ距離デイバインバスターを放つ。ヴィラは壁に叩きつけられ動かなくなる

スバルはゆっくりとヴィラに近づいて動かなくなった体を持ち上げ殴ろうとして

「そこまでだよ、スバル」

振り上げられた右腕は、なのはのバインドによって止められた

「それ以上は絶対にダメ」

「うあ……ああ……あああ」

スバルは体に限界が来たのか体の力が抜ける

「ティアナ、早急に上に連絡して救護班に来てもらって」

「……はい」

なのはの指示でティアナが通信を始める。数10分後、スバル、チンク、ヴィラは救護班に連れて行かれた

## 地上本部襲撃2（後書き）

優希「あとがきコーナー」

蚩「とりあえず、今回のスバルの暴走は原作より酷かったな」

優希「いやあ、気づいたらああなってた。反省も後悔もしてない」

蚩「せめて、反省はしてくれ」

優希「だが断る！謝辞のコーナー」

蚩「はあ、霊亀様、バルディッシュ様、サーペント様、なっぺ様、感想ありがとうございます」

優希「多分次回で地上本部襲撃編は終わると思います。とゆうわけで、朱神優希と式見蚩でした。感想お待ちします」

### 地上本部襲撃3 (前書き)

遅くなりました。今回で地上本部襲撃編は終わりです。とは言っても、今回は地上本部、一切出て来ませんけどw



### 地上本部襲撃3

フェイト視点

私と騎士ゼストが六課に向かって飛んでいると、突然射撃魔法が飛んできた

『ラウンドシールド』

飛んできた射撃魔法をシールドで受け止める

「お前は、トーレ……セツテもいるのか」

射撃魔法が飛んできた方を見た騎士ゼストが言ったその言葉に

「久しぶりですね、騎士ゼスト。そして初めまして、フェイトお嬢様」

短髪の女性が反応した

「あなた方二人を連れてくるようにレインに言われています。大人しくご同行ください」

その横にいる大きなブーメランを持った長髪の女の子がそう言うってくる

「断る。すまんが、急いでいるんだ。邪魔をしないでくれ」

「申し訳ありませんが、私達も引き下がるわけにはいかないのです」

「そうか、ならば倒すまでだ」

騎士ゼストがデバイスを構える。私もバルディッシュをザンバーフ  
オームにして構える

「トーレ、無茶はするな。此処は私1人でやる」

「それこそ、無茶だ。私を嘗めるなよ、セツテ。このぐらいどうと  
ゆうことはない」

なにを話してるの？

「テストロッサ、速さには自信があつたな？」

「ええ、それなりには」

「ならば、トーレの相手を頼む、アイツがナンバーズの中で一番速  
い」

「わかりました」

「IS、ライドインパルス」

「IS、スローターアームズ」

「来るぞ」

騎士ゼストがそう言うと同時にトーレが高速で接近してきた。それ  
をとっさにバルディッシュで受け止める

確かに速い。けど、恐れるほどじゃない

「はあ！」

「くっ」

一度離れて突進し何度かぶつかり合う。そして気がついた

「あなた、怪我を」

「……何の、ことですか？」

「何ヶ所かダメージを受けるのを避けるようにした箇所があるし、  
なにより動きが鈍すぎる。ドゥーエやセインから聞いたあなたとは、  
かなりの違いがある」

「ドゥーエとセインか。あの二人は元気にしていますか？」

「ええ、とても」

特にドゥーエは私がキヨンと2人つきりになるのを邪魔してくるく  
らいだ

「そうですね。それはよかった」

「出来れば、あなたもこちらで保護したいんだけど」

「それは無理な話です。私は妹たちを置いたままそちらに行くこと  
は出来ません」

そう言ってトーレが構える

「なら、少し手荒な方法を使っても連れて行く」

「それは、こちらのセリフです！」

そしてまた、私達はぶつかり合った

### 三人称

フェイトとトーレは何度かぶつかっては離れてまたぶつかった。それを繰り返しているうちに、トーレに変化が現れた。苦痛に顔を歪め、息は荒くとても痛々しい姿だった

「もう、やめにしよう。これ以上はあなたの体が」

「……ハアハア。まだ、です」

「どうして！？これ以上やったら」

「……私が……ここでやめてしまったら……妹たちを守れなく……  
なってしまう。それだけは……避けなくては……いけないです」

そう言って動こうとしたトーレだが、体の至る所にぼろが出ている  
トーレより、フェイトのほうが速かった

「ぐっ！？」

フェイトの振るったバルディッシュがトーレの意識を刈り取った。  
飛行魔法が解けて重力に従って落ちていくトーレの体をすぐにフェ

イトが抱える

「トーレ！」

それに気づいたセツテが慌ててフェイトに近寄る

「大丈夫。気絶しているだけだから。それにしても、酷い」

トーレの体はあまり詳しい知識のないフェイトが見てもヒドイ状況だった

「病院に連れて行ったほうがいいな」

「なら、私が」

そう言ってフェイトがトーレを抱えたまま飛ばうとするが、それをゼストが遮った

「待て、テストロッサ。俺が連れて行く。お前は速く隊舎へ向え。

「でも……」

「お前は自分がしなくてはいけないことを間違えるな」

「……わかりました」

「セツテ、お前もついて来い」

「しかし、私は……こんな状況下でどうするべきかという指示は出ていません」

「そんなものは関係ない。お前がどうしたいかだ、セツテ」

「私は……トーレの傍に居たいです」

セツテは少し逡巡した後はっきりと答えた

「わかった。テストロッサ、そっちは任せたぞ」

ゼストはそう言ってフェイトからトーレを受け取るとそのままセツテと飛んでいった。フェイトはそれを見送ると、隊舎に向かって飛んだ

そして、フェイトは瓦礫と化した六課の隊舎とその近くでボロボロになったキヨン達を見つける事になる

### 地上本部襲撃3（後書き）

優希「あとがきコーナー。……なんで僕は正座させられてるのかな？」

キョン「今回遅くなった理由を簡潔に答える」

優希「新学期で色々忙しくて」

蛍「本当は？」

優希「スバロボZを徹夜でやってたから」

『ファイナルアタックライド デイ・デイ・デイ・デイ・ディエンド』

キョン「プラストバーン・ブレーカー！」

蛍「デイメンションシューター！」

優希「ギヤアアア」

キョン「まったく、この次の話とか最終話の話とか書いてる暇があるならさっさと書けよ」

優希「だって、後の話って、思いついたときに書かないとすぐ忘れるから」

蛍「馬鹿だもんね、作者」

優希「バツサリ言われた!？」

キヨン「で? 次回の予定は?」

優希「キヨンが起きてからのイベントを少しやるつもり。ただ、使いたいキャラの詳細がわからないから、また遅くなるかも。続いては謝辞のコーナー」

キヨン「バルディッシュ様、なっぺ様、感想ありがとうございます」

優希「とゆうわけで、朱神優希とキヨンと式見螢でした。感想お待ちします」



揺らぐ心(前書き)

今回は短めです

## 揺らぐ心

体中が痛い。吐き気もする

俺が目覚めたときに一番最初に感じたことだった。

重たい瞼を開けると目の前には見慣れない天井と、俺の顔を覗き込んでいるフェイトさんとティアの顔があった

「キョン！目が覚めたの!?!」

「う、ティア、ここは？」

「病院よ。あんた、2日間眠りっぱなしだったのよ」

ティアのその言葉と体中を襲う痛みで、記憶が鮮明に蘇ってくる

そうだ、俺は六課で式見と戦って、負けて

「っ、ハルヒは!?!」

「.....」

答えは返って来ないが、ティア達の顔とその沈黙が答えだ

「また守れなかったんだな。ヴィヴィオも、ルーテシアも」

部屋が重たい沈黙に包まれる。最初に口を開いたのはフェイトさんだった

「キヨン、あなたはもう今回の事件からは外れた方がいい」

「なんでですか？」

「事件に身内が絡んだ場合、どうしても感情的に動いてしまうから、その人はその事件から外れた方が良く。それに、忘れちゃいけないけど、キヨンは一般人なんだよ。囑託魔導師でも、ましてや本局に籍をおいているわけでもない民間協力者。そんなキヨンをこれ以上こんな危険な事件に付き合わせるわけにはいかない」

……確かにそうだ。俺は半年前までは魔法も知らない一般人で、今までハルヒに付き合ってたのも、事件の大半は長門と古泉が解決してくれていたからだ。それが今じゃこんな有り様だ。今回の事件だって、下手に俺が介入しなかったらもっと速くに解決していたかもしれない。フェイトさん達に任せていればもっとスムーズに行ったんじゃないのか？

「これはキヨンが決める問題。どうする？キヨン」

フェイトさんの問いかけに俺は

「すみません、少し考える時間をください」

これだけしか言えなかった

「……わかった。けど、あまり長くは待てないよ。明日までには結論を出してね。行こう、ティアナ」

「……はい。あ、そういえば、古泉さん達にも連絡したから、明日、

明後日にはこっちに来るから」

「わかった」

「じゃあね、キョン。また明日」

そう言つてフェイトさんとティアが部屋から出て行つた

「……俺は、どうすれば良いんだよ」

心が揺らぐ。もう、何もかもほっぽりだしたい。俺が居なくても俺より強いのはさんやフェイトさん、ヴィータさんやシグナムさんが居るんだ。こんな思いまでして、まだ俺は協力するのか？

コンコン

その時、誰かが部屋のドアを叩いた

誰だ？古泉たちはまだ来ないらしいしティア達が戻つて来たつてこともないだろ。まあ、考えても仕方ないか

「どござ」

俺が返事するとドアが開き、一匹の猫が入ってきた……猫？

「ごめん、流石に最後のデイメンションシュートはやりすぎだった」

「なっ!?!?」

俺がわけがわからずに見ていると、いきなり猫がそう言った。が、

驚いたのはそこじゃない。猫が喋るなんて今更驚くほどの事じゃない。俺が驚いたのは、その声が式見の声だったことだ

「式見!？」

「正解だよ。二日ぶりだな、キョン。とは言ってもお前からしてみればもつと短く感じるのか？」

猫の姿が一瞬で式見の姿へと変わる。俺は咄嗟にタナトスをセツトアップしようとしたが俺の右腕にはタナトスはいなかった

「そんなに警戒しないでくれ。今の僕はお前に危害を加えるつもりはないんだから。それに、今のお前じゃ僕に抵抗すら出来ない」

悔しいが、その通りだ。動こうと腰を上げただけで体に激痛が走った。こんなんじゃないが抵抗も出来ない

「じゃあ、何しに来たんだよ」

「それに答える前にちよつとしたゲームをしよう。お前が勝ったら用件を言うよ」

「俺が負けたら？」

「別に、僕の用件が聞けなくなるだけだ。危害は加えないよ」

「いいよ、やってやる。で？どんなゲームをするんだ？」

俺は半ばやけくそ気味に答えた。少なくとも答えの出ない自問自答をするよりは有意義なはずだ

「ルールはお前が自分で考えてくれ」

「おい、そんなんでゲームになるのかよ？」

「ルールはそのまま答えになるからな」

式見はそう言いながらデバイスを用意しカードを装填して引き金を引いた

『アタックライド ゲントウノサーカス』

「じゃあ、良い夢を」

「どごゆづ」

意味だ？、と聞こうとしたが、その前に俺の意識は途切れた

## 揺らぐ心（後書き）

優希「あとがきコーナー」

キョン「お前が遅くなるかもって言ってる話は大抵一週間以内に仕上がるよな」

蚩「逆になにも言っていない時の方が異常に遅いって事の方が多いよな」

優希「いやあ、自分でもビックリだよ。まあとにかく今回からオリジナルが数話入ってからゆりかご編に突入だ。そろそろクライマックスだよ」

キョン「そういや、お前、Strikersが終わったらどうするつもりなんだ？」

優希「Strikers XとVividはやるつもり。後はその場のノリで」

蚩「とりあえずまだまだ続くんだ」

優希「そゆこと。さて、謝辞のコーナー」

キョン「霊亀様、なっぺ様、感想ありがとうございました」

優希「次回はなるべく早くに更新するつもりです」

キョン「次の更新は1ヶ月後かな？」

蛭「下手したらこのまま連載中止もあり得るよ」

優希「そこ、うっさい！とゆっわけで、朱神優希とキョーンと式見蛭でした」



夢（前書き）

思ったより遅くなりました

## 夢

「……い、……きろ」

誰だ？俺は眠いんだよ

「起きろよ！キヨン」

思いつきり肩を揺すられて目が覚める何事かと前を向くと

「たく、もうホームルームも終わったぞ。いつまで寝てんだよ」

呆れ顔の谷口が目の前に立っていた………って何で谷口がここにいるんだよ！？

「何でお前が居るんだよ？谷口」

「は？何でつてここが学校だからだろ？」

「大丈夫？キヨン。少し疲れてるんじゃないの」

谷口の後ろから国木田が心配そうに声をかけてくる

「国木田も何で居るんだよ？ここはミッドチルダの病院だぞ」

そこまで言つて俺は自分の異変に気がついた。今、俺が座っているのは病院のベッドではなく学校の椅子で、格好は病院の服から北高の制服になっていた

「は？ミッド……なんだって？」

「キヨン、本当に大丈夫？」

二人の顔が不審そうになる

まずいな、下手に騒がれるのは面倒だ

「いや、今度ハルヒが撮るって言う映画の台詞なんだ。どうだ迫真の演技だったろ？」

……流石に無理がありすぎるか？

「ああ、思い出した。さっきのミッド何とかってお前らが今年撮ってた映画の舞台って場所だよな？」

「そういえばそうだったね。へえ、涼宮さん今年はあれの続編やるんだ」

「は？何言ってるんだ？俺達が撮った映画は地球の日本を舞台にしたこの世のグダグダを結集させたような作品だろうが」

実はあれは地球じゃないなんて裏設定があるんなら別だが

「お前こそ何言ってるんだよ？それを撮ったのは一昨年だろうが」

そんなバカな

急いでケータイを見て確認すると、確かにあの映画を撮ってから二年経っていた

「どうしたんだ？キヨン。寝ぼけてんのか？」

「ああ、そうかもしれない」

「いったいなんだってんだ。俺はさっきまで病院に居たんじゃないのかよ？」

「あ、そういえばさっき涼宮さんが凄いスピードで教室を出て行ったんだけどキヨンは行かなくていいの？」

「ハルヒがいるのか!？」

「当たり前だろ？ボケるにはまだ早えーぞ、キヨン………って、おい。どこ行くんだよ！」

谷口が後ろで何かを叫んでいるがそれを無視して部室に向かって走る。久し振りに通る廊下を走り抜け、勢いよく部室のドアを開けるとそこには、ひどく不機嫌そうな顔のハルヒがふんぞり返って座っていた

こんな顔のハルヒを見るのもずいぶんと久し振りだな

「遅い!!!!!!!!!!!!!!」

なんて感傷に浸っていると、耳をつんぐさぐさようなハルヒの怒声が聞こえてきた

「何たらたらしってんのよ。あんた、SOS団としての自覚あんの？」

「そんなに怒鳴るなハルヒ。耳が痛いだろうが」

って、ハルヒがあまりにも今まで道理だから普通に普通に返しちまったが、ハルヒがこんな風に怒鳴ってるってことも、今の俺にとっては異常事態だ

「ハルヒ、なんでお前に感情があるんだ？レインに盗られた筈だろ？」

「は？あんた、なに言ってるの？宇宙人にでも頭を弄くられた？」  
そうだったらどれだけ良いか

「どうせ、さっきまで寝てたんでしょ？厨二病全開の夢を見るのは良いけど、現実とごっちゃにしないでよね」

お前がそれを言うのか。……………まさか、本当に夢だったのか？あの世界で起こった出来事は全て俺の頭の中で作られた妄想で、さっきまでそれを見ていただけ？

「さて、今日はみくるちゃん達も居ないから、SOS団の活動は出来ないわね。……………あ、ちょうど良いわ。キョン、買い物に付き合いなさい」

「はあ？」

ハルヒの突拍子もない言葉に呆れる

「はあ？じゃないわよ。買い物に付き合いなさいって言ってるの！ちなみに、あんたに拒否権はないから」

ハルヒはそう言うと、椅子から立ち上がり俺の制服のネクタイを掴むと、無理やり引っ張り出した

「ハルヒ、首が締まってる！ちゃんと自分で歩くから引っ張るな」

「じゃあ、キリキリと歩きなさい」

解放された首をさすりながら前を歩くハルヒの後ろをついて行く。ついて行きながら俺はこの世界について考えていた

ここには感情が盗まれていないハルヒが居る。なら、もうそれで良いんじゃないのか？この世界なら俺はあれ以上傷付く事もない。昔通りの平凡な日々に戻るんだ

俺の心は、徐々にこの世界に蝕まれていた

夢（後書き）

今回のあとがきコーナーは諸事情によりお休みです

## 決意（前書き）

今回は突っ込んだら負けです。原作に出てくる『幻灯のサーカス』の設定とはかなり違いますがご了承ください



## 決意

ハルヒの後について商店街へと来た俺はハルヒによって絶賛荷物持ちとして使われていた

「じゃああたしはここ見てくるからその辺に座ってて」

「俺は付いて行かなくて良いのか？」

「は！？バカじゃないの！？あんた。下着売り場にまで着いてくるつもり！？」

ハルヒにそう言われて初めてハルヒが行こうとしている場所が下着売り場なんだと気づく

しまった、ぼーっとしてた。周りの目が痛い

「いや、悪い。気づいてなかったんだ。ここで待ってるよ」

ハルヒが店に入っていくのを見送って近くにあったベンチに座る

「なんでだろうな、かなり疲れた」

「そりゃ、お前がこの世界を心の奥で拒否してるからだよ」

「なっ！？」

いつの間にか隣に誰かが座っていた。いや、誰かじゃない、こいつは……

「そんなに驚くなよ、また注目されるぜ？」

「驚くなつて方が無理だろ。俺が隣に座ってるんだからな」

そう、俺だ

「ま、そりゃそうか」

“俺”はそう言って笑う

「なんなんだ、お前は。ハルヒが創り出したドツペルゲンガーか？」

「んなわけないだろ？俺はハルヒに創られたんじゃない。お前が創り出した存在さ」

「俺が創り出した？」

「お前だつて気づいてんだろ？ここはありえたかもしれないＩＦの世界だ」

「ＩＦ……」

「ああ、ハルヒがレインに感情を奪われなかったとゆうＩＦの世界だ」

「それが、お前の存在とどう繋がるんだよ？」

「俺はお前のこの世界を拒絶する心が作った幻想さ」

「ふざけるな。タナトス、セットアップ」

俺の服がバリアジャケットに変わる

って、待て。俺はタナトスをはめてなっかたはずだろ？なんで

「それがお前と向こうの世界を結ぶ最後の鍵だ。お前がこの世界で生きたいと思うならそれを外せば良い」

“俺”はそう言うのと立ち上がった

「ここに残ったって誰も責めたりしないさ。それはそれでひとつの選択なんだから。ただし、急げよ」

その時、いきなり強い風が吹いて目を閉じる。次に開けた時には“俺”は居なくなっていた

「ごめん、遅くなった……どうかしたの？キョン」

ハルヒが店の買い物袋を持って帰ってきた。バリアジャケットはいつものまにか元の制服に戻っていた

「いや……なんでもない。また何か買ったのかお前は」

「当たり前でしょ。荷物持ちが居る時に買いたい物を買ったかないと」

「てことは、まだ俺は荷物持ちをさせられるのか」

「当然。さ、次行くわよ！」

三人称

「いやあ、大量大量。みくるちゃんの新しい衣装も買えたし、明日からは部屋ではこの格好ね」

「機嫌がいいのは結構だが買いすぎだ。少しは荷物持ちの事も考えてくれ」

上機嫌のハルヒの後ろを歩くキヨンが溜息をつきながらそう言う。だが、それほど重くはないのか足取り自体は軽い

「それぐらい軽いでしょ。それにあんたはもうちょっと鍛えたほうが良いわよ」

「これ以上鍛えるつもりはないんだけどな、まあいいか。ところでハルヒ、もう買い物は終わりなのか？」

「ええ、もういい時間だし。そろそろ帰らないと」

「そうか。……じゃあ、俺も帰らないとな」

キヨンはそう言うと立ち止まる

「キヨン？」

急に立ち止まったキヨンを見て、ハルヒも不思議そうに立ち止まる

「悪いな、ハルヒ。俺は元の世界に戻る」

キヨン視点

「……なんで？何かこの世界に不満でもあるの？みくるちゃんや有希が居ないからって事なら明日になれば」

「そうゆう事じゃないんだ。別にお前しか居ない世界でだって俺は生きていける」

「まるで告白ね。なら、何が不満なの？」

「ここが夢だからだよ」

そう、たったそれだけのことだ

「この世界で生きていくのはとっても魅力的だ。実際それでも良いかもしれないと思ったぐらいだ。けどな、やっぱりこれは絶対に目覚めなくちゃならない夢なんだよ」

「別に良いじゃない、そんなの」

「向こうには感情を失くした本当のハルヒがいる。俺をパパといって慕ってくれてるヴィヴィオがいる。そしてあいつらは俺が弱いせいで攫われちゃった。そいつらをほっという夢を見続けるなんて俺には無理だ」

「……あーあ、盛大にフラれちゃったわね。まあ、こうなることもわかってたけど。あんたは有希が創った世界よりも元の世界を選ぶような人間だもんね」

ハルヒは笑っているような泣いているような微妙な顔をした

「ただし、向こうを選ぶからには絶対にあたし達を助け出すこと。団長命令だからね。出来なかったら死刑よ」

「ああ、わかった。団長命令なら破れないな」

「よく言うわよ。いつつもあたしに逆らうくせに」

「それはお前が無茶ばかり言うからだ」

「じゃあ今回ののは無茶じゃないって事ね」

「ああ」

「頑張りなさいよ、キヨン」

ハルヒの声と共に俺の意識は闇へと落ちた

## 決意（後書き）

優希「あとがきコーナー」

蛍「なんとかこっちに帰ってきたか。てゆうか、あのもう一人のキヨンはなんだったんだよ」

優希「いや、元々三人称より下の所だけを書くつもりだったんだけど流石に何の要因もなしに元の世界に戻るのも変だからって付け加えただけだからこれといって意味はない。イメージ的には『消失』でキヨンの頭を踏みつけてたキヨン」

蛍「あれはただの想像だろ？」

優希「良いんだよ、別に。僕にはこれが限界なんだから」

蛍「まあ、作者がそれで良いなら良いけど」

優希「ゆし、謝辞のコーナー」

蛍「霊亀様、なっぺ様、感想ありがとうございます。さて次回は？」

優希「全然考えてないけど多分説明回になると思う。とゆうわけで、朱神優希と式見蛍でした」

## 目覚め(前書き)

今回は説明回。なのに殆ど説明出来てない



## 目覚め

「おはよう、キヨン」

目が覚めると、横に式見が座っていた

「よう、式見。ゲームは俺の勝ちだ」

「ああ、完敗だよ。よく戻ってこれたな」

式見は両手を上げて降参のポーズをとる

「俺はまだこつちでやらなくちゃいけないことがあるからな。こんな所で寝てられないんだよ」

「とゆうことは、迷いも消えたんだな？」

「ああ。さて、俺がゲームに勝ったんだ、なんでお前が俺が迷ってるのを知っていたのかも含めて全部教えて貰おうか？」

俺の言葉に式見が真剣な顔をする

「そうだな。まず、僕は幽霊だ」

「ちょっと待て」

速攻で式見の言葉を遮る

「幽霊ってのはちゃんとした実体があるものなのか？」

「そこら辺は僕的能力が原因だ。僕は元々別世界の人間だった」

「それは、異世界的な意味でか？それとも」

「それともの方だ。僕は此処とは違う平行世界の住人だった。そして、僕はその世界で二度死んでる。一度目は人間として。そして二度目は幽霊として成仏するはずだった。けど、僕はこうしてこの世界にいる」

「今はその理由はいい。それよりも、お前能力ってのはなんだ？」

「幽霊や霊力を実体化させる力、“霊体物質化能力”そしてその能力で実体化した幽霊の事を総称してマテリアルゴーストと言うんだ」

「お前はその力のおかげで実体があるって事か」

「そう。そしてこの力は自分の霊力を使って物を創り出す事も出来る。お前が創るような形だけの紛い物じゃなくて、ちゃんとした能力を持った本物を。猫になれるのもその応用だ。今の僕は霊力の塊のような存在だからな」

「それって、チートじゃねーか」

「そうでもない。大きいものを創るには相応の霊力が必要だし、今の僕が物質化出来る範囲は精々1cm程度。手を離れたら消える。それに自分が想像出来ないと創れないしな」

その言葉に俺は違和感を覚える。こいつが六課を襲撃して来た時に呼び出した奴らはどう考えても1cm以上離れていた。それはどう

説明するんだ？

「それは僕のデバイスのエンドの能力も関係してくる。元々僕のデバイスの能力はカードから仮面ライダーを召喚するもので、その能力を利用して僕がアニメやマンガのキャラのカードを創って召喚する。それなら1cm以上離れても大丈夫なんだ」

「色々複雑だな。じゃあ、次だ。なんでお前は俺が吼太に鍛えられてる事や、俺がさつきまで悩んでた事を知ってたんだ？」

「それは、こいつだよ」

いつの間にか式見は魔法使いなんかが持ってたような大きい本を持っていた

「それは？」

「僕が能力で創ったロストロギア“異界の物語”これには自分が居る世界や平行世界での出来事を物語として知ることが出来る。これを使って僕はお前の行動を把握していたんだ」

そんなのも創れるのかよ。本格的にチートだな

「さて、今の質問についてはこれで終わりだけど、まだ何かあるか？」

「ああ、最後の質問だ。お前は何でレインに協力する？なのに何故俺にそれを話に来たんだ？」

そう、本来なら俺とこいつは敵対しているはずなのだ。なのに何故

コイツは俺に情報を与えに来た？

「元々僕が平行世界の人間だって事は言ったよな？」

「ああ。それが何か関係あるのか？」

「この世界には平行世界の僕の友達がいるんだ。そしてその中の1人が人質になっているんだ。平行世界の存在だとしても僕はそいつを見捨てることは出来ない。だから僕はレインに協力する事になったんだ」

「それなら、こんな所にいたらマズいんじゃないのか？」

「今の所レインも僕の監視役のクアットロも『聖王の器』に付きつきりだ。ここにいることは気付いてない」

「聖王の器って、ヴィヴィオの事か！？あいつらは今どうなってる！？」

「そうだ、こいつならハルヒ達のことも解るはずだ」

「そう思って勢い込んで聞くが世界とゆうのはなかなか思い通りにはならない」

「落ち着け。悪いが僕もあまり知らないんだ。ただ、レインが動き出すのはもう時間の問題だ」

「そうか。けど、俺がやることはもう決まったからな。絶対にハルヒ達を助ける」

俺がそう言つと式見は軽く笑つた

「そう言えるようにまでなつたなら今回僕がわざわざ来た甲斐があつた。じゃあそろそろ僕は帰る。次会うときは多分僕はお前を殺そうとするだろうけど、負けないでくれよ?」

「努力はするさ」

式見は立ち上がるとまた黒猫へと姿を変え部屋から出て行くうとして

「あ、忘れる所だつた」

また人間の姿に戻つた

「どうした?」

「ああ、ゲームの商品だよ。お前が勝つたら渡そうと思つてたんだ」  
そう言つて式見は一枚のカードを取り出した

後日談とゆうか今回のオチ

次の日。昨日の返事を聞くためにフェイトさんが俺の部屋へとやつて来た

「どうするか決めた?キヨン」

「はい。俺はハルヒ達を助けるまでこの事件から降りるわけにはいきません」

俺は昨日決めた決意をハツキリとフェイトさんに伝えた

「じゃあ、これからも続けるんだね？」

「はい」

「そっか。……キョンがそう決めたもうならなにも言えないな。これからも頑張ろうね、キョン」

その時部屋のドアが叩かれた

「どうぞ」

「失礼します」

部屋に入って来たのは古泉達だった

「それじゃあ、私はこれで」

フェイトさんは気を使ってくれたのが古泉達が入って来たのを見ると席を立てそのまま部屋から出て行った

「ありがとうございます、フェイトさん。久しぶりだな、古泉。長門と朝比奈さんも。……今回は悪かったな。俺のせいでハルヒが攫われちゃった」

「ええ、お久しぶりです。あまり気を病まないでください。それよりお身体の具合は大丈夫なのですか？」

「大丈夫なわけないだろうが。全治半年だよ。特に右腕が酷いら

しい」

多分式見の呼んだあの男と拳を何回もぶつけたのが原因だな

「え！？それって、とつても重傷じゃないですか！」

俺の報告に朝比奈さんがとても慌てた様子で詰め寄ってくる。確かにそうなんですけど、そこまで驚かないでください

「ええ。けどこんな所で休んでる訳にもいかないんです。長門、俺の体治してってくれるか？」

「あまり推奨は出来ない」

珍しく長門が渋る

けど、俺だって譲れない

「それでもだ。ハルヒを助ける為にも一刻も早く体を治さないといけないんだ。頼む」

「……………わかった」

長門は渋々と言った様子で了解してくれた

長門お得意の情報操作により俺の体が直って（…………）いく。それは治癒などではなく、言うなれば俺の体の時間だけを巻き戻しているような感じだ

「今、あなたの肉体情報を損傷した時間よりも前の時間の肉体情報

へと変換している。だからその表現も間違いではない」

そうなのか。どうりで伸びた爪なんかも短くなっていったらと思っ  
たぜ

そうこうしている内に俺の体はどこにも不調のない健康そのものな  
体となった

「ありがとな、長門」

ベッドから降りて軽く体をほぐす

これですぐにでもハルヒ達を助けにいけるようになった。後は訓練  
あるのみだな

その後、医者への反対を体が完治したからと言って押し切り退院。そ  
の日はそのまま古泉達と一緒に過ごし、次の日から訓練を再開した



## 目覚め（後書き）

優希「あとがきコーナー」

キヨン「今回の話がわかりにくかった人は感想に『この作者マジ駄作者（笑）』って書いてください」

優希「ちょっと待てコラ。いくらなんでもそこまで言われるほどじやねーよ」

蛭「説明したいことの四分の一が読者に伝われば良いな程度の文しか書けない駄作者がなに言ってるんだが。こんな奴に使われてるか。はあ、死にてえ」

優希「う、うわああああん」

キヨン「作者が泣きながら走っていったから、今回はここで終わるだな。謝辞のコーナー」

蛭「靈亀様、なっぺ様、感想ありがとうございます」

キヨン「今の所作者は次に書く話を決めてないので遅くなるそうだし」

蛭「他のナンバーズ達に会うか、スバル達に会うか、アースラに乗るか、どれかにはなるらしいけどな。とゆうわけで、キヨンと式見蛭と駄作者でした。感想お待ちしてます」

駄作者「駄作者って言うなー！！！！！！！！」

謝罪と許容（前書き）

前回の予告とは少し違う

## 謝罪と許容

俺が退院してから二日後。俺はティアとセインから俺が気絶している間の事と地上本部で起こった事を聞かされた

ギンガが浚われてしまったこと。そのせいでスバルが暴走して今は入院していること。ドゥーエの精神が不安定になっていること。シヤマルさん、ザフィーラ、ヴァイスさんが式見からハルヒ達を守ろうとして負傷して入院したこと（式見曰わく手加減はしたらしいが）。3人の戦闘機人を保護したこと。ヴィラを捕まえたこと。六課の隊舎は瓦礫の山となってしまったため今はやてさんが臨時で本部として使える場所を得るために奔走していることなど

詳しく言つともう少しあるがそこら辺は長くなるから割愛する

「幸い、本部の方は八神部隊長にアテがあるらしいからすぐになんとかなりそう。スバルの方ももう少ししたら退院出来そうだし」

「けど、ドゥーエ姉はちょっと酷いかな。あの日以来すっかり引きこもっちゃって誰にも会ってないんだ」

セインが沈痛な面持ちでそう言う。

そりゃ、自分のせいで妹達が傷つけられているなんて言われたら引きこもりたくもなるわな

「そういえば、その保護された戦闘機人ってのは？」

「トール姉とチンク姉とセツテ。トール姉とチンク姉が一番拷問を

受けてたらしくてさ、かなり怪我とかが酷いんだよ。今はマリーさんが見てくれてるから結構回復したんだけど」

「ドゥーエは？」

「一度会いに行こうって言ったんだけど、『合わせる顔がない』って断られちゃって。でも、やっぱりなんとかして会わせたい」

そうは言うがかなり難しいだろうな。自分のせいで傷つけたと思ってるから尚更会いづらいだろうし

「キヨン。ドゥーエ姉に会うように言ってみてくれないかな？キヨンが言えば会ってくれると思うんだ」

いや、流石にそれはないと思うが

けど、ドゥーエが心配でもあるし、会うだけ会ってみるか

場所は変わって六課の宿舎。ここは隊舎とは離れていたため破壊の難を逃れたらしい。そしてその宿舎の一室。ドゥーエとセインの部屋に俺は来ていた

「ドゥーエ、起きてるか？」

部屋のドアをノックして声をかけると中からなんと弱々しい声が出た

『……………キヨ……………ン?』

「ああ。入るぞ、ドゥーエ」

『だ、駄目!』

先ほどとは違いドゥーエにしては珍しい大声での拒絶。しかし、今更そんな事で引くわけにもいかない

「悪いが、今のお前に拒否権はないんだ」

俺はハルヒのような傲慢さで部屋のドアを開けた

「っ……………」

部屋の中にいたドゥーエを一言で現すなら痛々しいだ

顔色は悪いし、流れるように滑らかだった金髪はボサボサになっている、目は充血しているし、瞼はこれでもかとゆうぐらい腫れている。目の下の隈も酷い。若干痩せたかもしれない

「……………セインからお前らの姉妹がなにをされてるのかは聞いた。お前がこつちに来たせいでそうだったことも」

「だから、私を笑いに来たの?」

ドゥーエが自嘲気味に笑う

「違う!なあ、ドゥーエ。セインからお前の姉妹が保護されたこと

は聞かされただろ？」

「ええ。……あなたも私にあの子達に会えというの？私が傷つけてしまったのに」

「お前が傷つけたわけじゃないだろ？それはレインが」

「一緒よ。私の行動であの子達が傷ついたんだもの」

「……まあ、そりや会うのは怖いよな。俺もはつきり言つて古泉たちに会うのは怖かった。自分の力不足でハルヒを浚われちまって、責められるとも思つたし愛想付かされてんじゃないかと思つたら会いたくなかつた。けどあいつらは俺を責めないどころか『ちゃんと取り返すでしょう？』だと。信じられてんだなつて思ったよ。まあ、少し愚痴られたけどな」

ドゥーエはそれがどうしたとゆう顔をする

「だから、どうなるかなんて会つてみなくちゃわからないんだよ。責められたら謝り倒せ。辛くなつたら俺が慰めてやる。だから少しだけでもいい。会いに行こうぜ？」

ドゥーエは少し考えた後口を開いた

「辛くなつたら慰めてくれるなら今ここで少し勇気が出るようにしてくれるかしら？」

「ああ、俺に出来ることならな」

「じゃあ、目をつむつてくれるかしら？」

俺は不思議に思いながらも良われたとおりに目を閉じる。

……なんだ？これ。俺、今からなにされるんだ？まさか殴られたりはしないよな？

そんな事を頭の中でぐるぐる考えていると不意に唇に柔らかい感触が……って

「どう、ドゥーエー!？」

一気に後ずさるとニヤニヤと笑うドゥーエーがそこにいた

「ふふ、こんなに傷ついているんだもの。あなたのファーストキスをもらっても罰は当たらないでしょ」

いやいや、ちよつと待て。その理屈はおかしいしそもそもお前の勇気とキスにどんな関係があるんだよ!？

「キス自体に意味があるわけじゃないわよ。……あ、ちなみに私もファーストキスだから」

正直頭が痛くなった。つーか、お前はこんな冴えない男にキスをしてホントによかったのかよ？

「ええ。一步優位に立つたわ」

なんのだよ。……よくよく考えれば俺のファーストキスはあの閉鎖空間でハルヒにしたやつなんだが、言う必要はないか

「さて、行きましようか。準備をするから部屋から出てくれる?」「  
やれやれ。ま、とりあえず少しでも元気を取り戻してくれたから良  
しとするか。」

またまた所変わって俺が一昨日まで入院していた病院。その一室の  
前に俺とドゥーエ、そして心配だからと付いて来たセインは居た

「……だよ」

「……………」

横に立っているドゥーエの顔は硬く、手は小さく震えている。だが、  
意を決したように拳を握るとその手でドアをノックした

『……………ぎゅぎゅ』

中から声が返ってくる。ドゥーエは一瞬躊躇ってドアを開けた



ドゥー工視点

「久し振りね、トーレ、チンク、セツテ」

中に居る姉妹達が私の方を向く。その目の中に怨念や侮蔑があるように思えて私は逃げ出したくなった。けれど、隣にキヨンが居てくれる。そう思っただけで安心できた。

「ああ。久し振りだな、ドゥー工」

そう返してくれた聞き覚えのあるチンクの声に私は泣きたくなくなった。ぐつとこらえて頭を下げる

「ごめんなさい。私がこちらに来たせいで、あなた達に酷い思いをさせてしまった。謝って許してもらえないとは思えないけど」

「……………」

罵られると思った。オットーやディードみたいに責めてくると思った。けど、一向に返ってこない返事に顔を上げるとチンクは困ったように笑っていた

「別に謝られる筋合いはない。ドゥー工は自分の意志でそちらに行っただ。なら私はそれを責めるような真似はしない」

「私もだ。自分の意志に従ったお前を責めたりなどしない」

セツテも横で首を縦に振っている。私は我慢仕切れずに泣いてしまった

「よかったな、ドゥー工」

「ええ」

キョンがそう言って頭を撫でてくれた

キョン視点

「だが、一つ気がかりな事がある」

背が小さい眼帯をした方      確かチンクだったはず      がそう  
言った

「気がかりなこと？」

「ああ。私達が居ないとゆうことは、他の妹達を守ってやる事が出来ない。それだけが心配だ」

ああ、その事か。それなら

「大丈夫だ。式見がなんとかしてくれるらしい」

一昨日、あいつが帰り際に俺にプレゼントを渡したついでにそう言  
ってきた

「式見蚩が？」

「ああ。だから心配しなくても大丈夫だ」

チンクとトールは胡散臭そうに俺を見たが俺の言葉を信用する事に  
したらしい

「じゃあ、後は姉妹水入らずだな。俺は他に行く場所があるから」

「わかったわ。帰るときは言ってね」

わかった、と言って俺は部屋を出た。そして歩くこと数分。俺はある病室の前に来ていた。返事が無いことはわかっているが一応ノックをしてから入る。中にはルーテシアと同じ色の髪を持った女性、メガー又さんが眠っていた

「すみません、メガー又さん。俺が弱かったせいでルーテシアを浚われてしまいました。けど、絶対に取り返しますから」

それだけ言っただけ俺は部屋を出た。

## 謝罪と許容（後書き）

優希「あとがきコーナー」

キヨン「今回は何がしたかったんだ？」

優希「ナンバーズの和解。いや、他にアイデアが出てこなかったから」

キヨン「スバルに会うとかあったんだろ？」

優希「いや、もうそれは良いかなーって」

キヨン「適當だな、お前は」

優希「良いんだよ適當で。謝辞のコーナー」

キヨン「靈亀様、なっぺ様、サーペント様感想ありがとうございました」

優希「次回は多分特訓か決戦前日になると思う。とゆうわけで、朱神優希とキヨンでした。感想お待ちします」

特訓（前書き）

今回で幕間は終わりです

## 特訓

ドゥーエ達ナンバーズの和解からまた数日。

その間、吼太にしごかれる夢を見たり（魔法少女リリカルなのは  
〈The Fantastic Story〉 番外編 キヨンの短期特訓を参照）スバルが退院したりとあったが、長くなるので割愛。  
今、俺とリインとアギトは、はやてさんが六課の本部として借りてきた次元航行艦アースラの訓練場に立っていた

「じゃあ、やるぞ。リイン、アギト」

「はいです!」

「おう!」

「ユニゾン・イン!」

アギトとリイン、二人とユニゾンをする。基本的にはそんな事をすれば融合事故が起こるそうだが

「魔力値安定。ユニゾン成功だね」

少し離れた場所で観察をしていたマリーさんがそう言った

「いやあ、キヨン君の魔力はユニゾンデバイスに合わせるから同時にユニゾンしても全然平気だね。これはもうある意味レアスキルだね。名称は完全融合かな」

『邪魔だ、バツテンチビ』

『なっ、アギトこそ場所とりすぎです！』

『あん？やんのかコラ！』

『望むところです！』

「頼むから人の中で暴れないでくれ」

「やってるね」

今にも俺の中で暴れだしそうな二人を懸命に宥めているのはさんとフェイトさんが部屋に入ってきた

「お疲れ様です、なのはさん、フェイトさん。もう報告書とかは大丈夫なんですか？」

「うん。細々としたのは残ってるけどとりあえず大丈夫だよ」

「じゃあ、模擬戦お願いします」

「了解」

なのはさんとフェイトさんがデバイスを起動してバリアジャケット姿になる。今回の目的はアギトとラインとの同時ユニゾンともうひとつ、なのはさんとフェイトさん二人との模擬戦をもらうことだ。この二人に勝てないようじゃとてもじゃないが式見には勝てない

「それじゃあ、マリーさん。審判お願いします」

「了解。じゃあ、三人とも用意は良い？。十分間の一本勝負。それじゃあ、始め！」

マリーさんの開始の合図と共に動き出す

「アブソリュート・ゼロ！」

リインの能力を使ってなのはさん達の足元に氷の刃を作り出すが一  
人とも空中に飛んでよける

「アクセルシューター」

「プラスマランサー」

なのはさんとフェイトさんの射撃魔法が飛んでくる

「フリジットダガー、ブレネン・クリューガー」

それをリインのフリジットダガーとブレネン・クリューガーを撃つ  
て相殺する

「ハアアアア！」

攻撃を相殺すると同時にフェイトさんがこちらに突っ込んできた。  
それを咄嗟にストラダーダを創って受けとめる

「デイバイイイン」



後ろでなのはさんがバスターを溜めているのが見える

「くっ、アブソリュート・ゼロ」

フェイトさんの足元に氷の刃を作り出してフェイトさんに距離を取らせる

「バスターアアア！」

「アギト、リイン、準備は良いか？」

『おう、ばっちりだぜ』

『リインも大丈夫です！』

「いくぞ、メドローアバスターアア」

リインの氷とアギトの炎を混ぜた砲撃を撃つ。俺となのはさんの砲撃がぶつかり少しの間拮抗するが、俺の方が打ち勝った

「プラズマランサー！」

『メドローアランサー』

なのはさんに追い討ちをかけようとしたところにフェイトさんの魔法が飛んできた。それは何とかタナトスのおかげで防げたが……

「流石にこの二人を同時に相手にするのは辛いな」

『マスターが望んだ事でしょう？』

ああ、その通りだよ

「アギト、リイン、ユニゾンアウトだ。タナトス、式見から貰ったあれやるぞ」

『All right ステータスロード。ロードファイ』

「そこまで。十分経ったよ」

と、そこでマリーさんが終了を告げた

「もうそんなに経ったんですか？」

「うん。いやあ、まさかこの二人を同時に相手して墜ちないとは思わなかったよ」

さっきも言ったがこのぐらいで墜ちてたら式見には勝てないからな

「いやあ、強くなったよね、キヨン君。まさか押し負けるとは思わなかったよ。最初の頃からは想像も付かないや」

そういや、初めてなのはさんと模擬戦をしたときにはシューターの的になってたんだよな。それを考えたら強くなったんだな、俺も

その時、アースラ全体にアラートが鳴り出した

『見えるかしら？全世界の方々』

目の前に画面が現れそこにレインが映る

『私の名前はレイン。全ての次元世界を支配するものよ。そしてこれが私の力』

画面が切り替わり地面から浮上する巨大な物体が映し出される

『一度は世界を破壊した悪の英知。聖王のゆりかご』

ゆりかごが映し出されている画面とは別にもうひとつの画面が映し出される。そこに映されていたのは椅子に縛り付けられているヴィオだった

「ヴィオ…オ……」

『パパ……ひつ、い、痛いよ、怖いよ、パパア!』

「ヴィオ！ヴィオ！」

『あはははは』

ヴィオの泣き声とレインの高笑いがある頭から冷静さを奪っていく

「落ち着いて、キョン！」

気が付いたら俺は画面のレインに向かってダイバインバスターを撃ちそうになっていた。俺の肩をフェイトさんが掴んでいる

「落ち着いて、キョン」

もう一度言われた言葉で完全に冷静さを取り戻せた

「すみません。もう大丈夫です」

正直な所、未だに頭に血が上っているがとりあえず理性は取り戻せた

『皆、すぐに会議室に集合や』

画面が消えてはやてさんの呼び出しがかかる。なのはさんとマリィさんは先に出て行った

「行こうか、キヨン」

「……はい」

フェイトさんに促されて歩き出すが、少し立ち止まってヴィヴィオが映っていた画面があった場所を見る

「待ってるよ、ヴィヴィオ。絶対に助けるからな」

そう言って、歩き出した

## 特訓（後書き）

優希「あとがきコーナー」

蛭「今回も短いな」

優希「いや、次からは長くなるって、多分」

蛭「次回からは本格的にクライマックスだな」

優希「そこで悩んでる事があるんだよな。スバルとティアの所はもう省いても良いかな？」

蛭「またなんで」

優希「だって、本編と変わらないし。他の所は色々かわるんだけど、その二人だけ変えようがないんだよな」

蛭「じゃあ、別に良いんじゃないのか？」

優希「そうだよな。次回は出撃ちよつと前を書いてその次から決戦を書くことと思ってる。具体的な順番は決めてないけど、とりあえずキヨンは一番最後に」

蛭「そりゃまあ、そこがクライマックスだからな」

優希「とゆうわけで、謝辞のコーナー」

蛭「靈亀様、なっぺ様、感想ありがとうございました」

「優希」とゆづわけで、朱神優希と式見蛭でした。感想お待ちしてま

出撃前の1コマ(前書き)

別名キヨンの受難とも言つ

## 出撃前の1コマ

「じゃあ、解散」

今回の事件に対する会議も終わり全員が会議室を出て行く。現場に着くまでは待機とゆう事になった。みんな自分の部屋に戻るようなので俺も自分にあてがわれた部屋に戻ると、そこには先客がいた

「お久しぶり、キヨン君」

「朝比奈さん！何であなたがここに」

そう、俺の部屋のベッドに何故か大人バージョンの朝比奈さんが座っていたのだ。

「本来、私はここにいてはいけないの。未来が変わってしまうから。でも私はこの先にある未来が正しいとは思わないからここに来たの」

「どうゆう意味ですか？」

「……このままだと、キヨン君は涼宮さんを救うことが出来ないの。それどころか、キヨン君が涼宮さんを殺してしまう」

朝比奈さんは少しの間考えるように目を瞑るとはっきりとこう言った。

……俺がハルヒを、殺す？

「ハハ、冗談だしたら笑えませんかよ、朝比奈さん」



「これが冗談だったらどんなによかったか」

俺だってこれが冗談なんて思っちゃいない。そんなことを言うような人じゃないし、そんなことを言えるような状況じゃない

「……俺はどうすればいいんですか？」

「私にも分からないわ。けど、それを回避する未来は絶対あるはずなの。ごめんなさい、こんなことしか言えなくて」

「いえ、朝比奈さんは悪くないですよ。悪いとしたら俺ですから」

そう、本当にそんなことになるなら悪いのは今目の前にいる朝比奈さんがいる未来を作ってしまった俺自身だ

「本当にごめんなさい。もう時間ね。さよなら、キョン君」

次の瞬間朝比奈さんの姿は消えていた

狐につままれていたような気分だ。

まさか、式見に見せられた世界のときに出てきた俺みたいに俺の妄想だったのではないかと思えば朝比奈さんが座っていた場所を触るとまだほのかに温かくあれが夢や幻ではない事がはっきりした

どうゆうことなんだ？俺がハルヒを殺す？

思考が無限ループに陥りそうになっていると部屋のドアがノックされた

「キヨン、入ってもいい？」

どうぞ、と返事をする。ティアが入ってきた

「どうかしたのか、ティア？」

「ええ、ちょっとね。あんたが色々気負ってんじゃないかと思って。ヴィヴィオの事とか、ハルヒの事とか」

気負ってるって言うよりは悩んでるって感じなんだがな

「大丈夫だ、絶対にあいつらは助ける」

俺の命に代えても

「確かにあの子達を助けるのも大切だけど、あんたも無事に帰ってこなくちゃいけないのよ？」

「ああ、分かってるさ」

俺の心が見透かされたように感じてドキッとしたが、平静を装って答える

「嘘ね。表情に出てるわよ」

咄嗟に顔を触ってしまう

「ほらね、自分でも思うところがあるんでしょ？」

「カマかけたのか」

「まったく。やっぱり様子を見に来て正解だったわね。いいわ、キヨン。それならそれでこっちにも考えがあるわよ」

ティアはそう言つや否や俺に跳びついてきた

「おまつ……んう!？」

俺が文句を言う前になんと俺はキスされていた。最近多いな、ドウ  
―エの時とか桂花の時とか

「キヨン、あたしはあんたが好き」

しかも告白までされちゃった

「ティア、……俺は」

「返事は今じゃなくていい。帰ってきたら教えて。どう?絶対に帰  
つて来なくちゃならなくなたでしょ?」

「ああ」

これ以上無いぐらい効果的だな

「ちよつと待ったああ!!!!」

その時、蹴破られたんじゃないかと思うぐらいの勢いで部屋のドア  
が開いた。……おかしいな、ここ自動ドアのはずなのに

「ティア、テメー、抜け駆けしやがったな」

「見張つてて正解だったわね」

「駄目だよ、ティア、抜け駆けは」

部屋に入ってきたのははヴィータさんとドゥーエとフェイトさんだった

「つて、何であなた達が!？」

「抜け駆けもなにも私は私のしたいようにしただけです」

「ふうん、そんな事言うんだ」

無視ですか。やばい、全然話しについていけない

「おい、キヨンこつち向け！」

「はい?.....んぶっ!？」

「んっ.....ぶはっ、.....あたしもキヨンのことが好きだ。帰ってきたらあたしにも返事してくれよ?」

この後の展開は分かるだろ? フェイトさんとドゥーエにもキスされて告白された。

やれやれ、どうやら俺は帰ってきてても試練が続くらしい

## 出撃前の1コマ(後書き)

優希「あとがきコーナー」

キヨン「何でこうなった？」

優希「この展開は元々考えてたんだよ」

キヨン「じゃなくて、何で俺はシリアスパートであんなことになっ  
てんだよ？」

優希「キヨンだからさ」

キヨン「メドロア・ブレーカー！」

優希「ぎゃあああああ」

蛍「容赦ないな」

キヨン「別にいいんだよ。さて、謝辞のコーナー。なっぺ様、霊亀  
様、バルディッシュ様、感想ありがとうございました」

蛍「今回は出撃か」

キヨン「みたいだな。それで、エリオ達、フェイトさんの後に俺か」

蛍「ずいぶんと先だな」

優希「しょうがないじゃん、いきなりクライマックスを書くわけに

も行かないし。フェイトの方は結構重要だし」

蛍「あ、生き返ったんだ」

優希「うん。とゆうわけで、朱神優希とキヨンと式見蛍でした。感想お待ちしてます」

## 出撃

「アギト、お前らはゼストさんと一緒にエリオ達についていってくれ」

「は！？なんでだよ！」

エリオ達の目標ポイントの近くまで来たときに、俺はそう言った

「さつき、新しい情報が入った。向こうにはルーテシアがいるらしい。俺はなのはさん達と一緒にゆりかごの方に向かうから、そっちには行けないんだ。頼む」

「……分かった。あたしは絶対にルールを助ける。だからお前もぜってーヴィヴィオとハルヒを助けるよ！」

アギトは難しい顔をして押し黙ったが結局そういつてくれた

「ああ」

フェイト視点

「とつとつ告白したんやね」

「へ！？な、なんのこと？」

出撃ポイントになるまで待機していたらはやてが嫌な笑みを浮かべながらこちらにやってきた。いきなりすることに少しもってしまった

「隠さんでもええよ。全部見とったから」

え、あれ全部見られてたの!?

「盗み見はよくないよ、はやてちゃん」

そこになのはもやってきた。

「いやあ、フエイトちゃんがものすごい剣幕でキヨン君の部屋に入ってたからどうしても気になってな。ちょっと覗いたらすごい修羅場やったから、ついな。けどすぐに退散したんやで?それで?返事はもらえたん?」

「まったく、はやてちゃんは。でも、私も少し気になるな」

なのはまで

私は諦めてキヨンの部屋で起こった事を全部話した

「まだ返事は貰ってない。帰ってきたら聞かせて貰うって事になったから」

「そっか。なら、絶対に生きて帰らないとね。フエイトちゃん」

「うん」

「ほな、出撃や。行くで、二人とも」

「「うん!」「」

三人称



今、ティアナ達の乗ったヘリはガジェット？型と？型に追われていた

『ごめんね、皆。思いつきり揺れるからしっかり捕まってる』

アルトが通信でそう言った直後、ヘリの揺れが激しくなる。…がその甲斐もあつてなんとかガジェットを巻くことに成功した

「アルト、凄い！」

『ありがと、スバル。さ、降下ポイントにつくよ。皆、準備は良い？』

「…………おっ…………」

皆の返事と共にハッチが開く

「確認するわよ？」

ティアナがディスプレイを見ながら今回の作戦について改めて確認をする

「あたし達はミッド地上、市街地方面敵戦力の迎撃ラインに参加する。地上部隊と協力して向こうのやつかいな戦力、召喚師や戦闘機人を最初に叩いて止めるのがあたし達の仕事。……そして今回の戦闘ではギンガさんとルーテシアも出てくる」

「優先的に対処」

「安全に確保、ですね」

エリオとキャロがそう言う

「ギンガさんはスバルが。ルーテシアはゼストさんとアギトに対処してもらいます」

「うん」

「了解した」

「よし。それじゃあ、行くわよ！」

ティアナの号令と共に皆がへりから飛び降りた

キヨン視点

今、俺達はゆりかごの目の前に来ている

「でけえ」

生で見るゆりかごは画面で見るものよりも遥かに巨大だった

この中にヴィヴィオとハルヒが

「（キヨン君、そっちに行ったよ）」

「（了解です）」

『ステータスロード。ロードファイルネーム“シグナム”』

「飛竜一閃！」

こちらに飛んできたガジェット？型を一扫する。が、すぐに今のよりも数倍近いガジェットが現れる

「ちつ、デイバインバスター！……………くそつ、キリがない」  
『高町一尉』

その時、なのはさんに一本の通信が入った。それは中へ入れる道が見つかったとゆう報告だった

『外周警戒はあたしが引き受ける。なのはちゃん、ヴィータ、キヨン君、行ってくれるか？』

「おつ」

「了解」

「わかりました」

各々返事をして、報告のあった場所へと向かう

「ここですね」

そこには人一人がやっと通れるぐらいの穴が空いていた。穴はずつと下へと続いている

「じゃあ、入るよ」

なのはさんとヴィータさんの後に続いて穴の中に入り少し降下すると広い空間へと出た

「スターズワン、ツー、ファイブ内部通路突入」

その時俺達の飛行魔法が消えなかった

「AMF!？」

「内部空間全部に!？」

魔力の出力を上げてなんとか魔法を持ちこたえさせて地面に着地する。それと同時に奥からガジェットどもがうようよとわいて出てくる

「邪魔だ!」

『ステータスロード。ロードファイルネーム“ザファイーラ”』

「鋼の輓!」

出てきたガジェットどもを一掃する。

待ってるよ、ハルヒ、ヴィヴィオ

**出撃（後書き）**

あとがきコーナーはお休みします

決戦1 誇りと決意（前書き）

キャラとゼスト達の扱いが酷い

## 決戦1 誇りと決意

エリオ視点

今、僕達の目の前にはエグザとルーが立っていた

「ルールー、向かえに来たよ。あたし達と一緒に帰ろう！」

「……………」

ルーはアギトの言葉にも反応しない

「キャハハ、バツカじゃないの？洗脳されてる子にそんなの伝わるわけないじゃない」

「んだと、この野郎！」

「待て、アギト」

今にもエグザに飛びかかりそうなアギトを騎士ゼストが抑えた

「エグザ、とか言ったな？君は、何故レインに従う？」

「そんなの、生みの親だからに決まってるじゃん。あたしは人造魔導師よ？人造魔導師は生みの親に従うために生まれてきたんじゃない」

その言葉に僕は初めて会った時から感じた疑問を発した

「君は自分が人造魔導師だって言う時、なんでそんな風に笑ってら

れるんだ？」

僕には絶対に出来ない

「あたしは、自分が人造魔導師であることに誇りを持つてるからよ」

エグザはそうはつきりと答えた

「……………凄いな、君は。僕はそんな風には考えられない。でも、だからこそ僕は君を止める！そんな事を誇りに思わないで欲しいから！」

ストラダを構える。それと同時にエグザがギリユを、ルーがガリユーと地雷王を呼びだした

「ゼストさん、僕はギリユをやりますのでガリユーの方をお願いします」

「…だが、ギリユはガリユーよりも」

「遥かに強いし速いです。けど、あのスピードについていけるのは今は僕しか居ませんから」

「……………わかった。但し無茶だけはするな。それで怪我をされてはハラオウンに合わす顔がないからな」

「わかりました」

「行って、ギリユー！」



ゼストさんと話し終わると同時にギリユーが突進してくる。迫ってくる爪を咄嗟にストラダーで防ぎ弾く

「この前は負けたけど、あの日よりも強くなったんだ。今日は僕が勝つ！ストラダー、フォームツヴァイ！」

『デューゼンフォーム』

デューゼンフォームにしたストラダーを構える

「スピーアアングリフ！」

ストラダーとギリユーの腕がぶつかって小さな爆発が起こる。だけど、ギリユーにはダメージがないのかすぐに次の攻撃を仕掛けてくる

「くっ」

それをギリギリの所で受け止めるが次の瞬間、後ろに回り込まれた

「しまっ……………がっ」

僕が反応するよりも早く数発殴られてふっ飛ばされ、そのまま床を突き破った

「くっ、やっぱり強い」

ストラダーを支えにして立ち上がる。既にギリユーは僕が突き破った穴から入って来ていた

「ストラダー、“あれ”をやろっ」

キョンさんがヒスイさんの世界に行って模擬戦をした時にヒスイさんが使ったとゆう技。あの日ギリューに負けてからキョンさんに再現してもらってがむしゃらに練習をしてやっともものにした魔法

「十秒間。耐えられるよね？」

『勿論です。マスター』

「ありがとう。行くよ、ストラダ。フォームドライ！」

『ウンヴェッターフォーム。エクスプロージョン』

ストラダをウンヴェッターフォームにしてカートリッジをロードする。これで準備は出来た

「十秒間だけ付き合って貰うよ、ギリュー」

『ツヴァイ ソニックムーブ start up』

その瞬間、僕の速度が亜音速を超え周りのものが全て止まったようになった。それはギリューも例外じゃない

「ハアアアア！」

拳に雷を纏い何十発も殴る。ストラダを使わないのは今回は一撃の重さよりも手数の方が多いのが重要だから。……まあ、本当は一撃一撃が重くて手数が多いのが一番なんだけど

『……？、？、？ time up』

「紫電百閃！」

ストラダのtime upの声と共に時間の流れが元に戻る。それと同時にギリューに全てのダメージが伝わり、その体が吹き飛んだ

三人称

「ハア、ハア。やったか？」

エリオにもあまり余裕は残っていない。無理矢理のソニックムーブの重ね掛けに亜音速越え。かなり体を酷使したせいでもうフラフラである。出来れば立ち上がって欲しくないと願うエリオ

しかし、そんなエリオの願いは認められずギリューは立ち上がった。だが、もうギリューもフラフラだ。足が小刻みに震えている

「これでお終いにしよう、ギリュー」

エリオがストラダを構えるとギリューも構えた

……そして

「サンダーレイジ！」

「……………」

両者が同時に動き交差する

「ぐっ」

「……………」

エリオは腕を斬られ呻く、一方のギリユーは振り返ってもう一度攻撃をしようと腕を上げ、そのまま倒れた

エリオ視点

「ハア、ハア。勝った」

ギリユーが倒れたのを見て力が抜ける。けど、まだやらなくちゃいけないことがある。僕が開けた穴から外に出るとエグザが立っていた

「ギリユーを倒したんだ」

「うん。もう終わりだ。僕は君を攻撃したくない。大人しく投降してくれないか？」

「お生憎様、私はレインにもう一つ命令を受けてるのよ。それは負けそうになったら自ら命を絶つこと」

そう言ったエグザの手にはいつの間にかナイフが握られていた

「させない！」

『ソニックムーブ』

エグザが握っていたナイフをストラダーで弾き飛ばしてその腕を掴む

「何で邪魔をするの！？私は人造魔導師として

」

「そんなの間違ってる！君は人造魔導師である事が誇りだって言った。でも、今君がしてる事は辛いことや嫌なことから自分が人造魔導師だからって言って逃げてるだけだ。そんなの誇りでも何でもない！」

「あなたに私の気持ちができるわけじゃない！ただの道具として生み出された私の気持ちが！」

「君は道具じゃない。本当に自分を道具だと思ってるならそんなこととは言わないはずだ」

エグザの腕を放して少し距離を取る

「それに、少し分かるよ、君の気持ち。僕も誰かの代わりとして造られてそして捨てられたから。けどそんな事関係ない、僕は僕として、今ここにいるエリオ・モンディアルとして生きてるんだ」

「……ふん、あなたの方が凄いじゃん」

「これはある人の受け売りなんだけどね。どう生まれたかは関係ない、今どう生きてるのが大切なんだって」

あの日、ヘリの中でキョンさんに言われた言葉を思い出す

「カッコいいね、その人。……あたしも、造られた人造魔導師としてじゃなくて、エグザとして生きていけるのかな？」

「うん。大丈夫だよ、絶対。エグザ……君を保護します」

この後、キヤロと騎士ゼストとアギトがルーとガリユーを連れて戻ってきた。どうやら正気を取り戻させることに成功したらしい

オマケ

「なあ、あたしらも結構頑張ったはずなのに扱いに差があるのは気のせいか？」

「さ、さあ？」

## 決戦1 誇りと決意（後書き）

優希「あとがきコーナー」

キヨン「おい、キャラ達が出てねーじゃねーかよ」

優希「いや、だってさあ、やってることは原作と変わらないし、ガリューと戦ったのがゼストになっただけで。ぶっちゃけ書くのがメンドい」

キヨン「だとよ、キャラ、ルーテシア」

優希「え？」

キャラ「ふうん、そうなんだ」

ルーテシア「作者さん、少しOHANASHIしよう？」

優希「す、すみませんでしたあ！」

キャラ「問答無用です。竜騎召還、ヴォルテール！」

ルーテシア「究極召還、白天王！」

優希「ギヤアアア」

キヨン「うわ、作者がミンチになっていく」

蛭「じゃあ、さっさと終わらせようか。謝辞のコーナー」

キヨン「いきなり出てくるな。霊亀様、なっぺ様、畏無様、感想ありがとうございました」

蛭「今回はフェイトさんで次がお前が」

キヨン「もう何回も確認したけどな。とゆうわけで、キヨンと式見蛭とキャラ口とルーテシアとミンチ（作者）でした。感想お待ちしております」



## 決戦2 真実と感謝（前書き）

最初に言うておく、今回はかなり原作を無視しています

## 決戦2 真実と感謝

フェイト視点

私は今、レインたちの基地となっていたとゆう洞窟内に居る。確かにガジェットが何体か居るからハズレとゆうことは無いだろうけど

「警備が手薄すぎる」

そう、ガジェットも？型だけであまり本格的な警備とは言えない

「それはそうさ、ここには私とウーノ、それに何人かの検体と人質だけだからね」

その時誰かがこちらに歩いてきた

「ジェイル・スカリエッティ……」

「初めましてだね、フェイト・テストロツサ執務官」

それは、私が長年追いかけていた広域次元犯罪者ジェイル・スカリエッティとナンバーズの一番ウーノだった

「ジェイル・スカリエッティ、あなたを保護します」

「ククク、広域次元犯罪者である私を保護とは。言葉を間違っているのではないかね？」

「先日保護したチンクがあなたの犯罪の経歴のほとんどがレインによるものだとゆう証拠を持っていました。それさえあればあなたの

罪が全て冤罪であると証明できます」

「ふむ、チンクか。……あの子達は元気にしているかい？」

「ええ」

「それは良かった。ウーノ、先に外に出ていてくれるかい？多分シスターか査察官が居るはずだからそのどちらかに保護してもらおうといい」

「！……ですが………いえ、わかりました」

ウーノは一瞬反論しようとしたが渋々といった感じで出口の方へと向かった。その横にはアコース査察官の無限の猟犬が付いていつている

「さて、残念だが私は無実にされていていいような人間ではない。少し昔話をしようか、執務官」

ウーノが十分に離れたのを確認したスカリエッティが喋り始めた

「昔、あるところに三人の男がいた。その男達は英雄と呼ばれているが今はただ権力に溺れた哀れな人間達

「それが現在の最高評議会のメンバーだ

「そして彼らは一人の人間を造り出した。それは失われた世界の知

恵と限り無き欲望をその身に秘めたアルハザードの遺児。開発コードネーム無限の欲望アンリミテッド・デザイア

「それが私、ジエイル・スカリエツィだ

「最高評議会のメンバーは私に色々なものを作らせた。だが決して私に自由を与えようとはしなかった

「怨んだよ。彼らの言いなりになって何かを作るだけでは私の中に巢食う欲望は満たされなかった

「そこで私は自分の欲望が満たされる世界を作ろうと思った

「そしてナンバーズ達を造ったんだ

「だが、そこで予想外のことが起こった

「ある日何の前触れも無く私の最高評議会への怨みの感情が消えたのだ

「それに心無し性格も変わった

「『神は気まぐれに世界を作り替えた。闇を光に変え、新たな闇を作り出す。闇は神へと取り憑き光により神と共には永久とわの眠りにつく』

「何故知っているのかなど瑣末な問題だよ

「話を戻そう。この“闇を光に”の闇とは私、新たな闇とはレイン。そして、神とは涼宮ハルヒと彼女の力のことを示している

「私の心の中にあつたどす黒い闇は彼女の気まぐれによつてただの光へと変えられた。なぜ彼女が私の事を知っていたのかは知らないけどね

「だが、残念なことにその頃にはもうナンバーズ達を造つた後だつた。だから私は彼女らの父となり穏やかに生きていくつもりだつたのだが

「私に変化が起きて数カ月後に突然彼女                    レインが現れた

「彼女はナンバーズたちが全員でかかっても敵わなかつた。ナンバーズ最強のトーレですらね

「彼女はナンバーズたちの命と引き換えに私に取引をしてきた。彼女の違法行為の手伝いをする事、そしてその罪を全て私が被る事

「もちろん私は承諾したよ

「確かにナンバーズ達を助けなければいけないとゆう思いはあつた。だが私の心の中の大半を占めていたのはまた実験が出来るとゆう歓喜だつた

「罪悪感はある。だがどれだけ心の闇を消そうと性格を変えようと結局私の中には無限の欲望が渦巻いていたのだよ

そこまで話したスカリエッツィはそこで一度大きく息を吸った

「これでわかっただろう？ 私は裁かれるべき人間なんだ」

そして、自虐的な笑みを浮かべるスカリエッツィを見て、私は

「それがどうかしましたか？」

そう言いきった

スカリエッツィは私の言葉に心底驚いた顔をしている

「私が今話を聞いた限りではあなたは娘の身を案じてレインの言うことを聞かなければいけなかった、いわば被害者です」

「だが私は、彼女に協力することに喜びを感じていたんだぞ？」

「それだってあなたのせいじゃない。悪いのはあなたの中に欲望を植えつけた最高評議会です」

「だが」

「私の大切な人が言ってたんです。どう生まれたかが問題じゃない、どう生きているかが大切なんだって。けど私はこれからどう生きていくのかも重要だと思っんです。あなたはどう生きたいんですか？」

「私は……………娘達と穏やかに生きていきたい」

スカリエッツィは少しの間俯いて悩んだがすぐにそう言った

「わかりました。ジェイル・スカリエツィ、あなたを保護します」

出口に向かいながら私はあることを思い出していた

スカリエツィは私やエリオを造ったプロジェクトFの基礎を作った人間

本来は褒められることではない。生命操作は違法だしそれによって悲しんだ人もいる

だけど、彼がいなかったら私たちもいなかった。誰かを助けたいって気持ちを抱くことも私がキヨンが好きになることも無かった

だから……

「……………ありがとう」

「ん？何か言ったかね？」

「別に何も言っていないですよ。それより速く歩いてください。さっさとあなたを保護して貰って奥に居る人たちも保護しないとイケないんですから」

私は恥ずかしさを隠すためにかなり速めに歩き出した

## 決戦2 真実と感謝（後書き）

優希「あとがきコーナー」

キヨン「これは無い」

蚩「無理があり過ぎないか？」

優希「良いんだよ、二次創作なんだから」

キヨン「叩かれるぞ」

優希「覚悟の上さ。謝辞のコーナー」

キヨン「靈亀様、畏無様、なっぺ様、灰音様、バルディッシュ様、感想ありがとうございます」

優希「次回からキヨンの出番ですよ」

蚩「僕は？」

優希「もうチヨイ後。とゆうわけで朱神優希とキヨンでした」



決戦3 聖王との対面(前書き)

ヴィヴィオとの戦いまでいけなかったorz

### 決戦3 聖王との対面

「でやああああ!!!」

次々に出てくるガジェット共を大剣で切り落としていくがすぐに次の大群が出てくる

「このっ、連刃一閃！」

連結刃で出てきたガジェットを一掃して、息を整える

「キヨン、あんま飛ばしすぎんな。ヴィヴィオのところに行く前に倒れちまうぞ」

ヴィータさんが心配そうに近づいてくる

「すみません。けど、時間が無いんです。一刻も早くハルヒたちの所に行かないと」

「だーかーらー、今のまんまだとその前に倒れちまうって言うてんだよ」

その時、俺たち三人に通信が入った

『突入隊、起動六課スターズ分隊へ。駆動炉と玉座の間詳細ルートが判明しました』

そしてゆりかご内部の地図が映し出される

「真逆方向……」

「突入隊のメンバーはまだ揃わねーか？」

『各地から緊急招聘していますが後四十分は』

そんなに悠長には待つてられない。

「しかたない。スターズワンとスターズツー、それにスターズファイブは別行動でいきます」

なのはさんもそう思ったのかそう言った

『了解しました。すぐに応援部隊を揃えます』

そう言って通信はきれた

「なのは！？」

「駆動炉と玉座のヴィヴィオ。かたつぽ止めただけで止まるかも知れないし、かたつぽ止めただけじゃ止まらないかも知れない。こうしてる間にも外は危なくなってるかも知れないんだよ？」

「けど、キヨンの奴はここまでで結構消耗しちまってる」

「このぐらい大丈夫です、ヴィータさん」

ヴィータさんは俺の言葉に諦めたのか渋々と言った感じで了解してくれた

「……わかったよ。で、誰がどこに行くんだ？」

「出来ればキヨン君には一番危険が低そうな駆動炉へ行行って欲しいんだけど」

「すみません、なのはさん。わがままだったのは分かってるんですが、玉座のほうへ行かせてくれませんか？」

「そう言うと思ったよ。キヨン君と私は玉座の間へ。ヴィータちゃんも駆動炉のほうへ行ってくれるかな」

ヴィータさんは少し不満そうな顔をしたが素直になのはさんに従った

「いいか、絶対に無事に帰って来いよ。お前は帰ったらあたしらのこ、告白に返事しなくちゃイケねーんだからな！」

ヴィータさんはそう言うのと恥ずかしくなったのか顔を真っ赤にして文字通り飛んでいった

「私たちも行くのか、キヨン君」

「はい」

玉座へ向かうなのはさんの後に続いて飛ぶ

「それで、キヨン君は誰にするの？」

「は！？おわつと」

なのはさんのいきなりの発言に集中が乱れて落ちそうになる

「いきなりどうしたんですか」

「ちょっと気になってね。フェイトちゃんもヴィータちゃんも十年以上の付き合いだし、ティアナは教え子だし」

「……………全然考えれてませんよ。いきなりすぎましたし今はそれよりもやらなくちゃいけないことがありますから」

「そつか。でも真面目に考えてあげてね、皆良い子だから」

「はい……………って、何でなのはさんがフェイトさんとティアの事も知ってるんですか！」

「なんでって、あの二人がキヨン君の事を好きだって事は有名だよ？知らないのはキヨン君くらいじゃないかな」

「マジですか」

全然気づいてなかった。こりゃ吼太やヒスイのことを笑えないな

「絶対に無事に帰らないとね」

そう言いながら笑うのはさん

笑い事じゃないですよ、全く

### 三人称

ふざけるのも程々に着実に玉座の間へと向かう二人

「「デイバインバスター！」」

二人の同時砲撃でガジェットが一瞬でスクラップになる

「さつきから、ガジェットの数が増えてる」

「それだけ玉座に近づいたって事なんでしょう」

そう言いながら角を曲がるのとその角の先にいた巨大な大砲　イ  
ノメースカノン　を構えたナンバーズ、デイエチが砲撃を撃つのが同時だった

「！さがつて、キョン君。エクセリオンバスターアアア！」

それにいち早く気づいたなのはがキョンの前に出て抜き撃ちで砲撃を撃ち、二つの砲撃が拮抗する

「くっ、ブラスターシステムリミットワン、リリース！」

『Blaster set』

「ブラスタアアアシュート！」

なのはのリミットリリースと共に砲撃の威力が上がリデイエチの砲撃を押し返しそのままデイエチを吹き飛ばした

「ハア、ハア、ハア」

「大丈夫ですか？なのはさん。ブラスターモードは負担が大きいん

ですからあまり無理しないほうが」

「まだ、ブラスタワンだから大丈夫だよ。それにキヨン君のフルドライブの方が負担は大きいよ」

なのはの言葉に苦虫を噛み潰したような顔になるキヨン

「……知ってたんですか」

「うん。マリーさんから聞いた。知ってるのは私だけだよ。私が見えることじゃないけど、あまり無理しちゃダメだよ？キヨン君」

「……分かってますよ」

なのはが倒れているディエチの方まで飛んで行きバインドで縛る

「ジットしてなさい。突入隊があなたを確保して安全な場所まで護送してくれる」

その間にレイジングハートがイノメースカノンを封印処理する

「ひとつ聞かせてくれ。俺達が確認してるナンバーズは俺達が保護してるドゥーエ、トーレ、チンク、セイン、セツテと今街に出てるオットー、ノーヴェ、ウエンデイ、デイド、そしてディエチ、お前だ。ナンバー1のウーノとナンバー4のクアットロ、後、式見とレインとハルヒはどこだ？」

「……ウーノ姉はドクターと一緒に地上の基地に残った。クアットロはこの中にいる。他の三人もここに居る筈だけど姿は見えない」

「そうか、教えてくれてありがとな、ディエチ。もう少ししたら突入隊が来るからそれまで待っていてくれ」

そう言っただけなのはとキヨンは奥へと進む

「どう思う？キヨン君」

「ヴィヴィオ以外の奴らが玉座の間にいるとは考え辛いですね。特にクアットロの力は戦闘向きじゃない。どこか離れた場所、しかもそう簡単には見つからない場所にいるんだと思います」

「そうなるよ、そっちも捜す必要があるね」

「……あの、なのはさん」

「分かってるよ。『クアットロの方はお願い出来ませんか』でしょ？」

「すみません」

「止めても止まらないだろうしね。その代わり絶対に無茶だけはダメだよ？」

「はい」

#### キヨン視点

なのはさんと別れて玉座の間を目指して飛んでいると前方に封鎖された入り口が見えてきた。



「あの先が玉座の間か」

加速して扉をバスターナックルで吹き飛ばす

「いらっしゃーい、お待ちしてましたあ」

部屋の中には布切れのような服を着たヴィヴィオとその横にクアツトロ……のホログラムがいた

「ヴィヴィオ！」

「お久し振りですねえ。こんな所まで無駄足ご苦労様」

「……レインとハルヒはどこだ？」

「あらあ、私は無視ですかあ？」

「テメーなんか構ってる暇はねーんだよ」

「カッコいいですねえ、白馬に乗った王子様の気分ですかあ？」

意味がないとわかっていながらも、アクセルシューターを撃つ。やはり当たると同時にホログラムが消え空中に画面が現れた

『でえーもあー、これでもまだ冷静でいられますう？』

「うう」

ヴィヴィオのうめき声に前を向くとヴィヴィオが苦しみだした

「ヴィヴィオ！」

ヴィヴィオに駆け寄ろうとした瞬間ヴィヴィオから虹色の魔力が噴き出して俺は呆気無く押し戻される

『あなたもドゥー工姉様から聞かされてますよねえ。古代ベルカ王族の固有スキル『聖王の鎧』レリックとの融合を経てこの子は完全にその力を取り戻す』

「パパア！パパア！」

「ヴィヴィオ！」

もう一度ヴィヴィオに近づこうとした瞬間魔力光が一際大きくなり思わず目を瞑る。目を開けるとそこには宙に浮かんだヴィヴィオがいた

三人称

「パパ」

『さあ、陛下あ、いつまでも泣いてないで陛下のパパが助けて欲しいって叫んでます。陛下のパパをさらって行ったこわーい悪魔がそこにいます。頑張っつてそいつをやっつけて本当のパパを助けてあげましょ』

クアットロの言葉がするとヴィヴィオの頭の中にさながら悪魔の囁きのごとく入っていく

『陛下の体にはそのための力があるんですよ。心のままに思いのま

まにその力を解放して』

そしてヴィヴィオの中で何かが壊れた

「う、うう。うああああ！」

虹色の魔力がヴィヴィオを包みそれがなくなるとヴィヴィオの体は大人のように大きく変化していた

キヨン視点

どうなつてんだ？ヴィヴィオの体が大きくなつた？ドゥーエのライアーズマスクみたいなのとも違うし

その時閉じられていたヴィヴィオの目が開いた

「あなたは、ヴィヴィオのパパをどこかにさらつた」

「何言つてんだヴィヴィオ。俺がわからねーのか！」

「うるさい！ヴィヴィオのパパを返して！」

また虹色の魔力が噴き出す

「くっ、タナトス、フルドライブ！」

『All light Start Full Drive . Save file All loading』

俺の中に今までセーブしてきたセーブデータが全てロードされる

『さあ、親子で仲良く殺し合いをしてください』

「悪いがクアットロニつ訂正させてもらうぜ。一つ目、俺はヴィヴイオの親じゃない。二つ目、俺は誰も殺さないし死ぬ気も無い」

大剣を創り出して構える

「やってやるよ。お前の目を覚ましてやるヴィヴィオ！」

### 決戦3 聖王との対面（後書き）

優希「あとがきコーナー」

蛭「微妙だな」

優希「うっさい。思ったよりも長くなったんだから仕方ないだろ！」

蛭「まあ、別にいいけど」

優希「今回は早めに終わろう。謝辞のコーナー」

蛭「畏無様、霊亀様、なっぺ様、バルディッシュ様、感想ありがとうございます」

優希「とゆうわけで、朱神優希と式見蛭でした。感想お待ちしてます」

**決戦4 聖王と凡人と親子喧嘩（前書き）**

今回はヴィヴィオ戦です

## 決戦4 聖王と凡人と親子喧嘩

『思考回路のトレース開始。ここからの武器創造は私が行います』

「頼む」

『あまり無理はなさないで下さい』

「努力するさ」

俺のフルドライブ、全セーブデータのロード。これを元々考えたのは俺だ。俺の中にあるデータを全部使えたら凄いいんじゃないのかと思ったのがきっかけだ

だがタナトスの答えは危険すぎるだった

元々俺のレアスキルは俺の脳の中に他人の能力を書き込んで行使するもの。当然脳に負担がかかる。それを失くすためにあるのが大量の記憶媒体ノーマルメモリ。だが流石に全てのセーブデータのロードはメモリでも耐え切れないらしい。だからこのフルドライブは負担を俺とメモリの半分に分けた状態で成り立っている

「アクセルシューター、プラスマランサー、ブリューナク、ヴァリブルシューター、シュート！」

射撃魔法をヴィヴィオに向かって一斉に放つ

「こんなの……効かない！」

だが全部虹色の魔力に弾かれてしまった

「くそっ、かてーな」

「はああああ！」

次の魔法を撃つ前にヴィヴィオが接近してきた

「ブーストアップ・ストライクパワー、メッサー・アングリフ！」

キャロのブーストとエリオの魔法を使って弾き飛ばすがダメージは無いみたいだ

「そういえば、クアットロがヴィヴィオにレリックと融合させたって言ってたな」

『はい』

「てことはウィンディみたいにレリックを壊せば何とかなるんじゃないのか？」

『いえ、その可能性は低いかと』

「なんでだ」

ヴィヴィオの砲撃をエクセリオンバスターを使って相殺しながら聞く

『彼女の状態からして精神操作もされています』

「なんだ？つまりそれを解かないと意味無いって事か？」



『そういつことになります』

てことはなのはさんがクアットロを探し出すまで足止めしてなくちゃいけないって事か

『それともう一つ、彼女の中には最低でも五つのレリックの反応があります』

「よくもまあそれだけのレリックを埋め込んだもんだ。つまりそれを全部壊すのも条件でことか」

これは思った以上に難題だぞ。

ヴィヴィオをバインドで縛り上げながらそう思った

三人称

「オプツテイクハイド」

ティアナの魔法を使ってキヨンが姿を消す

「そんなもの！」

だが、ヴィヴィオはキヨンが消えた瞬間に砲撃を撃つ

「がっ」

衝撃でキヨンの姿が現れる。それを見てヴィヴィオは薄く笑うがすぐに驚愕に変わる。キヨンの体が消えてなくなったのだ

「なんで」

「お前には見せたことが無かったか？」

ヴィヴィオのすぐ後ろで声がある。急いでヴィヴィオが振り返るとそこには本物のキヨンがいた。キヨンはオプティックハイドを使った後一体だけ分身を残してすぐにソニックムーブを使ってヴィヴィオの後ろに回りこんでいた

「デイバインバスター、15連！」

『デイバインカノン』

「ファイアー！」

キヨンの周りに幾つもの魔法陣が現れてそこから一斉にデイバインバスターが発射される

ヴィヴィオはなんとか持ちこたえようとするが流石に時間が足りず吹き飛ばされる

「このっ！」

ヴィヴィオはすぐに体勢を立て直すと射撃魔法のようなスフィアをキヨンの近くに投げる。するとそのスフィアが弾けて無数の小さなスフィアとなりキヨンを襲う

「くっ、ラウンドシールド20連！」

『ギガラウンドシールド』

キヨンはそれを多重展開したラウンドシールドで全て受け止める

「ちっ、このままじゃジリ貧だぞ」

『なのはさんを信じて待つしかありませんね』

「んなこと、言われなくても分かってはいるんだがな。荒雀・おれすずめ・そくはく速縛、  
10連！」

キヨンはヒスイの荒鷹・速と針雀・縛を合わせた技を撃ちヴィヴィオの動きを止めながらボヤク

一方その頃のクアットロは

「ふふふ、やってますねえ」

ゆりかごの最深部でキヨンとヴィヴィオの戦いを見ながら嫌な笑みを浮かべていた

「威勢良く啖呵を切ったからどんなもんかと思えば大したことないですねえ。予想以上に粘ってますけどそろそろ終わりでしょうし」

そんな事を言いながらクスクスと笑っている

「やっと見つけた」

「なっ!?!」

突然後ろから聞こえた声に慌てて振り向くとそこには少し息を切らしたのが立っていた

「ナンバーズのナンバー4、クアットロ。あなたを逮捕します。武装を解除して大人しく投降しなさい」

「くっ、まさかこれほど早くに此处を見つけるなんて。さすが魔王」  
魔王とゆう言葉になのはのこめかみがピクンと動く

「おかしいよね？私魔王なんて名前じゃないよ？ちゃんと名前で呼ばないとその人に名前がある意味がないよね？あなたは人に4番なんて呼ばれて嬉しい？」

「え、えっと……………」

クアットロの位置からはなのはの顔が暗くなって見えない。だがそれが逆にクアットロに恐怖心を与えている

「ちょっとお仕置き（OHANASHI）しようか？」

「『お』しかあつてませえん」

レイジングハートを突きつけられてクアットロの顔が引きつる

「問答無用！スタアアライト」

「ひっ」

クアットロはレイジングハートの先に魔力が溜まりだしたのを見て  
一目散に逃げようとするがもう遅い

「ブレエエエカアアア！」

クアットロはなのはの砲撃によって吹き飛ばされた

キヨン視点

「くう、ああ！」

バインドでヴィヴィオの動きを止めて体力を回復していると急にヴィヴィオが苦しみだした

「ヴィヴィオ!?!」

『キヨン君!』

ヴィヴィオに近づこうとした瞬間なのはさんから通信が入った。  
…若干目のハイライトが消えてるような気がするが光の屈折のせい  
だろ

『クアットロはこっちで捕まえた』

『嫌!そんなものそこに　ムグウ』

『私が責任を持って調k y　保護するから安心して』

「安心出来る要素が皆無なんですけど」

『とにかくそういうことだから後は頼んだよ』

「いえ出来ればこっちを手伝って欲しいんですけど……て、切れるよ」

呆れて溜息をつく。その時俺の前から声がした

「パ……パ……？」

「ヴィヴィオ！？俺が分かるのか！？」

急いでヴィヴィオに駆け寄る

「駄目！パパ、逃げて！」

いきなりヴィヴィオが殴ってくる。咄嗟にそれをシールドで防御するが結構押し戻される

「駄目なの……ヴィヴィオもう帰れないの！」

「ちっ」

追い討ちのように突進してくるヴィヴィオをいつの間にか創られていた両腕のリボルバーナックルで受けとめる

「待ってる、今助ける」

「駄目なの、止められない！」

「駄目じゃねえ」

即座にアクセルシューターをチャージしてヴィヴィオを弾き飛ばす

「もう、来ないで。分かったの私。もうずっと昔の人のコピーで、  
パパ……キョンさんもホントのパパじゃないんだよね。この舟を飛  
ばすための鍵で、玉座を守る生きてる兵器」

「ちげえ」

「ホントのパパもママも元からいないの。守ってくれて、魔法のデ  
ータ収集をさせてくれる人を捜してただけ」

「ちげえって言うてんだろ！」

「違うないよ！楽しかった思い出も嬉しかった記憶も全部ただの夢  
だったんだよ」

「なら！ここに居る俺は夢だったのか。お前の目の前に居る俺は夢  
だったのか！」

「それは……」

「もうこれはただの親子喧嘩だ。家に帰りたくないって言う娘と、  
家に連れ戻そうとする父親のな」

俺はそこまで言って一拍置く

「ああ、認めるよ、認めてやる。俺はお前の親だ。覚悟しろよ、ヴ  
ィヴィオ。俺はわがママを言わせたら右に出る奴はいないハルヒの  
傍にずっといたんだ。連れて帰るって言ったらバインドでふん縛っ

「でもお前を連れて帰るぞ！それが嫌ならホントの気持ちを言え！」

「私は……パパのことが大好き。パパとずっと一緒にいたい。……助けて、パパ」

「ああ、絶対にお前を助けてやる。だから泣くな、ヴィヴィオ」

俺はまたいつの間にか創られていたレイジングハートを構える

「確かヴィヴィオには最低でもレリックが5個埋められてるんだよな？」

『はい。そのはずです』

くそつ、今の俺の残りの魔力はこの後のことも考えるとブレイカー系三発分が限界だ。それでレリック5個全部を破壊。難易度高すぎるだろ

「いや、ウジウジ考えてたって仕方がねえ。俺はやるしかねーんだ。ヴィヴィオ、ちょっと……いや、結構痛いかもしれねーけど、我慢出来るな？」

「う、うん。頑張る」

「いい子だ。行くぞ、タナトス。魔力ダメージだけでレリックの破壊だ。一度やってんだ。今回だつて行けるはずだ。チャージスターライト、プラズマザンバー、ラグナロク」

『all light チャージ スターライトブレイカー、プラズマザンバーブレイカー、ラグナロクブレイカー』



レイジングハートに三つの砲撃の魔力が溜まっていく。やべえ、ちよっと罅が入りだした

「打ち鳴らせ、終幕の鐘！トリプルウウブレイエエカアア！」

レイジングハートに溜まった魔力が全てヴィヴィオに向かって放たれる

凄い轟音と土煙。そしてそれが徐々に晴れていき

床にデカイクレーターが出来ていた。その中心には倒れたヴィヴィオがおり、周りには4個の壊れたレリックが

……4個？ヴィヴィオの中に埋められていたのは最低でも5個だよな？タナトスが間違えてるとも思えねえし

「う、うう」

いや、今はそんな事よりヴィヴィオだ

「ヴィヴィオ！」

「来ないで！」

駆け寄ろうとしたらヴィヴィオに制止された

「一人で……立てるから」

ヴィヴィオが近くにあった瓦礫を支えにして立ち上がる。その後ろ

にヴィヴィオの体に隠れて見えなかった5個目のレリックが転がっていた

「あつ」

流石にダメージが大きいのかヴィヴィオの体がフラつく

俺は急いでヴィヴィオに駆け寄ってその体を抱き留めた

「よく頑張ったな、ヴィヴィオ。お前は自慢の娘だよ」

「えへへ。ただいま、パパ」

「お帰り、ヴィヴィオ」

ヴィヴィオはそう言うとそのまま気絶した

「さて、そろそろ良いかな？」

俺の後ろから声がする。振り返るまでもない。この声は式見だ

「ああ。待たせたな、式見」

ヴィヴィオを抱えて安全そうな場所まで運んでから式見の近くまで行く

「さて」

「それじゃあ」

「「決着をつけるぞ」(よじ)「

#### 決戦4 聖王と凡人と親子喧嘩（後書き）

優希「あとがきコーナー」

キヨン「はあ、とうとうヴィヴィオを娘って認めちゃった」

優希「別に良いじゃん。なのは系の小説を書き出した時点でこれは決まってた事なんだよ」

キヨン「いや、別に今更どうこう言つつもりはないんだけどな」

優希「じゃあ、ウジウジ言わない。謝辞のコーナー」

キヨン「靈亀様、なっぺ様、畏無様、バルディッシュ様、感想ありがとうございました」

優希「次回はキヨン対式見。そして次々回でクライマックス。とゆうわけで朱神優希とキヨンでした。感想お待ちしてます」

決戦5 意地と決着（前書き）

式見戦決着

## 決戦5 意地と決着

「まあ、とりあえず。回復するよ」

『アタックライド シン・サイフォジオ』

式見の頭上に巨大な4方向に伸びた剣が現れたかと思うと俺の傷や消費した魔力が回復していく。ヴィヴィオの方を見るとどうやらヴィヴィオにも効果があるらしく目立つ傷が消えていた

「悪いな」

「別に。手負いなのを言い訳にされても嫌だからな。次会った時、僕はお前を殺すつもりで行くって言ったよな？」

「ああ、言ったな」

「だから、お前も僕を殺すつもりで来い。じゃないと」

式見が数枚のカードを取り出して銃に装填する

「死ぬよ？」

『アタックライド ハンドソニックver.1 デイレイ』

式見の右腕にこの間吼太が使っていたのと同じ剣が出てきたと思うと次の瞬間式見の姿が消えた

「くっ」

殺気を感じて咄嗟にしゃがむと一瞬送られて俺の首があった辺りで式見の剣が振りぬかれる。

あぶねえ。もうちょっとで頭が体とオサラバするところだった

すぐにマツハキヤリバーを創り出して式見を蹴り飛ばす

「今回はお前直々か」

「ああ。自分の手で決着をつけたいからな」

「そりゃ、ありがたいな」

式見がカードを装填するのと同時に俺も術式を展開する

『アタックライド ガンレイズ・ザケル』

「プラスマランサー・ファランクルシフト！」

俺の魔法と式見の魔法一（？）がぶつかって相殺される

『アタックライド サギタ・マグカ・コンウエルゲンティア・フル  
グラーリス（魔法の射手・雷の千一矢）』

「ちっ、ラウンドシールド、多重展開！」

式見のデバイスの銃口から放たれた数え切れない程の射撃魔法を見た瞬間、撃ち落とすのを諦めて受け止める

『ファイナルアタックライド　ダ・ダ・ダ・ダンクーガノヴァマツクスゴッド』

「断、空、弾、効、剣！」

防ぎきつたと思った瞬間に式見が剣を創り出して斬りかかって来た

「紫電一閃、15連。紅蓮一閃！」

俺も紫電一閃を重ね掛けした大剣で受け止めて弾き飛ばす

『ファイナルアタックライド　グ・グ・グ・グレンラガン』

「ギガドリルブレイク！」

「ツエアシュテールングスハンマー！」

式見の腕に現れたドリルとツエアシュテールングスフォームのアイゼンのドリルがぶつかって碎ける

「ハア、ハア、やるな」

「テメーこそ」

「けど、負けられない」

「んなもん、俺もだ」

ハルヒを助けられなくなるってのもあるがこれはもう意地だ。俺はコイツだけには負けたくない。多分式見も同じだろう



『フォームライド BURST、ゼクロム』

電子音と共に式見の姿が少し変化した

こっちもそろそろ式見に貰った切り札を使うか

「タナトス、チャージスターライト」

『all right チャージスターライトブレイカー』

右腕に溜まった魔力をすぐに解放する

「解放、固定、掌握、魔力充填、術式兵装 『スターライトブレイカー 星光破壊』」

これが式見に貰った切り札の1つ、ネギのセーブデータ。とはいっても流石にさつき式見が使ったような長つたらしい呪文を覚えるなんて流石に無理だ。だから俺は闇の魔法<sup>マキ・エレベア</sup>だけを練習した。それがこれだ

「やっぱり使う、かつ」

「こうでもしないとテメーは倒せねーから、なっ」

俺の拳と式見の拳が同時に互いの顔面に入る。口いっばいに鉄の味が広がる

「ぐっ、まだまだあ！」

また同時に顔面に拳が入る。が今度はもう一発鳩尾辺りに蹴りを入

れてやった。……俺にも入ったが

何発殴ったのか忘れるぐらい殴りあった頃に突然式見が後ろに下がった

『アーマーライド キングゲイナー』

また姿が変わったと思った瞬間、凄いスピードで接近されて殴られた速い。けど、見えないわけじゃない。幸いこの姿はある程度防御力も上がってる。式見はあの姿になって攻撃力が下がったみたいだし、このままカウンターを狙う

だが、その目論見は見事に外れた。

姿は見えるがうまく避けられて当たらない

「くそっ、このままじゃジリ貧だ。タナトス、ライダーフォーム」

『all right ライダーフォーム。ダブルソニックムーブ、Start up』

俺の姿が一番最初に変身した時の姿になると同時に亜音速の世界に入って式見を殴る

「この、そろそろ倒れやがれ」

「こっちの台詞だ」

『アタックライド ヤーパンニンポー』

いきなり式見の姿が増えた。幻影か？

「一気に行く」

何人もの式見が一斉に襲いかかってくる。軽いホラーだな

前から襲い掛かってくる刀を避けながら飛んでくる何本ものクナイを全て弾く。やっぱり全部実体か

『マスター、後ろです！』

タナトスの声に振り向くとかなりの至近距離で式見が刀を振り上げていた

「終わりだ」

そして刀が振り下ろされた

三人称

キョンに刀が振り下ろされると同時に一斉に式見の分身がそこへ群がる

「ここまでか」

そこから少し離れた場所にいた本物の式見は複雑な表情を浮かべて  
そう呟くと分身達を消そうとして

「なっ!?!」

驚愕の声を上げた

「これで俺の勝ちだ、式見」

式見の目の前にある分身の大群に滅多差しにされているはずのキヨンが式見に大剣を突き刺していた

キヨン視点

「お前がシン・サイフォジオ以外のカードを使った過去を切り捨てる」

俺の言葉と同時に式見の分身や纏っていた装甲が消え去る

「これで終わりだ！ダイバイイインバスター！」

そしてゼロ距離ダイバインを叩きつけた。

この剣が式見から貰った二つ目の切り札。過去を断ち切る剣。ただし命に関わる過去は切れないらしい。

最初は何でこんな物と思ったが、なる程、こうゆう事が

「チェックメイトだ。この剣をお前に刺している限りお前がなにを創ってもその過去を切る」

「ああ、僕の負けだ。……一体、どうやって」

「あの大群から逃れたのかか？ソニックムーブ、5連。ぶつつけ本

「番だったがやってみるもんだな。流石にライダーフォームでも辛かったが」

『当たり前です。本来あれは重ね掛けするような魔法ではないのですから。ライダーフォームでも、保って10秒です。生身で使おうなんて考えないでくださいね』

「わかってるよ」

『ならいいのですが』

「口うるさい（口はないのに口うるさいとはこれいかに）タナトスを適当にあしらいなから式見に聞きたかったことを訪ねた」

「式見、お前、俺に勝つつもりなかっただろ」

「いや、最初にも言っただろ。殺す気で行くって」

「じゃあ、なんでこの剣を創って俺に渡した？」

「それぐらいのハンデがないと勝負にならないと思ったんだよ」

「なら、認識が甘かったな」

「ああ。僕の完敗だよ」

俺と式見は笑いながらそう言った。

なんか清々しい気分だな

「さて、後はハルヒだけだな」

その時後ろから誰かが歩いてくる音が聞こえた

ヴィヴィオの目が覚めたか？嫌、ヴィヴィオは俺の前の方に居る。  
じゃあ、誰だ？

そう思って後ろを振り向いた先には

「ハル…ヒ？」

そう、そこには北高の制服を着た我らがSOS団の団長、涼宮ハルヒが立っていた

## 決戦5 意地と決着（後書き）

優希「あとがきコーナー」

キヨン「今回もまた酷いな」

優希「いいんだよ。これも前から考えてたんだから」

蛍「今回僕が使ったカードのアーマーライドはISみたいな感じだと考えてくれればいいです」

優希「僕はIS見たことないんだけどね」

キヨン「ダメじゃねーか」

優希「いや、なんか見る気になれなくて。少し見た感想は武装神姫にしか見えん」

キヨン「確かに見えんこともないが」

優希「とゆうわけで謝辞のコーナー」

蛍「どうゆうわけだよ。バルディッシュ様、畏無様、霊亀様、なっぺ様、感想ありがとうございました」

優希「次回、ゆりかご編クライマックス。『決戦6 結末』今日明日中には更新出来るように頑張ります。とゆうわけで、朱神優希とキヨンと式見蛍でした。感想お待ちしてます」

決戦6 結末（前書き）

クライマックス！



## 決戦6 結末

「ハル…ヒ？」

「ええ、そうよ」

確かに顔や声はハルヒだ。けど、あいつはどんなに人を馬鹿にした態度をとってもこんな風に見下した目で見る奴なんかじゃない

「違う。お前はハルヒじゃない。お前は誰だ」

「ふふ、確かに私は涼宮ハルヒじゃないわ。レインよ。けど、体は本物よ。涼宮ハルヒの体に乗っ取ったの」

「何のために」

「何のために？ 決まってるわ。神の力を手に入れるためよ」

「それはもうハルヒから盗んだんじゃないのか」

「そうよ。けどあの力は強大すぎる。スカリエッティにどんなに強い精神と肉体を持った人間を造らせてもすぐに壊れてしまったわ」

「テメーはそんなことのために人を造ったのか」

自分でもわかるぐらい怒りで声が震える

「ええ。ざっと数百体は造ったかしら？ けど全然ダメだった。だから神の器を使うことにしたのよ」

「ふざけんなよ！テメエだけはなにがあっても絶対に許さねえ！」

俺はレインに向かって走り出した。幸い俺には式見に貰った過去を断ち切る剣がある。これを使ってレインがハルヒを乗っ取った過去を切る。そうすればレインはハルヒから離れる。それを叩く

「あら、神の器がどうなっても良いのかしら？」

だがすぐに止まった。レインがいつの間にか取り出したナイフをハルヒの首に押し当てたからだ

「なんのつもりだ。ハルヒはお前にとって大事なもんじゃねーのか？」

「もうDNAはとってあるからいざとなればクローンを造れる。それにクローンが失敗しても神の器は1つじゃない。そうでしょ？」

「……まさか、佐々木の事を言ってるのか」

「あら、物分かりが早くて助かるわ」

くそつ、最悪だ。まさかハルヒの力の事だけじゃなくて佐々木のことまで知ってるとは

「さあ、この体を傷つけたくなかったらデバイスを待機状態にしないで。式見、あなたも」

前にもこんなことがあったな、と思いながらバリアジャケットを解除してタナトスを待機状態に戻す。

「それと、その物騒な剣とデバイスもこちらに投げなさい」

俺は言われたとおり、手に中に入った剣とタナトスをレインの近くに投げた。そのすぐ後に式見もデバイスらしきものを投げる。…式見のデバイスの待機状態はカード型か

「ふふ、いい子ね。じゃあ、次、はっ!？」

レインの顔から嘲笑が消えいきなり苦しみだした

「くっ……キョ……ン」

「ハルヒ!？」

弱々しい声だったがそれは確かにハルヒの自身の声だった

「キョ……ン、あたしを……し……い」

「なんだって?」

最後の方が小さくて聞こえなかった。嫌、実際は聞こえた。だが、ハルヒからそんな言葉を聞きたくなかった

「あたしを殺しなさい、キョ……ン」

俺は目の前が真っ暗になった。

「そんなこと、出来るわけねーだろーが」

「抑えられてる今しかないの。わかるの。じゃないと、大変なことになる。団長命令よ」

「その足下にある剣を使えば」

「無理よ。レインの意識を抑えてるだけで精一杯」

そうか、これが朝比奈さん（大）の言ってた事か。向こうの時間の俺はここで何も出来ずにハルヒを殺しちまったんだな

けど朝比奈さん（大）は言っていた。ハルヒが死なない世界が必ずあるって

なら、今の俺になにが出来る？ デバイスもない、切り札だった剣もない俺に

……はは、なに考えてるんだろうな、俺は。いつから俺はバトルマシンの主人公になったんだよ。元々俺は友人AとかクラスメイトBがお似合いの一般人だろ？

なら自分でやろうとするなんておこがましい考えは止める。他力本願だと笑われようと俺は俺の道に行く

「諦めるな！ハルヒ！」

俺は喉が潰れるんじゃないのかとゆうぐらい大声をだした

「お前は誰だ！ 傍若無人、勝手気儘、自己中心を絵に描いたような人間、それが涼宮ハルヒだろうが。そんな奴がそんな弱気でどうする。俺は諦めてねーぞ。なのにSOS団団長であるお前が諦めてど

うすんだ。俺はお前を信じてる。だからお前も自分を信じる！お前は  
お前が思ってる以上に強いんだよ！」

後は本当にハルヒを信じるしかない。これで駄目だったら、違う時  
間軸の俺に頑張って貰おう

### ハルヒ視点

無茶苦茶言ってくれるじゃないの。こっちは尋常じゃないくらい頭  
が痛くて一瞬でも気を抜いたら意識を持って行かれそうだったのに  
けど、キヨンが信じてくれてるなら頑張るしかないじゃないのよ

『いい加減体を渡しなさいよ』

『嫌よ、ごめん被るわ。これはあたしの体よ。あんなんかの物じ  
ゃない』

あたしは無理矢理体を動かしてキヨンが投げた剣を拾い上げる。使  
い方は分かる。レインが見ていたのを私も見ているから

『だから、あたしの体から出て行きなさい、レイン！』

自分の体に大剣を突き刺して叫ぶ

「レインがあたしの体に入った過去を断ち切るわ！」

その瞬間、吐き気がするほど酷かった頭痛が止み、鉛のように重か  
った体も軽くなった

やった……の？

そう思った瞬間体の力が抜けて前のめりに倒れそうになる。それを誰かが受け止めてくれた。顔を確認するまでもない。この感触は、あたしの一番大好きな人

「よくやった、ハルヒ」

そう、キヨンの感触

キヨン視点

ハルヒが剣を突き刺して叫ぶと同時にハルヒの体が光ってレインの体がハルヒから弾き出されるようにして出てきた

そしてハルヒが崩れるように倒れそうになるのを俺は急いで駆け寄って受け止めた

「よくやった、ハルヒ」

「当たり前……じゃない。あたしを……誰だと……思ってるの？団長に……あんな口を利いて、しかも……団長命令を……無視したんだから、帰ったら……覚えときなさいよ」

「ああ、お前が無事ならなんでもやってやるさ。その代わり常識の範囲内にしてくれよ？」

俺はタナトスを拾い上げて腕につけると式見に向かってカード型のデバイスを投げる

「式見、ハルヒを頼む。ついでに回復もお願い出来るか？」



神の器を使う。お前たちはここで死ぬ」

そう言うとレインは高速でこちらに向かって跳んできた。確かに速い。けどこんなスピード、今更恐れるようなもんじゃない」

『チャージ、デイバインバスター、プラズマランサー、クラウ・ソラス、ファントムブレイザー、リボルバーナックル、紫電一閃、シユーティング・レイ、ギガントシユラーク』

「これは、ヴィヴィオとハルヒの分だ！ブレイカーナックル！」

レインの攻撃を避けて壁に叩きつけ、飛び上がる

「式見、ハルヒとヴィヴィオをしっかり守ってしてくれよ」

「わかったよ。任せとけ」

『チャージ、スターライトブレイカー、プラズマザンバーブレイカー、ラグナロクブレイカー、クロスファイアーシユート、リボルバーシユート、サンダーレイジ、番風、エターナルコフィン』

俺の右腕に超高濃度の魔力の塊が出来上がる。そして、

「これは、テメーが軽々しく弄んだ命の分だ！ビッグバアアアアン  
ブレエエエカアアアア！」



その塊を一気に放った

土煙が上がってレインの姿が見えなくなる

「ハア、ハア、やったか？」

土煙が晴れると地面に倒れ伏しているレインが居た

一応、死んでいないか確認する。……よかった、息はしてる

俺は大きく息を吐く。

終わった。これでようやく、全て

## 決戦6 結末（後書き）

優希「あとがきコーナー。…終わったーーーーー」

キヨン「長かったな」

優希「ホントに。まあ、まだ続くんだけど今回で一先ずクライマックスまでは書けたし一段落だな。次回はゆりかごからの脱出だけ。さて、謝辞のコーナー」

キヨン「霊亀様、なっぺ様、畏無様、感想ありがとうございました」

優希「とゆうわけで、朱神優希とキヨンでした。感想お待ちしてます」

帰還（前書き）

長くなったので分けます

## 帰還

「うわぁ、ここまでして死んでないって逆にエグいな」

式見が猫の状態で近づいてきてそう言う

「まあ、流石に殺したくはないからな。つか、なんで猫になつてんだ？」

「お前の攻撃でヴィヴィオや涼宮さんに被害が出ないようにしたからだよ。もう殆ど霊力は残ってない」

「そうか。さて、ヴィヴィオとハルヒを保護することは出来たしレインを拘束出来た。後はここから出るだけ……だ」

次の瞬間俺は足の力が抜けて前のめりに倒れていた

「キョン！」

「パパ！」

バタバタとゆう足音でハルヒとヴィヴィオがこっちに走って来ているのが分かる。　ヴィヴィオ、目が覚めたんだな　なんとか起き上がるうと腕に力を入れようとするが全然力が入らない

『限界が来ましたね。フルドライブの使用や中途半端な回復、さらに限界を超えた魔力の使用。流石に体はポロポロですよ』

そんな責めるように言わないでくれ、タナトス。無理したって自覚

はあるんだから

「キヨン君！」

この声は……なのはさん

ハルヒに助け起こされて何とか前を向くと俺が破壊した扉からなのはさんと気絶して背負われているクアットロとぼろぼろになったヴィータさんをおぶっているはやてさんが入ってきた

「ぼろぼろじゃないですか、ヴィータさん」

「うつせえ、お前には言われたくねーよ」

『聖王陛下、ならびに神の反応ロスト、システムダウン』

突然部屋に放送のようなものが流れる

「なんだ？」

「このゆりかごは駆動炉と聖王…つまりヴィヴィオ、後レインが涼宮さんの力を使って書き換えたレインの意識で動いてる」

「けど、今はその全てが失われてるから……」

『艦内復旧のため全ての魔力リンクをキャンセルします』

その放送と共に一際AMFが強くなりなのはさんとはやてさんの飛行魔法が消えて地面に落ちる。ついではやてさんとユニゾンしていたらしいリインがはやてさんの中から出てくる

「駄目です、魔力結合できません」

「じゃあない、歩いて脱出や」

「でも、キヨン君が」

なのはさんが心配そうにこっちを見てくる

「このぐらい大丈夫ですよ」

そういつて何とか自力で歩こうとするが足が震えて自力で立つことすらままならない

「無理してんじゃないわよ、キヨン」

倒れそうになったところをハルヒに支えられた。なんとゆうか、情けない

「でも、早くしないと、確か」

『これより、破損内壁の応急処置を開始します。破損内壁および非常隔壁から離れてください』

その放送と共に俺が砲撃で開けたらしき穴が塞がれていく

「出口へ急ぐんや!」

それを見たはやてさんの声と共に皆急いで出口へと向かうが時すでに遅し。出口も先ほどの穴と同様に塞がれてしまった

「くそつ、最悪だ」

「完全に閉じ込められたな」

そんなに冷静に分析してる暇があったらなんか考える式見

「そつだ。なのはさん、これを壁に刺してくれませんか？」

俺は即行で創った鉄のナイフをなのはさんに渡す

「うん、いいけど」

なのはさんは疑問そうにしながらも出口だった壁にナイフを突き刺していく

「ありがとうございます。危ないですから離れててください」

『ロードファイルネーム“チンク”』

「IS『ランブルデトネーター』」

壁に突き刺したナイフが爆発して土煙が上がる。チンクのISである金属の爆発。これで壁が壊れればいいんだが

土煙が晴れ、壁を見ると、抉れてはいるものの貫通までは行かなかつたらしい

「くそつ、駄目か。体が動けば1人ずつディープダイバーで壁の向こうまで連れて行けるんだが」

「ないものねだりしててもしょうがねーだろうが」

「そりゃそうなんですけど」

その時、突然頭上の壁が爆発した。慌ててそちらの方を向くと

「お待たせしました」

「皆さん、助けに来ました」

「キヨン、死んでないでしょうね！」

「お姉様方に頼まれて助けに来たっすよー」

開いた壁の向こうにはスバルとティア、フリードに乗ったキャロと  
もう2人赤い髪の女が居た。片方はスバルに似てるな

「ウエンディ、姉妹達とは会えたんだな」

式見の言葉に片方の赤髪が反応する

「おお、猫バージョンの式見っす。もうばっちり。ノーヴェなんか  
チンク姉と会えてうれし泣きしてたっすよ」

この台詞からするとこの2人は戦闘機人か

「なっ、適当なこと言ってんじゃねー、ウエンディ」

後で聞いた話だが式見はチンクたちにも会いに行っていたらしい。



他の戦闘機人たちに投降を促すように頼んだとか

「そういうのは後にしてくれ2人とも。見ての通りこっちは負傷者が多すぎる」

「了解つす。誰を運べばいいつすか？」

「ウエンディはクアットロと高町さんを頼む。ノーヴェは僕とヴィオオを持ってくれるか？」

「じゃあ、あたしは八神部隊長を背負いますね」

「それなら私は竜に乗せてもらおうかしら。竜に乗れるなんて最高じゃない」

ハルヒが嬉しそうにそう言った。

やれやれ、これでこそハルヒって感じだな

「じゃあ、俺はティアのバイクか。安全運転で頼むぜ」

「任せなさい。………そういえば、あれはどうすんの？」

ティアが指差したのは未だに伸びているレインだった

「あー、縄創るからフリードにでもぶら下げとくか」

「そうね」

こうして俺達は何とかゆりかごから脱出できた

## その後

事件から三カ月後

今回の首謀者であるレインと事件に協力の意思を見せなかったヴィラは起動拘置所とかいう場所へ。スカリエツティ達は全ての罪が冤罪と認められ無罪放免となった。今は時々管理局に協力しながらスカリエツティ一家として戦闘機人たちと共にクラナガンに住んでいる。ルーテシアの母親であるメガーヌさんはスカリエツティの治療によって少しずつだが良くなっていき最近目を覚ました。スカリエツティ曰くレリックは使い方によっては高性能な医療道具なるらしい。しかしこれについてはちょっとした騒動があった

「ドクター、11番のレリックが見つからなかった」

「ん？11番？メガーヌ・アルピーノを治すのに必要なレリックのナンバーは3だよ？」

「は！？ルールーが探せって言われてたのは11番だぞ」

「そつなんすか？あたしは5番って聞かされてたんすけど」

「ん？私は8番だと聞いていたのだが」

「全員違う番号を聞かされていたのね。これもレインの仕業かしら？ルーテシアお嬢様を手元に置いておくための」

「……そうだったんだ。……ちよつと出かけてくるね」

「ちよつ、ルーお嬢様、レインは軌道拘置所つすよ！だからこんな所で白天王を呼ぼうとしないてください！」

とまあ、騒ぎといつてもこの程度のことなのだが。

式見は少し事件に積極的関わったが人質が取られていた事もあったし事件にも協力的だったため保護観察ということになった。そして、俺はというと。あの後すぐさま病院へとかつぎ込まれ全治3ヶ月の診断を受け、即入院となった。入院中はいろんな人が見舞いに来た。ハルヒやフェイトさんたちはほぼ毎日と言ってもいい位に。

その中でも印象深いといえばやはり朝比奈さん（大）の来訪と古泉との会話だろうか。朝比奈さんの方は俺が入院して一週間位したとき

「おはようございます、キヨン君」

朝起きたらベッドの横の椅子に朝比奈さん（大）が座っていた

「お、おはようございます。どうしたんですか、こんな朝早くに」

「お礼を言いに。ありがとございます、キヨン君。涼宮さんを助けてくれて」

そう言って朝比奈さんは頭を下げた

「頭を上げてください。俺もハルヒを助けたかったですから、お礼を言われることじゃありませんよ」

「そう。それとね、キヨン君。もう1つ言わなくちゃいけないの。今回は何とかなったけど涼宮さんを狙ってるのはレインだけじゃないの」

「つまりハルヒのバッドエンドはまだ完全に回避されたわけじゃないって事ですか？」

「うん。この先もまだまだたくさんあるわ」

「そうですか。……まあ、その時はその時です。ハルヒは殺させませんよ、絶対に」

今回こんなに助けるのに苦労したんだ殺してたまるか

「そう。私は何も出来ないけどこれからも頑張ってください、キヨン君。……さて私はそろそろ帰るので目を閉じてくれますか？」

「あ、はい」

朝比奈さんに言われて慌てて目を瞑る。その瞬間、頬に柔らかい何かが触れた

「へっ!？」

慌てて目を開けたが既に朝比奈さんは居なかった

そして古泉の方はそれからさらに一週間後のことだ

「涼宮さんに力のことを教えるのですか!？」

古泉は信じられないとゆう顔をした。元々古泉はハルヒの記憶を長門に消させようとしていたのだ。だが、俺はそれとは真逆のことを言った

「それがどうゆうことかお分かりでしょう?下手をすれば世界が一瞬にして滅んでしまいかもしれないんですよ?」

「ああ、そうかもしれない。けど俺はそれはないと思ってる」

「何を根拠に」

「お前が言ってたんだろ?が。ハルヒには一定の常識があるって。だから俺はそれに賭けてみる事にする」

俺がそう言つと古泉は心底驚いたという顔をした

「あなたという人は。……分かりました。あなたがそう言つのなら僕もそれに賭けてみるとしましょう」

こうして俺達はハルヒに力のことを話した

ちなみにハルヒの反応はというと

「知ってたわよそんな事。レインにさらわれてた時に聞かされたわけど、実感はないし実際に試してみたけどこれといった変化はなかったし。だからあたしは今まで通りにさせて貰うわ。文句はないでしょ?」

だそうだ。まったく、相変わらず肝の据わった奴だよ。この時ばかりは古泉と一緒に顔を見合わせた笑ったね

そして今日俺はやつと退院出来ることになった。玄関にフェイトさんが車で迎えに来ていた

「退院おめでとう、キヨン」

「ありがとうございます、フェイトさん」

俺が助手席に座ると車は発進した。流れる町並みを眺めながらこれからしなくてはいけないことを考える。とりあえずヴィヴィオを養子にするための作業は進めないとな。後は親を説得する。これは妹を味方につければどうともなるだろ。魔法のことも言わなくちゃいけない。やれやれ、やらなくちゃいけないことは山ほどあるな

1つずつ確実に片付けていくとするか

## その後（後書き）

優希「あとがきコーナー」

キヨン「なんか最終回みたいな雰囲気だな」

優希「まだだ、まだ終わらんよ」

キヨン「元ネタがわからないネタをやるうとすんな」

優希「すまん。とはいえ、まだ終わらないのはホント。サウンドステージ04をやりたいからstrickers編最終回はもう少し先かな。謝辞のコーナー」

キヨン「バルディッシュ様、霊亀様、畏無様、なっぺ様、感想ありがとうございました」

優希「次回からサウンドステージ04をやって最終回をやって、それから霊亀さんのコラボかな。とゆうわけで、朱神優希とキヨンでした。感想お待ちしてます」

訪れた平和な日々 一日目

「だぁー、きつつーい、もーだめー」

ティアが訓練の疲れで机に突っ伏す

「ティアさん、頑張つて。今、お食事運んできますから」

キャロが心配そうにティアにそう言って取りに行こうとするのを俺が止める

「そんなに心配しなくても大丈夫だ、キャロ。サボるなよ、ティア」

「わかつてるわよお」

ティアが渋々と立ち上がる

「大分動けるようにはなつたと思うんですけど、まだまだ隊長達には敵いませんね」

「まあ、ある意味仕方ないとは思っけどね」

エリオとスバルがそう言いながら食事を机に運んでくる

「あとちよつとが届かないのよねえ。ああ、くやしい」

「そうだな」

「パパ、じゅんびできたよ」



「よし、それじゃあ、いただきます」

手を合わせて昼飯を食べだす

「今週中に模擬戦が、んぐんぐ、一回はあるから、んぐんぐ、一回は勝ちたいよね」

「スバル、食べるか喋るかのどちらかにしろ。それに一回じゃねえ」

「二回やるなら二回勝つ」

「そのつもりでやりましょう」

「おお、ガード陣やる気だ」

「でも、スバルさんもティアさんもキョンさんも休暇前に怪我とかしないようにしてくださいね」

「へ？」

「休暇？」

キヤロの言葉にティアとスバルがきよとんとした顔をする

「もしかして、お前ら忘れたのか？」

「明々後日からキョンやあなた達スターズ分隊……だっけ？は休みじゃなかったの？」

ハルヒの指摘にティアとスバルは顔を見合わせて

「「……………ああ!」」

すつとんきよな声を上げた

場所は変わってオフィス。スバルとティアはヴィータさんに休暇のことを聞きに来ていた。つーか、なんで俺まで

「今月の頭に伝えただろうが。忘れてんじゃねえ!バカたれが」

「すみません」

「呼び出しはよほどのことがない限りはしねーし、滞在制限もねえ。どんだけ遠出しようとかまわねえよ。ま、今からじゃ旅行の予約も難しいだらうけどな」

なんで少しドヤ顔なんですか、ヴィータさん

それから少しして、俺達はオフィスから出て廊下を歩いていた

「俺はもう休みの間にやることは決まってるけどお前らはどうするんだ?」

「あたしは別に遊びに行きたいところもないから。スバルは?」

「うーん、……………あ、お母さんのお墓参りに行って来る。キョンはどうするの?」

「ん？俺か？とりあえずヴィヴィオの学校見学だな。後は親たちの説得とか。やらなくちゃいけないことを片付けるのに使うかな」

とまあ、そんな話をしたのが一昨日。つまり今日からスターズ部隊の休暇だ

「ゆっくりして来てな、キヨン君」

玄関ではやてさんが見送りをしてくれた

「はい」

「はやてさん、いってきます」

「じゃあ、行って来るわ、はやてちゃん」

「おい、ハルヒ、一応はやてさんは年上だし俺の上司に当たるんだが」

「別にええよ、キヨン君。ハルヒちゃんも楽しんできてな」

「もちろんよ。異世界での探検なんてわくわくするわ」

「行き先は決まってるからあまりウロウロはしないぞ」

「なによ、少しくらいいいじゃない」

「じゃあ、明後日はお願いします」

後ろでブーブー言っているハルヒを無視してはやてさんに明後日の予定のことを確認する

「うん、大丈夫。何とかそれまでには仕事全部終わらせるわ」

「すみません、無理いって」

「ええよ、キヨン君の為やしな。ほな明後日な」

「はい、お願いします。さて、行くぞ、ヴィヴィオ」

「うん！」

「ちょっと、あたしを無視しないでよ！」

「わかった、わかった。行くぞ、ハルヒ」

「ええ！」

途端に上機嫌になったハルヒは満足気に一人で歩きだした。って、あいつ、道わかってんのか？

案の定、迷子になったハルヒを探し出して最初の目的地であるSet.  
ヒルデ魔法学院に着いた頃には約束の時間から30分も遅刻していた

「あ、こちらです、キヨンさん」

校門の近くで待ち合わせをしていたシャツ八さんへ駆け寄る

「すみません、シャツ八さん。遅くなりました」

「いえ、大丈夫ですよ。お久しぶり、ヴィヴィオ。それと初めまして、涼宮さん」

「こんにちは」

「初めまして、シャツハさん」

ヴィヴィオとハルヒも挨拶をする。

こうゆう所だとハルヒも礼儀正しくなるんだよな

「お時間頂いてありがとうございます」

「いえいえ、それでは早速ご案内いたしましょう」

そうやってシャツハさんは中へと入っていく。俺達もそれについて敷地内へと入っていく

ちょうど休憩時間なのか生徒と思しき子供が騒いでいる

「ようこそ、ベルカ聖王協会系列、伝統あるミッションスクール  
t・ヒルデ魔法学院へ」

「うわあ」

「へえ」

ヴィヴィオとハルヒが学校らしき建物を見て感嘆の声を上げる

「校内はこんな感じで、丁度休み時間なので生徒達が賑やかにしていますね」

「あ、シスター、ごきげんよう」

「ごきげんよう、シスター」

「はい、ごきげんよう」

シャツハさんに気がついた何人かの生徒が挨拶をしていく

「わあ、こどもがいっぱい」

「お前と年はほとんど変わらないぞ、ヴィヴィオ」

「この学校に入ったらお友達になれるかもしれませんが。少しお話してみますか？」

「はい」

シャツハさんは手を叩いて生徒達を注目させた

「はい、ちよつといいですか？」

生徒達は何事かとこちらに注目してくる

「来年からこの学校入学するかもしれない女の子が居ます。時間のある子は、良かったらお話してあげてくれませんか？」

「はい」

何人かの生徒が返事と共にこちらに近づいてくる

「ほれ、行ってこい、ヴィヴィオ」

「うあ」

流石に同年代の子供がいつぱいいるのは緊張するのか、少し躊躇しているヴィヴィオの背中を軽く押して促してやると以外とあっさり子供達の輪の中に入っていった

「こんにちは」

「ご機嫌」

「お名前は？」

「ヴィヴィオです」

周りの質問攻めにも難なく対応しているヴィヴィオを見て少し感慨深くなる

「どうかしましたか？」

「あ、いえ。意外とまともに接していますから。もう少し緊張するかなと思ってたんで」

「やっぱり、子供同士ですからね」

「向こうが魔法の練習室」

「行ってみる？」

「いいの？……シスター・シャツハ、いってみてもいいですか？」

「はい。行つてらっしゃい」

「お前も行ってくるか？ハルヒ」

「いいの！？」

横でそわそわしていたハルヒに声をかけると想像以上に大きいリアクションが帰ってきた。全く、どんだけ見て回りたいんだよ

「その変わり、あんまり迷惑をかけるんじゃないぞ。ヴィヴィオの通う学校になるかもしれないんだからな」

「ええ、わかつてるわよ！」

「どうだか。じゃあ、このお姉さんも案内してやってくれ。ムチャを言つても聞かなくていいからな。すぐに職員を呼んでくれ」

『はい』

「私たちが学校内を見回っています。玄関の所で待ち合わせしましょう」

「頼むぞ、ハルヒ。一応、お前が最年長なんだから、しっかりしてくれよ」



「わかってるわよ。しつこいわね。じゃ、後でね」

そう言っつてハルヒは子供達を引き連れて歩き出した。おいおい、早速ムチャクチャやってるよ。まあ、ヴィヴィオもいるし、大丈夫だろう……と信じたい

「さて、行きましようか」

「はい」

俺もシャツ八さんに続いて歩き出した

「初等部が五年間、中等部が三年、後は二年単位で任意で上級クラスへ上がっていきます。基本はエスケーターですが、飛び級もありますし、本格的に学びたければ、学資資格も取れます」

「なるほど」

「……と、そろそろ時間ですし、戻りますか」

「そうですね。ハルヒは待たせるとうるさいですから」

そう言っつて俺とシャツ八さんが玄関に戻ったときには、まだハルヒは戻って来てはいなかったが、俺たちが到着してすぐに帰ってきた

「じゃあみんな、ありがとう」

「ありがとね、みんな」

「じゃあね、ヴィヴィオ」

「さようなら、ハルヒお姉ちゃん」

ヴィヴィオとハルヒが子供たちに手を振りながら別れてこちらにやってくる

「ふふ、早くも」

「ですね。ハルヒは何人が洗脳してないか心配ですけど」

「失礼ね、そんなことするわけないじゃない」

「ならいいんだけどな。さて、そろそろ行くか。今日はありがとう  
ございました、シャツハさん」

「いえ、どういたしまして」

そして俺達は学校を後にした

「どうだ、ヴィヴィオ。あの学校で勉強できそうか？」

「うん。てゆうか、あのがつこつがいい」

「そうか。友達がいつぱい出来そうだもんな。ただし、友達は選べよ。ハルヒみたいな奴と付き合とろくな事がないぞ」

「ちょっとそれどうゆう意味よー！」

「でも、パパはそれがたのしいんだよね？」

「う……まあな」

この娘は痛い所をついてきやがる

「だからヴィヴィオもいっしょにいてたのしいともだちをつくるよ」

「……そうだな。それが一番だ。さて今日はまだ時間もあるしこれから遊園地行くか」

「ああ、あんたがだいぶ前にフェイトちゃんたちと行った？」

「ああ。幸いにもこの近くだからな。明日は一日中用事があるし明後日は遠出だから今日はパーツと遊ぶぞ」

その後、俺達は時間いっぱい遊園地で遊んだ

訪れた平和な日々 一日目（後書き）

優希「あとがきコーナー。今更だけど十万アクセス突破しました」

キョン「ほんとに今更だな」

優希「ちよつとした告知。十万アクセス突破記念はこの話のEFを書きます」

キョン「EFって、書くほどのことがあったか？」

優希「そこは書いてからのお楽しみとゆうことで」

キョン「で、今回の話だが。今回はサウンドステージ 04の話なんだよな？」

優希「うん。ただ、二日目と三日目はオリジナルにするけど。長さによつては二日目と三日目は一本に纏める。謝辞のコーナー」

キョン「畏無様、なつぺ様、霊亀様、バルディッシュ様、ああ様、感想ありがとうございます」

優希「とゆうわけで、朱神優希とキョンでした。感想お待ちしてます」

訪れた平和な日々 二日目(前書き)

遅くなりました

## 訪れた平和な日々 二日目

俺は今、フェイトさんと一緒にとある場所に向かっている。その場所とは軌道拘置所。そんな場所に用がある人間は1人しか居ない

「じゃあ、また後で、キヨン」

「はい」

フェイトさんと別れて俺は面会室に入る。中に居たのは、ハルヒの能力と感情を奪い、3ヶ月前に俺が叩き潰した今回俺が関わった事件の首謀者、レイン

「久し振りだな、レイン。元気そうで何よりだ」

「あなたに殴られた場所が未だに疼くけれどね」

レインはそう言って俺が殴ったのであろう場所をさする

「それは俺の知った事じゃない。自業自得だ」

「あら、随分と酷いわね。……まあ、いいわ。それで？世界を救った英雄様が遠路はるばるこんな所までなんの用事かしら？」

「やめる。あれを解決したのはなのはさん達だ、俺じゃない。用事はお前だつて予想ぐらいいついてるだろ？何故お前がハルヒや佐々木の事を知っていたのかについてだ」

「ああ、そのこと」

レインはどうしても良さそうに話し出した

「あなたは平行世界で漫画の中に出て来た人間に出会っているわね？」

「ああ、式見の呼び出す奴らも漫画やアニメのキャラが多いな」

「そう、平行世界には漫画やアニメのキャラが実在する世界もあるの。そして、私が居た世界ではあなた達はラノベのキャラなのよ」

「どうゆう事だ？つまり、お前も平行世界の人間とゆうことなのか？そして俺たちの行動は全てそのラノベに書かれていた」

「ええ、そうゆう事よ。理解が早くて助かるわ。そして、私は異世界へと渡る方法を見つけ出し、世界を手に入れる為に涼宮ハルヒの力を盗んだ」

「そして豚箱行きか。」「ご愁傷様」

「茶化さないでくれるかしら？」

レインがジト目でこちらを見てきたので仕方なく謝っておく

「悪い、悪い。さて、もう一つの質問だ。お前は、ハルヒを狙う存在について何か知ってるか？」

俺は、朝比奈さんに聞かされたハルヒが死んでしまうかもしれない未来を創る原因を探す必要がある。その中には確実に今回のような輩もいるのだろう。ならばレインと接触しているかもしれないと思

つたのだが

「彼女を狙う存在？そんなものあなたの身近にいるでしょ？」

「古泉の機関や橘の組織の事か？いや、それとは違う。ハルヒの命を直接狙うような奴らだ」

「さあ？会ったこともないわね」

「そうか。どうゆう存在かさえ分かれば警戒することも出来たんだが」

やはり駄目か。結構期待してたんだがな

「まあ、そんな奴が現れてもあなたがいれば大丈夫なのでしょうけれど」

「なんだ？俺をおだてても刑期は短くならないぞ」

「事実を言ったままでよ。『神は気まぐれに世界を作り替えた。闇を光に変え、新たな闇を作り出す。闇は神へと取り憑き光により神と共に永久とわの眠りにつく』」

いきなりレインがわけの分らないことを言い出した

「何だそれは？詩か？俺にはそうゆうのを評価できるだけのセンスは残念なことに備わってないんだが」

「ええ、そうでしょうね。あまり教養がいいとは思えないし」



なんだと、こら。もう一回殴りたいのか

「遠慮しておくわ。これは聖王協会のとあるレアスキル持ちの騎士が読んだあの事件にまつわる予言よ。この新たな闇とは私。そして神とは涼宮ハルヒ。この予言では私を止めたいなら涼宮ハルヒを殺すしかなかった。けれどあなたは予言に抗ったわ」

「抗ったのは俺じゃない。ハルヒだ。俺は何もやってねえよ」

「まったく、それが本心なのだから嫌味な男よね」

「事実だろ？」

「そうね、そうゆうことにしておくわ」

『マスター、そろそろ時間です』

タナトスが面会時間の終わりが近づいていることを告げてきた

「そうか。じゃあな、レイン。いつかまた会えるといいな」

立ち上がってそう告げると俺は部屋から出ようとしたところで

「そうね。ああ、そうだ。少し忠告をしておくわ」

「忠告？」

その言葉に足を止めた

「ええ。元々、私の世界にあったあなた達のラノベにはこの世界は

書かれていなかった。この世界は涼宮ハルヒが望んだから現れた世界」

「何が言いたいんだ？」

「そして、私もまた涼宮ハルヒに望まれてこの世界に来たのよ」

「ハルヒがお前を？ありえんな」

「本当にそう言える？」

「もしそうだとしても何の関係もない」

「涼宮ハルヒが死を望んでいるとしたら？」

「ふざけるのも大概にしろ！あいつが死を望んでるだど！？そんな事あってたまるか」

「そうね、これは可能性でしかない、シュレディンガーの猫箱よ。彼女の本心を知ることが出来ない。だから彼女が死を望んでいるのか望んでいないのかもわからない。もし彼女が本当に大事なら大切にしてあげなさい。これが私の忠告よ」

「大層な忠告をありがとよ。気をつけることにするさ。それじゃあな」

そうして、俺は部屋から出た

場所は変わって海上隔離施設。そこで式見が更正プログラムを受けている

「よう、式見。元気そうだな」

「そっちこそ。元気そうでなによりだ」

「3ヶ月も病院暮らしだったかな」

「今、自分の足で歩けてるならいいじゃないか。それよりも、鈴音は元気か？」

神無鈴音かんなりんね、この世界に居る式見の世界の友人と同じ存在。そしてレインが人質に取っていた少女。

式見はスカリエッティのアジトから救出された後、今回事件に巻き込んでしまった事を謝るために一度だけ彼女と会っている

その後、彼女は病院で療養をし、明日には地球に帰る予定だ

「ああ、もうすっかりよくなったよ。明日には地球に帰る」

「……そうか。それはよかった。僕も来月には出所だ。その後の行き先も決まった」

「確か、スバルの所で引き取って貰うんだよね？」

式見の更正プログラムを担当しているのはギンガ。その関係でゲンヤさんとはよく顔を合わせていたらしい。そして式見を気に入ったゲンヤさんが行く場所がないなら、と保護責任者を買って出たのだ

「ああ。ゲンヤさんには足を向けて眠れないよ」

「けど、お前成仏はしなくても良いのか？」

実体があるとはいえ一応幽霊なわけだし、ここにいるよりそうした方が良いと思うんだが

「ここは本来僕が居るべき場所じゃない。自分の世界に戻ったらそうするぞ」

「そうかい。そういえばここに来る前にレインに会ってきたんだが」  
俺はレインに言われたことを式見に話した

「正直、僕にも何とも言えない。ただ、レインが言うことも一理あると思う。僕も成仏したはずなのに気がついたらこの世界にいたからな」

「ハルヒが死を望んでいると？」

「そこまでは僕にも分からない。けど確かに注意は必要だろうな。  
涼宮さんが望んだとゆう話は本当だろうから」

式見までそんなことを言うのかよ。やれやれ、これは本当に注意が必要だな

「そろそろ時間だな。じゃあな、式見。また今度」

「ああ、じゃあな、キヨン」

訪れた平和な日々 二日目(後書き)

今回はあとがきコーナーはお休みにします

訪れた平和な日々 三日目(前書き)

やばい、夏バテのせいかな全然書く気になれない

## 訪れた平和な日々 三日目

さて、今日は前々から計画していた遠出だ。とはいっても旅行の類じゃないが

「ヴィヴィオ、準備出来たか？」

「うん」

「さて、行くか」

今回の目的地は第97管理外世界、つまり地球だ。目的は俺の両親への魔法についての説明、そしてヴィヴィオを養子にすることの説明だ。そして、これは、はやてさんにもついて来てもらう事になっている。

「いやあ、まさか私が魔法を説明する立場になるとは思わなかったわ」

地球行きのトランスポーターがある本局へと向かう途中はやてさんがそう言った

「昔、まだ私らが管理局に入局してない頃の話しなんやけどな。フイトちゃんは元々こっちの世界の人間やし、私も両親がいなかったから説明する必要はなかったんやけど、なのはちゃんだけは親がおったからリンディさん　ああ、フイトちゃんの保護者な。その人が説明に行ったんや。まさか私も同じ立場になるとは思わなかったわ」



「まあ、基本的に魔力が無い世界ですしね、地球は」

と、雑談をしていると目的地である本局に着いた。そこから地球行きの特急に乗って地球へ向かい、さらに電車などを乗り継ぎ俺は数ヶ月ぶりに我が家へと帰ってきた

数ヶ月ぶりに見る我が家は何も変わっていないようなので少し安心する。っと、そろそろ中に入らないとな

「ただいまー」

「お帰りー、キョン君！」

家に入ると同時に妹に飛びつかれた。バランスを崩しそうになるが後ろにヴィヴィオとはやてさんが居るため何とかこらえる

「久しぶりだな。元気にしてたか？」

「うん！えつとその人たちは？」

妹がはやてさんとヴィヴィオを指差していった

「こら、人を指差すんじゃないやありません。この人は八神はやてさん。で、こっちはヴィヴィオ。お前の姪になる予定だ」

「めい？」

妹は姪とゆう言葉に首を傾げた

おいおい、来年はもう中学生だろ、お前は

「まあ、その辺は後で教えてやる。親父がお袋はいるか？」

「うん。ちょっと待っててね。お母さん、キヨン君が美人なお姉さんと子供を連れて帰ってきたよー！」

「ばっ、誤解を生むような言い方をするな！」

「え、ヴィヴィオはパパのこどもじゃないの？」

「いや、そうなんだが」

「酷いわ、キヨン君。私との関係は遊びだったんやね」

「はやてさんが、よよよ、と言いながら壁に寄りかかって嘔泣きをしだした」

「はやてさんもそうゆう不穏なことを言うのは止めてください」

くそ、この人この状況を楽しんでやがる。にやけてる口元が丁度見えるのがうざい

と、一騒動あったが何とか本題に入ることが出来た。最初は突拍子もなさ過ぎる話にばかりとしていた両親も最後には全て納得してくれた。ヴィヴィオについては流石に未成年で養子を取ることに難色を示していたが、当初の予定通り妹を味方につけたら、あっさりと折れた

「じゃあ、また向こうに戻る。四月には帰ってくるから」

「うん！じゃあね、キヨン君、ヴィヴィオちゃん、はやてちゃん！  
やれやれ、ハルヒといい、妹といい、なんで俺の周りの奴らは年上  
を年上らしく扱わないのかね

「年上にはちゃんとさんをつけなさい」

「えー」

「えー、じゃない。ヴィヴィオだってやってるぞ」

「まあまあ、別にええよ。ほんなら、またな、妹ちゃん」

「うん！」

「またね、おばちゃん」

「お、おば！？……せめてお姉ちゃんにしてよ、ヴィヴィオちゃん」

おお、妹の笑顔が引きつってる。これは珍しいものが見れた

「じゃあな。行くぞ、ヴィヴィオ」

とりあえず、面倒事が起きる前に退散することにした。これはまた、  
悩みの種が増えたかもしれない

やれやれ

訪れた平和な日々 三日月（後書き）

書くのがめんどくさいので、あとがきコーナーはお休みします

【十万アクセス突破記念 番外編ⅠF】 ハルヒのいない世界（前書き）

だいぶ遅くなって申し訳ありません。  
今回は番外編です

【十万アクセス突破記念 番外編ⅠF】 ハルヒのいない世界

『あ……りが……とう、キヨン。大……好きだ……たわ……よ』

あの日、ゆりかごの中で俺はあいつを助けてやる事が出来なかった  
それどころか俺はあいつをこの手で殺してしまった。俺の力はあいつを助けるために手に入れた力のはずなのに

その後のことは全然覚えていない。スバル達が助けに来てくれたよ  
うな気もするがよく覚えていない。気がついたら俺はアースラの医務室のベッドに横たわっていた

その後、俺は、はやてさんに連れられて霊安室に保管されているハルヒに会いに行った

ハルヒの顔は穏やかで、黙っていればただ眠っているだけのようにも見える。ハルヒの胸には大きな刺し傷があった。俺が刺した痕だ

俺は改めて自分の犯した罪を認識し、ハルヒにすがりついて泣いた

それから1ヶ月後。俺はヴィヴィオをフェイトさんに預けて、予定

よりも早くミッドから地球へと帰ってきた。一刻も早くあの世界から出たかったからだ。結局、俺は誰の想いにも応えられなかった

本当は学校も止めるつもりだったが、親に止められて渋谷学校には通う事になった

「今日から留学していた、“ ”が戻ってくる事になった。ただ、残念なお知らせだ。涼宮が向こうで通り魔に合い、亡くなった」

朝のSHRで今年も俺達の担任だった岡部がそう告げた。

そうか。ハルヒの事は通り魔とゆうことにしたのか、長門。傑作だな。あいつを殺したのは俺なのに

そして、SHRが終わり、教室全体が騒がしくなりだした。その原因の1つは俺に群がる奴らだが。向こうでハルヒに何があったのかを躍起になって聞き出そうとして来る。そんなに知り合いが死んだ話が聞きたいのかよ、お前らは

俺が黙り込んでいてもしつこく聞いてくるクラスメイト達にそろそろキレそうになった時

「おい！その辺にしとけよ、テメーら。今回の事で一番ショック受けてんのはキョンなんだよ。ちつとは気を利かせてそつとしいてやれねーのか！」

大きな机を叩く音と共に誰かがそう叫んだ。皆が一斉にそいつの方を向く。そこにいたのは、谷口だった。その近くには国木田もいる

谷口の大声に畏縮したのか、俺に群がっていた奴らはサッサと撤退していった

「大丈夫かよ？キヨン」

俺の周りに完全に人が居なくなると谷口が近付いてきた

「ああ。ありがとな、谷口。助かった」

「よせよ。困ってる時はお互い様だろ？」

「それにしても、嫌な連中だよな。今までは涼宮さんに全然関わろうともしなかったのに」

珍しく国木田が他人に向かって辛辣な言葉を発した

「……………それにしても、涼宮の事は残念だったな」

「あまり気に病まないようにね、キヨン」

「ああ、ありがとな、二人とも。けど、もうちょっとの間だけ独りにしといてくれ。まだ、気持ちの整理がつけられないんだ」

二人は顔を見合わせた後複雑そうな顔をして

「わかった。気持ちの整理とやらが済んだらお前から話しかけてくれ。待ってるからな」

谷口がそう言って離れていった



次の瞬間、世界が闇に包まれた。

これは、ハルヒの閉鎖空間！？なんでだ！ハルヒはもう死んだんだ。何故、今頃閉鎖空間が

俺がパニックに陥っていると突然目の前に小さな神人が現れた。その神人は次第に形が変わり

「ハル……ヒ？」

頭にあるリボン付きの力チューシャ。左腕にある腕章。それは表面こそ神人のままだが、ハルヒそのものだった

神人は少しの間なにもせずじっとしていたが、俺の存在に気づくとゆっくりとこちらに近づいてきた

「ひっ、く、来るな、来るな！た、タナトス、セットアップ！」

俺は再びパニックに陥りながらとつさにタナトスを起動するとすぐさま大剣を創り出し神人を切り裂いた

神人は斬られると、まるでそこには最初からなにもなかったかのようになくなって消滅した

「は、はは。やっぱりお前は俺を恨んでるのか、ハルヒ」

神人が居た場所を見つめながら俺はそう呟いた

タナトスを待機状態に戻すと同時に閉鎖空間も消えた

「　　　　　」さん！

現実世界に戻つてくると珍しく血相を変えた古泉が慌てて俺の教室に入つて来た

「なにが言いたいのかはわかつてる。ここじゃ何だ、屋上へ行くぞ」

古泉を連れて屋上へ向かう。空は憎たらしくなるぐらいの快晴だった

「先程、あなたの教室で閉鎖空間が発生しました。しかし、僕は閉鎖空間へ入れず、どうしようかと思っていた矢先、突如として閉鎖空間が消滅したのです。あなたは、なにかわかりますか？」

俺は先程起きたことを端的に説明した

「つまり、いきなり閉鎖空間が現れそこで涼宮さんそっくりの神人と出会い、それを斬つたとゆうことですか」

「簡潔に纏めるならそうゆう事だ」

「涼宮さんが亡くなられた今となっては何故閉鎖空間が起こったのかはわかりません。が、この現象はこれからも続くと思われます」

「ハルヒは居なくなつたのにか？」

「今回のケースを見る限り確率は高いかと」

じゃあ、なにか？俺は一生いつ閉鎖空間が現れるのかビクビクしながら生きて行かなくちゃならないのか？

……これもハルヒを殺した罰か。なら、甘んじて受けるしかないよな

そんな話をしたのが半年前。俺はハルヒの死から未だ立ち直れていなかった。それどころか不規則で発生する閉鎖空間もあり日に日に酷くなって行き、今では殆ど死人同然だ

そんなある日、あの日以来ほとんど顔を合わせていなかった古泉が珍しく俺のクラスに訪れた

「ああ、いらっしやいましたね。 ” さん、お客様ですよ」

「……お客？」

今の俺にお客だと？ いったい誰だ？ 式見に頼んで平行世界の奴らはこの世界に干渉出来ないようにした。なのはさん達にも、もう関わらないでくれと言った。じゃあ誰だ？

「今から部室に来ていただけますか？」

「ああ、わかった」

まあ、いい。会えば分かるさ。古泉がお客と言つのなら危ない奴でもなさそうだしな

俺は古泉の後に続いて部屋へ向かう。そういえばハルヒが死んでから部屋には一度も行つてない

「着きましたよ」

ぼんやりとしていたらいつの間にか部屋の前についていた。古泉の後に続いて部屋の中に入る

「失礼します。彼を連れてきましたよ」

「ああ、ありがとう」

「……式見！」

部屋の中にいた、俺のお客とやらは式見だった。何で今更式見が

「僕がお呼びしたのですよ。この半年間、あなたの姿は見ていて耐えられるものではありませんでしたから」

「そうゆうことだ。だいぶ精神的に参ってるみたいだな。どうだ、キョン。もう一度僕とゲームをしないか？」

「ゲーム……あれか」

俺が一度精神的に不安定になっていた時に式見が行ったゲーム

「ルールは前回と同じ。戻って来れば勝ちだ」

「今の俺が帰ってこれると本気で思ってるのか？」

「思ってるぞ」

式見がカードをセットしたデバイスの銃口を俺に向けてくる

「じゃあな、キョン。よい夢を」

そして俺は眠りについた

気がつくと俺は教室の椅子に座っていた。周りには誰も居ない……嫌、背後に人の気配がある。振り向くと、案の定そこには不機嫌そうな顔をしたハルヒがいた

「よ、よう。ハルヒ」

「あたしを助け出さなかったら死刑って言ったわよね？」

「……………」

ハルヒの冷たい声と視線が胸に刺さる

「ま、あれは仕方がなかったからそんなに責めるつもりはないけど、しかし、ハルヒはすぐに視線を窓へと逸らした

「……………なんでだ。俺はお前を殺したんだぞ」

「それはあたしが望んだことよ。あんたを責めるのは筋違いでしょ

「？」

「だが……」

「ああ、もう。うじうじ言ってるじゃないわよ。あたしが良いって言うてんだからそれで良いのよ！」

ハルヒは突然俺の胸ぐらを掴むとそう言ってまくしたてた

「わかつたらさっさとこんな世界からは帰る！向こうにはあんたを心配してる人だって居るんだからシャキッとしなさい！」

ハルヒは俺の胸ぐらから手を離し、犬を追い払うように手をはらう

「今回は俺をこの世界に繋ぎ止めようとはしないんだな」

「あんたは向こうの世界を選んだのよ。なら、どんなに苦しいことが起ころうがあんたは自分の選んだ世界を生きなさい」

「……ああ。そうだな」

「じゃあね、キヨン」

「ああ。じゃあな、ハルヒ」

そして俺はまた意識を失った。その直前に見たハルヒの顔は見とれるような笑顔だった

「おはようございます」

目が覚めた俺の目の前に古泉の顔があった

「とりあえず、そのにやけた顔を俺の前から消せ」

「おやおや、これは手厳しい」

古泉が俺の言葉に苦笑するが、素直に俺の前から退く

「……式見はどうした？」

部室を一通り見回して式見が居なくなっていることに気がついた

「ああ、彼ならお帰りになりましたよ。その代わりにこの子を置いて行かれました」

よく見ると古泉の足下によく見知った子供が居た

「ヴィヴィオ……」

「パパ……」

俺が名前を呼ぶと、目に涙を溜めて駆け寄ってきた。それを優しく受け止める

「ああ、式見さんからの伝言です。『自分の娘の面倒ぐらいちゃん』と責任を持って見る』だそうです」

「ああ。その通りだな。ありがとな、古泉」

ヴィヴィオの頭を撫でながら古泉にお礼を言う

こいつにもかなり迷惑をかけちゃったからな

「いえ、お礼を言われるような事はしていませんよ。それでは、僕もこれで」

「あ、ちょっと待ってくれ」

部屋を出て行くこうとする古泉を呼び止める

「どうかされましたか？」

「悪いが少しの間ヴィヴィオを預かっててくれないか？やらなくちゃいけないことがある」

古泉は俺の顔をジッと見た後、仕方ないといった風に肩をすくめて了解してくれた

古泉とヴィヴィオが居なくなると途端に世界が暗くなった。閉鎖空間だ

いつの間にか俺の背後にハルヒの形をした神人が立っていた。……嫌、違うな。今なら解る。こいつはハルヒそのものだ

「今まで斬ったり撃ったりして悪かったな、ハルヒ。痛くなかったか？」

ハルヒが首を横に振る

「そうか。夢でお前に叱られたよ。なんだその体たらくは！って。



俺はお前を殺しちまった事を後悔してる。そして恐れてたんだ、お前に恨まれてんじゃないかって」

ハルヒはそんな事はないとゆう風にまた首を振る

「そついえばあの時お前の告白に答えてやれなかったな。俺もお前の事を愛してる、ハルヒ」

俺はそう言つてハルヒを抱きしめた

次の瞬間、世界は元に戻っていた

『ありがとう、キョン。愛してる』

閉鎖空間が消える直前。そんな声が聞こえた気がした

ここからは、なんて事はない後日談。家族にヴィヴィオを紹介し娘として受け入れてもらった。妹はどうもヴィヴィオとは犬猿の仲だが、上手くやっている

SOS団も活動を続けている。個人的には古泉に団長をやって貰いたかったが古泉他俺以外の団員の満場一致で俺が団長となってしまった。長門が率先して俺を団長に推してきた時は流石にびびったね  
フェイトさん達にも会いに行き、ヴィヴィオを押し付けた事を謝った。フェイトさんの話だとヴィヴィオもかなり無理をしていたらしい。今でこそいろんな感情を見せるが当時は誰にも心配をかけまいと無理やり笑って過ごしていたそうだ

あれから閉鎖空間は起こらない。古泉の見解を真に受けるならば、

この世に残っていた未練があの日綺麗に払われて成仏したんだろう  
これからも色々辛いことはあるんだろう。けど、今の俺ならなん  
とか乗り越えていけるんじゃないだろうか。そうであると願いたい

優希「久しぶりのあとがきコーナー」

キヨン「約1ヶ月か？」

優希「うん。そんぐらい。いや、暑さとかその他諸々で全然モチベーションが上がらなくて」

キヨン「にしても酷すぎる」

優希「まあ、なにはともあれ更新出来たんだから良いじゃん」

キヨン「つか、なんだ、この世界」

優希「お前が朝比奈さん（大）に警告されたハルヒを救えなかった世界」

キヨン「未来を変えてほんと良かったよ」

優希「そだね。謝辞のコーナー」

キヨン「なっぺさん。畏無さん、感想ありがとうございました」

優希「ちなみに、頼まれたコラボはキャンセルがない限り全てやります。とゆうわけで、朱神優希とキヨンでした」

アル晴レタ日ノ事(前書き)

遅くなりました

## アル晴レタ日ノ事

今回の一連の事件、後にレイン事件と呼ばれる事になる事件が終わってから数ヶ月。俺達は広いロビーに居た

「長いようで短かった一年間。本日を持って起動六課は任務を終えて解散となります。みんなと一緒に働けて、戦えて、心強く嬉しかったです。次の部隊でもみんなどうか元気に頑張ってください」

パチパチと大きな拍手が起こる

そう、今日で機動六課の運用期間は終わり。俺とハルヒもミッドを離れて、地球の平凡な高校生に戻る。その先の事はまだ未定だが

「それにしても、一年って、案外短かったわね」

はやてさんの挨拶も終わり、フォワードメンバー4人+二匹（ウィンディもちょっと前に傷が完治した）で六課解散の打ち上げに向かう途中、ティアがそんな事を言い出した

「そうだねえ」

「しかも俺は一年も居なかったからな。余計に短く感じるぜ」

「そうですね。でも、訓練はきつかったですけど、楽しかったですね」

「うん。とっても」

ホントに色々あった。正直、ハルヒに出会ってから一番きつかった

「キヨンが地球に帰るのって来週だっけ？」

「ああ、学校に行くのはもうちょっと先だが、色々準備とかあるしな」

「そうになると、気軽には会えなくなりますね」

「そうだね。ちょっと寂しくなるね。ね、ティアさん」

「へ！？な、なananでそこでいきなりあたしに振ってくるわけ！？」

「落ち着きなよ、ティア。もう気持ちはキヨンに伝えてるんでしょ？なら恥ずかしかることないじゃん」

スバルの言葉で俺がこっちに残っている間になんとかしなくちゃいけない問題を思い出した。正直思い出したくもない。これじゃ本当に吼太達を笑えねーじゃねーかよ

「そ、それはそうだけど、恥ずかしいもんは恥ずかしいのよ！」

「ふーん。で？キヨンは誰にするか決めたの？」

意地の悪い笑みを浮かべながらスバルが聞いてくる。くそ、古泉みたいなの顔しやがって。他の奴らも少なからず興味はあるようどこっちをチラチラと見てくる

「ねーねー、どうなのー」

「お前に答える義理はない。それにお前に言ったら確実にからかうだろうが」

しかもセインとウエンディにまで教えて。この3人の内1人にでも噂が広まったら次の日には無限書庫まで広まってる事があるからな。アルトの恥ずかしい話の二の舞にはならん

「ぶー、いいじゃん、教えてくれても」

「諦める。それよりも、打ち上げの前になのはさん達に呼ばれてたろ」

「あ、みんな、ちょっと」

うわさをすれば何とやら。後ろからなのはさんと、ギンガが近寄ってきた

「あ、なのはさん。ちょうど話してたんですよ。用事って何ですか?」

「うん、ちょっとね。ついて来てくれる?」

なのはさんはそれだけ言うところかに向かって歩き出す

なのはさん達についていくと、そこは桜が満開に咲いている巨大な広場だった。ハルヒやヴィヴィオ、はやてさん達も居る

「うわぁ」

「すげえ。日本でもそうそう見れないぐらいの満開だな」

「これってなのはさん達の故郷の花ですよね？」

「うん。桜って言うんだよ」

「すごく、綺麗」

少しの間桜を鑑賞した後

「おし、フオワード一同、整列！」

「「「「はい！」「」「」」

ヴィータさんの号令で全員が一行に並ぶ

「さて、この一年間、みんなよく頑張ったね」

「あたしは一年間ほとんど誉めたことはなかったが、お前らすげー強くなった」

なのはさんがこの一年間を振り返るように話す言葉に俺を含めたフオワード全員が聞き入る

「みんな、本当に強くなった。五人全員、もう立派なストライカーだよ」

なのはさんの言葉にティア達が感極まったのが軽く涙ぐむ。俺はと  
いうと、娘とハルヒの手前流石に泣きはしなかったが胸が熱くなった

「甘いわ、なのはちゃん。キョンはまだまだ強くならなくちゃ駄目



よ。こんなもので満足するだなんて団長であるあたしが許さないわ  
！」

「お前はホント、空気を壊す天才だよな」

俺とハルヒのやりとりでみんなが笑う。ま、狙ったわけじゃないが、  
泣き顔でいるよりかは笑ってる方が良いだろ

「ふふ。さて、折角の卒業式、湿っぽいのは無しにしよう」

「ああ、その通りだ」

いままで黙っていたシグナムさんが突然前に出てきた。……なんと  
も嫌な予感がする

「お前らちゃんと自分の相棒は持って来てるだろうな？」

俺達がデバイスを持っているか確認しながらアイゼンをいきなりツ  
エアシユテールングスフォルムでセットアップするヴィータさん

「え？え？」

その後ろで何が起こっているのかイマイチ理解できていないらしい  
フェイトさんがオロオロとしている

「なんだ、お前は聞いてなかったのか？」

いつの間にかレヴァンティンを構えたシグナムさんが意外そうにフ  
ェイトさんを見る

「全力全開、手加減なし。機動六課で最後の模擬戦！」

これまたいつの間にかレイジングハートをセットアップしたなのは  
さんがそう力強く宣言した

「……はい！」

しかもティア達もやる気満々。少し顔を見合わせた後、力強く返事  
をした

「頑張ってくれ」

俺はやらん。とゆうか、勝つのは無理だろ。今までと違ってリミッ  
ターが全部外れてんだぞ、この人達

「なに言ってるのよ、キョン！あんたもやるのよ！」

「俺に死ねってか！」

くそっ、ハルヒの野郎、人事だと思いやがって。流れ弾がいつても  
防いでやらんぞ

「ほーらー、キョンもやるうよ。私達五人でフォワードチームでし  
よ！」

「腕を引っ張るな、スバル。そんなに五人でやりたきゃギンガを誘  
え。アイツだつてフォワードチームだろうが」

無理やり腕を引っ張ってくるスバルと格闘しつつ言う

「あー、ごめんね。まだ私ドクターストップかかってるから」

「そういうことだ、諦めろ、キョン」

「くりゅー」

いつの間にか来ていた式見やウィンディにまで見放された

「くそつ、わかった、やってやるよ！やればいいんだろ！やれば！  
タナトス、セットアップ！」

ヤケクソ気味にタナトスをセットアップする。こうなったら、なるようになれだ。フェイトさんも最後まで渋っていたがチビ2人の説得により結局参加する事になった

「いいか、やるからには勝つぞ。じゃないと我らが団長様のありがたーい説教がまってるからな」

円陣を組んで作戦を立てながら俺はニコニコと笑いながらこちらを見ているハルヒを見て溜め息をつく

「4対5で数的にはこちらが有利だ。キャラにはフルバックで俺達の援護をしてもらう。後は残った4人でポジションが近い隊長達と1on1だ。いいか、俺達にはまだ隊長達を2人も相手にできる程の力はない。キャラも戦闘には不向きだし、誰かが負けたら実質的にそこで終わりだ。気合い入れて行くぞ！」

「いや、あんた前なのはさんとフェイトさん2人を相手して引き分けたんじゃ」

「あの時とは違って、隊長達全員リミッターが外れてんだぞ。流石に無理だ」

とりあえず、大雑把だが作戦も決まった。後は実力と運だ。勝敗は神のみぞ知るってやつだな

「お前も久々の戦闘だが頼むぞ、ウィンディ」

獣魂召還で大きくなったウィンディを撫でる。ウィンディはそれに答えるように一声鳴いた

「そろそろいいかなー？」

「あ、はい」

円陣を解いてなのはさん達に向き直る

「それじゃあ、行くわよ！レディー……………ゴー！！！」

ハルヒの掛け声で戦闘が始まる、ティアはなのはさんと、スバルはヴィータさんと、エリオはシグナムさんと、そして、俺はフェイトさんだ

「やるからには勝ちます。ハルヒの説教は嫌なんで」

「ふふ、まだまだ、年下には負けないよ！」

そしてバルディッシュと大剣がぶつかり合った

後日談とゆうか、模擬戦後の桜並木で行われた二次会での話。結局

模擬戦はフォワード陣の負けで幕を閉じた。流石に背後からSLB撃つてくるとは思わなかった。ガチで勝ちに来すぎでしょ、なのはさん

「にゃはは、フェイトちゃん倒して油断してたから、つい」

「それにしてもですよ、まったく」

俺はその一撃により気絶。一番最後に熨されたキャロによると、それはもう酷いのはさん無双だったそうだ

「まったく、なっさけねーな」

「ほう、そんなに言うならSLBをバリアジャケット無しで受けてみるか？ノーヴェ」

「え、遠慮しとく」

何故か二次会に混ざってきたスカリエッティ一家。その9女であるノーヴェは少し青ざめながら両手をパタパタとふる

「しかし、フェイトお嬢様を倒したのだろう？ならば貴様はかなりの実力者とゆうことだ。どうだ、今度、一戦」

「勘弁してくれ、トーレ。今回は運が良かったただけだ。まだまだ俺は弱い」

「あら、運も実力のうちって言いますし、それも含めてキヨンさんの実力ですよ」

トーレの提案をげんなりしながら断っているとクスクスと笑いながらウーノが近づいてくる。その横にはスカリエッツィの姿もある

「君のデバイスと君自身の魔力や稀少技能は一度詳細に調べてみたいものだ。私の中の欲望が疼くよ」

「…また機会があればな」

身の危険を感じた為、危ない笑顔を浮かべ始めたスカリエッツィから離れる

その途中でオットー、デイドと話すドゥーエを見かけた。あの事件の後、ドゥーエは他のナンバーズとも和解した。一番心配だったオットーとデイドとも、今では普通に接している。楽しそうに何かを話している姿は外見年齢相当で本当に生き生きとしている

更に歩くと紫の長髪が目立つ女性と少女に出会った

「あら、キヨンさん。お久しぶりね」

「お久しぶりです、メガーヌさん。で、お前とは初めましてでいいのか？エグザ」

「一応会っては居るんだけどねー。初めまして キヨンさん」

エグザはメガーヌさんが養子として引き取り、アルピーノ家の次女となった。そして来週にはメガーヌさんの療養とゆう名目でどっかの無人世界へ行き静かに暮らすらしい

「ほんと、お前とルーテシアは似てないな」

「えー、そんな事ないよ。オリジ……お姉ちゃんとお喋りして思ったけど、お姉ちゃんはちょっと声が小さいだけで性格はあんまり変わらないよ」

この時の俺はんなわけあるかと鼻で笑ったが数年後、この時の言葉を実感することになるなど思ってもいなかった

「あ、エリオだ。ちょっと行ってくるね、お母さん」

「ええ、行ってらっしゃい」

あの事件の日、何があったのかは知らないがエグザはエリオにご執心だった。キャラとは違い超が付くほど積極的なエグザに戸惑うエリオとそれに嫉妬して同じような行動をキャラがしてエリオが余計に翻弄され調子に乗ったエグザがヒートアップしてまたキャラがとゆうエンドレスな構図は最近では見慣れた日常となりつつある

「仲が良いわね、あの子達は」

「仲が良いんですかね？あれは」

流石に嫉妬でヴォルテールを呼び出しかけた時はビビったね。まあ、最近では竜魂召還程度だが……それが普通だと思ってしまった俺  
つて

取りあえずエリオもげると念じた後、メガーヌさんに挨拶をしてから何故か設置された巨大なステージの方へと向かうと、片目に眼帯チンクではないをつけた少女をつれたヴァイスさんに出会った

「よう、楽しんでるか？キヨン」

「まあまあです。その子は？」

「妹のラグナだ。ラグナ、こいつは俺の後輩で、えーっと………キヨんだ」

ヴァイスさんは一瞬なにかを考えた後、妹さんに俺を紹介する。この人、俺の本名を忘れたな

「始めまして、キヨンさん。ラグナ・グランセニックです」

「ああ、始めまして。それから、それは俺の本名じゃないからな。本名は…『みんなー、楽しんでる　　？』なんだ！？」

俺が名前を言う直前に突然大音量でハルヒの声が聞こえてきた。何事かとステージの方を見るとそこには、いつぞやのバニー服のハルヒと魔法使いの衣装の長門、そしてウェイトレス姿の朝比奈さんがそこに立っていた

「なんなんだ一体」

突然の出来事に呆然とするがすぐにハルヒ達が持っているものを見て何をやりたいたいのかが解った。ハルヒ達が持っているものはギターやベース。それにスタッフらしき人がドラムのようなものを設置している。つまり、ハルヒは去年（……いや、一昨年か？）やったバンドをまたやるつもりらしい

「やれやれ、あいつはいつもいつもやるのが突然なんだよ」



「そんな事はありませんよ」

背後からの声に振り向くといつも通りのにやけ顔の古泉が立っていた

「どつゆづ事だ？」

「涼宮さんは数ヶ月前からこのイベントを計画されていたんですよ。勿論八神さんに許可を頂いた上で」

「へえ、あのハルヒがねえ」

舞台の方を見ると準備が整ったようだ。ハルヒがギター、長門がベース、朝比奈さんがドラム……って、朝比奈さん大丈夫なのか？

『さあ、張り切って行くわよ！まずは一曲目！』

そして弾き始めた曲も学園祭で弾いた曲だ。ハルヒや長門は勿論、朝比奈さんも想像以上にしっかりと叩いている

「学校でENOZのメンバーの方達に協力して貰ってかなり練習していたんですよ、朝比奈さん」

なるほどな。本当はかなり練習したんだろう。じゃないとあそこまで上手くはならない

ハルヒが弾いた曲は文化祭で弾いた二曲とその後ハルヒが創った曲の一曲。後は聞いたことがない曲　古泉によるとENOZのオリジナルらしい　だった

ハルヒのステージは思いのほか好評で結構な数の局員がステージの

方へと集まっ て来ていた

『じゃあ、これでラストよ!』

そう言ったハルヒはなぜか楽器を下ろして前の方に来る。そして、鳴り始めた音楽にあわせて踊り出した

「この曲も聞いたことが無いな。これもENNOZの曲か?」

「いえ、これは涼宮さんのオリジナルです。振り付けも彼女が考えたんですよ」

「へえ。まあ、作曲は一回やってるしな」

振り付けまでとは思わなかったがな

そして歌が終わり、音楽も止まった

『みんなー、聞いてくれてありがとうー』

ハルヒの声に合わせてステージの周りに集まった局員がわっ、と沸く

『で、こっからは私事なんだけど、この場を借りて言っわ』

そして一拍が空いて

『大好きよ!キョン!』

ハルヒファンらしき局員達の空気が凍った

「死ぬなよ、キヨン」

「ありがとうございます、ヴァイスさん」

ヴァイスさんの労いを受け、俺がタナトスをセットアップすると  
局員共が襲いかかって来たのはほぼ同時だった

そこから先は筆舌に尽くしがたいが、簡単に纏めると、ハルヒファ  
ンの局員をさばききったと思ったら新たに局員が襲いかかってきて  
（後で聞いた話ではフェイトさん達のファンらしい）それが終わ  
ったと思ったら今度はフェイトさん達自身が襲いかかってきて、そ  
れから逃げていたらなぜかルーテシアに突然告白されて、ゼストさ  
んが襲いかかってきて、最後には会場がメチャクチャになるほどの  
戦闘を行ってはやてさんに三時間ぐらい正座で説教された

もし朝比奈さんに時間移動させてもらえるならば去年のなにも知ら  
ない俺に向かって言おう

お前の未来に平和はない、ってな。

## アル晴レタ日ノ事（後書き）

優希「あとがきコーナー。とゆうわけで、s t r i k e r s 編最終回でした」

キョン「長すぎるわ。1ヶ月も更新が空いたぞ」

優希「だって、中々モチベーションが上がらなくて。けど、大丈夫。この後の話は殆ど出来上がってるから。頭の中で！」

蛍「頭の中じゃ駄目じゃん」

キョン「ま、駄作者だしな。気にすんな」

優希「駄作者言うな！謝辞のコーナー」

キョン「なっぺ様、畏無様、感想ありがとうございました」

優希「次回からコラボです。一応予定としては以前依頼されていた霊亀さん、畏無さん、バルディッシュさんとのコラボを予定しています。とゆうわけで、朱神優希とキョンでした」

【番外編】キヨンの選択（前書き）

遅くなつてすみません。今回は霊亀さんとのコラボです。正直グダグダです

## 【番外編】キヨンの選択

地球に帰るまで後5日。その間にやらなくちゃいけないことはいくつが残っている。その1つが

「キヨン、いい加減に答えを出しなさいよ！」

「あたし、帰って来たら答えなさいって言ったじゃない」

これの決着だ

「IS『デーパーダイバー』」

取りあえず地面に潜って詰め寄ってきたハルヒとティアから逃げる

『本当にマスターはヘタレですね』

「うるさい。こんな事そうホイホイと決めれるか」

逃げながら最近生意気になってきた俺のデバイス、タナトスと話す

『あなたの平行世界のご友人のように全員愛せば良いではないですか』

「あいつらは特殊だ。俺は普通の一般的な高校生で居たいんだよ」

『魔法に関わった時点でそれは無理な相談かと』

「うるさい」

そろそろ大丈夫だろうと思ひ、地上に出る。だが、俺はこの時のこの判断を一生後悔する事になる

「久し振りね、キヨン」

俺が出た先に居たのは平行世界に居るはずの俺の知り合いである桂花と、何故か自分のデバイスをこちらに向けているライトだった

「悪いな、キヨン」

その声と共に俺の意識は刈り取られた

### 三人称

「ん……………？なにがどうなった？」

意識を取り戻したキヨンが朦朧とする頭で周りを見回すと、そこは見慣れた部屋だった

「ってゆうか、俺の部屋だろ、此処。桂花やライトはどこ行きやがった？」

「あら、気がついた？」

部屋のドアが開いて猫耳フードを被った少女、桂花が入ってくる

「お前、いきなり何してくれてんだ」

キヨンは文句を言いながら立ち上がるうとして自分がバインドで何重にも縛られていることに気付く

「これはお前じゃないよな。どう見ても魔力光が何種類もあるし」

「ええ。皆、入って良いわよ」

桂花が呼ぶとフェイト、ヴィータ、ティア、ルーテシア、ドゥーエ、ハルビ。つまり、キヨンに告白した人間が部屋へと入ってくる

「やっぱりか」

魔力光の色と状況でなんとなく察しがついていたキヨンは溜め息をつく

「あんたが悪いのよ。いつまで経ってもハッキリしないから」

ティアがそう言っただけでキヨンを睨みつける

「ごめんね、キヨン。でも、こうでもしないとキヨン、逃げちゃうから」

フェイトが申し訳無さそうに告げる

「みんなから聞いたわよ？あんた、前から思ってたけど、相当入タレよ」



桂花の言葉にぐうの音も出ないキヨン

「でも、もう逃げられないわよ、キヨン！」

「デバイスはシャーリーに預けてる。さすがのお前でもデバイス無しじゃその拘束は抜けねーだろ」

「さあ、今日こそハッキリと決めてもらうわよ、キヨン」

「……誰と付き合っの？」

逃げ道を全て絶たれ、ここまで迫られればキヨンがどんなにヘタレでも答えを出すしかない

「……わかった。1分だけ考える時間をくれ」

「別に構わないわよ。あんたの人生を左右する選択だもの。1分と言わず5分くらい考えなさい」

ハルヒの許可を得たキヨンは目を瞑って考え出した

キヨン視点考えが纏まり目を開ける

「考えは纏まった？」

「ああ」

「なら、聞かせてもらおうじゃない」

ハルヒの言葉に一拍置いた後、俺は笑顔で俺の出した答えを告げた

「もう少し保留「ヴァリアブルシュート！」のわっ!?!」

突然のティアの攻撃を身をよじって紙一重で交わす

「なにしゃがる!非殺傷でも当たったらシャレにならねーぞ」

「結局10分も考え込んで出た結論がそれか!」

「え、そんなに考え込んでました?俺」

ヴィータさんの言葉にビックリする。そんなに時間は経ってないと思っただのにな

「はあ。ここまで来てその答えって……。あんだ、ヘタレとかそうゆうレベルを越えてるわよ」

「うっさい。こんなこと、そう簡単に決めれるか!」

「最初に1分待ってって言ったのはあんでしょうが」

流石に非難轟々だった。まあ、わかつちや、いたけど

「ハア、こうなったら仕方ないね」

「そうね。やりたくはなかったけれど、キヨンがこんなんじゃないわね。自業自得よ、キヨン」

フェイトさんとドゥーエがそう言いだしたが正直話が見えない。頼

むからちゃんと俺にもわかるように話してくれ

『ここにいる全員と付き合って貰うわよ（ぞ）（ね）キヨン』

……………は？

今、俺の顔を鏡で見たら呆気にとられた顔のいい見本が見れることだろう

「なに？聞こえなかったの？キヨン？」

いや、しっかりと聞こえたさ。だからこそその疑問だ。俺が全員と付き合う？どこのギャルゲだ。今時、そんな安直なハーレムエンドなんか人気は出んぞ

「だから、あたし達だつてやりたくねーって言ってんだろ」

「……………けど、このままじゃ埒が開かない」

「だから、あんたが決めるのを渋ったらこうしようって予め決めてたのよ」

こうなることを予想される程ヘタレな俺に自分の事ながら盛大に呆れる

そんな事よりもだ。1000歩譲って全員と付き合うとしても、世間的にはどうなんだ？流石に世間様に後ろ指を指されながらも付き合える程俺の肝は大きくないぞ

「ああ、それなら大丈夫よ。ミッドって一夫多妻有りだから」

マジか……………

「ここまでされてまだ渋る気？」

く……………

「わかりました。ハルヒやフェイトさん達がそれで良いなら、全員と付き合いま……………ぶっ!？」

最後まで言う前に全員に抱きつかれた。バインドで身動きが取れない俺はバランスが崩れそのままベッドへと倒れ込む

『これからよろしくね、キヨン』

「はい、よろしくお願ひします」

俺は苦笑しつつもそう返した

後日談とゆうか、このすぐ後の話

「じゃあ、早速既成事実を作りましょうか」

ドゥーエの言葉に再び思考がフリーズする。俺以外誰も焦っていない所を見るとどうやらこれも予め決められていたらしい

「明日になって『あれは流されただけ』とか言われても困るじゃない。だからこそ言い逃れが出来ないようにしてあげるわ」

バインドで縛られた哀れな芋虫状態である俺は着実に服を剥ぎ取ら

れだす

「ちよつ、落ち着け。誰か止めてくれ」

「諦めなさい、キヨン」

「ごめんね」

この中で随一の常識と良心の持ち主であるはずのフェイトさんに見放されてしまった

「……大丈夫、痛いのは最初だけ」

それは男のセリフじゃないのか、ルーテシア

「へえ、あなた、結構筋肉あるのね」

なっ！？いつの間にか、裸同然にされてる！？バインドはされたまんまなのにどうやって脱がしたんだよ。そして、いつの間に女性陣も裸になったんだ。正直、目のやり場に困る

「さあ、覚悟しなさい、キヨン」

あ、もう抵抗の余地がねーや

俺の記憶がハッキリしてるのはここまでで、気が付いたら日付が変わっていた

【番外編】キヨンの選択（後書き）

優希「あとがきコーナー」

キヨン「とりあえず、遅くなった理由を手短かに話せ。早く更新出来るんじゃないかったのかよ？」

優希「正直最近小説に対してモチベーションがあがりません」

キヨン「それでまた更新が1ヶ月位空いたのか」

優希「まあ、それでもこの先の展開だけは考えてるから最後まではやりきるつもりだけど。謝辞のコーナー」

キヨン「なっぺ様、グイス様、畏無様、感想ありがとうございます  
た」

優希「次回こそは早く更新……出来たらいいな」

キヨン「出来たらじゃなくてやれよ」

優希「後ろ向きに善処します。とゆうわけで、朱神優希とキヨンでした。感想お待ちしてます」

【番外編】神に苦労させられている者達（前書き）

コラボなのに主人公は出てきません

ちよつと無理やりすぎたかも

## 【番外編】神に苦勞させられている者達

### 式見視点

キヨンがテストタロツサさん達に喰われている頃、僕は闇の回廊を使い平行世界を渡り歩いていた。理由としては自分が元居た世界に帰りたいからだ

「やっぱり駄目か」

自分の世界があると思われる周辺の平行世界には何故か干渉が出来ない。レインの下に居た頃から何度も試したことなので判っていることではあったが、事件も終わり、もしやと思って期待していたんだけど結果は残念なものだった

向こうの世界で僕はもう成仏したことになるからなのか、或いは涼宮さんの力が、理由は解らない。どちらにしてもまだ帰れないとゆうことだけはハッキリとしている

「無駄に靈力を使っただけになっちゃったな。ハア、死にたい」

少し期待していただけに落胆は大きく、最近ではあまり使わなくなっただと思っていた口癖が出るレベルで僕は落ち込んでいた

ここからじゃキヨン達が居る世界は遠いし、とりあえずどこかの平行世界へ行こう。今の気分のまま長いこと闇の回廊の中にいたら闇に取り込まれかねない

闇の回廊から出るとそこは森の中だった



「1つはどの平行世界だろ？」

森なんてどんな世界にも絶対にある場所だしなあ。出来れば原作キヤラには会いたくないな。下手な介入はその後に響くし。一番厄介なのは転生者やトリップした人間に会うことだ。

転生者達が己の世界に自分の知識にないキャラが現れた場合取る行動は二種類に分けられる。1つは事情を聞いたり仲良くなる努力をする友好的な行動。キヨンが平行世界で出会った吉谷吼太やヒスイ・ハーツなんかはこっちに分類される。もう1つは異端をよしとせず排除しようとする暴力的な行動。

そんな事を考えていると突然少し遠くの方が爆発した。……気になるし見に行ってみるか。介入さえしなければいいんだし

爆発があった近くに行くと、モンハンに出てくるキリン装備をした女性と刀を使う少女……じゃないな、少年が戦闘していた。さっきの爆発は樽爆弾か？

モンハンの世界ならその辺りにモンスターが居るだろうし第一人を襲う理由がないからキリン装備は転生者だろう。もう一方の少年は僕の知識の中には該当するキャラが居ないためこちらも転生者と見て間違いないだろうな。

「っつ」

突然、背後から撃ち込まれた銃弾を避け、振り返る。そこには某ガンダムファイターが乗っていた神と名付けられた機体のような装甲をつけた男が立っていた

「ふん、避けたか。運の悪い奴め。当たっていれば楽に死ねたものを」

この男はさっきのでいくと後者だな

「こつちに交戦の意思はない。ほっといてくれればすぐにでも出て行くよ！」

出来ることならなるべく戦闘は避けたい。僕的能力は使いすぎれば霊力不足で死んでしまう。なによりめんどくさい。ダメな転生者の相手は原作キャラか善良な転生者に任せるに限る

「そんなこと知ったことか！貴様はここで死ぬのだ！」

しかし、男は僕の話も聞かずに突っ込んできた

「ハア、死にたい。なんでこうなるかな。エンド、セットアップ」

口癖と共に溜め息を吐きながら僕のデバイスであるディエンドライバー、通称エンドを起動させる

さて、どうするかな。……ここは向こうの転生者らしき二人の所に行くか。あわよくばどちらかを味方につけられるかもしれないし。最悪こいつを押しつけることは出来るだろう

「なら、善は急げだ」

攻撃を交わしながら2人に近づいていく。

「ちっ、イレギュラーが増えたか」

流石にこっちに気が付いたらしい少年がアカム装備の大剣を避けながら舌打ちしている……って、あれ？さっきまでキリン装備じゃなかったっけ？まあ、良いか

「安心しろ。とりあえず僕は君に危害を加えるつもりはないから」

少年に向かってそう言って、ガンダムに向き直る

「何もんだ？あんた」

「通りすがりの幽霊だ。すぐに忘れてくれて構わない。それよりも、こいつらの詳細を教えてくれないか？」

「イレギュラーな転生者どもだ」

「そりゃ、転生者はイレギュラーだろ」

「どつかのアホな天使が物語を壊す為に送り込んだんだ。そいつは冥界送りになったらしいがな」

成る程。つまり、このガンダムやウカム装備（また装備が変わってる）は物語を悪い方向に壊す為に造られたってわけか

……気が変わった。この世界に介入しよう

「ちよっと下がっててくれ。すぐに終わらす」

少年にそう言ってガンダムとモンハンの転生者と対峙する

「俺のこの手が真っ赤に燃える！お前を倒せと轟き叫ぶ！」

ガンダムがそう叫ぶと同時に本当に手が燃えているように光る。ああ、やっぱり使えるんだ

「爆熱！ゴオオオット・フィンガー！！！！！」

「おっと」

ガンダムの攻撃は単純なので簡単に避けて懐に潜り込む

威力は確かに高いが避けてしまえばどんな攻撃もどつとゆうことはない

僕は即座に三枚のカードを削り出してエンドにセットし、引き金を引く

『ヒーローライド、ドモンカッシュ。アーマーライド、ゴッドガンダム。フォームライド、メイキョウシスイ』

エンドの声と共に僕の目の前にかにも強そうな男性が金色に光る装甲付きで現れる

「なっ！？」

男がかなり狼狽している。それもそうだろう。なんせ、この男性は言ってしまうばガンダムが使っている力のオリジナル。そして今から使わせる技は男の使う技を遥かに超える技

『ファイナルアタックライド、ゴ・ゴ・ゴ・ゴッドガンダム』

「流派！東方不敗ヶ最終奥義！石破天驚拳！」

ドモンが巨大な掌の形をしたエネルギーを男に向かって放つ

「ガハッ！？」

ほぼゼロ距離なため男は避けることも出来ずにそれを喰らう

「石破天驚ゴッドフィンガアアア！！！！」

当たった掌は男を掴みあげギリギリと締め上げ

「ヒート・エンド！」

ドモンの掛け声と共に爆発して男の体は吹き飛んだ。……いや、別に殺してはないよ？殺しを否定するつもりはないけど、だからって無闇に殺すことを肯定するつもりもない。一度死んだから分かるけど、死ぬのは痛いからな

「さて、君もこれ、喰らってみるか？」

かなり空気と化していたモンハン転生者の方を見て脅す。流石に嫌なのか首を千切れんばかりに振って否定の意思表示をしてくる

「じゃあ」

僕は以前キヨンに渡した過去を断ち切る剣を創り出してモンハン転生を刺す

「君が天使に力を貰ったという過去を断ち切るよ。これで君は晴れて一般<sup>モブキャラ</sup>人だ」

ガンダムの方にも同じ事をやって、転移魔法を使ってどこかに転移させる。行き先は神のみぞ知る、だ

「改めて聞くぞ。何もんだ、お前」

少年が呆気にとられた顔をして近づいてくる

「式見蛭。さつきも言ったが通りすがりの幽霊だよ。君は？」

「俺は遠坂霧夜。形だけは転生者だ」

お互い自己紹介が終わるとデバイスを待機状態に戻す

「幽霊つて、転生者じゃないのか？なんか特殊な力を使ってたし」

「いや、転生者じゃない。僕の力は生まれつきだよ。発現したのは高校生の時だけだ。それに、僕の力はどんな転生者も手に入れる事は出来ないよ」

「なんで？」

「使い方次第で神すらも殺してしまうからさ。そんな力、神が渡すわけないだろ」

まあ、理由はもう一つあるんだけどな

「けど、あんたは持つてるじゃん」

「僕は神が自分の力の一部を入れてしまうというミスを犯して造られた人間なんだ。その力のせいで何回か死にかけたよ」

「実際死んでんだろ」

「まあね」

「ほんと、神には祿なのがないな」

この子も転生させた神様に苦労させられてるのかな？まあ、無闇に介入する事でもないか

「さて、そろそろ帰るかよ」

気分転換、にしてはちょっとアレだけど憂鬱な気分は消えたし

「なあ、また会えるか？」

「そうだな。此処は僕が元居た世界の近くだし、たまにはこれるかもね」

「じゃあ、またな」

「ああ。また」

遠坂君に返事をすると言の回廊を創り出し新しく出来た家族がいる世界への帰路についた

平行世界に知り合いを作る気は無かったんだけど、案外良いものだな  
闇の回廊を歩きながら僕は小さく笑った



【番外編】神に苦労させられている者達（後書き）

優希「あとがきコーナー」

蛭「今回はキヨンが出てこなかったな」

優希「まあ、偶にはそういう話があっても良いんじゃないの?」

蛭「コラボの時にするべきじゃないと思うけど」

優希「いいの、いいの。謝辞のコーナー」

蛭「畏無様、ヴィス様、なっぺ様、感想ありがとうございました」

優希「次回でコラボ終了。日常編に移ります」

蛭「日常編って、キヨンの学校生活とか?」

優希「そんな感じ。とゆうわけで、朱神優希と式見蛭でした」

【番外編】水の大剣士 対 炎氷の大剣士（前書き）

今回はバルディッシュさんとのコラボです

【番外編】水の大剣士 対 炎氷の大剣士

あの大騒動から二日。流石に隠し通す事も出来ず次の日にははやてさんとスバルに伝わり、そこからスカリエッティ一家果ては無限書庫で目下徹夜十日目ユーノさんにまで一日で話が伝わった。スカリエッティ一家はドワーエが居るから良いとしても無限書庫はどうやって伝わったんだよ。ま、そんな事気にしたってどうしようもないんだがな

みんな、引越しの準備が忙しらしく朝からドタバタしていた。俺はと言うと特に持ってきた荷物があるわけでもないので普通に暇を持って余している。ヴィヴィオはザフィーラと散歩に出掛けてしまったのでウィンディと一緒に敷地内を散歩していると、突然音もなく俺の隣を飛んでいたウィンディが消えた

「は？」

「かわいいですわー」

「くりゅー?!?!?」

声のする方、俺の足元を見ると、どっかの銀河の歌姫のような容姿をした女性がウィンディを胸の中に埋めるようにして抱え、頬擦りをしていた

くそ、うらやましいじゃねーか、ウィンディ。ちよっとそこ変われ

「欲望がただ漏れだぞ、キヨン」

呆れたような声に振り向けばそこには平行世界の友人であるヒスイがそこに立っていた

「よう、ヒスイ。なんで居るんだ？」

「前回と一緒だ。突然魔法陣が現れて気が付いたらここにいた」

またか。何なんだ、この世界は。定期的に平行世界に転移魔法を飛ばしてんのか？

「そついや、ヒスイ。テメエの間はよくもやってくれたな」

そついえば、こいつにはこの間転移した瞬間に斬られてボロボロにされた借りがあつた（魔法少女リリカルなのはStrikerS）  
天を撃ち抜く烈風）『Episode EX02 模擬戦/V S  
キヨン』参照）

「お前、まだ根に持ってたのかよ」

「当たり前だ。言つとくが俺は長いこと根に持つタイプだ」

「たく、女々しい野郎だな」

うっさい。文句あるのか

「ま、そんなことよりだ、キヨン。お前に頼みたいことがあんだよ」

頼み？なんだ？金を貸す以外なら用件によつては聞いてやらんこと  
もないぞ



「ウンディーネと？ユニゾンしたお前じゃなくてか？」

俺にしては妥当な質問だろ。その質問にはヒスイではなくウンディーネが答えた

「ああ。いつもはシグナムが相手をしてくれるのだが、いつも同じ相手では非効率的なのでな」

なるほど、それでちょうどこっちの世界に来たんで俺に白羽の矢が立ったわけか

「ま、俺は構わねーけどな。あ、ユニゾンはしても良いのか？」

「生身で来い、と言いたいところだが、此方も余に有利な条件を出しているからな。特別に認めてやるっ」

「そりゃ、ありがとよ。ちょっと待ってる。はやてさんに話し通してくる。……出来ればその間にシルフをどうにかしといてくれ」

未だにウンディーネを愛で続けているシルフを見て俺とヒスイとウンディーネは同時にため息を付いた

俺が報告すると訓練場はすぐに貸し出され、ビル群に設定された訓練場の真ん中で俺とウンディーネは向かい合った

「んじゃ、二人とも準備は良いな？」

「いつでも」

「ああ。頼むぞ、2人とも」

『おう！』

『任せるです！』

ヒスイの問いかけに答えてアギトとリインとユニゾンして大剣を構え、ウンディーネは刃のない大剣を構える

「って、それ、刃がないけど良いのか？」

「ああ。貴様に心配されるまでもない」

俺の疑問にウンディーネは淡々と答える

「それもそうか」

「じゃあ、始め！」

ヒスイの号令と同時に俺もウンディーネも動く

「魔神連斬・竜牙！」

「魔神氷炎連斬！」

ウンディーネの水を纏った斬撃と俺の氷と炎を纏った斬撃がぶつかり合い、爆発する

「はぁ！」

ウンディーネが爆風を突っ切って斬りかかってくる。それを大剣で受け止め一瞬拮抗したが大剣は容易く真っ二つになった

「ちっ」

ソニックムーヴを使って距離を取って大剣を創り直す。流石に移動魔法はセーフだろ。それよりも、ウンディーネの大剣だ。俺の大剣が真っ二つになる瞬間、ウンディーネの魔力が一瞬跳ね上がった

『どっと思っっっ』

『魔力を込めて威力を強化するタイプのロストログアのような物だ  
と思います』

『だよな。ぶつかる度に壊されてたらキリがねーし、接触は禁止だな』

『んなことより、前見る！来てるぞ！』

わかってるよ。突っ込んでくるウンディーネの攻撃を避け砲撃魔法を撃とうとして、慌てて止める。

「ふん、隙だらけだ！水花散る天幕！」  
ロサ・イクトウス



「がつ!?」

その一瞬の逡巡がいけなかった。ウンディーネが高速で接近してきて俺は袈裟懸けに斬られ、周りを花弁のような魔力が漂う。追撃が来る前に急いで距離を取る

「悪い、大丈夫か?」

「痛てえけどなんとか大丈夫だ」

「ツインユニゾンしてるのが良かったです。ダメージが結構分散されました」

「ほう。奏者が喰らった時は一度地に伏せたのだが、意外と頑丈なのだな」

「まあな」

「ならば、これも耐えて見せる!」

ウンディーネの周りの魔力収縮度が急激に高まる。デカいのが来る!

「アギト! リイン! 魔力を集中させる! ラウンドシールド15連!」

「海龍波!」

俺がギガラウンドシールドを張ると同時にウンディーネが作り出した2体の水の龍が俺を襲った

三人称

海龍波がキヨンを襲い、巨大な爆発が起こる

「おいおい、大丈夫かよ、キヨンの奴」

「流石に死んでませんよね？」

ヒスイとシルフが心配そうに呟く。爆炎が晴れると、そこには満身創痍といった感じでキヨンがなんとか立っていた

「こりゃ、勝負あったか…」

「まだだ！」

ヒスイが勝負を止めようと前に出ようとした瞬間キヨンが大声で止めた

「無理と無謀は違うぞ。その満身創痍の体でなにが出来る。海龍波を喰らって立っていただけでも誉めてやる。だからもう止めておけ」

ウンディーネが呆れたようにそう言うがキヨンは不適に笑って

「出来るさ。テメーが見本を見せてくれたからな！」

そう叫ぶと大剣を上段に構える

「お前の技が俺に当たるって事はこの距離は俺にとってもお前に当たる間合いって事だ。頼むぞ、アギト、ライン！」

キヨンが叫ぶと同時に魔力が急速に高まっていき

『ステータスロード。ロードファイルネーム“ウンディーネ”』

「氷炎龍波アアアア！」

氷と炎、二対の龍がウンディーネに向かって放たれた

忘れがちな設定ではあるが、キヨンのレアスキル『記録と使用と改造』<sup>ロード・チート・セーブ</sup>の記録の発動条件は対象の手を握る事。ウンディーネはキヨンと対面した時にキヨンと握手をしている。なので自動的にウンディーネの能力は既にノーマルメモリに記録されていたのだ。そして、キヨンはウンディーネの技である『海龍波』をアギトの炎とリインの氷を放つ技へと改造して放った<sup>チート</sup>

「なっ！？ぐあああっ！！！」

ウンディーネは予想もしていなかった攻撃に呆気に取られるが、すぐさまシールドを張って防ぐ。しかし、キヨンは違いユニゾンデバイスの援護やシールドの多重展開をしていなかったため威力に負け、シールドごと吹き飛ばされた

キヨン視点

勝った……か？

大剣を杖にしてなんとか倒れずにはいるが正直もう戦えない。これでウンディーネに向かってこられたら俺の負けだ。どうか向かって来ませんようにと願ながら煙が晴れるのを待つ

そして、煙が晴れた先にはウンディーネが大の字に倒れていた

「勝負あつたな。キヨンの勝ちだ」

勝てた

ヒスイの宣言に喜ぶ間もなく俺の意識は闇に落ちた

後日談とゆうか、今回のオチ

「知らない天井だ」

いや、嘘だけど

目が覚めると、俺は医務室のベッドに横たわっていた。医務室に運ばれるのも久しぶりだな

「そっいや、ヒスイ達は……」

「僕が元の世界に帰しといたよ」

「式見？」

式見の声はするが姿が見当たらない。ベッドの下を覗くと猫の姿の式見がちよこんと座っていた

「なんでその格好なんだ」

「ちよつと霊力を使いすぎてな。今は回復の為にこの姿だ」

成る程ね

「ああ、そういえばウンディーネから伝言だ。『次は勝つ』だそうだよ」

「またやらなくちゃいけないのかよ。ハア、憂鬱だな」

とは言ってるものの、内心そこまで嫌という訳でもない自分が居ることに気づいた

俺も色々と染まってきたな

【番外編】水の大剣士 対 炎氷の大剣士（後書き）

今回のあとがきコーナーは諸事情によりお休みします

俺は帰ってきた！……言ってみただけだよ（前書き）

やっと更新。今回はハルヒの原作を読んでないとわからないかも

俺は帰ってきた！……言ってみただけだよ

「……ん……ん……て！」

「……ぱ……さだ……」

誰かの声が聞こえる。それと同時に体がゆさゆさと揺らされる。うるさいな、こっちは眠いんだ。もう少し寝させてくれ

「……う……たない……」

「ぱ……が……いん……からね」

声が止み揺すられるのも止んだ。やれやれやっつと諦め……

ドスッ

「ガハッ!？」

突如として腹部に強烈な衝撃が襲い、俺の意識は無理やり覚醒させられた

「おはよう、キヨン君」

「おはよう、パパ」

「クリュー」

俺の腹の上には今年で中学生となる我が妹と今日から小学一年生と



なる娘のヴィヴィオと俺の使役獣ウィンディがいた。その横には呆れ顔の桂花も

「頼むからもうちょっと優しい方法で起こしてくれ」

「だってキヨン君、全然起きないんだもん」

「パパが起きないときはこうしろってお姉ちゃんが言ったんだもん」

「自業自得ね」

「クリュリユー」

女3人(+1匹)からの口撃に俺は降参の意を示すために両手を挙げる

「わかった、わかった。俺が悪かったよ。着替えるから出て行ってくれ」

俺の上からチビ2人と1匹を退けて、追い払うようにシッシッと手を振る

「私も？」

「一番年上のお前が出て行かないとこいつらが出て行かないだろうが」

「それもそうね。行きましょ、みんな」

「「はい」」

「くりゆ〜」

全員出て行ったのを確認した後、大きな溜め息を1つ吐く。六課に居た頃の早起きの習慣は最近ではすっかり抜けきり一年前の妹に叩き起こされるとゆう日常が戻ってきてしまった。今ではそこに娘もプラスされたわけだが。もう一度盛大に溜め息を吐いてからベッドを抜け出し着替えを始める。

この間に桂花の事でも説明しとくか。あいつは元々違う平行世界の住人なのだが、俺に会うために一々こっちに来るのも面倒だと、こちらの世界に永住する事になった（とゆうか、桂花の独断でそう決まった）……までは良かったのだが計画も立てず成り行きで決めた事の為、桂花は住む場所すら無く、流石にフェイトさん達にも頼れない為、仕方なく俺の家に居候とゆう形となった。親にその事を話すと一度ヴィヴィオを娘にするとゆう突拍子もない話をしたためか意外とあっさりOKが下りた

「にしても、あのおふくろのウキウキとした顔。絶対彼女だと思っ  
てんだろうな」

実際、その通りだと言えばその通りなんだが他にもミッドに数人の彼女がいると知ったらうちの両親はどんな顔をするのかね？

あ、ちなみにウィンディについてはほぼノーリアクションだった。今ではシャミセンと並んでうちのペットとして両親に可愛がられている。意外とうちの親は適応力が高かったらしい

着替えも終わり部屋を出て居間へと向かう。居間にあるテーブルには妹とヴィヴィオ、桂花が並んで座りトーストを頬張っていた

「おはよう、キヨン」

「ああ、おはよう、桂花」

俺の分と思しきトーストが置かれている席に座りながら桂花に挨拶をする。

「今日からあなたも学校なのでしょう？」

「ああ。ヴィヴィオの送り迎えは頼んだ」

ヴィヴィオは先週からSt・ヒルデ魔法学院の初等部一年となった。昨日まで送り迎えは俺がトランスポーターでしていたが今日からは桂花がしてくれることになっている

「わかってるわよ。あんたこそ遅刻しないように行きなさいよ」

「わかってるさ。まだ余裕だ」

パンを食べながら壁にかけてある時計で時間を確認してそう答える

「じゃあ、行ってきまーす、キヨン君」

「パパ、行ってきまーす」

「行ってくるわ、キヨン」

「おう、行ってらっしやい」

「クリュー」

それから数十分後、妹とヴィヴィオと桂花が揃って家を出た。さて、そろそろ俺も出るとするかね。自分の部屋に戻りカバンとタナトスをひつつかみウィンディとシャミセンに留守番を申しつけて玄関に鍵をかけて学校へと向かう

「ハア、やっぱりここは拷問だな」

学校に向かう為に絶対に登らなくてはならない急勾配で尚且つ距離のある坂を登りながら呟く。流石に向こうで鍛えたからこの程度の坂を登るだけで疲れる訳ではないのだが、ただ坂を登るとゆう行為は精神的にきついものがある

「やあ、青年！ひっさしぶりじゃあないか！」

バシン！

「のわっ！？」

突然の背中への衝撃にすつとんきよな声が出てしまう。振り返るとそこには体の中に太陽のエネルギーを取り込んで発しているのである。笑顔を標準装備とする、我らがSOS団名誉顧問の鶴屋さんがそこにおられた

「痛いですよ、鶴屋さん」

「いやあ、ごめん、ごめん。久し振りに会ったから力加減を間違えちゃったよ」

「勘弁してくださいよ」

そこで俺は何か違和感を感じる。まるで間違い探しのわかりにくい間違いを探すような感覚。そして気づく。そうだ、鶴屋さんは俺の1つ年上。つまり、今年で俺が三年生になるとゆうことは、この人はつまりもう卒業している筈なのだ

「なんでここにいらっしゃるんですか、鶴屋さん。もう、あなたは卒業してはるはずでしょう?」

「んー、そーなんだけどね。なんか実感がわかなくてさあ。だからちよろつと登校の真似事だけでもって思ってたね。そしたらキヨン君に会えたし、たまの思いつきもやってみるもんだねえ」

「はあ。それはいいですけどそのまま教室まで行かないでくださいよ」

この人ならやりかねない。朝比奈さんみたいな天然じゃなくて狙って

「流石にそこまではしないによるよ。学校の先生にも迷惑がかかったらちやうしね」

そんな話をしているうちに校門へとついた

「それじゃ、勉強に勤しむんだよ、少年!」

「ええ、わかりました。それじゃあ」

元気に手を振りながら坂を下りていく鶴屋さんを見送って昇降口で靴を履き替え自分の教室へと向かう

「よう、キヨン。久しぶりじゃねーか！」

「なんだ、谷口か」

教室に入ると、馴れ馴れしく近づいてくる馬鹿が1人

「やあ、キヨン。久しぶり」

「おう、久しぶりだな、国木田」

その後から中学時代からの友人である国木田もやって来た。そっちはしつかりと挨拶を返しておく

「テメツ、俺と国木田じゃ全然反応がちげーじゃねーか！」

「うるせえよ。アホのお前と国木田を一緒くたには出来るか」

「んだとお？」

「まあまあ、2人とも。ほら、先生も来たし」

俺と谷口が睨み合つと国木田が教室の入口の方を指差す。指された方に向けば確かに岡部教諭が教室に入つて来ていた。

ちっ、命拾いしたな、谷口

「そりゃ、こつちの台詞だ」

「2人とも喧嘩はやめなよ。それじゃ、僕は教室に戻るよ」

ん？国木田のクラスはここだろ？

「残念だけど、今年から違うクラスなんだ。けど、昼食の時なんかは普通に食べに来るから」

キーン・コーン・カーン・コーン

「やば、予鈴だ。それじゃあね、キヨン。また昼休憩」

そう言っつて国木田は慌ただしく教室を出て行った。俺も自分の席に向かった

それから時間は流れて放課後。今日は珍しくハルヒが家の用事があるとかで団活は中止。それを知った谷口が遊びに行かないかと誘ってきた

「別に構わんが、どこに行くんだ？」

「駅前でも行くか」

「言つとくがナンパなんかしないからな」

そんな事しようものならフェイトさん達に殺されかねん

「別にやんねーよ。今日は純粹に遊びに行くだけだ」

「国木田は？」

「あいつは今日用事があるんだとよ。付き合いわりーよな」

「用事なら仕方ないだろ」

そんな訳で谷口と二人で駅前へと向かうと意外な人物達がまるで俺達がここに来ることを知っていたかのようにそこに居た

「やあ、キヨン。偶然だね」

「佐々木！橋に九曜もいるのか」

俺の中学時代の友人で、自称“俺の親友”。古泉曰く「十人中八人が一見して目を惹かれる」容姿の持ち主。ハルヒの持つはた迷惑で神懸かりな力を持つ可能性があった奴。成績優秀、才色兼備、正直俺が親友だと言われるのが恥ずかしいほど出来た人間である

そして、古泉達『機関』とは違う『組織に属している佐々木信奉者である超能力者橋京子と、これまた長門達『情報統合思念体』とは違う『天蓋領域』とやらの作ったヒューマノイド・インターフェースである周防九曜（こいつは、以前俺と間違えて谷口と付き合っていたらしい）後、以前はここにもう1人いけ好かない毒舌な未来人が居たのだが、まあ、あんな奴は居てくれない方が俺の精神上良いためどうでも良いか

「す、すすすす！？」

突然谷口が訳の分からない言葉を呟きながら固まった。こいつ、未だに九曜に苦手意識を持つてるのか

「どうした、谷口？お酢でも買って来なくちゃいけない用事でも思いましたか？」



「お、おう！そうなんだ。それじゃ！」

そう言って立ち去ろうとする谷口を

「待って！」

驚くことに九曜が大声で呼び止めた。あの長門以上に意思疎通が困難だった九曜が自分からアクションを起こすとは……。流石の谷口も動きを止めた

「谷口君……だったかな？その喫茶店にでも行って少し九曜さんの話を聞いてあげてくれないかい？」

「お願い」

佐々木と九曜とゆう美人二人のお願いに谷口も「まあ、話を聞くだけなら」と折れた

「どうゆう事だ、佐々木」

「ちゃんと説明するよ。僕としては出来れば君の留学先での土産話を聞きたいんだが」

……そうだな。レインは佐々木にも目をつけてたみたいだし佐々木には話したいた方が良いか

不思議探索の時に使うお馴染みの喫茶店へと入り九曜と谷口とは離れた席に座り適当にコーヒーを頼む

「それで？あれは本当に九曜か？そっくりさんじゃねーのか？」

「正真正銘、周防九曜さんその人だよ。君が居ない一年にも満たない間に彼女は人とゆうものを知ったんだよ。天蓋領域は人とゆうものに対して未成熟な知識しか持っていなかったが、だからこそ長門さん達情報統合思念体より人として成長出来たんだよ」

「それがなんで谷口との会話に繋がるんだ」

「彼女が一番深く関わったのは僕たち非日常組を除けば彼だけだ。一時期とはいえ彼氏だったのだからね。だからその彼に恋愛感情が芽生えたってなんら不思議ではないだろう？」

不思議すぎて頭が痛くなるよ。……にしても恋愛感情か。確かに長門にはなさそうな感情だよな。だが、感情豊かな朝倉や黄緑さんにもなかったのか？……嫌、考えたところで詮なきことだな

「それよりも、僕は君の土産話の方が気になるよ。大方の事情は橘さんを通して古泉君から聞いているが、君の口から聞きたいからね」  
そういえば古泉の奴、橘とメアド交換してるんだったな。なら話はやい。俺は大雑把に向こうで起こったことを説明した。流石にフイトさん達の事は伏せといたけどな。佐々木に白い目で見られるのは勘弁願いたい

「と、まあ、そんなとこだ」

「なる程。異世界に平行世界、それに魔法か。面白い体験をして来たんだね、君は」

「面白いもんか。こっちはお陰で一度死にかけて、その後3ヶ月も入院する羽目になったんだぞ」

「娘を助けるために命を賭けて頑張る父親。とても感動的な美談じゃないか」

「……お前がどう感じようが勝手だけどな。レインはお前も狙ってたみたいだし一応今後は注意しといてくれ」

「分かった、善処するよ。……ところで1つ聞いておきたいんだが」

「ん？なんだ？」

佐々木は何かを躊躇するように俯いて一拍を置いた後、決心したように顔を上げる

「もし、もしもだよ。僕が涼宮さんのように連れ去られてしまったら君は僕を助けに来てくれるかい？」

「……なにを言うのかと思えば。当たり前だろ。俺はお前の親友なんだからな。どこに連れ去られようと必ず助け出す」

「っ……君はいつからそんな恥ずかしい台詞を言えるようになったんだい？」

「そうか？普通の事を言ったと思ったんだが」

「言われたこっちが恥ずかしくなるよ、まったく」

佐々木の顔がいつになく真っ赤だ。本当に恥ずかしかったんだな。

こちらの話が一段落した所で谷口達の話も決着が着いたのかこちらに寄ってきた

「話は終わったか？谷口」

「ああ。俺達また付き合うことになったわ」

谷口の言葉に九曜がほんのりと頬を染める。……明日は天変地異か？これがあの長門達情報統合思念体ですら意思の疎通が出来なかった九曜だとはどうも理解しがたいな

「それはおめでとう、九曜さん。幸せにね。今度は簡単に別れちゃ駄目だよ？」

「よかったな、谷口。数週間で愛想尽かされてまた別れられるなよ」俺と佐々木がそれぞれ思い思いのお祝いの言葉をかけた。それから数分後、すこぶる機嫌の良い谷口をおだてて飲食代を奢らせて店を出る

「それじゃあ、僕はこれで。またね、キョン」

「今日はありがとうございました」

最初に佐々木と橋が別れた

「じゃ、九曜送ってくから。また明日な、キョン」

「さようなら」

それからすぐ谷口と九曜とも別れた。今は家に向かって人気のない道を歩いている

「ハア、1日目から疲れた」

『あれがマスターのご友人ですか。なかなか個性的な方々でしたね』

「あの中でまともなのは佐々木ぐらいだからな。久々に会えて良かった」

『彼女もマスターに気があるようでしたが』

「佐々木が俺に？んなわけねーよ。俺と佐々木は中学からの親友。ただそれだけだ。それに、もし仮に佐々木が俺に気があったとしてもあいつには俺なんかよりもっと他に良い奴が見つかるさ」

『……それは、フエイト様達に関してもそう思っていらっしゃるのですか？』

タナトスの指摘に一瞬言葉に詰まる

「……ああ、思ってる。俺みたいな地味で平凡な男よりいい男は世の中掃いて捨てる程居る。あの人達にももっと相応しい人は居るはずだ。……けどな、だからってあの人達の気持ちを蔑ろにするつもりはない。あの日決めたんだ。あの人達が俺を好きで居てくれるなら俺もあの人達を精一杯好きになろうって」

言ってから自分の言葉に恥ずかしくなる

「本当に佐々木が言ったように恥ずかしい台詞がさらっと出て来るようになってるな。今の、誰にも言うなよ、タナトス」

『さあ？私は常に音声情報を記録していますのでもしかしたらメンテナンスの時にシャリオ様やマリエル技師に聞かれるかもしれませんね（笑）』

「今すぐそのデータを消せ！」

『うん、それ無理……です』

「なんでお前が朝倉の物真似してんだ！いいから消せ！」

『あまり騒がれるとこの世界では通報されるのでは？』

「だったらさっさと消せよ！」

『嫌です。面白いじゃないですか』

くそ、こいつ、こんな性格だったか？段々と生意気になっている。これは由々しき問題だな。新たに浮上したこの問題は誰に相談すれば良いんだ？今度スカリエッティに見てもらおうか？

俺は佐々木がどうこうよりもよっぽど頭を悩ませながら家へと帰った

俺は帰ってきた！……言ってみただけだよ（後書き）

優希「あとがきコーナー。とゆうわけで日常編第1話でした」

キヨン「まさか、谷口と九曜がまた付き合いだすとはな」

蛭「原作読んでない人にとっては頭の上に疑問符だらけだろうけどな」

優希「そこら辺はもう、ご想像にお任せします、とゆうことで。謝辞のコーナー」

キヨン「畏無様、なっぺ様、バルディッシュ様、感想ありがとうございます」

優希「とゆうわけで、朱神優希とキヨンと式見蛭でした。感想お待ちしております」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6156m/>

---

魔法少女リリカルなのはの憂鬱

2011年12月11日16時47分発行